

IBM Unica Campaign

バージョン 8 リリース 6

2012 年 5 月 25 日

ユーザー・ガイド

IBM

お願い

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、273 ページの『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本書は、IBM Unica Campaign バージョン 8 リリース 6 モディフィケーション 0、および新しい版で明記されていない限り、以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原典： IBM Unica Campaign
Version 8 Release 6
May 25, 2012
User's Guide

発行： 日本アイ・ビー・エム株式会社

担当： トランスレーション・サービス・センター

第1刷 2012.6

© Copyright IBM Corporation 1998, 2012.

目次

第 1 章 IBM Unica Campaign の概要 . . . 1

Campaign の対象者	1
他の IBM Unica 製品との統合	2
IBM Unica Marketing Operations との統合について	2
レガシー・キャンペーンについて	3
Campaign の概念	4
キャンペーン	4
フローチャート	4
セッション	5
プロセス	5
オファー	5
セル	5

第 2 章 Campaign の概要 7

ユーザー名とパスワード	7
IBM Unica Marketing にログインするには	7
役割と権限	8
Campaign でのセキュリティー・レベル	8
開始ページの設定	8

第 3 章 キャンペーン 11

キャンペーン用のデータの準備	11
Campaign での IBM Coremetrics セグメントの使 用	11
キャンペーンの設計	11
例: マルチチャネルのリテンション・キャンペー ン	12
キャンペーンへのアクセスについて	14
キャンペーンの操作	15
キャンペーンの作成方法	15
戦略的セグメントのキャンペーンとの関連付け	16
オファーのキャンペーンとの関連付け	16
キャンペーンの表示方法	17
リンクされたレガシー・キャンペーンから Marketing Operations プロジェクトに移動する方 法	18
キャンペーンのサマリー詳細の編集方法	18
キャンペーンの実行について	19
キャンペーンの印刷方法	19
キャンペーンの移動方法	19
キャンペーンの削除について	20
キャンペーン結果の分析	20
キャンペーンの編成	21
キャンペーン・フォルダーの追加方法	21
キャンペーン・フォルダーの名前と説明の編集方 法	21
キャンペーン・フォルダーの移動方法	22
キャンペーン・フォルダーの削除方法	22
キャンペーンに関するリファレンス情報	23
「キャンペーン一覧」ページのアイコン	23
「キャンペーン・サマリー」タブのアイコン	24

「キャンペーン・サマリー」タブに関するリファ レンス情報	24
---	----

第 4 章 フローチャート 27

フローチャートの作成	27
フローチャートの設計についての考慮事項	27
新規フローチャートを作成するには	27
フローチャートのコピー	28
フローチャートをコピーするには	29
フローチャートの表示	29
フローチャートを表示するには	29
フローチャートのレビュー	30
フローチャートのプロセスをレビューするには	30
フローチャートの編集	31
編集用にフローチャートを開くには	31
フローチャートのプロパティを編集するには	31
フローチャートの検証	31
フローチャートを検証するには	32
フローチャートのテスト	32
フローチャートをテスト実行するには	32
フローチャート・プランチをテスト実行するには	33
フローチャートの実行	33
フローチャートを実行するには	34
フローチャート・プランチを実行するには	34
プロセスを実行するには	35
実行履歴オプションについて	35
フローチャートの実行を一時停止するには	37
一時停止されたフローチャートの実行を継続する には	37
フローチャートの実行を停止するには	37
停止されたフローチャートの実行を継続するには	38
ランタイム・エラーのトラブルシューティング	38
フローチャートの削除	38
フローチャートを削除するには	39
フローチャートを印刷するには	39
トラブルシューティング用のフローチャート・ファ イルのパッケージ化	39
トラブルシューティング用のフローチャート・フ ァイルをパッケージするには	40
フローチャート・データ・パッケージの IBM Unica テクニカル・サポートへの送信	40
フローチャート・データのパッケージ化のオプシ ョン	41
フローチャートのリファレンス	44
「フローチャート」タブのアイコン (「表示」モ ード)	44
「フローチャート」ページのアイコン (「編集」 モード)	45

第 5 章 プロセス 47

プロセスのタイプ	47
--------------------	----

データ操作プロセス	47	抽出プロセスの構成	86
実行プロセス	48	データをセル、単一テーブル、または戦略的セグメントから抽出するには	86
最適化プロセス	48	eMessage ランディング・ページからのデータの抽出	88
フローチャートでのプロセスの使用	49	「書き込み」タブのリファレンス	89
新規プロセスをフローチャートに追加するには	49	スナップショット	90
2つのプロセスの接続	50	スナップショット・プロセスを構成するには	90
例: プロセスの接続	50	スケジュール	93
プロセスをコピーして貼り付けるには	51	スケジュール・プロセスを構成するには	94
プロセスを切り取るには	52	スケジュール・プロセスでカレンダー・ツールを使用するには	96
プロセスをテンプレート・ライブラリーから貼り付けるには	52	トリガーに基づいたスケジューリング	97
プロセスを移動するには	53	キューブ	98
プロセスを削除するには	53	キューブ・プロセスを構成するには	98
2つのプロセスの間の接続を削除するには	53	セグメントの作成	100
プロセスを実行するには	54	セグメントの作成プロセスを構成するには	100
プロセスの構成	56	メール・リスト	101
「プロセス設定」ウィンドウにアクセスするには	56	コンタクト・プロセス (メール・リストまたはコール・リスト) を構成するには	102
選択	57	コール・リスト	107
選択プロセスを構成するには	57	トラッキング	107
IBM Coremetrics セグメントを選択プロセスで使用する方法	58	トラッキング・プロセスを構成するには	107
マージ	61	レスポンス	109
マージ・プロセスを構成するには	61	レスポンス・プロセスを構成するには	110
セグメント	62	モデル	112
フィールドによるセグメント化	63	モデル・プロセスを構成するには	112
クエリーによるセグメント化	63	スコア	114
別のセグメント・プロセスへの入力としてのセグメントの使用	63	スコア・プロセスを構成するには	115
セグメント化の考慮事項	64	プロセス用のデータ・ソースの選択	116
フィールドでセグメント・プロセスを構成するには	65	入力セル、セグメント、またはテーブルをプロセスへの入力として選択するには	116
クエリーでセグメント・プロセスを構成するには	65	複数のテーブルをプロセスへの入力として選択するには	117
セグメント・プロセスの設定: 「セグメント」タブ	66	新規テーブルをソースとして選択するためにマップするには	117
セグメント・プロセスの設定: 「書き込み」タブ	67	プロセス用のデータベース内処理の選択	117
セグメント・プロセスの設定: 「全般」タブ	68	データベース内処理をオンまたはオフにする	118
「新規セグメント」および「セグメントの編集」ダイアログ	68	フローチャートに対してデータベース内処理をオンまたはオフにするには	118
サンプル	69	データベース内処理をグローバルにオンまたはオフにするには	119
サンプル・プロセスを構成するには	69	プロセスでのクエリーの作成	119
サンプル・サイズ計算器について	72	Campaign プロセスでのクエリーの評価方法	119
オーディエンス	73	「ポイント & クリック」を使用してクエリーを作成するには	120
オーディエンス・レベル	73	「SQL 入力」を使用してクエリーを作成するには	121
ハウスホールディング	74	「入力サポート」を使用してクエリーを作成するには	122
レベルの切り替え	74	SQL を使用したクエリーの作成	123
オーディエンス・プロセスの構成	75	項目のプロファイル	128
例: オーディエンス・プロセス	77	項目をプロファイルするには	128
例: レコードのフィルター処理	77	プロファイルでの入力の制限	129
入力と出力で同じオーディエンス・レベルを使用する	78	プロファイルの不許可	131
入力と出力で異なるオーディエンス・レベルを使用する	82	プロファイル・オプションの設定	132
抽出	84		
例: トランザクション・データの抽出	85		
eMessage ランディング・ページからデータを抽出する際の前提条件	86		

プロファイル・カウントの更新	133
プロファイル・カテゴリーをクエリーに挿入するには	133
プロファイルの結果を印刷するには	134
プロファイル・データをエクスポートするには	134
コンタクト・ログの出力ファイルまたはテーブルの指定	135
出力ファイルをコンタクト・ログに指定するには	135
データベース・テーブルをコンタクト・ログに指定するには	136
乱数選択用のシードの変更	136
レコードを選択するための乱数種を変更するには	137
プロセス出力での重複 ID の除外	137
「カレンダー」ツールを使用するには	137

第 6 章 オファー 139

オファー属性	139
オファーのバージョン	141
オファー・テンプレート	141
オファー・リストについて	142
静的オファー・リスト	142
スマート・オファー・リスト	143
セキュリティーおよびオファー・リスト	143
処理	143
コントロール・グループ	144
ターゲット・セルへのコントロール・セルの関連付け	144
オファーの処理	145
新規オファーの作成	145
オファーの関連製品	146
オファーの複製	148
オファーのグループ化	149
オファーを編集するには	150
オファーまたはオファー・リストを移動するには	150
オファー・リストへのオファーの追加	151
オファーの削除	151
オファーの回収	152
オファーをプロセス設定ダイアログからセルに割り当てるには	153
オファーの検索	154
「オファー一覧」ページのアイコン	155
サマリー・ページからオファー・レポートを表示するには	156
オファー・リストの処理	157
静的オファー・リストを追加するには	157
スマート・オファー・リストを追加するには	157
オファー・リストを編集するには	158
オファー・リストの移動	158
オファー・リストの削除	159
オファー・リストの回収	159
セルへのオファー・リストの割り当て	159
Marketing Operations が Campaign と統合されている場合のオファーの管理	160
Marketing Operations の資産を Campaign のオファーで使用する方法	160

Marketing Operations の資産を Campaign のオファーで使用する方法	161
---	-----

第 7 章 セル 165

セル名およびセル・コード	165
例: セルの名前変更のシナリオ	166
セルの操作	169
フローチャート・プロセス内でセルを作成する方法	169
出力セル・サイズの制限	169
セル名の変更	173
セル名のリセット	174
セル名とセル・コードのコピーおよび貼り付けについて	175
セル・コードの変更	176
「ターゲット・セルの照合とリンク」ダイアログを使用してフローチャート・セルを照合およびリンクする方法	176
「ターゲット・セルの照合とリンク」ダイアログを使用してフローチャート・セルを照解除またはリンク解除する方法	177
「ターゲット・セルの照合とリンク」ダイアログを使用してフローチャート・セルを手動で照合およびリンクする方法	178
プロセス設定ダイアログを使用してフローチャート・セルをターゲット・セルにリンクする方法	178
プロセス設定ダイアログを使用してフローチャート・セルをターゲット・セルからリンク解除する方法	179
フローチャート CSP のセルにオファーを割り当てる方法	179
セルへのオファー・リストの割り当て	180
セルに割り当てられたオファーでパラメーターを設定する方法	180
ターゲット・セル・スプレッドシートについて	181
ターゲット・セル・スプレッドシートのセル・ステータス情報	182
ターゲット・セル・スプレッドシートの操作	183

第 8 章 コンタクト履歴およびレスポンス・トラッキング 193

コンタクト履歴およびオーディエンス・レベル	193
詳細コンタクト履歴	193
コンタクト履歴テーブルへのエントリーの書き込み	194
処理履歴 (UA_Treatment)	195
ベース・コンタクト履歴 (UA_ContactHistory)	195
詳細コンタクト履歴 (UA_DtlContactHist)	197
オファー履歴	198
コンタクト履歴への書き込みの無効化	198
テスト実行の実施	198
ログ・オプションを無効にする方法	198
コンタクト履歴およびレスポンス履歴の消去	199
コンタクト履歴およびレスポンス履歴の消去方法	199
レスポンス・トラッキングについて	200
レスポンス・トラッキングの実行	201
レスポンス・タイプ	205

レスポンス・カテゴリー	206
直接レスポンス	206
推定レスポンス	208
アトリビューション方式	209
最適一致	209
断片一致	210
複数一致	210

第 9 章 保管オブジェクト 211

ユーザー定義項目について	211
ユーザー定義項目の作成	211
ユーザー定義項目の保管	213
ユーザー定義項目を永続化するには	214
ユーザー変数について	217
ユーザー変数を作成するには	218
カスタム・マクロについて	218
カスタム・マクロを作成するには	219
カスタム・マクロを使用するためのガイドライン	221
カスタム・マクロを管理するには	223
テンプレートについて	224
テンプレートをテンプレート・ライブラリーにコピーするには	224
テンプレート・ライブラリーからテンプレートを貼り付けるには	224
テンプレートを管理するには	225
テーブル・カタログについて	225
テーブル・カタログにアクセスするには	225
テーブル・カタログを編集するには	226
テーブル・カタログを削除するには	226

第 10 章 セッション 227

セッションの操作	227
セッションを作成するには	227
セッションを表示するには	228
セッションのサマリー詳細を編集するには	228
セッション・フローチャートを編集するには	229
セッション・フローチャートのプロパティーを編集するには	229
セッションのコピーについて	229
セッションの実行について	229
セッションを移動するには	229
セッションの削除について	230
セッションの編成について	231
セッション・フォルダーを追加するには	231
セッション・フォルダーの名前および説明を編集するには	231
セッション・フォルダーを移動するには	232
セッション・フォルダーを削除するには	232
「セッション一覧」ページのアイコン	233
戦略的セグメントについて	233
戦略的セグメントのパフォーマンスの向上	234
戦略的セグメントを作成するための前提条件	234

戦略的セグメントを作成するには	235
「セグメント一覧」ページからセグメントを表示するには	236
キャンペーンのサマリー・ページから戦略的セグメントを表示するには	236
セグメントのサマリー詳細を編集するには	236
戦略的セグメントのソース・フローチャートを編集するには	237
「セグメント一覧」ページのアイコン	237
戦略的セグメントの実行	238
戦略的セグメントの編成	238
戦略的セグメントの削除	240
グローバル抑制およびグローバル抑制セグメントについて	241
グローバル抑制の適用	242
グローバル抑制の無効化	242
ディメンション階層について	243
例: ディメンション階層	243
ディメンション階層の作成	243
ディメンション階層を更新する	245
保管ディメンション階層をロードする	245
キューブについて	246

第 11 章 レポート 249

レポート・タイプ	249
Campaign リスト・ポートレット	250
Campaign IBM Cognos レポート・ポートレット	250
レポートの操作	251
レポートへのアクセスと表示	251
レポート・コントロール	252
レポート・ツールバー	253
レポートを電子メールで送信するには	253
さまざまな形式でのレポートの表示	253
レポートの再実行	255
Campaign のレポートのリスト	255
フローチャート・セル・レポート	255
セグメント・クロス集計レポート	261
キャンペーン・カレンダー	262
キャンペーンおよびオファーのリストのレポート	262
パフォーマンス・レポート	262

付録. IBM Unica Campaign オブジェ

クト名での特殊文字	269
サポートされていない特殊文字	269
命名上の制約を持たないオブジェクト	270
特定の命名上の制約を持つオブジェクト	270

IBM Unica 技術サポートへの連絡 . . . 271

特記事項	273
商標	275

第 1 章 IBM Unica Campaign の概要

Campaign は、バックエンド・サーバー、Web サーバー、ActiveX クライアントおよび Marketing Platform セキュリティーで構成される Web ベースのエンタープライズ・マーケティング・マネジメント (EMM) ソリューションです。Campaign を使用して、ユーザーは直接マーケティング・キャンペーンを設計、実行、および分析できます。

Campaign には使いやすいグラフィカル・ユーザー・インターフェースが用意されています。これにより、顧客 ID の選択、抑止、セグメント化、およびサンプリング、さらに顧客 ID の出力リスト作成という直接マーケティング・プロセスがサポートされます。Campaign の Universal Dynamic Interconnect (UDI) データ・コミュニケーション層を使用して、リレーショナル・データベース (データベース・タイプを問わず) やフラット・ファイルなど、すべてのデータ・ソースのデータにシームレスにアクセスし、操作することができます。

Campaign プロセスは、コンタクト履歴およびレスポンス履歴にデータを挿入し、レスポンス・アトリビューションおよびレポート作成をサポートします。

このアプリケーションは生の SQL、マクロ、および関数をサポートしますが、ユーザーは SQL を知らなくてもキャンペーンを設計できます。データベース・テーブルはいったんマップされると、簡単に選択、マージ、サンプリング、およびセグメント化することができ、結果として得られた顧客をさまざまなオファーに関連付けることができます。また、キャンペーンの結果については、記録、レスポンス・トラッキング、および投資収益率 (ROI) 計算を行うことができます。キャンペーンは、特定時点に実行されるようにスケジュールすること、または特定イベントによってトリガーされるようにすることが可能です。これらはすべて、SQL の知識がなくても可能です。

Campaign はマーケティング・キャンペーンを 1 つ以上のフローチャートで構成される 1 つの個別エンティティとして扱います。各フローチャートは 1 つ以上のプロセスで構成されます。キャンペーンは 1 つ以上の戦略的セグメント、オファー、およびレポートに関連付けることができ、複数のフローチャートで構成できます。

プロセスは、キャンペーン・フローチャートのビルディング・ブロックであり、Campaign の心臓部と言えます。プロセスが実際のデータ操作、スケジュールリング、オファー照合、リスト生成、および最適化を行うからです。実質、プロセスを使用して、キャンペーンを定義および実装することになります。

Campaign の対象者

Campaign は、マーケティングの専門家、およびデータ・マイニング、On-Line Analytical Processing (OLAP)、ならびに SQL の専門家を使用対象者として設計されています。

Campaign のユーザー は、直接マーケティング・キャンペーンを設計、実行、および分析することができます。キャンペーン管理者 は、データベース・テーブルのマッピング、構成設定の調整、ユーザー用カスタム属性とオファー・テンプレートの定義などの初期作業と同時進行作業を実施することで、その同僚のための基礎作業を行います。

Campaign 管理者が実行する作業について詳しくは、「*Campaign 管理者ガイド*」を参照してください。

他の IBM Unica 製品との統合

Campaign は、オプションで以下の IBM® Unica 製品と統合できます。

- **Distributed Marketing**。集中管理キャンペーンの分散した、カスタムでの実行をサポートします。
- **eMessage**。ターゲットを設定した、測定可能な電子メール・マーケティング・キャンペーンを構築します。
- **Interact**。対話における体験を充実させるために、カスタマイズされたオファーおよび顧客プロファイルの情報をリアルタイムで取得します。Campaign での Interact 機能の使用 (対話式フローチャートの使用やバッチ・フローチャートの Interact プロセスの使用を含む) については、IBM Unica Interact の資料を参照してください。
- **Marketing Operations**。Marketing Operations のマーケティング・リソース管理機能を Campaign のキャンペーン開発機能と統合します。詳しくは、『IBM Unica Marketing Operations との統合について』を参照してください。
- **CustomerInsight**。直接マーケティング・キャンペーンの設計時に、CustomerInsight グループの選択内容にアクセスできるようにします。
- **NetInsight**。直接マーケティング・キャンペーンの設計時に、NetInsight 訪問者セグメントにアクセスできるようにします。
- **Optimize**。ビジネス・ルールおよび制約を考慮する一方で、顧客中心の観点からコンタクトを最適化します。
- **PredictiveInsight**。レスポンス・モデリング、クロス・セル、顧客評価、およびセグメンテーションの予測モデルのスコア設定を活用します。

Campaign と統合されている他の IBM Unica 製品の使用方法については、それらの製品に同梱されている資料を参照してください。

IBM Unica Marketing Operations との統合について

Campaign を Marketing Operations と統合すると、そのマーケティング・リソース管理機能を使用してキャンペーンを作成、計画、および承認することができます。

Campaign を Marketing Operations と統合すると、スタンドアロンの Campaign 環境で以前に実行された多くのタスクが Marketing Operations で実行されます。以下にそれらのタスクを示します。

- キャンペーンの実行:
 - キャンペーンの実行
 - キャンペーンの実行、移動、および削除

- キャンペーンのリポート詳細の操作
- ターゲット・セル・スプレッドシートの操作
- セルへのオファーの割り当て
- コントロール・セルの指定
- カスタム・キャンペーン属性の作成および追加
- カスタム・セル属性の作成および追加

これらのタスクについては、「*Marketing Operations and Campaign 統合ガイド*」で説明されています。

以下のタスクは、Campaign のスタンドアロン環境と統合環境の両方で実行されません。

- フローチャートの作成
- フローチャートの実行
- キャンペーン/オファー/セルの詳細分析
- キャンペーンのパフォーマンスに関するレポート作成 (インストールされているレポート作成パックによる)

オファーの統合も有効になっている場合、Marketing Operations で以下のタスクを実行します。

- オファーの設計
 - オファー属性の定義
 - オファー・テンプレートの作成
- オファーの作成、承認、公開、編集、および回収
- オファー・リストおよびオファー・フォルダーによるオファーの編成

レガシー・キャンペーンについて

レガシー・キャンペーンとは、統合が有効になる前に Campaign (または Affinium Campaign 7.x) で作成された既存のキャンペーンのことです。Marketing Operations と Campaign の統合環境では、以下のタイプのレガシー・キャンペーンにアクセスできるように Campaign を構成できます。

- バージョン 8.0 の統合が有効になる前にスタンドアロン Campaign (Campaign が現行バージョンか旧バージョンかを問わず) で作成されたキャンペーン。これらのキャンペーンは Marketing Operations プロジェクトにリンクできません。
- Affinium Campaign 7.x で作成され、Affinium Plan 7.x プロジェクトにリンクされたキャンペーン。両製品の属性間のデータ・マッピングに基づく場合、これらのキャンペーンの機能はこれらの製品のバージョン 7.x から変化していません。

すべての新規作成キャンペーンに適用されるバージョン 8.0 の統合が有効になった後でも、Campaign を使用すると両方のタイプのレガシー・キャンペーンにアクセスし、操作することができます。

Campaign の概念

Campaign を使用する前に理解しておく必要がある基本概念には、以下の内容があります。

- 『キャンペーン』
- 『フローチャート』
- 5 ページの『セッション』
- 5 ページの『プロセス』
- 5 ページの『オファー』
- 5 ページの『セル』

キャンペーン

Campaign でキャンペーンを作成して、直接マーケティング・キャンペーンを管理および反映します。各キャンペーンは以下の要素によって定義します。

- 名前
- セキュリティー・ポリシー
- 説明
- 目的
- キャンペーン・コード
- 発効日および有効期限
- イニシアチブ
- 所有者
- カスタマイズされた属性

キャンペーンには 1 つ以上のフローチャートが含まれています。フローチャートは、キャンペーンを実行するためにデータに対して一連のアクションを実行するように設計します。

フローチャート

Campaign では、フローチャートはデータに対して実行する一連のアクションを表します。すべてのアクションはそれぞれプロセス というビルディング・ブロックによって定義されます。プロセスを構成および結合することで、基礎にあるデータを操作して目標を達成できます。フローチャートは、手動で、スケジューラーにより、または定義済みの何らかのトリガーへの応答として実行できます。

フローチャートを使用して特定のマーケティング目標を達成します。例えば、ダイレクト・メール・キャンペーンの対象として適格な受信者の判別、その受信者グループのメーリング・リストの生成、特定のオファーへの各受信者の関連付けなどといった目標を達成できます。またフローチャートを使用して、キャンペーンへの応答者をトラッキングおよび処理し、キャンペーンの投資収益率を計算することもできます。

各キャンペーンごとに、そのキャンペーンを実装するためのフローチャートを 1 つ以上設計し、必要なデータ操作またはアクションを実行するフローチャートを形成する各プロセスを構成します。

各フローチャートには以下の要素があります。

- 名前
- 説明
- 構成および接続されたプロセス
- 1 つ以上のデータ・ソース

Interact のライセンス交付を受けたユーザーは、Campaign を使用してリアルタイムの対話式フローチャート を実行することもできます。対話式フローチャートはイベントの発生に依存するフローチャートです。対話式フローチャートについて詳しくは、「*Interact ユーザー・ガイド*」を参照してください。

セッション

セッションとは、アプリケーション内のある特殊な場所のことです。この場所で、基本的、永続的、およびグローバルなデータ構成体 (戦略的セグメントやキューブなど) が Campaign 管理者によって作成され、すべてのキャンペーンで使用できるようになります。キャンペーンと同様に、セッションも個々のフローチャートで構成されます。

プロセス

フローチャートは、キャンペーンまたはセッションで特定のタスク (データの選択、2 つの異なるオーディエンス・グループのマージ、キャンペーン結果の書き出しなど) を実行するように構成された個々のプロセスで構成されます。

オファー

オファーは、さまざまな方法で提供することができる、単一のマーケティング・メッセージを表します。

Campaign では、1 つ以上のキャンペーンで使用できるオファーを作成します。

オファーは、以下のように再使用可能です。

- 異なるキャンペーン内で
- 異なる特定時点において
- 異なる人々のグループ (セル) を対象として
- オファーのパラメーター化された項目を変化させた、異なる「バージョン」として

コンタクト・プロセスのいずれかを使用してフローチャートでターゲット・セルにオファーを割り当て、オファーを受け取った顧客および応答した顧客に関するデータを取得することによりキャンペーン結果をトラッキングします。

セル

セルとは、単にデータベースからの ID (顧客や見込み顧客などの ID) のリストです。Campaign では、フローチャートでデータ操作プロセスを構成および実行して、セルを作成します。これらの出力セルは、同じフローチャートの他のプロセス (その作成元プロセスのダウストリームにあるもの) で入力として使用することもできます。作成できるセル数に制限はありません。

Campaign で 1 つ以上のオファーの割り当て先となっているセルはターゲット・セルと呼ばれます。ターゲット・セルとは、同種の個人 (あるいは、個々の顧客や世帯アカウントなど、オーディエンス・レベルが定義されている任意のエンティティ) の固有のグループのことです。例えば、高価値顧客、Web でのショッピングを好む顧客、分割払いのアカウント、電子メール・コミュニケーションの受信を決めている顧客、リピートのロイヤル購入者などに、それぞれセルを作成できます。作成した各セルまたはセグメントの扱いはそれぞれ異なっており、異なるチャネルを介して異なるオファーまたはコミュニケーションを受け取ります。

オファーの受け取り対象として適格ではあるが、分析の目的でそのオファーの受け取り対象から除外されている ID を含むセルは、コントロール・セルと呼ばれます。Campaign では、コントロールは常に検証コントロールです。

「セル」という用語は、「セグメント」と互換的に使用される場合があります。戦略的セグメントは、キャンペーン・フローチャート内ではなく、セッション内で作成されるセルです。戦略的セグメントは他のセル (例えば、フローチャート内のセグメント・プロセスによって作成されたセルなど) と変わりませんが、どのキャンペーンでもグローバルに使用できる点が異なります。戦略的セグメントは、その当初の作成元であるフローチャートが再実行されるまで、静的 ID リストとなっています。

第 2 章 Campaign の概要

Campaign で意義のある作業を実行できるようになるには、事前にデータベース・テーブルをマップし、(場合によっては) セグメント、ディメンション、キューブなどのデータ・オブジェクトを作成し、さらに、個々のキャンペーンを計画および設計しておく必要があります。これらの作業は、当初は IBM Unica コンサルタントの支援のもとで実行し、その初回のキャンペーンと本書を利用して、ユーザー自身で追加のキャンペーンを設計および実行すること、あるいはさまざまなレベルの支援のもとで初回のキャンペーンを改善、拡張し、そのキャンペーンを基礎として利用することが期待されます。

構成およびその他の管理作業について詳しくは、「*Campaign インストール・ガイド*」および「*Campaign 管理者ガイド*」を参照してください。

ユーザー名とパスワード

Campaign にアクセスするには、Marketing Platform で作成されたユーザー名とパスワードの組み合わせが必要であり、Campaign にアクセスする権限を持っている必要もあります。

有効なユーザー名とパスワードがない場合は、システム管理者にお問い合わせください。

IBM Unica Marketing にログインするには

IBM Unica Marketing の使用を開始するには、以下が必要になります。

- IBM Unica Marketing サーバーにアクセスするためのイントラネット (ネットワーク) 接続。
 - ご使用のコンピューターに Microsoft Internet Explorer がインストール済みであること。
 - IBM Unica Marketing にサインインするためのユーザー名とパスワード。
 - ネットワーク上の IBM Unica Marketing にアクセスするための URL。この正しい URL が不明であるか、あるいはユーザー名またはパスワードが必要な場合は、IBM Unica Marketing 管理者にお問い合わせください。
1. Microsoft Internet Explorer ブラウザーを起動します。
 2. ブラウザーのアドレス・フィールドに、その IBM Unica Marketing の URL を入力します。

IBM Unica Marketing が Windows の Active Directory または Web アクセス制御プラットフォームと統合されていて、そのシステムにログオンしている場合は、IBM Unica Marketing 管理者によって構成されたダッシュボードまたはデフォルトの開始ページが IBM Unica Marketing によって表示されます。これで、ログインは完了です。それ以外の場合は、ログイン・ページが表示されます。

ご使用の IBM Unica Marketing のバージョンで SSL を使用している場合、初めてサインインする際にデジタル・セキュリティ証明書を受け入れるためのプロンプトが表示される場合があります。「はい」をクリックして、証明書を受け入れます。

3. ユーザー名とパスワードを入力してから、「サインイン」をクリックします。

IBM Unica Marketing のパスワード規則の構成方法によっては、「パスワードの変更」ページが表示される場合があります。新規パスワードを入力し、再度それを入力して確認し、「パスワードの変更」をクリックします。

ログインが成功すると、IBM Unica Marketing 管理者によって構成されたダッシュボードまたはデフォルトの開始ページが IBM Unica Marketing によって表示されます。

役割と権限

Campaign でのユーザー名は、レビュー担当者、デザイナー、マネージャーなどの 1 つ以上の役割に関連付けられています。組織に固有の役割は、管理者が定義します。役割によって、Campaign で実行できる機能が決まります。これらの機能を特定のオブジェクトに対して実行できるかどうかは、組織によって実装されるオブジェクト・レベルのセキュリティによって決まります。自分の権限では許可されないオブジェクトにアクセスしたり、タスクを実行したりする必要がある場合は、システム管理者にお問い合わせください。

Campaign でのセキュリティ・レベル

Campaign でのセキュリティは、以下の 2 つのレベルで機能します。

- **機能** - ユーザーが属する役割に基づいて、オブジェクトのさまざまなタイプに対して実行できるアクションを決定します。これらの役割は組織が実装時に定義し、各役割には一連の権限が関連付けられています。これらの権限は、役割に属するユーザーが実行できるアクションを決定します。例えば、「管理者」という役割が割り当てられているユーザーには、システム・テーブルをマップおよび削除するための権限が与えられる場合があり、「レビュー担当者」という役割が割り当てられているユーザーには、システム・テーブルをマップおよび削除するための権限は与えられない場合があります。
- **オブジェクト** - 許可されているアクションの実行対象にできるオブジェクト・タイプを定義します。言い換えれば、ユーザーが、キャンペーンを編集するための一般的な権限が付与されている役割に属しているとしても、特定のフォルダーにあるキャンペーンにアクセスできないよう、Campaign のオブジェクト・レベルのセキュリティをセットアップすることができます。例えば、ユーザーが部門 A に属している場合、機能役割に関係なく、部門 B に属するフォルダーの内容へのアクセスを許可されない場合があります。

開始ページの設定

IBM Unica Marketing に最初にログインした際に、ダッシュボード・ページを表示しない場合は、インストール済みの IBM 製品のいずれかの 1 つのページを開始ページとして選択することができます。

表示しているページを開始ページとして設定するには、「設定」>「現在のページをホームに設定 (Set current page as home)」を選択します。開始ページとして選択できるページは、各 IBM Unica Marketing 製品および IBM Unica Marketing 内のユーザーの権限によって決定されます。

表示しているページで、「現在のページをホームに設定 (Set current page as home)」オプションが有効になっている場合、そのページを開始ページとして設定できます。

第 3 章 キャンペーン

キャンペーンは、そのキャンペーンを実行するためにデータに対して一連のアクションを実行するようにユーザーが設計した、1 つ以上のフローチャートで構成されます。フローチャートは複数のプロセスで構成されます。プロセスは、キャンペーンに必要な実際のデータ操作、コンタクト、スケジューリング、およびレスポンス・トラッキングを行うようにユーザーが構成します。プロセスは、実質的にはキャンペーンをどのように定義し、実装するかを表したものです。

複数のチャネルを使用して 1 つのオファーを提供するリテンション・キャンペーン用に設計されたフローチャートの例は、12 ページの『例: マルチチャネルのリテンション・キャンペーン』を参照してください。

キャンペーン用のデータの準備

キャンペーン用のデータを準備するには、最初に、顧客と製品に関する情報を含むデータ・ソース内のテーブルまたはファイルを Campaign に通知する必要があります。データを Campaign にマップすることで、そのデータがプロセスで操作に使用できるようになります。詳しくは、「Campaign 管理者ガイド」のデータベース・テーブルの管理に関するセクションを参照してください。

また、キャンペーンで使用するオファー、戦略的セグメント、およびその他のデータ・オブジェクトの作成も必要になる場合があります。キャンペーンで使用するオブジェクトの作成については、211 ページの『第 9 章 保管オブジェクト』を参照してください。

Campaign での IBM Coremetrics セグメントの使用

IBM Coremetrics® Web Analytics 製品を使用すると、ユーザーは訪問レベルおよびビュー・レベルの基準に基づいてセグメントを定義することができます。これらのセグメントを Campaign で使用できるようにすると、フローチャートでそれらを使用できるため、マーケティング・キャンペーンでターゲットにすることができます。この「オンライン・セグメンテーション」機能を使用すると、IBM Coremetrics のデータを自動的にキャンペーンに取り込むことができます。

- 統合を構成するには、「Campaign 管理者ガイド」を参照してください。
- IBM Coremetrics 定義のセグメントを Campaign で使用するには、58 ページの『IBM Coremetrics セグメントを選択プロセスで使用方法』を参照してください。

キャンペーンの設計

キャンペーンを作成する前に、キャンペーンの書類上での設計と目標の決定を済ませておく必要があります。書類上でキャンペーンの設計を行ったら、キャンペーンを作成し、キャンペーンの目標を達成するためのフローチャートを 1 つ以上作成することにより、Campaign にそのキャンペーンを実装します。

キャンペーンは 1 つ以上のフローチャートで構成されます。フローチャートは相互接続された複数のプロセスで構成されます。フローチャート内で結合されたプロセスは Campaign の心臓部と言えます。プロセスが実際のデータ操作、コンタクト、スケジューリング、およびレスポンス・トラッキングを行うからです。実質、プロセスはキャンペーンをどのように定義し、実装するかを表したものです。

例: マルチチャネルのリテンション・キャンペーン

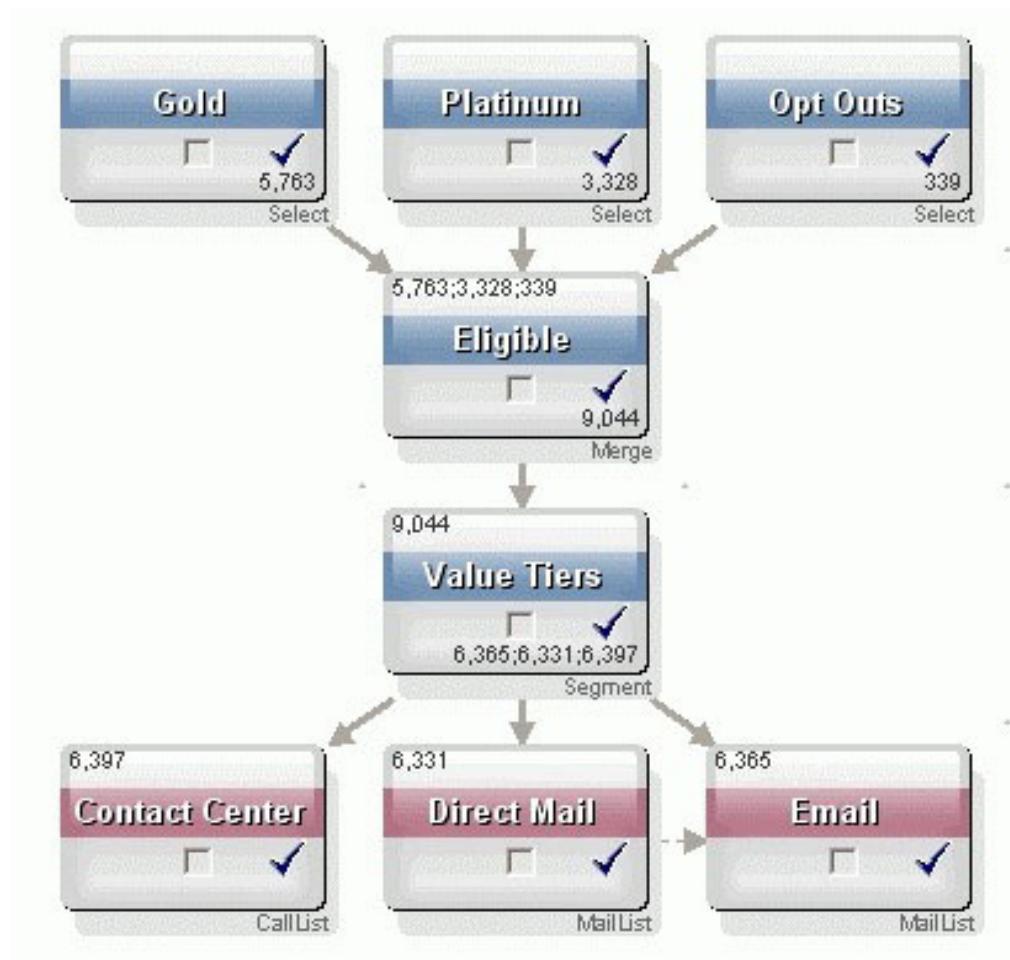
この例では、複数のチャネルを使用して、自然消滅的に失われた可能性のある顧客にオファーを提供するリテンション・キャンペーンを示します。

2 つのフローチャートが必要です。1 つ目はオファーの送信先 (セグメントごとに異なるチャネルを使用) の顧客のリストを生成するためのもの、2 つ目は、オファーへのレスポンスをトラッキングして、レポート作成と分析用にレスポンス・データを書き出すためのものです。

コンタクト・フローチャート

コンタクト・フローチャートの目的は、それぞれの価値のセグメント内で適格な顧客を選択し、各セグメントごとに異なるチャネルのコンタクト・リストを出力することです。

リテンション・キャンペーンのフローチャートの例



フローチャートの最初の層では、2 つの選択プロセスが Gold セグメントと Platinum セグメントで顧客を選択し、3 つ目の選択プロセスにはマーケティング・コミュニケーションから離脱した顧客のリストが含まれています。

2 番目の層では、マージ・プロセスが Gold および Platinum の顧客を結合し、離脱した顧客を除外します。

3 番目の層では、セグメント・プロセスを使用して、適格なすべての顧客をスコアに基づいてそれぞれの価値の層にセグメント化します。

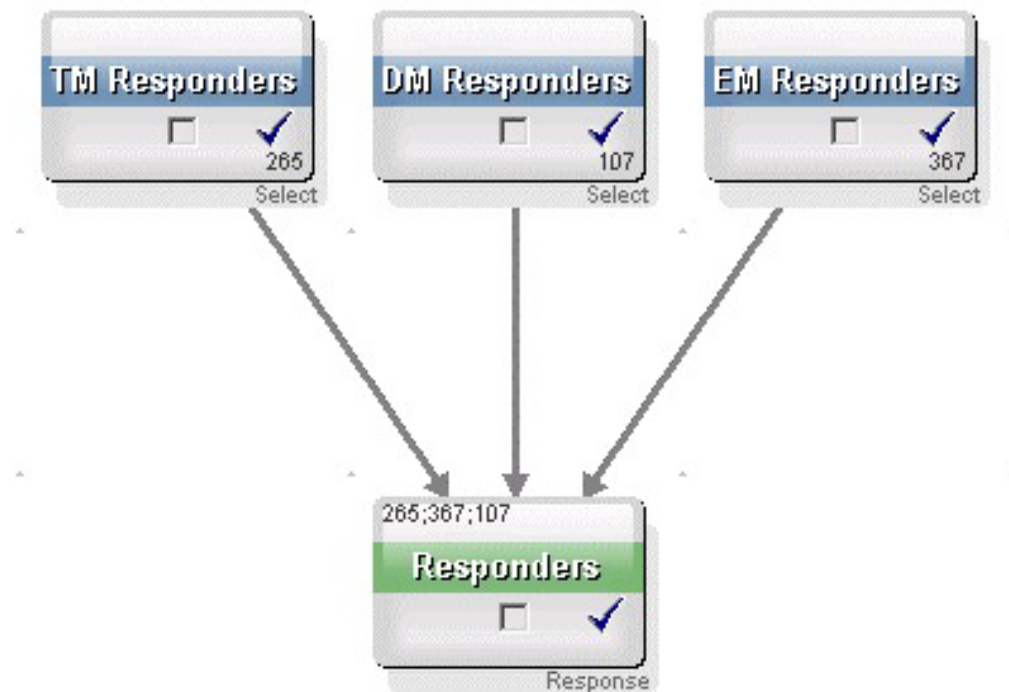
最後に、高価値顧客が、コール・リスト・プロセスを使用してコール・リストに出力され、オファーについて電話でコンタクトされます。中価値の顧客は、メール・リスト・プロセスを使用してメール・リストに出力され、オファーについてのダイレクト・メールを受け取ります。最も低価値の顧客は、電子メールでオファーを受け取ります。

レスポンス・フローチャート

この同じキャンペーンの 2 番目のフローチャートは、コール・センターおよびレスポンス取得システムによって取得された、電話、ダイレクト・メール、および電子

メールのオファーへのレスポンスをトラッキングします。レスポンス情報は、Campaign のさまざまなパフォーマンス・レポートを通じて入手することができます。

リテンション・キャンペーンのレスポンス・トラッキング・フローチャート



キャンペーンへのアクセスについて

キャンペーンには「キャンペーン一覧」ページからアクセスします。このページはメニューの「キャンペーン」>「キャンペーン」リンクから表示できます。

「キャンペーン一覧」に表示される情報は、Campaign 環境の構成方法によって異なります。

- **スタンドアロン Campaign 環境** — 「キャンペーン一覧」ページには、少なくとも読み取り権限のあるすべてのキャンペーンとキャンペーン・フォルダーが表示されます。
- **Marketing Operations と Campaign の統合環境** — レガシー・キャンペーンへのアクセス権限が有効になっている場合、「キャンペーン一覧」ページにはレガシー・キャンペーンのみが表示されます。そうでない場合、このページにキャンペーンの一覧は表示されません。Marketing Operations によって作成されたキャンペーンにはキャンペーン・プロジェクトを通じてアクセスします。

レガシー・キャンペーンについて詳しくは、3 ページの『レガシー・キャンペーンについて』を参照してください。レガシー・キャンペーンへのアクセス権限を有効にするための Campaign の構成については、インストール資料を参照してください。

Marketing Operations で作成されたキャンペーン・プロジェクトに「キャンペーン一覧」ページからアクセスする場合は、「**キャンペーン・プロジェクト**」フォルダーのリンクをクリックします。このフォルダーから、Marketing Operations のプロジェクト・ビューにアクセスできます。表示されるプロジェクトは、Marketing Operations で設定したデフォルトのプロジェクト・ビューによって異なります。必要であれば、すべてのキャンペーン・プロジェクトが表示されるようにこのビューを構成することができます。

キャンペーン・プロジェクトについて詳しくは、「*Marketing Operations and Campaign 統合ガイド*」を参照してください。プロジェクト・ビューについて詳しくは、「*Marketing Operations ユーザー・ガイド*」を参照してください。

注: 「キャンペーン・プロジェクト」フォルダーの削除、移動、またはコピーはできません。

キャンペーンの操作

このセクションでは、Campaign 内でキャンペーンに関して実行できる作業について説明します。

注: ご使用の Campaign 環境が Marketing Operations と統合されている場合、キャンペーンの操作には Marketing Operations 内のキャンペーン・プロジェクトを使用する必要があります。統合が有効になる前に作成された既存のキャンペーンがその Campaign 環境にあり、Campaign がレガシー・キャンペーンにアクセスできるように構成されている場合、本書の説明に従ってそれらのキャンペーンを操作してください。詳しくは、2 ページの『IBM Unica Marketing Operations との統合について』を参照してください。

注: キャンペーンを操作するには、適切な権限が必要です。権限については、「*Campaign 管理者ガイド*」を参照してください。

キャンペーンの作成方法

1. 「キャンペーン」 > 「キャンペーン」を選択します。

現行パーティション内のフォルダーまたはキャンペーンが表示された「キャンペーン一覧」ページが表示されます。

2. フォルダー構造内を移動して、キャンペーンの追加先フォルダーを開きます。
3. 「**キャンペーンの追加**」アイコンをクリックします。

「新規キャンペーン」ページが表示されます。

4. 「キャンペーン・サマリー」内の項目に記入します。
5. キャンペーン・サマリーの詳細の入力が完了したら、「**保存と終了**」をクリックします。

「キャンペーン」ページに新しいキャンペーンのリストが表示されます。

注: キャンペーンのフローチャートの作成を直ちに開始する場合は、「**保存とフローチャートの追加**」をクリックすることもできます。ただし、フローチャート

を作成する前に、該当するセグメントとオファーをキャンペーンに関連付けることをお勧めします。その方が、フローチャートでの顧客の選択およびコンタクト・リストの作成が簡単になります。

戦略的セグメントのキャンペーンとの関連付け

戦略的セグメントとは、1つのセッションでシステム管理者(上級者)が作成し、すべてのキャンペーンで使用できるようにしたIDのリストのことです。戦略的セグメントは他のセグメント(例えば、セグメント・プロセスによって作成されたセグメントなど)と変わりませんが、どのキャンペーンでもグローバルに使用できる点が異なります。

戦略的セグメントをキャンペーンと関連付けると、フローチャートの作成時にそのセグメントを簡単に選択できます。また、関連する戦略的セグメントをキャンペーンと関連付けることで、Campaign内のレポート機能が向上します。

セグメントをキャンペーンに関連付ける方法

1. 「キャンペーン・サマリー」タブで、「セグメントの追加/削除」アイコンをクリックします。

「セグメントの追加/削除」ウィンドウが表示されます。

2. 追加するセグメントを以下のように選択します。
 - 追加するセグメントが見つかるまで、フォルダーをクリックしながらフォルダーの間を移動していきます。
 - 「ツリー表示」/「リスト表示」をクリックしてセグメントのリスト表示を変更してから、追加するセグメントに移動します。
 - 「検索」をクリックして「検索」タブにアクセスします。追加するセグメントを見つけるための名前や説明をこのタブで入力できます。
3. 追加するセグメントを選択(複数可)し、>> をクリックしてそれらを「含まれているセグメント (Included Segments)」リストに移動します。Shift キーを押しながらクリックするか、Ctrl キーを押しながらクリックすると、複数のセグメントを選択できます。
4. このキャンペーンに関連付けるセグメントの選択が完了したら、「変更の保存」をクリックします。

追加したセグメントは「キャンペーン・サマリー」ページの「関連セグメント」の下にリストされます。

注: 選択プロセスを使用してキャンペーンのフローチャートで顧客を選択する場合、キャンペーンに関連付けられているセグメントがリストの先頭に表示されるので、顧客を見つけやすくなります。

オファーのキャンペーンとの関連付け

キャンペーンを定義する際にオファーをキャンペーンと関連付けると、コンタクト・プロセスでオファーをセルに割り当てるときに、そのオファーを簡単に選択できます。「キャンペーン・サマリー」タブからキャンペーンに関連するオファーを

定義する場合、「トップダウン」の関連付けと呼ばれます。最初にキャンペーンとの関連付けをせずに単純にフローチャートでオファーを使用する場合は、「ボトムアップ」の関連付けと呼ばれます。

「キャンペーン・サマリー」タブからオファーを「トップダウン」で関連付ける方法

1. 「キャンペーン・サマリー」タブで、「オファーの追加/削除」アイコンをクリックします。

「オファーの追加/削除」ウィンドウが表示されます。

2. 追加するオファーを以下のように選択します。
 - 追加するオファーが見つかるまで、フォルダーをクリックしながらフォルダーの間を移動していきます。
 - 「検索」をクリックして「検索」タブにアクセスします。追加するオファーを見つけるための名前、説明、またはコードをこのタブで入力できます。
3. 追加するオファーを選択（複数可）し、>> をクリックしてそれらを「含まれているオファー」リストに移動します。**Shift** キーを押しながらクリックするか、**Ctrl** キーを押しながらクリックすると、複数のセグメントを選択できます。
4. このキャンペーンに関連付けるオファーの選択が完了したら、「変更の保存」をクリックします。

追加したオファーは「キャンペーン・サマリー」タブの「関連オファー」の下にリストされます。これらのオファーは、このキャンペーンのフローチャートで使用するまでぼかし表示されます。

「キャンペーン・サマリー」タブの「関連オファー」セクションには、キャンペーンに関連付けられているすべてのオファーがリストされます。「トップダウン」で関連付けられているオファーは、「ボトムアップ」で関連付けられているオファーとは、視覚的に区別されます。オファー名の横にアスタリスクが付いている場合、そのオファーは「トップダウン」方式でキャンペーンに関連付けられたことを示します。最初にトップダウンで定義されずに直接フローチャートで使用されたオファーは、アスタリスクなしで表示されます。トップダウンで定義されていても、まだフローチャートで使用されていないオファーは、フローチャートで使用されるまでぼかし表示されます。

コンタクト・プロセスを使用してキャンペーンのフローチャートにコンタクト・リストを作成する場合、トップダウンで定義されたオファーはリストの先頭に表示されるので、1 つ以上のターゲット・セルへの割り当て用にオファーを見つけて選択することが容易になります。

キャンペーンの表示方法

1. 「キャンペーン」>「キャンペーン」を選択します。

現行パーティション内のフォルダーまたはキャンペーンが表示された「キャンペーン一覧」ページが表示されます。

2. 表示するキャンペーンを含むフォルダーに移動します。

3. 表示するキャンペーンの名前をクリックして、そのキャンペーンを「サマリー」タブで開きます。

または

4. 表示するキャンペーンの名前の横にある「**タブの表示**」アイコンをクリックします。

「サマリー」、「ターゲット・セル」、および「レポート」のタブを選ぶための選択項目が (そのキャンペーンの表示の上部に横並びで、またはポップアップ・メニューとして) 表示され、キャンペーン内の各フローチャート (ある場合) の表示に関する選択項目も表示されます。

5. 表示するキャンペーンのタブをクリックします。

選択したタブでキャンペーンが開きます。

リンクされたレガシー・キャンペーンから Marketing Operations プロジェクトに移動する方法

1. 「キャンペーン」 > 「キャンペーン」を選択します。

現行パーティション内のフォルダーまたはキャンペーンが表示された「キャンペーン一覧」ページが表示されます。レガシー・キャンペーンのみがリストされず。

Marketing Operations と Campaign の統合が有効になった状態で作成されたキャンペーンを表示するには、「**キャンペーン・プロジェクト**」フォルダーをクリックします。レガシー・キャンペーンがない場合、または構成内でレガシー・キャンペーンが有効になっていない場合、このページは常に空になります。

2. 前に Affinium Plan のプロジェクトにリンクしたキャンペーンの名前をクリックします。

「サマリー」タブにキャンペーンが開きます。

3. 「**関連プロジェクト**」項目に表示されたプロジェクトの名前をクリックします。

Marketing Operations が開き、リンクされたプロジェクトの「サマリー」タブが表示されます。

4. Campaign に戻るには、Marketing Operations 内の (「**関連キャンペーン (コード)**」) 項目内のプロジェクトの名前をクリックします。

キャンペーンのサマリー詳細の編集方法

1. 「キャンペーン」ページで、サマリー詳細を編集するキャンペーンの名前をクリックします。

また、「**タブの編集**」アイコンをクリックしてコンテキスト・メニューから「サマリー」を選択すると、編集モードのキャンペーン・サマリーに直接アクセスできます。

「サマリー」タブにキャンペーンが開きます。

2. 「**サマリーの編集**」アイコンをクリックします。

3. 「サマリー」タブで必要な編集を行います。

注: キャンペーン名には文字に関する特定の制限があります。詳しくは、269ページの『IBM Unica Campaign オブジェクト名での特殊文字』を参照してください。

4. 変更を完了したら、「保存と終了」をクリックします。

変更が保存され、キャンペーンが閉じます。

キャンペーンの実行について

キャンペーンを実行するには、キャンペーン内の1つ以上のフローチャートを実行します。フローチャートを実行するには、事前にそのフローチャートのすべてのプロセスを正しく構成しておく必要があります。構成されていないフローチャート・プロセスはぼかし表示されます。正常に構成されたフローチャート・プロセスは色付きで表示されます。

システム・テーブルに出力が書き込まれないようにして実行する、フローチャートのテスト実行を行うことができます。

キャンペーンの印刷方法

「このアイテムを印刷」アイコンを使用すると、キャンペーン内の任意のページを印刷できます。

1. 印刷するキャンペーンのタブを選択します。

選択したタブが開きます。

2. 「このアイテムを印刷」アイコンをクリックします。

現在のページの印刷用ページを表示する新しいウィンドウが開きます。

3. 「印刷」をクリックします。

「印刷」ウィンドウが表示され、ここでプリンター・オプションを設定できます。

4. 「印刷」ウィンドウで「印刷」をクリックします。

ページが印刷されます。

キャンペーンの移動方法

キャンペーンをフォルダーからフォルダーへ移動することで、キャンペーンの編成を行えます。

重要: 移動を計画しているキャンペーン内のフローチャートを誰かが編集の場合、キャンペーンを移動するとそのフローチャート全体が失われる可能性があります。キャンペーンの移動時は、そのキャンペーン内のフローチャートがいずれも編集用が開かれていないことを確認してください。

1. 「キャンペーン」ページで、移動するキャンペーンの横のチェック・ボックスを選択します。複数のキャンペーンを選択して、一度に同じ場所に移動することができます。

2. 「移動」アイコンをクリックします。

「アイテムの移動」ウィンドウが表示されます。

3. キャンペーンの移動先のフォルダーをクリックします。

フォルダーの横にある + 記号をクリックしてフォルダーを開き、リストをナビゲートします。

4. 「このロケーションを受け入れる」をクリックします。

注: フォルダーをダブルクリックすると、場所の選択と受け入れを 1 回の手順で行うこともできます。

キャンペーンが宛先フォルダーに移動されます。

キャンペーンの削除について

キャンペーンを削除すると、キャンペーンとすべてのフローチャート・ファイルが削除されます。再使用するためにキャンペーンの一部を保管しておく場合は、その部分を保管オブジェクトとして保存できます。詳しくは、211 ページの『第 9 章 保管オブジェクト』を参照してください。

重要: コンタクト履歴やレスポンス履歴のレコードが関連付けられているキャンペーンを削除すると、対応するコンタクト履歴およびレスポンス履歴のレコードもすべて削除されます。関連するコンタクト履歴およびレスポンス履歴を保持する必要がある場合は、キャンペーンを削除しないでください。

キャンペーンの削除方法

1. 「キャンペーン」ページで、削除するキャンペーンに移動します。
2. 削除するキャンペーンの横のチェック・ボックスを選択します。複数のキャンペーンを選択して一度に削除できます。
3. 「選択項目の削除」アイコンをクリックします。

重要: コンタクト履歴やレスポンス履歴のレコードが関連付けられているキャンペーンを削除しようとする、対応するコンタクト履歴およびレスポンス履歴のレコードもすべて削除されることを示す警告メッセージが表示されます。対応するコンタクト履歴およびレスポンス履歴を保持する必要がある場合は、「キャンセル」をクリックします。

4. 確認ウィンドウで「OK」をクリックします。

選択したキャンペーンが削除されます。

注: キャンペーンを表示しているときに、「削除」アイコンをクリックしてキャンペーンを削除することもできます。

キャンペーン結果の分析

キャンペーンを実行した後は、結果を測定し、その結果を使用して戦略を細かく調整することができます。Campaign は、実際の応答率、売上、応答者当たりの利益など、キャンペーンに関するさまざまな情報を分析します。この情報に基づき、Campaignは合計および増分の売上と利益、および全体的な ROI を計算できます。

Campaign には、キャンペーンに関する情報の収集および分析に役立つ複数のタイプのレポートがあります。レポートの操作については、249 ページの『第 11 章 レポート』を参照してください。

キャンペーンの編成

キャンペーンはフォルダーまたは一連のフォルダーを作成して編成することができます。これにより、作成したフォルダー構造内の 1 つのフォルダーから別のフォルダーにキャンペーンを移動できます。キャンペーンを編成するために、フォルダーの追加、移動、および削除が可能です。フォルダーの名前および説明を編集することもできます。

キャンペーン・フォルダーの追加方法

1. 「キャンペーン」 > 「キャンペーン」を選択します。

現行パーティション内のフォルダーまたはキャンペーンが表示された「キャンペーン一覧」ページが表示されます。

2. サブフォルダーの追加先フォルダーに移動して「サブフォルダーの追加」をクリックします。または最上位にフォルダーを追加する場合は、単純に「サブフォルダーの追加」をクリックします。

「サブフォルダーの追加」ページが表示されます。

3. フォルダーの名前、セキュリティ・ポリシー、および説明を入力します。

注: フォルダー名には文字に関する特定の制限があります。詳しくは、269 ページの『IBM Unica Campaign オブジェクト名での特殊文字』を参照してください。

4. 「変更の保存」をクリックします。

「キャンペーン一覧」ページに戻ります。作成した新しいフォルダーまたはサブフォルダーが表示されます。

キャンペーン・フォルダーの名前と説明の編集方法

1. 「キャンペーン」 > 「キャンペーン」を選択します。

現行パーティション内のフォルダーまたはキャンペーンが表示された「キャンペーン一覧」ページが表示されます。

2. 名前を変更するフォルダーをクリックします。
3. 「名前の変更」をクリックします。

「サブフォルダー名の変更」ページが表示されます。

4. フォルダーの名前と説明を編集します。

注: フォルダー名には文字に関する特定の制限があります。詳しくは、269 ページの『IBM Unica Campaign オブジェクト名での特殊文字』を参照してください。

5. 「変更の保存」をクリックします。

「キャンペーン一覧」ページに戻ります。フォルダーまたはサブフォルダーの名前が変更されます。

キャンペーン・フォルダーの移動方法

1. 「キャンペーン」 > 「キャンペーン」を選択します。

現行パーティション内のフォルダーまたはキャンペーンが表示された「キャンペーン一覧」ページが表示されます。

2. 移動するサブフォルダーを含むフォルダーに移動します。
3. 移動するフォルダーの横にあるチェック・ボックスを選択します。複数のフォルダーを選択して同じ場所に一度に移動できます。
4. 「移動」アイコンをクリックします。

「アイテムの移動」ウィンドウが表示されます。

5. サブフォルダーの移動先のフォルダーをクリックします。

フォルダーの横にある + 記号をクリックしてフォルダーを開き、リストをナビゲートします。

6. 「このロケーションを受け入れる」をクリックします。

注: フォルダーをダブルクリックすると、場所の選択と受け入れを 1 回の手順で行うこともできます。

サブフォルダーとそのすべての内容が宛先フォルダーに移動されます。

キャンペーン・フォルダーの削除方法

フォルダーを削除するには、事前にフォルダーの内容を移動または削除する必要があります。

注: フォルダーを削除するために必要な権限を持っている場合、Campaign で、そのフォルダー内のサブフォルダーを削除することもできます。

1. 「キャンペーン」 > 「キャンペーン」を選択します。

現行パーティション内のフォルダーまたはキャンペーンが表示された「キャンペーン一覧」ページが表示されます。

2. 削除するサブフォルダーを含むフォルダーに移動します。
3. 削除するフォルダーの横にあるチェック・ボックスを選択します。複数のフォルダーを選択して一度に削除できます。
4. 「選択項目の削除」をクリックします。
5. 確認ウィンドウで「OK」をクリックします。

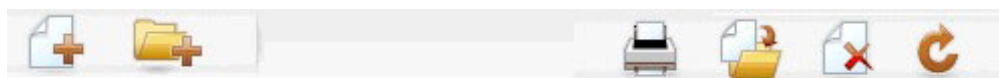
フォルダーと、下位のすべての空のサブフォルダーが削除されます。

キャンペーンに関するリファレンス情報

このセクションでは、キャンペーンを操作するための Campaign インターフェースの項目とアイコンについて説明します。

「キャンペーン一覧」ページのアイコン

「キャンペーン一覧」ページでは以下のアイコンが使用されます。



以下の表では、左側のアイコンから右側のアイコンへの順番で説明します。

注: Campaign インターフェースの多くのアイコンは、権限が必要な機能に関連付けられています。詳しくは、「Marketing Platform 管理者ガイド」を参照してください。

表 1. 「キャンペーン一覧」ページで使用されるアイコン

アイコン名	説明
キャンペーンの追加	新しいキャンペーンを追加する場合にクリックします。 注: ユーザーに適切な権限がない場合、または Marketing Operations と Campaign の統合が有効でない場合、このアイコンは表示されません。Marketing Operations でのキャンペーン・プロジェクトの作成については、「Marketing Operations and Campaign 統合ガイド」を参照してください。
サブフォルダーの追加	新しいキャンペーン・サブフォルダーを追加する場合にクリックします。
項目の印刷	ページを印刷します。
移動	各項目の横にあるチェック・ボックスをクリックして 1 つ以上のキャンペーンまたはキャンペーン・サブフォルダーを選択した後、このアイコンをクリックして選択した項目の移動先となる新しい場所を指定します。
選択項目の削除	各項目の横にあるチェック・ボックスをクリックして 1 つ以上のキャンペーンまたはキャンペーン・サブフォルダーを選択した後、このアイコンをクリックして選択した項目を削除します。
キャンペーンの再読み込み	ページ上のキャンペーンのリストを更新する場合にこのアイコンをクリックします。

「キャンペーン・サマリー」タブのアイコン

「キャンペーン・サマリー」タブでは以下のアイコンが使用されます。



以下の表では、左側のアイコンから右側のアイコンへの順番で説明します。

注: インターフェースの多くのアイコンは、権限が必要な機能に関連付けられています。詳しくは、「Marketing Platform 管理者ガイド」を参照してください。適切な権限がない場合、「サマリーの編集」、「セグメントの追加/削除」、「オファーの追加/削除」、「フローチャートの追加」、「キャンペーンの移動」、および「キャンペーンの削除」のアイコンは表示されません。

表2. 「キャンペーン・サマリー」タブのアイコン

アイコン名	説明
サマリーの編集	キャンペーン・サマリーを編集する場合に、このアイコンをクリックします。
セグメントの追加/削除	このキャンペーンに関連付けられている戦略的セグメントを変更する場合に、このアイコンをクリックします。
オファーの追加/削除	このキャンペーンに関連付けられているオファーを変更する場合に、このアイコンをクリックします。
実行	「実行」メニューにアクセスする場合に、このアイコンをクリックします。このメニューで「すべて実行」を選択すると、このキャンペーン内のすべてのフローチャートを実行できます。
フローチャートの追加	このキャンペーンにフローチャートを追加する場合に、このアイコンをクリックします。
項目の印刷	キャンペーン・サマリーを印刷する場合に、このアイコンをクリックします。
キャンペーンの移動	キャンペーンの移動先となる新しい場所を指定する場合に、このアイコンをクリックします。
キャンペーンの削除	キャンペーンを削除する場合に、このアイコンをクリックします。

「キャンペーン・サマリー」タブに関するリファレンス情報

次の表では、「キャンペーン・サマリー」タブの項目について説明します。

表3. 「キャンペーン・サマリー」タブの項目

項目	説明
セキュリティ・ポリシー	キャンペーンに適用されるセキュリティ・ポリシー。
説明	「キャンペーン一覧」ページのキャンペーン名の下に表示される、このキャンペーンの説明。
目的	このキャンペーンの目的。

表 3. 「キャンペーン・サマリー」 タブの項目 (続き)

項目	説明
キャンペーン・コード	<p>キャンペーンの固有 ID。指定されたフォーマットに従っています。Campaign は、それぞれの新規キャンペーンに固有のキャンペーン・コードを自動的に生成します。このコードはデフォルト・フォーマットまたは組織のカスタム・フォーマットに従っています。このコードを編集するか、「コードの再生成」をクリックして新しいコードを生成できます。</p> <p>注: コードを編集すると、Campaign ではキャンペーン・コードの全体的な固有性が確保されなくなります。レスポンス・トラッキングを実行する場合は、トラッキング・コードとして (キャンペーン・コードなどの) 編集可能コードの使用は避けるようにしてください。代わりに、Campaign が生成した処理コードを使用してください。処理コードは手動で編集できず、固有性が保証されます。</p>
開始日/終了日	<p>キャンペーンが有効な期間を示す日付範囲。日付を手動入力するか、カレンダー・アイコンをクリックするか、または前後の矢印を使用して日付を選択することができます。</p>
キャンペーン・タイプ	<p>そのキャンペーンが該当するキャンペーン・タイプ。選択可能なキャンペーン・タイプのリストはシステム管理者が作成します。</p>
所有者	<p>この編集不可項目には、このキャンペーンを作成した担当者のユーザー名が表示されます。</p>

システム管理者が作成したカスタム属性はすべてページ下部に表示されます。

第 4 章 フローチャート

フローチャートを使用して、キャンペーン・ロジックを実行するためにデータ上で一連のアクションを実行します。キャンペーンは、1 つ以上のフローチャートから構成されています。フローチャートは、キャンペーンで必要になるデータ操作、コンタクト・リストの作成、あるいはコンタクトおよびレスポンスのトラッキングを実行するために構成する複数のプロセスで構成されています。実質的に、プロセスはキャンペーンを定義および実装する方法です。

注：フローチャートで作業するには、適切な権限が必要になります。権限について詳しくは、「*IBM Unica Campaign 管理者ガイド*」を参照してください。

フローチャートの作成

新規フローチャートを作成するか、既存のフローチャートをコピーすることにより、新規のフローチャートをキャンペーンに追加できます。

既存のフローチャートをコピーすることにより、完成したフローチャートを使用して作業を開始し、必要に応じてそのフローチャートを変更できるため、時間を節約することができます。

フローチャートの作成を支援するために、事前構成されたフローチャート・テンプレートを使用して、共通のキャンペーン・ロジックまたはプロセス・ボックス・シーケンスを素早く作成できます。また、クエリー、テーブル・カタログ、トリガー、カスタム・マクロ、ユーザー変数、およびユーザー定義項目の定義など、その他のオブジェクトを保存して再使用することもできます。

フローチャートの設計についての考慮事項

フローチャートを作成する際は、次のような考慮事項に注意してください。

- **循環依存関係の回避。** プロセス間に循環依存関係を作成しないように注意してください。例えば、フローチャートに、セグメント化プロセスへの入力を提供する選択プロセスがあるとします。選択プロセスでの入力として、その選択プロセスが出力を提供するセグメント化プロセスと同じプロセスによって作成されるセグメントを選択すると、循環依存関係が作成されてしまいます。この状態は、このプロセスを実行しようとするとうエラーになります。
- **グローバル抑制の適用。** 組織でグローバル抑制機能を使用する場合は、ID の特定のセットが、ターゲット・セルおよびキャンペーンでの使用から自動的に除外される可能性があることに注意してください。

新規フローチャートを作成するには

注：インタラクティブ・フローチャートを作成する場合は、IBM Unica Interact の資料で詳細を確認してください。

1. フローチャートを追加するキャンペーンまたはセッションで、「フローチャートの追加」アイコンをクリックします。

「フローチャートのプロパティ」ページが表示されます。

2. フローチャートの名前および説明を入力します。

注: フローチャート名には、文字に関する特定の制限があります。詳しくは、269 ページの『IBM Unica Campaign オブジェクト名での特殊文字』を参照してください。

注: 「フローチャート・タイプ」では、ライセンス交付を受けた Interact ユーザーでない限り、「標準バッチ・フローチャート」が選択できる唯一のオプションです。ライセンス交付を受けたバージョンの Interact をインストールしている場合は、「インタラクティブ・フローチャート」も選択できます。

3. 「保存とフローチャートの編集」をクリックします。

「フローチャート」ページに、プロセス・パレットおよびブランクのフローチャート・ワークスペースが表示されます。

4. プロセスをフローチャートに追加します。

通常、フローチャートは 1 つ以上の選択またはオーディエンス・プロセスから始まり、作業を行う顧客またはその他の市場性のあるエンティティを定義します。

重要: フローチャートでプロセスを追加および構成しているときは、必ず頻繁に「保存」をクリックしてください。

5. フローチャートを作成し終わったら、「保存」または「保存して終了」をクリックします。

フローチャートのコピー

既存のフローチャートをコピーして、キャンペーンに追加することにより、完成したフローチャートを使用して作業を開始し、必要に応じてそのフローチャートを変更できるため、時間の節約になります。

コピーされたフローチャートにコンタクト・プロセス (メール・リストまたはコール・リスト) が含まれており、そのターゲット・セルが、ターゲット・セル・スプレッドシートに定義されたターゲット・セルにリンクされている場合、重複したセル・コードが発生しないように、フローチャートの新規コピーのセルに対して新規セル・コードが生成されます。ターゲット・セルがフローチャートで定義されており、コンタクト・プロセスの「セル・コードを自動生成」オプションがオフになっている場合、コピーされたフローチャートを貼り付けても、新しいセル・コードは生成されません。

注: フローチャートをコピーする際に、古いフローチャートのセル・コードを参照するユーザー定義項目がフローチャート・ロジックで使用されていると、新しいフローチャート内でこのロジックが破損します。

プロセス設定は新規フローチャートにコピーされます。ただし、オリジナルのフローチャートの実行結果として作成された一時ファイルや一時テーブルは、新規フローチャートにはコピーされません。

フローチャートをコピーするには

1. コピーするフローチャートを表示します。

例えば、キャンペーンを表示しているときに、フローチャートのタブをクリックすることができます。

2. 「コピー」アイコンをクリックします。

「フローチャートの複製」ウィンドウが表示されます。

3. フローチャートのコピー先のキャンペーンを選択します。

フォルダーの横にある + 記号をクリックして展開し、リスト内を移動します。

4. 「このロケーションを受け入れる」をクリックします。

注: フォルダーをダブルクリックすると、場所の選択と受け入れを 1 回の手順で行うこともできます。

選択したキャンペーンにフローチャートが移動します。

フローチャートの表示

フローチャートの「表示」権限を持っている場合、そのフローチャートを読み取り専用モードで開いて表示できます。これにより、フローチャート構造を表示することはできますが、プロセス設定ダイアログを開いたり、変更を加えたりすることはできません。読み取り専用モードでは、プロセスおよびプロセス間の接続を表示して、フローチャートの目的を素早く確認できます。

フローチャートが表示用に開かれたときに、ズームアウトしてさらに多くのプロセスを一度に表示したり、ズームインしてフローチャートの一部を拡大してより詳細に表示することもできます。

フローチャートの詳細 (フローチャート内のプロセスの構成方法など) をさらに表示するには、フローチャートをレビューまたは編集用に開く必要があります。

フローチャートを表示するには

以下の 3 つの方法で、フローチャートを表示することができます。

- 「キャンペーン」ページで、キャンペーンの横にある「タブを表示」アイコンをクリックし、表示するフローチャートをメニューから選択します。
- キャンペーンから直接フローチャート・タブを開きます。
- キャンペーンの「レポート」タブを開き、次に、フローチャートのリストからフローチャート名をクリックします。

ズームインおよびズームアウトするには

「ズームイン」および「ズームアウト」アイコンをクリックします。

フローチャートのレビュー

ユーザーがフローチャートの「レビュー」権限（「編集」権限ではなく）を持っている場合は、「レビュー」モードでのみフローチャートを開くことができます。「レビュー」モードでは、プロセス設定の表示およびフローチャートの変更を行うことはできませんが、変更を保存したり、フローチャートまたはそのいずれかのプロセスの本番実行を行ったりすることはできません。これにより、不注意によるフローチャートの変更を心配することなく、フローチャートの内容を安全に検査したり、フローチャート内のプロセスを安全にコピーおよび再使用することができます。

重要: テスト実行は出力を書き出したり、トリガーを実行したりする場合があります。ことに注意してください。また、「レビュー」モードの場合でも、ユーザーが適切な権限を持っている場合はフローチャートでカスタム・マクロやトリガーを編集できるため、フローチャートが変更される場合があります。

「レビュー」モードで実行可能な他のアクションは以下のとおりです。

- テストの実行 (適切な権限を持っている場合)
- レビュー中のプロセスまたはフローチャートのテンプレートとしての保存

重要: 「レビュー」モードでは、フローチャートの自動保存オプションは無効になっており、使用可能にすることはできません。フローチャートへの変更を保存するには、「編集」権限を持っている必要があります。

フローチャートのプロセスをレビューするには

注: フローチャートを「編集」モードで開いたときと同じようにして、「レビュー」モードでフローチャートを開きます。ユーザーが編集権限を持っていない場合は、権限の設定により、「レビュー」モードでのみフローチャートへのアクセスが可能になるように自動的に設定されます。

以下のいくつかの方法で、フローチャートをレビュー用に開くことができます。

- 「キャンペーン」ページで、キャンペーンの横にある「**タブの編集**」アイコンをクリックし、レビューするフローチャートをメニューから選択します。
- キャンペーンを開いてから、フローチャート・タブをクリックします。フローチャート・ページで、「**編集**」アイコンをクリックします。

Ctrl を押しながら、フローチャート・タブをクリックして、フローチャートを「レビュー」モードで直接開くこともできます。

- キャンペーンの「**レポート**」タブを開き、レビューするフローチャートへのリンクをクリックしてから、「**編集**」アイコンをクリックします。

「レポート」タブで、**Ctrl** を押しながら、フローチャート・リンクをクリックして、フローチャートを「レビュー」モードで直接開くこともできます。

「レビュー」モードでフローチャートを開くと、フローチャートはレビュー・モードで表示されており、変更を加えても保存できないことを示すメッセージが表示されます。ページ見出しに「レビュー中 (Reviewing)」と示され、「**キャンセル**」オプションのみが表示されます。

フローチャートの編集

プロセスを追加または削除したり、プロセスを構成したりするためにフローチャートを編集します。フローチャートの名前および説明を編集することもできます。

重要: 他の人が既に編集しているフローチャートを編集する場合は、Campaign から、フローチャートが他のユーザーによって開かれていることを示す警告が出されます。そのままフローチャートを開き続けると、他のユーザーによる変更が即時に完全に失われます。作業の損失を防ぐため、他のユーザーが開いているかどうかを最初に確認せずにフローチャートを開き続けないようにしてください。

編集用にフローチャートを開くには

以下のいくつかの方法で、フローチャートを編集用に開くことができます。

- 「キャンペーン」ページで、キャンペーンの横にある「**タブの編集**」アイコンをクリックし、メニューからフローチャートを選択します。
- キャンペーンを開いてから、フローチャート・タブをクリックします。フローチャート・ページで、「**編集**」アイコンをクリックします。

Ctrl を押しながら、フローチャート・タブをクリックして、フローチャートを「**編集**」モードで直接開くこともできます。

- キャンペーンの「**レポート**」タブを開き、編集するフローチャートへのリンクをクリックしてから、「**編集**」アイコンをクリックします。

Ctrl を押しながら、フローチャート名をクリックして、フローチャートを「**編集**」モードで直接開くこともできます。

フローチャートのプロパティを編集するには

1. フローチャートを編集用に開きます。
2. 「フローチャート」ツールバーの「**プロパティ**」アイコンをクリックします。

「フローチャート・プロパティの編集」ページが表示されます。

3. フローチャートの名前または説明を変更します。

注: フローチャート名には、文字に関する特定の制限があります。269 ページの『IBM Unica Campaign オブジェクト名での特殊文字』を参照してください。

4. 「**変更の保存**」をクリックします。

変更したフローチャート詳細が保存されます。

フローチャートの検証

「**フローチャートの検証**」機能を使用して、フローチャートの妥当性をいつでも（フローチャートの実行時は除く）確認できます。フローチャートで検証を実行するために、そのフローチャートを保存しておく必要はありません。

検証では、フローチャートについて以下の検査を行います。

- フローチャート内のプロセスが構成されているかどうか。

- セル・コードがフローチャート内で固有であるかどうか。ただし、これは、AllowDuplicateCellCodes 構成パラメーターが「いいえ」に設定されている場合のみです。このパラメーターが「はい」に設定されている場合は、フローチャート内で重複するセル・コードが許可されます。
- セル名がフローチャート内で固有であるかどうか。
- コンタクト・プロセスによって参照されるオファーおよびオファー・リストが有効であるかどうか (すなわち、それらが回収されたり、削除されたりしていないかどうか)。参照されるが、空であるオファー・リストはエラーを生成せず、警告のみ出されます。
- ターゲット・セル・スプレッドシートからトップダウン・エントリーにリンクされるセルが、引き続き接続されているかどうか。

検証ツールは、フローチャートで検出された最初のエラーを報告します。検証ツールを何度か連続して実行し (表示された各エラーを修正した後で)、検出されたすべてのエラーが修正されたことを確認することが必要になる場合もあります。

注: 最良の方法は、本番実行を行う前にフローチャートで検証を実行することです。これは、バッチ・モードでフローチャートを実行する場合、または実行をアクティブに監視しない場合は特に推奨されます。

フローチャートを検証するには

1. 「編集」モードのフローチャート・ページで、「実行」アイコンをクリックし、「フローチャートの検証」を選択します。

Campaign によって、フローチャートが検査されます。

2. フローチャートにエラーがあると、メッセージ・ボックスが表示され、最初に見つかったエラーが表示されます。それぞれのエラーを修正し、検証ツールを再実行すると、残りのエラーが引き続き表示されます。

フローチャートのテスト

データを出力したり、テーブルやファイルを更新したりしたくない場合は、フローチャートまたはブランチでテスト実行を行うことができます。ただし、テスト実行および本番実行の両方の完了時にトリガーが実行されることに注意してください。

プロセス、ブランチ、またはフローチャートをテストする場合は、グローバル抑制が適用されることに注意してください。

注: フローチャートの作成時にプロセスおよびブランチでテスト実行を行うことが推奨されます。これにより、エラーが発生した場合はそれらをトラブルシューティングすることができます。また、フローチャートを実行またはテストする前に、各フローチャートを必ず保存してください。

フローチャートをテスト実行するには

1. 「編集」モードのフローチャート・ページで、「実行」アイコンをクリックし、「フローチャートのテスト実行」を選択します。

フローチャートがテスト・モードで実行されます。データはどのテーブルにも書き込まれません。

各プロセスは、正常に実行されると、青色のチェック・マークが表示されます。エラーがある場合、プロセスには赤色の X が表示されます。

2. 「保存して終了」をクリックして、フローチャートを保存します。

「保存」をクリックしてフローチャートを保存し、編集用に開いたままにしておくこともできます。

フローチャートの実行が終了する前に「保存して終了」をクリックすると、フローチャートは実行を継続し、終了した時点で保存されます。あるユーザーまたは別のユーザーが、まだフローチャートが実行されているときにそのフローチャートを再度開くと、そのフローチャートに対して行われた変更はすべて失われます。このため、フローチャートは実行前に必ず保存してください。

実行を一時停止するには、プロセス・ボックスを右クリックして、「実行」>「一時停止」を選択します。実行を停止するには、プロセス・ボックスを右クリックして、「実行」>「停止」を選択します。

3. Campaign ツールバーの「レポート」タブをクリックして、「フローチャート・ステータス・サマリー」レポートを表示し、フローチャートの実行にエラーがないかどうかを判別します。

フローチャート・ブランチをテスト実行するには

1. 「編集」モードのフローチャート・ページで、テストするブランチ上のプロセスをクリックします。
2. 「実行」アイコンをクリックし、「選択したブランチのテスト実行」を選択します。

フローチャートがテスト・モードで実行されます。データはどのテーブルにも書き込まれません。

各プロセスは、正常に実行されると、青色のチェック・マークが表示されます。エラーがある場合、プロセスには赤色の X が表示されます。

フローチャートの実行

フローチャート内で、フローチャート全体、ブランチ、または個別のプロセスを実行することを選択できます。最良の結果を得るために、フローチャートの作成時にテスト実行を行って、エラーの発生時にエラーをトラブルシューティングできるようにします。また、各フローチャートをテストまたは実行する前に、そのフローチャートを必ず保存します。

重要: コンタクト・プロセスを含むフローチャートの場合、フローチャートの本番実行ごとに生成できるコンタクト履歴は 1 回のみであることに注意してください。ID の同一リストから複数のコンタクトを生成するには、ID のリストのスナップショットを取り、フローチャートを実行するたびにそのリストから読み取ります。

注: 管理者権限を持つユーザーは、「監視」ページにアクセスできます。このページは、実行中のすべてのフローチャートおよびそのステータスを表示し、フローチャートの実行を中断、再開、または停止するためのコントロールを提供します。

フローチャートを実行するには

1. フローチャートを表示している場合は、「実行」アイコンをクリックし、「実行」を選択することにより、そのフローチャートを実行することができます。

フローチャートを編集している場合は、「実行」アイコンをクリックし、「フローチャートを保存して実行」を選択します。

2. フローチャートが既に実行されている場合は、確認ウィンドウで「OK」をクリックします。

実行から得られたデータが、該当するシステム・テーブルに保存されます。各プロセスは、正常に実行されると、青色のチェック・マークが表示されます。エラーがある場合、プロセスには赤色の X が表示されます。

3. 「保存して終了」をクリックして、フローチャートを保存します。

「保存」をクリックしてフローチャートを保存し、編集用に開いたままにしておくこともできます。

実行後はすぐにそのフローチャートを保存して、実行の結果を任意のレポートで表示する必要があります。フローチャートを保存すると、繰り返し行われた実行の結果が即時に使用可能になります。

注: フローチャートの実行が終了する前に「保存して終了」をクリックすると、フローチャートは実行を継続し、終了した時点で保存されます。

4. Campaign ツールバーの「レポート」タブをクリックして、「フローチャート・ステータス・サマリー」レポートを表示し、フローチャートの実行にエラーがないかどうかを判別します。

フローチャート・ブランチを実行するには

1. 「編集」モードのフローチャート・ページで、実行するブランチ上のプロセスをクリックします。
2. 「実行」アイコンをクリックし、「選択したブランチを保存して実行」を選択します。

注: フローチャートのプロセスのみまたはブランチのみを実行しても、フローチャートの実行 ID は増分されません。プロセスのみまたはブランチのみ実行するときに、コンタクト履歴レコードが存在する場合は、処理を続行する前に実行履歴オプションを選択するようプロンプトが出されます。詳しくは、35 ページの『実行履歴オプションについて』を参照してください。

各プロセスは、正常に実行されると、青色のチェック・マークが表示されます。エラーがある場合、プロセスには赤色の X が表示されます。

プロセスを実行するには

設定が正常に行われて結果が予期したとおりになるように、設定および接続を行ったら、必ずすぐに各プロセスを実行してください。

注: プロセスを実行すると、前の実行の結果はすべて失われます。

1. キャンペーン内で、編集するフローチャートを開きます。
2. 実行するプロセスをクリックします。

プロセスでソース・プロセスからのデータが必要な場合は、そのデータが使用できるように、ソース・プロセスが既に正常に実行されていることを確認してください。

3. 「実行」アイコンをクリックするか、またはプロセス・ボックスを右クリックしてから、次のオプションのいずれかを選択します。
 - **選択したプロセスのテスト実行:** このオプションは、エラーの発生時にそのエラーをトラブルシューティングできるように、フローチャートの作成時に使用します。テスト実行では、データの出力も、テーブルまたはファイルの更新も行いません。(ただし、テスト実行の完了時にトリガーが実行され、またグローバル抑制が適用されます。)
 - **選択したプロセスを保存して実行:** 本番実行を行います。メール・リストやコール・リストなどのプロセスでは、「コンタクト履歴」にエントリーを書き込みます。それぞれの本番実行では、コンタクト履歴を一度だけ生成できます。ある本番実行に対して既に実行されているコンタクト・プロセスは、現在の実行からのコンタクト履歴が最初に削除された場合にのみ再実行できます。トリガーは、本番実行の完了時に実行されます。

注: フローチャートのプロセスのみまたはブランチのみを実行しても、フローチャートの実行 ID は増分されません。プロセスのみまたはブランチのみ実行するときに、コンタクト履歴レコードが存在する場合は、処理を続行する前に実行履歴オプションを選択するようプロンプトが出されます。詳しくは、『実行履歴オプションについて』を参照してください。

4. プロセスで実行が完了されたら、確認ウィンドウで「OK」をクリックします。

プロセスが正常に実行された場合、そのプロセスには青のチェック・マークが表示されます。エラーがある場合は、プロセスには赤の「X」が表示されます。

実行履歴オプションについて

注: 「実行履歴オプション」ウィンドウは、現在の実行 ID のコンタクト履歴を既に生成しているブランチまたはプロセスを実行する際にのみ表示されます。新規実行インスタンスが特定の再実行ブランチまたは再実行プロセスに存在しない場合、「実行履歴オプション」ウィンドウは表示されません。

「実行履歴オプション」ウィンドウを使用して、生成する新規コンタクト履歴をコンタクト履歴テーブルに書き込む方法を選択します。

実行履歴オプションのシナリオ

2 つのブランチ、およびコンタクト履歴にログを記録するように構成されている、2 つのコンタクト・プロセス A と B を持つフローチャートがあります。

このフローチャート全体を（「フローチャートの実行」コマンドを使用して先頭から）一度実行します。これによって、新規の実行 ID（例えば、実行 ID = 1）が作成され、この実行 ID 用のコンタクト履歴も生成されます。

このフローチャート全体の最初の正常な実行の後に、最初のオファーを受け取った個人と同じ個人にフォローアップ・オファーを提供するためのコンタクト・プロセス A を編集します。したがって、コンタクト・プロセス A を再実行します。現在の実行 ID は「1」で、コンタクト履歴がプロセス A および実行 ID=1 に対して既に存在しています。

コンタクト・プロセス A を選択して「プロセスの実行」をクリックすると、「実行履歴オプション」ウィンドウが表示されます。実行 ID を変更せずにそのまま（実行 ID=1）にしておくことを選択し、この実行 ID に関連付けられている既存のコンタクト履歴を置き換えることができます。あるいは、新規の実行インスタンスを作成（つまり、実行 ID を 2 にインクリメントする）し、実行 ID=1 に関連付けられているコンタクト履歴を元のままにしておいて、実行 ID=2 に関連付けられた新規のコンタクト履歴を追加することもできます。

フォローアップ・オファーを送付し、最初のオファーに関連付けられているコンタクト履歴を失わないようにするため、「新しい実行インスタンスの作成」を選択します。これによって、実行 ID が「2」に変更され、最初のオファーを受け取った ID と同じ ID のコンタクト履歴レコードがコンタクト履歴テーブルに追加されます。

ここでコンタクト・プロセス B を編集して実行すると、「実行履歴オプション」ウィンドウは表示されません。これは、現在の実行 ID が 2 で実行 ID=2 に関連付けられているコンタクト履歴がコンタクト・プロセス B に対して存在しないためです。コンタクト・プロセス B のみを実行すると、実行 ID = 2 の追加のコンタクト履歴レコードが生成されるだけです。

「実行履歴オプション」ウィンドウのリファレンス

「実行履歴オプション」ウィンドウには、次のオプションがあります。

表 4. 「実行履歴オプション」ウィンドウのオプション

オプション	説明
新しい実行インスタンスの作成	フローチャートの特定のブランチまたはプロセスを新規の実行 ID を使用して再実行します。新規の実行 ID に関連付けられた結果をコンタクト履歴テーブルに追加します。既存のコンタクト履歴は元の状態のままです。
以前の実行のコンタクト履歴を置換	以前の実行 ID を再利用して、その実行 ID に対して前に生成されたコンタクト履歴を置き換えます（実行されているプロセスまたはブランチについてののみ）。フローチャートの他のブランチまたはプロセスに対して前に生成されたコンタクト履歴レコードは、元の状態のままです。

表4. 「実行履歴オプション」ウィンドウのオプション (続き)

オプション	説明
キャンセル	ブランチまたはプロセスの実行を取り消します。既存のコンタクト履歴に対しては何も実行されません。フローチャートは「編集」モードで開いたままです。

関連付けられたレスポンス履歴が存在する場合は、コンタクト履歴を置換することはできません。したがって、「**以前の実行のコンタクト履歴を置換**」を選択し、関連付けられたレスポンス履歴レコードが存在していた場合は、次の2つのオプションのいずれかを選択することができます。

- 関連付けられたレスポンス履歴レコード、およびコンタクト履歴レコードをクリアする場合は、「**OK**」をクリックします。レスポンス履歴が存在し、前の実行のコンタクト履歴を置き換えたい場合は、これが唯一のオプションです。
- コンタクト履歴レコードのクリアを取り消す場合は、「**キャンセル**」をクリックします。現在のコンタクト・プロセスを実行するために新規の実行インスタンスを作成する場合は、代わりに「**新しい実行インスタンスの作成**」を選択することができます。

フローチャートの実行を一時停止するには

実行中のフローチャート、ブランチ、またはプロセスを一時停止すると、サーバーにより実行は停止されますが、既に処理されたデータはすべて保存されます。実行を一時停止して、サーバー上のコンピューター・リソースを解放することができます。

実行を一時停止した後、その実行を継続するか、停止することができます。

フローチャート・ページで、「**実行**」アイコンをクリックし、「**一時停止**」を選択します。

注: 適切な権限を持っている場合は、「**監視**」ページからフローチャートを制御することもできます。

一時停止されたフローチャートの実行を継続するには

一時停止された実行を継続する場合、その実行は、停止した場所と正確に同じ場所で再開されます。例えば、選択プロセスが10個のレコードを処理した後で一時停止した場合、11番目のレコードを処理することにより、その実行が再開されます。

フローチャート・ページで、「**実行**」アイコンをクリックし、「**続行**」を選択します。

注: 適切な権限を持っている場合は、「**監視**」ページからフローチャートを制御することもできます。詳しくは、「*Campaign* 管理者ガイド」を参照してください。

フローチャートの実行を停止するには

フローチャート・ページで、「**実行**」アイコンをクリックし、「**停止**」を選択します。

現在実行中のプロセスの結果が失われ、それらのプロセス上に赤色の **X** が表示されます。

注: 適切な権限を持っている場合は、「監視」ページからフローチャートを制御することもできます。

停止されたフローチャートの実行を継続するには

フローチャートが停止されたプロセスから始まるフローチャート・ブランチを実行することにより、停止されたフローチャートの実行を継続することができます。そのプロセスは、すべてのダウンストリーム・プロセスと一緒に再実行されます。

1. 「編集」モードのフローチャート・ページで、赤色の **X** が表示されているプロセスをクリックします。
2. 「実行」アイコンをクリックし、「選択したブランチを保存して実行」を選択します。

注: 適切な権限を持っている場合は、「監視」ページからフローチャートを制御することもできます。詳しくは、「*Campaign* 管理者ガイド」を参照してください。

ランタイム・エラーのトラブルシューティング

正しく構成されたプロセスは、色付きで表示されます (特定の色によってプロセスのタイプが表されます)。名前がイタリック体で示された灰色のプロセスには、構成エラーがあります。エラーについての詳細情報を確認するには、プロセス上にマウスオーバーした状態で、エラー・メッセージの説明を表示します。

フローチャートがエラーのため実行を停止する場合、実行されていたプロセスには赤色の **X** が表示されます。そのプロセス上にマウスオーバーした状態で、エラー・メッセージを表示します。

注: システム・テーブルがデータベースに保管されるように Campaign が構成されており、ユーザーがフローチャートを表示していない場合に、データベース接続障害のために実行が停止すると、プロセスには赤色の **X** は表示されません。代わりに、フローチャートが、最後に保存されたときと同じ状態で表示されます。

また、システム・エラー情報についてログ・ファイルを参照し、キャンペーンの「分析およびパフォーマンス/収益性 (Analysis and Performance/Profitability)」レポートをレビューして、結果が予期されたものかどうかを確認する必要もあります。

フローチャートの削除

フローチャートを完全に削除すると、フローチャートおよびそれに関連するすべてのファイル (ログ・ファイルも含む) が除去されます。フローチャートの一部を再使用するために保管する必要がある場合は、保存オブジェクトとして当該部分を保存できます。

出力ファイル (スナップショット、最適化、またはコンタクトの各プロセスによって作成されたファイル) は削除されず、コンタクト履歴およびレスポンス履歴の情報も保持されます。

重要: 他のユーザーによって編集中のフローチャートを削除しようとする、Campaign によって、フローチャートが他のユーザーによって開かれていることを示す警告が出されます。そのままフローチャートを削除を続行すると、他のユーザーによる変更が完全に失われます。作業の損失を防ぐため、フローチャートの削除を続行するには、まず、他のユーザーが開いているかどうかを確認してください。

フローチャートを削除するには

1. 削除するフローチャートを「表示」モードで開きます。

フローチャート・タブが表示されます。

2. 「フローチャートの削除」アイコンをクリックします。
3. 確認ウィンドウで「OK」をクリックします。

フローチャートおよびそれに関連するすべてのファイルが削除されます。

フローチャートを印刷するには

フローチャートのハードコピーを Campaign から印刷できます。

注: Web ブラウザーの「ファイル」>「印刷」コマンドは使用しないでください。フローチャートが正しく印刷されない場合があるためです。

1. 印刷するフローチャートを、「表示」または「編集」モードで開きます。
2. 「印刷」アイコンをクリックします。

「ページ設定」ウィンドウが表示されます。

3. 「OK」をクリックします。

「印刷」ウィンドウが表示されます。

4. 「OK」をクリックして、現在のフローチャートを印刷します。

フローチャートが印刷中であることを示す Campaign ウィンドウが表示されません。

トラブルシューティング用のフローチャート・ファイルのパッケージ化

フローチャートをトラブルシューティングするために IBM の支援を必要とする場合は、関連するデータを自動的に収集して、IBM テクニカル・サポートに送信することができます。含める項目のリストから項目を選択して、データを制限するための日付範囲を指定できます。データは、ユーザーが選択したフォルダーに書き込まれます。データの内容を圧縮して、IBM テクニカル・サポートに送信することができます。

Campaign は、選択したデータ項目に加えて、以下を識別するサマリー・ファイルも作成します。

- 現在の日付と時刻
- ソフトウェアのバージョンおよびビルド番号
- ユーザー名

- パッケージに含めた選択内容

トラブルシューティング用のフローチャート・ファイルをパッケージするには

この手順を実行できるのは、フローチャート（テスト実行または本番実行のいずれか）の編集または実行を行う権限を持つユーザーのみです。「ログの表示」権限を持っていない場合は、選択ウィンドウでログ関連のエントリーを選択することはできません。

このタスクを使用して、フローチャート・データ・ファイルを自動的にパッケージし、フローチャートのトラブルシューティングで支援が必要な場合に、それらのファイルを IBM テクニカル・サポートに送ることができるようにします。

1. 「編集」モードのフローチャート・ページから、「システム管理」>「フローチャート・データの収集」を選択します。「トラブルシューティングのためにデータ・パッケージを作成」ウィンドウが表示されます。
2. パッケージの名前を入力するか、デフォルト名のままにします。このパッケージ名は、選択されたデータ項目が作成されるサブフォルダーを作成するために使用されます。
3. 「参照」をクリックして、データ・パッケージが保存されるフォルダーを選択します。
4. パッケージに含める各項目のチェック・ボックスを選択します。一部の項目では、抽出データをフィルターに掛けるために使用する追加情報を選択時に入力できます。

または、「既定のアイテムを選択」チェック・ボックスをチェックすることができます。このチェック・ボックスは、フローチャートのトラブルシューティングで通常必要になるすべてのデータを自動的に選択します。これには、リストされたすべての項目（ただし、ログ・ファイルは除く）、およびユーザー・テーブル、コンタクトおよびレスポンス履歴テーブル、戦略的セグメント、およびスタッフ・トレース・ファイルの内容が含まれています。

5. 「OK」をクリックして、パッケージを作成します。

フローチャート・データ・パッケージの IBM Unica テクニカル・サポートへの送信

電子メール、またはサポート担当者が推奨する方法を使用して、データ・パッケージを IBM Unica テクニカル・サポートに送信することができます。IBM Unica テクニカル・サポートは、圧縮されていないデータ（パッケージ・サブディレクトリ全体）を受け入れますが、オプションで、IBM に送信する前にこれらのファイルを圧縮および暗号化して、単一のファイルにパッケージ化することができます。

フローチャート・データのパッケージ化のオプション

表 5. フローチャート・データのパッケージ化のオプション

項目	含まれている内容の説明	設定可能な追加の指定
「既定のアイテムを選択」チェック・ボックス	フローチャートのトラブルシューティングに通常必要とされるすべてのデータ。これには、リストされたすべての項目 (ただし、ログ・ファイルは除く)、およびユーザー・テーブルおよびコンタクト履歴テーブルの内容が含まれています。	
フローチャート	フローチャート .ses ファイル。	実行結果を含めるかどうか オプションで、ランタイム・データ・ファイル (「アンダースコア」ファイルとも呼ばれる) を組み込むか除外するかを指定します。
フローチャート・ログ	フローチャート .log ファイル。	オプションで、開始と終了のタイム・スタンプを設定します。これらを設定しない場合、デフォルトはログ・ファイル全体です。
リスナー・ログ	unica_aclsnr.log ファイル。	オプションで、開始と終了のタイム・スタンプを設定します。これらを設定しない場合、デフォルトはログ・ファイル全体です。
起動ログ	AC_sess.log ファイル。	オプションで、開始と終了のタイム・スタンプを設定します。これらを設定しない場合、デフォルトはログ・ファイル全体です。
Web メッセージ・ログ	AC_web.log ファイル。	オプションで、開始と終了のタイム・スタンプを設定します。これらを設定しない場合、デフォルトはログ・ファイル全体です。
Campaign 構成	.config ファイル。フローチャートのトラブルシューティングに役立つように、Campaign 環境の構成プロパティおよび構成設定をリストします。	
キャンペーン・カスタム属性	customcampaignattributes.dat ファイル。これは、Campaign カスタム属性の属性名と値のペアをリストします。現在のキャンペーンに関連するエントリーのみ含まれます。	

表 5. フローチャート・データのパッケージ化のオプション (続き)

項目	含まれている内容の説明	設定可能な追加の指定
セル・カスタム属性	customcellattributes.dat ファイル。これは、Campaign セル・カスタム属性の属性名と値のペアをリストします。現在のキャンペーンに関連するエントリーのみ含まれます。	
オファーの定義	以下のオファー関連の各システム・テーブルのすべての行が含まれています。 UA_AttributeDef.dat、 UA_Folder.dat、UA_Offer.dat、 UA_OfferAttribute.dat、 UA_OfferList.dat、 UA_OfferListMember.dat、 UA_OfferTemplate.dat、 UA_OfferTemplAttr.dat、 UA_OfferToProduct.dat、 UA_Product.dat、 UA_ProductIndex.dat	
ターゲット・セル・スプレッドシート・データ	targetcellspreadsheet.dat ファイル。このファイルには、ターゲット・セル・スプレッドシート全体用の UA_TargetCells のデータが含まれています。現在のキャンペーンのデータが、列/行で区切られたテキスト形式で含まれています。	
カスタム・マクロの定義	custommacros.dat ファイル。このファイルには、UA_CustomMacros の以下のフィールドが列/行形式で含まれています。Name、FolderID、Description、Expression、ExpressionType、DataScrName、DataVarType、DataVarNBytes、CreateDate、CreatedBy、UpdateDate、UPdateBy、PolicyIS、ACLID	
システム・テーブル・マッピング	systablemapping.xml ファイル。データ・ソースを含む、すべてのシステム・テーブル・マッピングが含まれています。	

表 5. フローチャート・データのパッケージ化のオプション (続き)

項目	含まれている内容の説明	設定可能な追加の指定
+ システム・テーブルの内容を含める	このオプションを選択すると、オプションが展開されて、すべてのシステム・テーブルがリストされます。	<p>含めるシステム・テーブルをそれぞれ選択します。テーブル全体 (すべての行およびすべての列) が組み込まれます。</p> <p>サブオプションを選択しない場合、パッケージにはシステム・テーブルは含まれません。</p>
+ コンタクト履歴テーブルを含める	このオプションを選択すると、オプションが展開されて、コンタクト履歴およびオーディエンス・レベルごとの詳細なコンタクト履歴テーブルが表示されます。	<p>選択するセットごとに、パッケージにはコンタクト履歴、およびそのオーディエンス・レベルの詳細なコンタクト履歴レコードが含まれます。</p> <p>オプションで、開始と終了のタイム・スタンプを設定できます。それらを設定しない場合、デフォルトはすべてのレコードです。</p> <p>サブオプションを選択しない場合、パッケージにはコンタクト履歴テーブルの情報は含まれません。</p>
+ レスpons履歴テーブルを含める	このオプションを選択すると、オプションが展開されて、すべてのオーディエンス・レベルのレスポンス履歴テーブルが表示されます。	<p>選択するテーブルごとに、パッケージにはそのオーディエンス・レベルのレスポンス履歴レコードが含まれます。</p> <p>選択するテーブルごとに、オプションで開始と終了のタイム・スタンプを設定できます。それらを設定しない場合、デフォルトはすべてのレコードです。</p> <p>テーブルを選択しない場合、パッケージにはレスポンス履歴テーブルの情報は含まれません。</p>
+ ユーザー・テーブルの内容を含める	このオプションを選択すると、オプションが展開されて、当該パッケージに対して選択できるユーザー・テーブルの内容が表示されます。	<p>含めるユーザー・テーブルをフローチャートから選択します。</p> <p>何も選択しない場合、パッケージにはユーザー・テーブルの内容は含まれません。</p> <p>選択するユーザー・テーブルごとに、含める最大行数をオプションで設定できます。最大行数を設定しない場合、パッケージにはテーブル全体が含まれます。</p>

表5. フローチャート・データのパッケージ化のオプション (続き)

項目	含まれている内容の説明	設定可能な追加の指定
+ 戦略的セグメントを含める	このオプションを選択すると、オプションが展開されて、当該パッケージに対して選択できるすべての戦略的セグメントが表示されます。	
+ スタック・トレース・ファイルを含める	UNIX バージョンでのみ使用可能なオプションです。このオプションを選択すると、オプションが展開されて、unica_aclsnr.log と同じディレクトリーにスタック・トレース・ファイル (*.stack) のリストが表示されます。	パッケージに含めるスタック・トレース・ファイルを選択します。サブオプションを選択しない場合、パッケージにはスタック・トレース・ファイルは含まれません。

フローチャートのリファレンス

このセクションでは、フローチャートで作業するための Campaign インターフェースのアイコンについて説明します。

「フローチャート」タブのアイコン (「表示」モード)

フローチャート・タブの「表示」モードでは以下のアイコンが使用されます。



以下の表では、左側のアイコンから右側のアイコンへの順番で説明します。

注: インターフェースの多くのアイコンは、権限が必要な機能に関連付けられています。詳しくは、「Marketing Platform 管理者ガイド」を参照してください。「コピー」および「フローチャートの削除」アイコンは、適切な権限がない場合は表示されません。

表6. 「フローチャート」タブのアイコン (「表示」モード)

アイコン名	説明
編集	このアイコンをクリックして、フローチャートを編集します。
実行	このアイコンをクリックして、「実行」メニューにアクセスします。
フローチャートの追加	このアイコンをクリックして、別のフローチャートをキャンペーンに追加します。
ズームイン	このアイコンをクリックして、フローチャートの表示サイズを大きくします。
ズームアウト	このアイコンをクリックして、フローチャートの表示サイズを小さくします。

表6. 「フローチャート」タブのアイコン (「表示」モード) (続き)

アイコン名	説明
項目の印刷	このアイコンをクリックして、フローチャートを印刷します。
コピー	このアイコンをクリックして、このフローチャートのコピーを作成します。
フローチャートの削除	このアイコンをクリックして、フローチャートを削除します。

「フローチャート」ページのアイコン (「編集」モード)

「フローチャート」ページの「編集」モードでは以下のアイコンが使用されます。



以下の表では、左側のアイコンから右側のアイコンへの順番で説明します。

注: インターフェースの多くのアイコンは、権限が必要な機能に関連付けられています。詳しくは、「Marketing Platform 管理者ガイド」を参照してください。

表7. 「フローチャート」ページのアイコン (「編集」モード)

アイコン名	説明
実行	このアイコンをクリックして、「実行」メニューにアクセスします。
プロパティ	このアイコンをクリックして、「フローチャートのプロパティ」ウィンドウを表示または編集します。
オプション	このアイコンをクリックして、「オプション」メニューにアクセスします。
システム管理	このアイコンをクリックして、「管理」メニューにアクセスします。
レポート	このアイコンをクリックして、フローチャート・セル・レポートにアクセスします。
切り取り	フローチャート内の 1 つ以上の項目を選択し、このアイコンをクリックして、選択した項目を除去します。
コピー	フローチャート内の 1 つ以上の項目を選択し、このアイコンをクリックして、選択した項目をコピーします。
貼り付け	このアイコンをクリックして、切り取りまたはコピーした項目をフローチャートに貼り付けます。
ズームイン	このアイコンをクリックして、フローチャートの表示サイズを大きくします。
ズームアウト	このアイコンをクリックして、フローチャートの表示サイズを小さくします。
印刷	このアイコンをクリックして、フローチャートを印刷します。

第 5 章 プロセス

プロセスは、フローチャートのビルディング・ブロックです。プロセスは、必要な出力を得るために特定のタスクを実行するように構成します。例えば、マージ・プロセスを使用して 2 つの異なるオーディエンス・グループをマージしたり、コンタクト・プロセス (コール・リストまたはメール・リスト) を使用してキャンペーン全体の結果を出力したりします。

タスクは、通常セル を処理するプロセスを使用して実行されます。セルとは、マーケティング・メッセージ受信者 (顧客 ID または見込み顧客 ID など) の識別子のリストです。通常、フローチャート内の各プロセスでは、1 つ以上のセルを入力として取得し、そのデータを変換し、1 つ以上のセルを出力として生成します。

Campaign 内で使用できるプロセスは、フローチャート・プロセス・パレット (フローチャートの作成およびプロセスの処理に使用するスペース) 上に表示されます。

異なるタイプのプロセスは色によって識別されます。つまり、データ操作プロセスは青、実行プロセスは赤、および最適化プロセスは緑で表示されます。

フローチャートを作成するには、必要なタイプのプロセスをプロセス・パレットからフローチャート・ワークスペースに移動し、それらを接続して構成します。

プロセスのタイプ

Campaign の各プロセスは、機能によって 3 つのタイプに分類されます。これらのタイプは、フローチャート・プロセス・パレット内で次のように色によって識別されます。

- データ操作プロセス - 青。
- 実行プロセス - 赤。
- 最適化プロセス - 緑。

「コンタクト・プロセス」と呼ばれる専門化された実行プロセスのセットでは、コンタクト・リスト (メール・リストまたはコール・リスト) が生成されます。

注: このセクションで説明されている Campaign の各プロセスに加えて、Interact、Optimize、および eMessage では、キャンペーン・フローチャートでの使用のための追加のプロセスが提供されています。これらの製品で提供されているプロセスについては、各製品の資料を参照してください。

データ操作プロセス

データ操作プロセスを使用して、データ・ソースから顧客 ID を選択し、それらの ID をさまざまな方法で操作して、意味のあるグループまたは対象オーディエンスを作成します。

データ操作プロセスを使用すれば、一組の基準に基づく顧客の選択、包含または除外のための顧客のリストのマージ、意味のあるグループへの顧客のセグメント化、

テスト・グループまたはコントロール・グループに対するサンプリング、またはキャンペーンの対象オーディエンスの指定などのタスクを行うことが可能になります。

次のようなデータ操作プロセスがあります。

- 57 ページの『選択』
- 61 ページの『マージ』
- 62 ページの『セグメント』
- 69 ページの『サンプル』
- 73 ページの『オーディエンス』
- 84 ページの『抽出』

実行プロセス

必要なオーディエンスを選択するためのキャンペーンの作成が完了したら、実行プロセスを使用して使用可能な方法で結果を出力する必要があります。実行プロセスは、フローチャートの実行を制御し、実際の顧客コンタクトをトリガーします。

実行プロセスは、完成したキャンペーンの実際の実行を制御します。この実行には、コンタクト・リストの管理と出力、対象オーディエンスの処理、レスポンスとコンタクトのトラッキング、データのログ、およびキャンペーンまたはセッションの実行のスケジュールが含まれます。

次のような実行プロセスがあります。

- 90 ページの『スナップショット』
- 93 ページの『スケジュール』
- 98 ページの『キューブ』
- 100 ページの『セグメントの作成』
- 101 ページの『メール・リスト』
- 107 ページの『コール・リスト』

注：メール・リスト・プロセスおよびコール・リスト・プロセスは、コンタクト・プロセスとも呼ばれます。

最適化プロセス

最適化プロセスを使用すれば、効果を最大化するようにキャンペーンを微調整することができます。最適化プロセスを使用してスコアを生成し、オーディエンスの選択を詳細化します。最適化プロセスによって、コンタクトとレスポンスをトラッキングでき、また PredictiveInsight などのデータ・マイニング製品、または Campaign からの予測モデル化の結果を使用して、オーディエンスの選択を詳細化して ROI を最大化することもできます。また、最適化プロセスでは、個々の見込み顧客へのコンタクトに使用するための、組織全体にわたる最も効果的なキャンペーン、オファー、およびチャネルを判断するための機能を提供することもできます。

次のような最適化プロセスがあります。

- 107 ページの『トラッキング』
- 109 ページの『レスポンス』

- 112 ページの『モデル』
- 114 ページの『スコア』

フローチャートでのプロセスの使用

Campaign を使用すれば、プロセスを視覚的に操作することによって、キャンペーン・フローチャートを簡単に作成することができます。さまざまなフローチャート設計を試しながら、プロセスの作成、接続、設定、および実行を行うことができます。次のセクションでは、プロセスを使用して行うことができるタスクについて説明しています。

- 『新規プロセスをフローチャートに追加するには』
- 51 ページの『プロセスをコピーして貼り付けるには』
- 52 ページの『プロセスをテンプレート・ライブラリーから貼り付けるには』
- 53 ページの『プロセスを移動するには』
- 53 ページの『プロセスを削除するには』
- 50 ページの『2 つのプロセスの接続』
- 53 ページの『2 つのプロセスの間の接続を削除するには』
- 56 ページの『「プロセス設定」ウィンドウにアクセスするには』
- 35 ページの『プロセスを実行するには』

新規プロセスをフローチャートに追加するには

プロセスをフローチャートに追加するには、パレット内で任意のプロセス・ボックスをクリックしてから、フローチャート・ワークスペース内でクリックします。

既存の設定済みプロセスもコピーでき、またテンプレート・ライブラリーからテンプレートを貼り付けることもできます。テンプレートには、1 つ以上の設定済みプロセスと接続が含まれています。

1. キャンペーン内で、編集するフローチャートを開きます。
2. プロセス・パレットで、フローチャートに追加するプロセスをクリックします。
3. ボックスの配置先となる、ワークスペース内の位置をクリックします。ボックスをある位置にドラッグできないことに注意してください。つまり、クリックする必要があります。

プロセスを追加する際は、フローチャート内でキャンペーンのフローに基づいて各プロセスを論理順序で配置するようにします。ワークスペース内では、各プロセス・ボックスを重ねて配置することは避けてください。プロセス・ボックスが重なってしまった場合、一番上のプロセス・ボックスをクリックし、積み重なって表示されていない次のボックスが表示されるようにそれを移動します。

新規に追加したプロセスは、設定されるまではぼかし表示 (グレー) になります。設定済みプロセスは、それらのタイプに基づいて色付きで表示されます (データ操作プロセスは青、実行プロセスは赤、最適化プロセスは緑です)。

4. プロセスを右クリックして、そのプロセスに対して実行できる操作のリストを確認します。

通常、次のステップはプロセスの構成になります。このステップでは、ワークスペース内でプロセスをダブルクリックしてダイアログを表示し、このダイアログを使用してプロセスを構成します。ワークフローを確定するために各ボックスを接続する必要があります。(一部のプロセスでは、ソース・プロセスからの入力を必要とするため、構成する前に接続する必要があります。) 例えば、特定の収益のブラケット内で世帯を選択してから、オーディエンス・プロセスまたはマージ・プロセスにそれを接続するように、選択プロセスを設定する場合があります。最後に、このプロセスをテスト実行します。作業する際は、フローチャートを高い頻度で保存してください。

プロセスの設定、接続、および実行については、利用できる他のトピックを参照してください。

2 つのプロセスの接続

データ・フローの方向とプロセスの実行順序を指定するには、フローチャート内の各プロセスを接続します。ワークスペース内でプロセスを移動すると、既存の接続は残り、移動されたプロセスの新しい位置に調整されます。接続は、簡単に追加または削除することができます。

1. キャンペーン内で、編集するフローチャートを開きます。

プロセス・パレットとワークスペースが表示されます。

2. 接続の作成元となるプロセス内の接続ボックスの上にカーソルを移動します。

カーソルが 3 つの下向きの矢印に変わります。

3. 線をクリックして接続の作成先のプロセスにドラッグします。

ソース・プロセスが強調表示されます。カーソルをドラッグすると、ソース・プロセスから接続の線が引かれます。

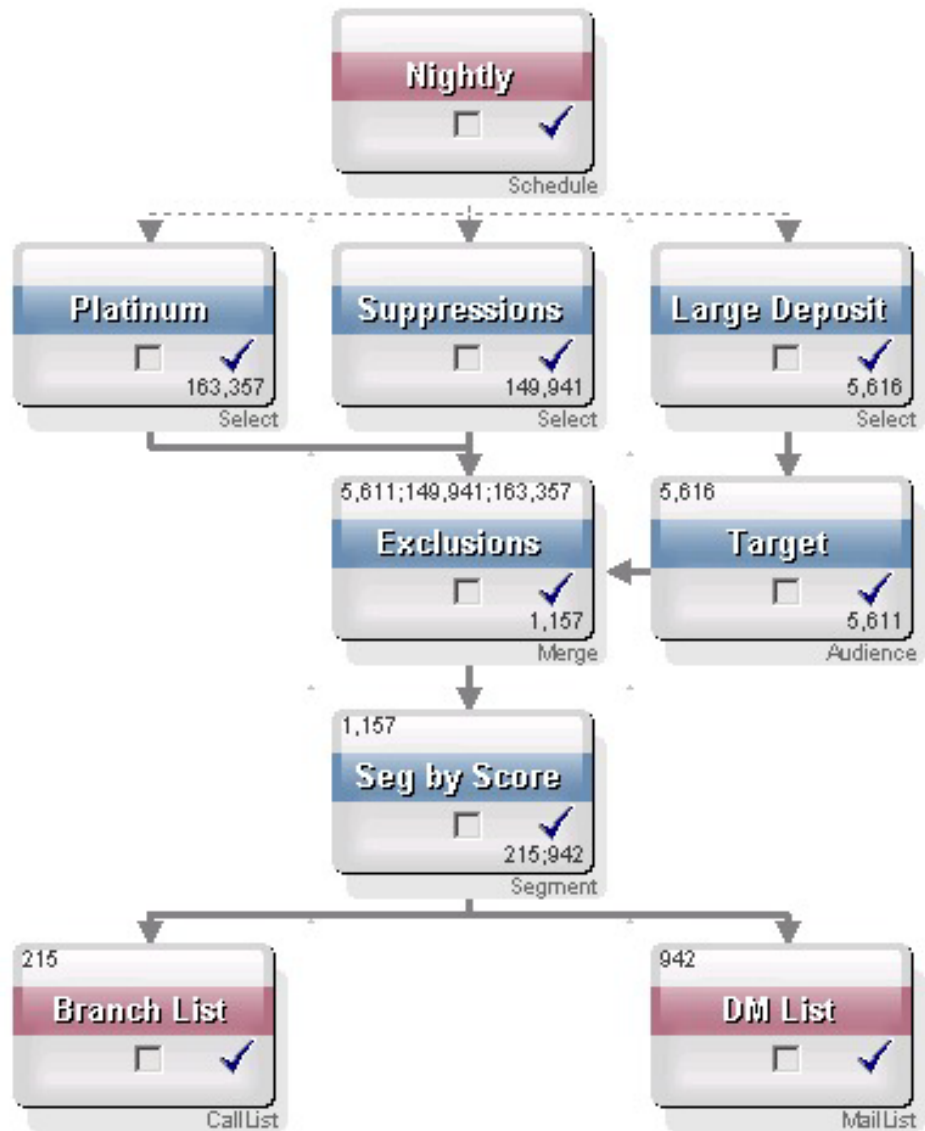
4. 宛先プロセス上の任意の位置でマウス・ボタンを放します。

ソース・プロセスと宛先プロセスが接続され、矢印でデータ・フローの方向が示されます。ソース・プロセスは宛先プロセスの前に実行され、ソース・プロセスからのデータ出力は宛先プロセスへの入力として使用できます。

注: 宛先プロセスがソース・プロセスからデータを受け取る場合、接続は実線で示されます。宛先プロセスがソース・プロセスからデータを受け取らないが、ソース・プロセスが完了するまで正常に実行できない場合は、接続は点線で示されます。

例: プロセスの接続

次のフローチャートは、毎晩自動実行するようにスケジュールされています。スケジュール・プロセスと 3 つの選択プロセスとの間の点線の接続は、スケジュール・プロセスが実行を完了するまで各選択プロセスが実行されないが、スケジュール・プロセスから選択プロセスにデータは渡されないことが示されています。



プロセスをコピーして貼り付けるには

既に構成済みのプロセスをコピーすると、フローチャートを作成する際の時間を短縮することができます。コピーしたプロセスは、ワークスペース内の別の場所か、または別のフローチャートに貼り付けます。

1. キャンペーン内で、編集するフローチャートを開きます。
2. ワークスペース内で、コピーしたいプロセスをクリックします。

注: 複数のプロセスをコピーするには、**Shift** キーを押しながらコピーしたいプロセスをクリックし、これらのプロセスの近くに選択ボックスをドラッグします。または、**Ctrl + A** を使用して、フローチャート内のすべてのプロセスを選択することもできます。

3. 「コピー」アイコンをクリックします。

メニューから「コピー」を選択するか、**Ctrl + C** を押すこともできます。

4. 「貼り付け」アイコンをクリックします。

メニューから「貼り付け」を選択するか、**Ctrl + V** を押すこともできます。

プロセスのコピーがワークスペース内に表示されます。

5. コピーしたプロセスをクリックして、目的の場所までドラッグします。

プロセスを切り取るには

1. キャンペーン内で、編集するフローチャートを開きます。

プロセス・パレットとワークスペースが表示されます。

2. ワークスペース内に既に存在するプロセスの中から、切り取るプロセスを選んでクリックします。

注: Shift キーを押したままクリックすると複数のプロセスを選択でき、マウス・ポインターをドラッグするとプロセスのグループを選択でき、また **Ctrl+A** を使用するとフローチャート内のプロセスをすべて選択できます。

3. 「フローチャート」のツールバーの「切り取り」アイコンをクリックします。

「切り取り」はメニューでクリックすることもでき、また **Ctrl+X** を押して行うこともできます。

プロセスがフローチャートから削除されて、クリップボード上に保存されました。これで、このプロセスを現在のフローチャートまたは別のフローチャート内に貼り付けることができます。

プロセスをテンプレート・ライブラリーから貼り付けるには

フローチャートの作成時に、テンプレート・ライブラリーからのテンプレートを使用すると時間を節約することができます。テンプレートには、1 つ以上の設定済みプロセスと接続が含まれています。

1. キャンペーン内で、編集するフローチャートを開きます。

プロセス・パレットとワークスペースが表示されます。

2. 「オプション」アイコンをクリックして、「テンプレート」を選択します。

「テンプレート」ウィンドウが選択可能なテンプレートをリストして表示されず。

3. フローチャートに貼り付けるテンプレートを「項目リスト」から選択します。
4. 「テンプレートの貼り付け」をクリックします。

選択したテンプレート内の 1 つ以上のプロセスがフローチャートに貼り付けられます。

1 つ以上のプロセス・ボックスがフローチャート・ワークスペース内の別のプロセス・ボックスの上に貼り付けられると、それらは積み重なった状態で表示されます。積み重なって表示されていない次のボックスを表示するには、一番上のプロセス・ボックスをクリックして移動します。

プロセスを移動するには

編集中のフローチャート内のプロセスは、すべて移動することができます。この移動は、対象のプロセスをワークスペース上の別の位置にドラッグすることによって行います。

Campaign では、あるプロセスを別のプロセスの上に重ねて配置することができます。ただし、多数のプロセスがある規模の大きいフローチャートの場合、すべてのプロセスを確認できるように、それらを重ね合わせるのではなく、ズーム機能を使用の方が操作がより簡単な場合があります。

1. キャンペーン内で、編集するフローチャートを開きます。

プロセス・パレットとワークスペースが表示されます。

2. ワークスペース内で、新しい位置に移動するプロセスをクリックしてからドラッグします。

マウス・ボタンを放すと、そのプロセスが新しい位置に移動されます。移動しているプロセスとの間の既存の各接続は残り、新しい位置に対して線が引き直されます。

プロセスを削除するには

フローチャートを設計して作成している際に、追加していたプロセスを削除することが必要になる場合があります。

1. キャンペーン内で、編集するフローチャートを開きます。

プロセス・パレットとワークスペースが表示されます。

2. ワークスペース内で、削除するプロセスを右クリックしてから、メニューの「削除」を選択します。

注: 複数のプロセスを同時に選択することができます。これは、マウス・ポインターを使用して選択する際に、**Shift** キーを押したままにすることによって行います。

選択した項目を削除するかどうかを確認するメッセージが表示されます。

3. 「OK」をクリックします。
4. 選択した 1 つ以上のプロセスがワークスペースから削除されます。また、各プロセス間の接続もすべてフローチャートから削除されます。

2 つのプロセスの間の接続を削除するには

1. キャンペーン内で、編集するフローチャートを開きます。

プロセス・パレットとワークスペースが表示されます。

2. 削除する接続をクリックします。
3. 以下のいずれかを実行します。
 - 接続を右クリックして、メニューから「削除」を選択します。
 - **Delete** キーを押します。

- 「フローチャート」のツールバーの「切り取り」アイコンをクリックします。
- **Ctrl+X** を押します。

接続が削除されました。

プロセスを実行するには

設定が正常に行われて結果が予期したとおりになるように、設定および接続を行ったら、必ずすぐに各プロセスを実行してください。

注: プロセスを実行すると、前の実行の結果はすべて失われます。

1. キャンペーン内で、編集するフローチャートを開きます。
2. 実行するプロセスをクリックします。

プロセスでソース・プロセスからのデータが必要な場合は、そのデータが使用できるように、ソース・プロセスが既に正常に実行されていることを確認してください。

3. 「実行」アイコンをクリックするか、またはプロセス・ボックスを右クリックしてから、次のオプションのいずれかを選択します。
 - **選択したプロセスのテスト実行:** このオプションは、エラーの発生時にそのエラーをトラブルシューティングできるように、フローチャートの作成時に使用します。テスト実行では、データの出力も、テーブルまたはファイルの更新も行いません。(ただし、テスト実行の完了時にトリガーが実行され、またグローバル抑制が適用されます。)
 - **選択したプロセスを保存して実行:** 本番実行を行います。メール・リストやコール・リストなどのプロセスでは、「コンタクト履歴」にエントリーを書き込みます。それぞれの本番実行では、コンタクト履歴を一度だけ生成できます。ある本番実行に対して既に実行されているコンタクト・プロセスは、現在の実行からのコンタクト履歴が最初に削除された場合にのみ再実行できます。トリガーは、本番実行の完了時に実行されます。

注: フローチャートのプロセスのみまたはブランチのみを実行しても、フローチャートの実行 ID は増分されません。プロセスのみまたはブランチのみ実行するときに、コンタクト履歴レコードが存在する場合は、処理を続行する前に実行履歴オプションを選択するようプロンプトが出されます。詳しくは、35 ページの『実行履歴オプションについて』を参照してください。

4. プロセスで実行が完了されたら、確認ウィンドウで「OK」をクリックします。

プロセスが正常に実行された場合、そのプロセスには青のチェック・マークが表示されます。エラーがある場合は、プロセスには赤の「X」が表示されます。

実行履歴オプションについて

注: 「実行履歴オプション」ウィンドウは、現在の実行 ID のコンタクト履歴を既に生成しているブランチまたはプロセスを実行する際にのみ表示されます。新規実行インスタンスが特定の再実行ブランチまたは再実行プロセスに存在しない場合、「実行履歴オプション」ウィンドウは表示されません。

「実行履歴オプション」ウィンドウを使用して、生成する新規コンタクト履歴をコンタクト履歴テーブルに書き込む方法を選択します。

実行履歴オプションのシナリオ: 2つのブランチ、およびコンタクト履歴にログを記録するように構成されている、2つのコンタクト・プロセス A と B を持つフローチャートがあります。

このフローチャート全体を（「フローチャートの実行」コマンドを使用して先頭から）一度実行します。これによって、新規の実行 ID（例えば、実行 ID = 1）が作成され、この実行 ID 用のコンタクト履歴も生成されます。

このフローチャート全体の最初の正常な実行の後に、最初のオファーを受け取った個人と同じ個人にフォローアップ・オファーを提供するためのコンタクト・プロセス A を編集します。したがって、コンタクト・プロセス A を再実行します。現在の実行 ID は「1」で、コンタクト履歴がプロセス A および実行 ID=1 に対して既に存在しています。

コンタクト・プロセス A を選択して「プロセスの実行」をクリックすると、「実行履歴オプション」ウィンドウが表示されます。実行 ID を変更せずにそのまま（実行 ID=1）にしておくことを選択し、この実行 ID に関連付けられている既存のコンタクト履歴を置き換えることができます。あるいは、新規の実行インスタンスを作成（つまり、実行 ID を 2 にインクリメントする）し、実行 ID=1 に関連付けられているコンタクト履歴を元のままにしておいて、実行 ID=2 に関連付けられた新規のコンタクト履歴を追加することもできます。

フォローアップ・オファーを送付し、最初のオファーに関連付けられているコンタクト履歴を失わないようにするため、「新しい実行インスタンスの作成」を選択します。これによって、実行 ID が「2」に変更され、最初のオファーを受け取った ID と同じ ID のコンタクト履歴レコードがコンタクト履歴テーブルに追加されます。

ここでコンタクト・プロセス B を編集して実行すると、「実行履歴オプション」ウィンドウは表示されません。これは、現在の実行 ID が 2 で実行 ID=2 に関連付けられているコンタクト履歴がコンタクト・プロセス B に対して存在しないためです。コンタクト・プロセス B のみを実行すると、実行 ID = 2 の追加のコンタクト履歴レコードが生成されるだけです。

「実行履歴オプション」ウィンドウのリファレンス:

「実行履歴オプション」ウィンドウには、次のオプションがあります。

表 8. 「実行履歴オプション」ウィンドウのオプション

オプション	説明
新しい実行インスタンスの作成	フローチャートの特定のブランチまたはプロセスを新規の実行 ID を使用して再実行します。新規の実行 ID に関連付けられた結果をコンタクト履歴テーブルに追加します。既存のコンタクト履歴は元の状態のままです。

表 8. 「実行履歴オプション」ウィンドウのオプション (続き)

オプション	説明
以前の実行のコンタクト履歴を置換	以前の実行 ID を再利用して、その実行 ID に対して前に生成されたコンタクト履歴を置き換えます (実行されているプロセスまたはブランチについてのみ)。フローチャートの他のブランチまたはプロセスに対して前に生成されたコンタクト履歴レコードは、元の状態のままです。
キャンセル	ブランチまたはプロセスの実行を取り消します。既存のコンタクト履歴に対しては何も実行されません。フローチャートは「編集」モードで開いたままです。

関連付けられたレスポンス履歴が存在する場合は、コンタクト履歴を置換することはできません。したがって、「以前の実行のコンタクト履歴を置換」を選択し、関連付けられたレスポンス履歴レコードが存在していた場合は、次の 2 つのオプションのいずれかを選択することができます。

- 関連付けられたレスポンス履歴レコード、およびコンタクト履歴レコードをクリアする場合は、「OK」をクリックします。レスポンス履歴が存在し、前の実行のコンタクト履歴を置き換えたい場合は、これが唯一のオプションです。
- コンタクト履歴レコードのクリアを取り消す場合は、「キャンセル」をクリックします。現在のコンタクト・プロセスを実行するために新規の実行インスタンスを作成する場合は、代わりに「新しい実行インスタンスの作成」を選択することができます。

プロセスの構成

フローチャートにプロセスを追加したら、そのプロセスを構成する必要があります。プロセスを構成することによって、そのプロセスで使用するデータのソース、処理する ID、および出力の形式などに関する重要な情報を Campaign に提供します。例えば、過去 6 カ月に購入を行ったすべての顧客を選択するように「選択」ボックスを構成できます。

1 つのベスト・プラクティスとしては、キャンペーンが実行される際に各プロセスが使用される順序でそれらのプロセスをフローチャート内に配置することです。一部のプロセスでは、ソース・プロセスからの入力が必要とするため、構成する前に接続する必要があります。

「プロセス設定」ウィンドウにアクセスするには

1. キャンペーンまたはセッション内で、編集するフローチャートを開きます。

プロセス・パレットとワークスペースが表示されます。

2. 設定するプロセスをダブルクリックします。また、プロセスを右クリックして、メニューから「プロセス設定」を選択することもできます。

そのプロセス用の「プロセス設定」ウィンドウが表示されます。

3. 「プロセス設定」ウィンドウの各タブの項目に情報を入力します。支援が必要な場合は、「ヘルプ」をクリックしてください。
4. 設定の詳細の入力が完了したら、「OK」をクリックします。

正しく構成されたプロセスは、色付きで表示されます (特定の色によってプロセスのタイプが表されます)。名前がイタリック体で示された灰色のプロセスには、構成エラーがあります。エラーについての詳細情報を確認するには、プロセス上にマウスオーバーした状態で、エラー・メッセージの説明を表示します。

選択

選択プロセスを使用して、顧客、口座、世帯などのコンタクトのリストをマーケティング・データから作成するための基準を定義します。選択プロセスは、Campaign で最も頻繁に使用されるプロセスです。ほとんどのフローチャートは 1 つ以上の選択プロセスから始まります。選択プロセスは、他のプロセスによって変更および詳細化が可能な、顧客 ID などの ID のリストを含むセルを出力します。

選択プロセスを構成するには

選択プロセスを定義して、マーケティング・データからコンタクトのリストを作成します。セグメントまたはテーブルにすべての ID を指定するか、クエリーを使用して特定の ID を選択できます。その後、1 つ以上の選択プロセスを別のプロセスへの入力として使用することができます。例えば、すべての上顧客 (Loyal Customer) を選択し、次にすべてのオプトアウト顧客 (Opt-Out) について別の選択を行い、それらをマージして 1 つのリストにすることができます。

1. キャンペーン内で、編集するフローチャートを開きます。
2. パレットで選択プロセスをクリックしてから、ワークスペースをクリックして、プロセスをフローチャートに追加します。

ワークエリアの「選択」プロセス・ボックスは、構成されるまではぼかし表示されています。

3. フローチャート・ワークスペースで「選択」プロセス・ボックスをダブルクリックします。

プロセス設定ダイアログが表示されます。

4. 「ソース」タブで、「入力」ドロップダウン・リストを使用して、プロセスのデータ・ソースとして使用できる「セグメント」または「テーブル」を選択します。

注: IBM Coremetrics を Campaign に統合すると、**IBM Coremetrics Segments** を入力として選択することができます。手順については、58 ページの『IBM Coremetrics セグメントを選択プロセスで使用する方法』を参照してください。統合の構成については、「*IBM Unica Campaign 管理者ガイド*」で説明されています。

5. 「すべて選択」オプションのいずれかを選択します。オプション名は、使用する入力データ・ソースのオーディエンス・レベルによって異なります。例えば、オーディエンス・レベルが「顧客」の場合、「**すべての顧客 ID を選択**」および「**条件を指定して顧客 ID を選択**」が表示されます。
 - 「入力」リストで選択されたデータ・ソースのすべての行を含める場合は、「**すべての ID を選択**」を選択します。
 - クエリーに基づいて ID を選択する場合は、「**条件を指定して ID を選択**」を選択します。

6. 「条件を指定して ID を選択」を選択した場合、以下のいずれかの方法を使用してクエリーを作成します。
 - **ポイント & クリック**: これはデフォルト・ビューです。「フィールド名」、「演算子」、「値」、および「AND/OR」列のセルをクリックして、ダイアログの右側のリストから値を選択し、クエリーを作成します。この方法は、クエリーを作成する最も簡単な方法で、構文エラーの回避にも役立ちます。
 - **SQL 入力**: このボタンをクリックして、未加工の SQL を作成するか、「入力サポート」を使用して、論理演算子やストリング関数など、提供されるさまざまなマクロから選択します。
7. クエリーを構成する場合、「選択項目」リストからクエリーに含めるフィールド (IBM Unica Campaign 定義項目およびユーザー定義項目を含む) を選択します。詳しくは、119 ページの『プロセスでのクエリーの作成』を参照してください。「構文チェック」および「件数確認」を使用して、クエリーにエラーがないことを確認します。

注: Campaign 定義項目と同じ名前を持つテーブル・フィールドがクエリーに含まれている場合、構文 `<table_name>.<field_name>` を使用してフィールド名を修飾する必要があります。
8. プロセスによって生成される ID の数を制限する場合は、「セル・サイズの制限」タブをクリックします。
9. 「全般」タブをクリックして、「プロセス名」 (例えば、「上顧客 (Loyal Customers)」などの名前を付けます)、「出力セル」の名前 (デフォルトでは、これは「プロセス名」と一致します) および「セル・コード」 (通常、デフォルトをそのまま受け入れます) を指定します。「説明」に、この選択プロセスで実行しようとしている内容についての説明を入力します。
10. 「OK」をクリックします。

これで、プロセスが構成されました。予期される結果をプロセスが返すかどうかを確認するために、プロセスの実行をテストできます。

IBM Coremetrics セグメントを選択プロセスで使用する方法

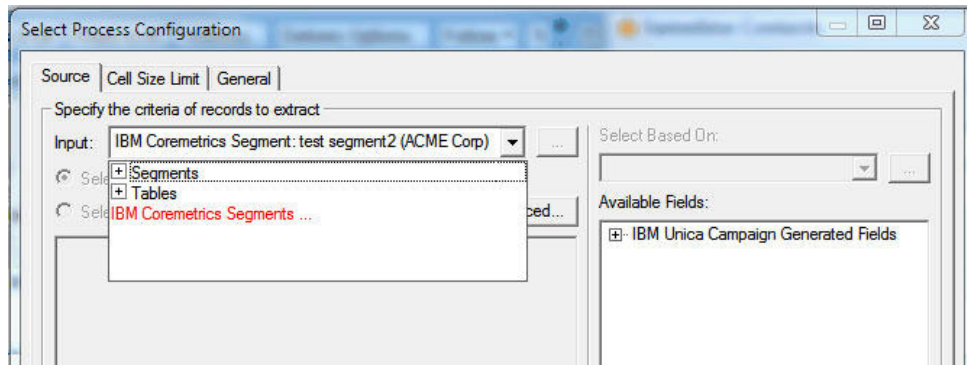
選択プロセスを構成するときに、**IBM Coremetrics セグメント**をデータ・ソースとして選択し、IBM Coremetrics 製品からエクスポートされたセグメントをキャンペーンで使用することができます。

注: 「**IBM Coremetrics セグメント**」オプションを選択できるのは、IBM Coremetrics と Campaign が統合されている場合のみです。統合の構成については、「*IBM Unica Campaign 管理者ガイド*」で説明されています。

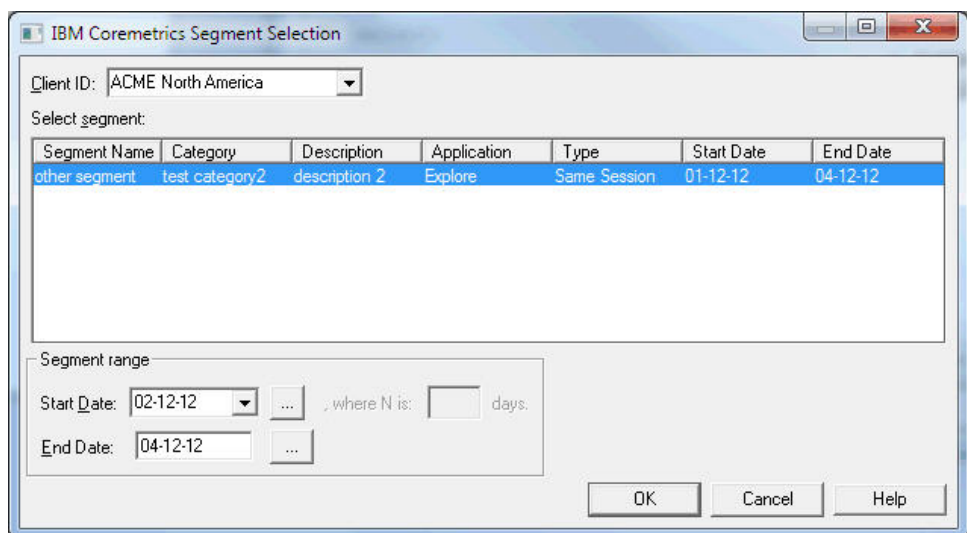
1. Campaign フローチャートの選択ボックスをダブルクリックして、「選択プロセス設定 (Select Process Configuration)」ダイアログを開きます。

前に定義した IBM Coremetrics セグメントを含む選択ボックスを変更する場合は、「ソース」タブの「入力」ボックスに既存のセグメント名が表示されます。

2. 「入力」リストを開き、「**IBM Coremetrics セグメント**」をクリックします。



「IBM Coremetrics セグメントの選択 (IBM Coremetrics Segment Selection)」ダイアログが開きます。



- 「IBM Coremetrics セグメントの選択 (IBM Coremetrics Segment Selection)」ダイアログで、以下のように操作します。
 - ドロップダウン・リストから「クライアント ID」を選択し、その特定の IBM Coremetrics クライアントに関連付けられている公開済みのすべてのセグメントのリストを表示します。
 - 「セグメントの選択」リストに、IBM Coremetrics で定義されているセグメントが表示され、セグメントが作成されたアプリケーション、セグメントのタイプ、および開始日と終了日も併せて表示されます。
 - 「説明」を参照すると、セグメントの目的を確認できます。セグメントに関する詳細が必要な場合は、そのセグメントをダブルクリックすると、セグメントの式、および IBM Coremetrics で定義されているその他の情報が表示されます。
 - 各セグメントの横に表示されている「開始日」と「終了日」は、セグメントの条件と一致する訪問者を検出するための、IBM Coremetrics 定義の日付範囲を示しています。例えば、あるセグメントでは、2012 年 1 月 12 日から 2012 年 4 月 12 日までの間に少なくとも 3 回特定のサイトを訪問したすべての訪問者を検出し、別のセグメントでは別の日付範囲に該当する訪問者を検出する、ということが考えられます。IBM Coremetrics 定義の日付範囲をここで

変更することはできません。ただし、ダイアログの下部にある「セグメントの範囲」という日付コントロールを使用して、IBM Coremetrics で定義された範囲内で日付の範囲を定義することは可能です。

4. リストでセグメントを選択します。選択プロセスを変更 (作成ではなく) する場合は、既存のセグメント範囲が表示されます。
5. ダイアログの下部にある「セグメント範囲」という日付とカレンダーのコントロールを使用して、選択したセグメントに関するデータを取得する日付範囲を指定します。
 - 指定する範囲は、IBM Coremetrics でそのセグメントに対して定義された開始日から終了日まで (リストの各セグメントの横に示されている日付) の範囲内でなければなりません。
 - Campaign は、開始日と終了日だけでなく、日付制約 (指定されている場合) も考慮します。日付制約は IBM Coremetrics で定義されますが、セグメントの選択ダイアログには表示されません。日付制約は、1 つのセグメントに関してプルするデータの日数を制限することにより、大規模なデータ・セットのエクスポートが原因で IBM Coremetrics が過負荷になることがないようにします。

例えば、3 カ月の期間 (開始日から終了日まで) と 7 日間の日付制約を指定して IBM Coremetrics で定義されたセグメントがあるとします。Campaign で定義する日付範囲では、両方の制約を考慮します。3 カ月の期間を超える日付範囲を指定した場合、そのセグメント定義は保存できません。同様に、7 日間を超える日付範囲を指定した場合も、そのセグメント定義は保存できません。

- IBM Coremetrics 定義の範囲と日付制約の範囲に収まっていれば、絶対的な日付と相対的な日付のいずれでも指定することができます。
- 絶対的な開始日を指定した場合は、終了日も指定する必要があります。例えば、IBM Coremetrics 定義のセグメントで 3 カ月の期間が指定されている場合、その期間内の 1 日、1 カ月、または 1 週間間に情報が収集された訪問者を、キャンペーンのターゲットにすることができます。
- 相対的な日付の例:
 - IBM Coremetrics 定義のセグメントで 3 カ月の期間が指定されている場合、「昨日」や「最近7日」などの相対的な日付を指定して、最近の訪問者を継続的に検出することができます。キャンペーンは、IBM Coremetrics 定義の終了日に達するまで問題なく実行されます。
 - 「今月」を指定する場合、この相対日付が使用される前日までの、その月のすべてのデータが使用可能になっている必要があります。例えば、今日が 3 月 28 日だとすると、選択したセグメントについて、3 月 1 日から 3 月 27 日までのデータが使用可能になっている必要があります。
 - 「先月」を指定する場合、先月分のすべてのデータが使用可能になっている必要があります。例 #1: IBM Coremetrics 定義のセグメントで、開始日が 3 月 1 日、終了日が 3 月 31 日と指定されている場合、4 月 1 日から 4 月 30 日までの期間内で (4 月 30 日を含む)、「先月」を使用して 3 月のデータを取得することができます。例 #2: IBM Coremetrics 定義のセグメントで、開始日が 3 月 1 日、終了日が 3 月 30 日と指定されている場合は、完全な 1 カ月分のデータが存在していないため、「先月」を使用

することはできません。例 #3: IBM Coremetrics 定義のセグメントで、開始日が 3 月 2 日、終了日が 3 月 31 日と指定されている場合も、完全な 1 カ月分のデータが存在していないため、「先月」を使用することはできません。例 2 と例 3 の場合、「先月」がセグメントの日付の範囲内に収まっていないことを通知するメッセージが表示されます。その場合、相対日付ではなく絶対日付を使用する必要があります。

6. 「OK」をクリックして、「選択プロセス設定 (Select Process Configuration)」ダイアログに戻ります。

選択プロセスを実行すると、指定された日付範囲および日付制約の範囲内におけるセグメントに関するデータが IBM Coremetrics からプルされます。フローチャートで使用されているマッピング・テーブルにより、IBM Coremetrics の ID を Campaign のオーディエンス ID に変換する方法が Campaign に通知されます。これで、これらのオーディエンス ID をダウンストリーム・プロセスで使用できます。この仕組みに関する技術情報については、「Campaign 管理者ガイド」を参照してください。

まれに、フローチャートの実行時に、選択したセグメントの IBM Coremetrics の ID の数が、Campaign で検出されたオーディエンス ID の数と一致しない場合があります。例えば、100 個の IBM Coremetrics キーがあるのに対し、Campaign で一致する ID が 95 個しかない場合があります。Campaign ではこの状況について警告が出されますが、フローチャートの実行は続行されます。マップされた変換テーブルに更新されたレコードがあるか確認するように求めるメッセージが、そのフローチャートのログ・ファイルに書き込まれます。管理者は、その企業のポリシーに従ってオンライン・キーおよびオフライン・キーを (再) 照合し、変換テーブルに最新データを再挿入することにより、この状況を解決できます。マップされた変換テーブルが更新されたら、フローチャートを再実行する必要があります。

マージ

マージ・プロセスを使用して、どの入力セルを含めて結合するか、およびどの入力セルを除外 (抑制) するかを指定します。これにより、フローチャート内の以降のプロセスに対して、セルを含めたり除外したりできるようになります。例えば、マージ・プロセスを使用して、マーケティング資料を受け取らないことを要求した「オプトアウト」顧客を抑制します。

マージ・プロセスを構成するには

マージ・プロセスは、1 つ以上の入力セルを受け入れて、1 つの出力セルを生成します。ユーザーは、どの入力セルを含めて結合するか、またはどの入力セルを出力から除外するかを指定します。

1. キャンペーン内で、編集するフローチャートを開きます。
2. パレットでマージ・プロセスをクリックしてから、ワークスペースをクリックして、プロセスをフローチャートに追加します。
3. マージ・プロセスが、入力としてそのマージ・プロセスによって使用される出力セルを持つ 1 つ以上の構成済みプロセスに接続されていることを確認します。

注: すべての入力セルは同じオーディエンス・レベルを持っている必要があります。

4. フローチャート・ワークスペースでマージ・プロセスをダブルクリックします。

プロセス設定ダイアログが表示されます。マージ・プロセスに接続されたプロセスのセルは、自動的に「入力」リストに表示されます。

5. 「方法」タブで、含めるか除外する入力セルを指定します。「入力」リストで各セルをクリックし、該当する「追加>>」ボタンを使用して、そのセルを「選択するデータ」リストまたは「除外するデータ」リストに追加します。

「選択するデータ」リスト内のセルの ID は、固有 ID の 1 つのリストに組み込まれます。「除外するデータ」リスト内の ID は、マージされた出力には表示されません。

6. 以下のいずれかを選択して、入力セル（「選択するデータ」リストで指定）内の重複 ID を処理する方法を指定します。
 - **組み込み時にマージ/消去:** 重複 ID を削除して、少なくとも 1 つの入力セルに出現する固有 ID のリストを作成します。これは、論理「OR」または「ANY」です。
 - **組み込み時に照合 (AND):** すべての入力セルに出現する ID のみを含めます。これは論理「AND」または「ALL」です。

最初のオプションは、顧客 A が「Gold.out」セルまたは「Platinum.out」セルのいずれかに存在する場合に、その顧客をリストに組み込みます（ただし、レコードが組み込まれるのは一度だけのため、重複レコードは存在しません）。2 番目のオプションは、顧客 A が「Gold.out」セルおよび「Platinum.out」セルの両方に出現する場合にのみ、その顧客をリストに組み込みます。2 番目のオプションは、顧客が複数の基準を満たす場合にのみ、その顧客をリストに含める場合に有用です。

7. プロセスによって生成される ID の数を制限する場合は、「セル・サイズの制限」タブをクリックします。
8. 「全般」タブをクリックして、「プロセス名」、「出力セル」の名前、および「セル・コード」を割り当て、プロセスについての説明を「説明」に入力します。
9. 「OK」をクリックします。

プロセスが構成され、フローチャートで使用可能になります。予期される結果をプロセスが返すかどうかを確認するために、プロセスの実行をテストできます。

セグメント

セグメント・プロセスを使用して、データを個別のグループ（セグメント）に分割し、さまざまな処理またはオファーを受け取ります。セグメントが作成された後に、セグメント・プロセスをコンタクト・プロセス（コール・リストやメール・リストなど）に接続し、処理やオファーをセグメントに割り当てます。作成できるセグメントの数に制限はありません。

例えば、顧客の以前の購買履歴に基づいて、顧客を高価値、中価値、および低価値のセグメントに分割することができます。これらの各セグメントは、コンタクト・プロセスに接続されると、異なるオファーを受け取ることができます。

データは 2 つの方法でセグメント化することができます。すなわち、フィールドで個別の値を使用する方法、およびクエリーを使用してフィールドのデータをフィルター処理する方法です。データベース・テーブル・フィールドに加えて、ユーザー定義項目を使用してデータをセグメント化することができます。これにより、カスタムの階級付けを実行できます。

重要: セグメント・プロセスによって作成されるセグメントは、セグメントの作成プロセスで作成され、任意のセッションまたはキャンペーンで使用できるグローバルに永続的な戦略的セグメントと同じものではありません。

フィールドによるセグメント化

データベース・テーブルのフィールドによりデータをセグメント化する場合、そのフィールド内の個別の各値によって別個のセグメントが作成されます。このオプションは、フィールド内の値が、作成するセグメントに対応している場合に非常に便利です。

例えば、10 個の各地域の顧客に別々のオファーを割り当てるとします。ご使用の顧客データベースには、各顧客が属している地域を示す `regionID` という名前のフィールドが含まれています。`regionID` フィールドでセグメント化し、10 個の地域セグメントを作成します。

クエリーによるセグメント化

「クエリーで作成」オプションは、ユーザーが作成したクエリーの結果に基づいてデータをセグメント化します。このオプションは、必要なセグメントを作成するためにフィールド内のデータをフィルターに掛ける必要がある場合に非常に便利です。

例えば、過去 1 年間の顧客の購買履歴に基づいて、顧客を高価値 (\$500 超)、中価値 (\$250 から \$500)、および低価値 (\$250 未満) のセグメントに分割すると仮定します。ご使用の顧客データベースの `PurchaseHistory` フィールドには、各顧客の購買金額の合計が格納されています。別個のクエリーを使用して、それぞれのセグメントを作成し、`PurchaseHistory` フィールドでセグメントの条件を満たす値を持つレコードを選択します。

注: 未加工の SQL を使用してデータをセグメント化することもできます。

別のセグメント・プロセスへの入力としてのセグメントの使用

セグメントは、別のセグメント・プロセスへの入力セルとして使用することもできます。例えば、顧客を 6 つの年齢範囲にセグメント化するとします。データベースには、6 つの年齢範囲のいずれかを各顧客に割り当てる `AgeRange` という名前のフィールドが含まれています。`AgeRange` フィールドによってセグメント化し、6 つのセグメントを作成します。

その後、別のフィールドまたはクエリーによってさらに顧客を分割する別のセグメント・プロセスへの入力として、これらの 6 つのセグメントを使用することができます。

ます。例えば、データベースに PreferredChannel という名前のフィールドが含まれているとします。このフィールドは、各顧客の優先コンタクト・チャンネル (ダイレクト・メール、テレマーケティング、FAX、電子メール) を指定します。6 つの年齢範囲セグメントを入力として使用して、2 番目のセグメント・プロセスを作成し、PreferredChannel フィールドによってセグメント化することができます。6 つの年齢範囲セグメントの各セグメントが、さらに 4 つの優先チャンネル・セグメントにセグメント化され、合計で 24 個の出力セグメントが作成されます。

セグメント化の考慮事項

データをセグメント化する場合は、以下のオプションおよびガイドラインを検討してください。

- 『セグメント化方式の選択』
- 『セグメントを相互排他的にする』
- 『セグメント・サイズの制限』
- 65 ページの『ソース・セルの選択』

セグメント化方式の選択

場合によっては、フィールドまたはクエリーによってセグメント化したときに、同じ結果が得られることがあります。例えば、ご使用のデータベースの AcctType フィールドによって、顧客の口座が「標準 (Standard)」、「優先 (Preferred)」、および「プレミア (Premier)」の 3 つのレベルに分割されているとします。AcctType フィールドによるセグメント化によって、これらの口座タイプ用に 3 つのセグメントが作成されます。クエリーを使用しても同じ結果を得ることができますが、セグメントを作成するには、3 つの別個のクエリーを作成する必要があります。セグメント化するデータに基づいて、最も効率的な方法を判断してください。

セグメントを相互排他的にする

セグメントが相互に排他的になるように指定できます。すなわち、条件を満たす各レコードが 1 つのセグメントにのみ配置されることが保証されます。これにより、セグメントがオファーに割り当てられると、各顧客がオファーを 1 つのみ受け取ることが保証されます。

レコードは、ユーザーが定義した優先順位に基づいて、そのレコードが満たす基準を持つ最初のセグメントに配置されます。例えば、顧客が 1 および 3 のセグメントに適格であり、優先順位でセグメント 1 がセグメント 3 より前にある場合、その顧客はセグメント 1 にのみ出現します。

セグメント・サイズの制限

1 セグメントごとのレコード数のデフォルト・サイズは「無制限」です。例えば、フローチャートまたはプロセスのテスト実行を行う場合など、作成されるセグメントのサイズを制限することができます。

セグメント・サイズは任意の正整数に制限できます。指定するセグメント・サイズが、生成されるレコードの総数より小さい場合、セグメントはランダムに選択された適格なレコードで構成されます。

ソース・セルの選択

選択されたセルはすべて、同じオーディエンス・レベルで定義されていなければなりません。複数のソース・セルが選択されている場合、各ソース・セルで同じセグメント化が実行されます。

フィールドでセグメント・プロセスを構成するには

1. 「セグメント・プロセスの設定」ウィンドウの「セグメント」タブで、「入力」ドロップダウン・リストを使用して、プロセスへの入力を指定します。複数のソース・セルを使用するには、「複数セル」ボタンをクリックして、ダイアログ・ボックスからセルを選択します。
2. 「データ項目で作成」を選択し、ドロップダウン・リストを使用して、セグメントの作成に使用するフィールドを選択します。

「プロファイル」ウィンドウが開き、選択されたフィールドのプロファイルが自動的に開始されます。

3. プロファイルが完了するまで待ってから「OK」をクリックし、すべてのセグメントが適切に作成されたことを確認します。

セグメントのリストおよび「セグメント数」フィールドは、選択されたフィールドのプロファイル結果に基づいて更新されます。フィールドを最初に選択した後に任意の時点でそのフィールドを再プロファイルするには、「プロファイル」をクリックします。

4. 必要に応じて、残りの構成オプションを設定します。
5. 「OK」をクリックします。

プロセスが構成され、フローチャート内で使用可能な状態で表示されます。予期される結果をプロセスが返すかどうかを確認するために、プロセスをテストできます。

クエリーでセグメント・プロセスを構成するには

1. 「セグメント・プロセスの設定」ウィンドウの「セグメント」タブで、「入力」ドロップダウン・リストを使用して、プロセスへの入力を指定します。複数のソース・セルを使用するには、「複数セル」ボタンをクリックして、ダイアログ・ボックスからセルを選択します。
2. 「クエリーで作成」を選択します。
3. 作成するセグメントの数を決定し、「セグメント数」フィールドに数値を入力します。
4. セグメントごとにクエリーを構成するには、セグメントを選択し、編集をクリックして、「セグメントの編集」ウィンドウにアクセスします。詳しくは、68ページの『「新規セグメント」および「セグメントの編集」ダイアログ』を参照してください。
5. 必要に応じて、残りの構成オプションを設定します。
6. 「OK」をクリックします。

プロセスが構成され、フローチャート内で使用可能な状態で表示されます。予期される結果をプロセスが返すかどうかを確認するために、プロセスをテストできます。

セグメント・プロセスの設定: 「セグメント」タブ

次の表は、「セグメント・プロセスの設定」ウィンドウの「セグメント」タブのフィールド、ボタン、およびコントロールについて説明しています。

表9. 「セグメント」タブ

フィールド/コントロール	説明
入力	セグメント・プロセスへの入力を指定します。ドロップダウン・リストには、セグメント・プロセスに接続されたプロセスのすべての出力セルが含まれています。
「複数セル」ボタン	セグメント・プロセスへの入力として、複数のソース・セルの選択を許可します。
データ項目で作成	データのセグメント化に使用するフィールドを指定します。データは、選択されたフィールドに存在する個別の値を使用してセグメント化されます。フィールド内の個別の各値によって、別個のセグメントが作成されます。
「プロファイル」ボタン	「 プロファイル 」ウィンドウを開きます。このウィンドウでは、選択されたフィールド内のレコードの値および配布を計算します。フィールドでセグメント化する場合にのみアクティブです。
「ユーザー定義項目」ボタン	「 ユーザー定義項目の作成 」ウィンドウを開きます。フィールドでセグメント化する場合にのみアクティブです。
クエリーで作成	作成したクエリーに基づいてデータをセグメント化します。
セグメント数	作成するセグメントの数を指定します。クエリーでセグメント化する場合にのみアクティブです。デフォルトでは、「Segment1」、「Segment2」、および「Segment3」というデフォルト名を使用して 3 つのセグメントが作成されます。 フィールドでセグメント化する場合、「セグメント数」フィールドは、選択されたフィールドのプロファイル結果に基づいて更新されます。
データの重複を許可しない	セグメントを相互に排他的にするかどうかを指定します (すなわち、条件を満たす各レコードが 1 つのセグメントにのみ配置されることが保証されます)。
書き込みテーブルの作成	セグメントが出力セルごとに書き込みテーブルを作成すべきかどうかを指定します。このオプションを選択すると、Campaign は、セグメント全体で重複するターゲット・オーディエンスを追跡するために必要な情報を後のプロセスに提供できるようになります。 このチェック・ボックスを選択すると、「書き込み」タブのオプションが有効になります。 このチェック・ボックスは、「データの重複を許可しない」が選択されている場合は無効になります。

表9. 「セグメント」タブ (続き)

フィールド/コントロール	説明
セグメント名	すべてのセグメントを名前別にリストします。デフォルトでは、「Segment1」、「Segment2」、および「Segment3」というデフォルト名を使用して 3 つのセグメントが作成されます。 フィールドでセグメント化する場合、「セグメント名」は、選択されたフィールドのプロファイル結果に基づいて更新されます。例えば、「A」および「B」という 2 つの個別の値を持つ「Acct_Status」という名前のフィールドでセグメント化を行う場合、「Acct_Status_A」および「Acct_Status_B」という名前の 2 つのセグメントが作成されます。
最大サイズ	各セグメントで許可された最大レコード数。
サイズ	セグメントの条件を満たすレコードの数。プロセスが実行される前に、この数はデフォルトで出力セル内のレコードの総数に設定されます。
クエリー	このセグメントの条件を定義するクエリー。クエリーでセグメント化する場合にのみ表示されます。
1 つ上へ	選択されたセグメントを、処理順序内の 1 つ上の位置に移動します。セグメントは、テーブルにリストされている順に処理されます。
1 つ下へ	選択されたセグメントを、処理順序内の 1 つ下の位置に移動します。セグメントは、テーブルにリストされている順に処理されます。
「新規セグメント」ボタン	「新規セグメント」ウィンドウを開きます。クエリーでセグメント化する場合にのみアクティブです。
「編集」ボタン	選択されたセグメントを編集するために「セグメントの編集」ウィンドウを開きます。
削除	選択されたセグメントを削除します。セグメントが削除されると、「セグメント数」フィールドが自動的に更新されます。
0 件のセグメントは後続処理を行わない	このプロセスの下流のプロセスが、空のセグメントについて実行されないようにします。

セグメント・プロセスの設定: 「書き込み」タブ

「セグメント・プロセスの設定」ウィンドウの「書き込み」タブを使用して、セグメント・プロセスから指定する出力が、フローチャート内のメール・リスト・プロセスまたはコール・リスト・プロセスへの入力として利用できるようにします。次の表は、「書き込み」タブのフィールド、ボタン、およびコントロールについて説明しています。

表 10. 「書き込み」タブ

項目	説明
ターゲット・データ・ソース	このプロセスの出力が書き込まれる場所。 Campaign Server および接続先のその他の任意のデータ・ソースが「 ターゲット・データ・ソース 」ドロップダウン・リストから選択可能です。
選択項目	<p>入力データ・ソースに基づいて抽出可能なフィールドのリストで、フィールド名およびデータ型を含みます。</p> <p>入力ソースが eMessage のランディング・ページの場合、各フィールド名はランディング・ページの属性です。その属性に特殊文字またはスペースが含まれている場合は、有効なフィールド名に変換されます。すべてのランディング・ページ属性のデータ型は、テキストとしてリストされます。</p> <p>注: スキーマ・オブジェクト名は 30 文字までに制限されます。ご使用の属性名を 30 文字以下に制限して、抽出された出力の有効な列名を作成してください。</p>
書き込み項目	「選択項目」リストから抽出することを選択したフィールド。「項目名」はデフォルトで「書き込み項目」列のフィールド名に設定されます。
「プロファイル」ボタン	「プロファイル」ウィンドウを開きます。このウィンドウでは、選択されたフィールド内のレコードの値および配布を計算します。フィールド名が「 選択項目 」リストで選択されている場合にのみアクティブになります。
「ユーザー定義項目」ボタン	「ユーザー定義項目の作成」ウィンドウを開きます。
「詳細」ボタン	「詳細設定」ウィンドウを開きます。このウィンドウには、重複レコードをスキップし、Campaign が重複を識別する方法を指定するためのオプションが含まれています。

セグメント・プロセスの設定: 「全般」タブ

「セグメント・プロセスの設定」の「全般」タブでは、「プロセス名」、「出力セル」の名前、または「セル・コード」を変更したり、プロセスについての「説明」を入力したりできます。これらのオプションについては詳しくは、以下のトピックを参照してください。

- 173 ページの『セル名の変更』
- 174 ページの『セル名のリセット』
- 175 ページの『グリッド内のすべてのセルをコピーおよび貼り付けする方法』
- 176 ページの『セル・コードの変更』

「新規セグメント」および「セグメントの編集」ダイアログ

次の表は、「新規セグメント」および「セグメントの編集」ダイアログのフィールド、ボタン、およびコントロールについて説明しています。

注: 「新規セグメント」ダイアログは、クエリーによるセグメント化を行う場合にのみ利用できます。フィールドでセグメント化する場合は、「セグメントの編集」ダイアログの「名前」および「最大サイズ」フィールドのみ利用できます。

表 11. 「新規セグメント」および「セグメントの編集」ダイアログのコントロール

フィールド/コントロール	説明
名前	セグメントの名前。
最大サイズ	セグメントで許可された最大レコード数。
ソースの選択	クエリーのベースとなるデータ・ソースを指定します。
すべての <audience_level> ID を選択	「入力」ドロップダウン・リストにあるデータ・ソースの ID をすべて含めます。 <audience_level> は、ソース・セルのオーディエンス・レベルの名前です。
条件を指定して <audience_level> ID を選択	定義した基準に基づいて特定の ID のみ選択するクエリーを作成するための機能を利用できるようにします。 <audience_level> は、ソース・セルのオーディエンス・レベルの名前です。
「詳細設定」ボタン	「詳細設定」タブを開きます。このタブには以下のオプションがあります。 <ul style="list-style-type: none"> 未加工 SQL を使用する: 未加工の SQL クエリーを使用して、データをセグメント化します。 入力セルのクエリー・スコープを使用する: このセグメント・プロセスへのソース・セルがクエリーを使用する場合のみ使用可能です。ソース・セルのクエリーを現在の選択基準と結合 (「AND」を使用) させる場合に、このチェック・ボックスを選択します。
「ユーザー定義項目」ボタン	「ユーザー定義項目の作成」ウィンドウを開きます。
「クエリー」テキスト・ボックスおよびボタン	クエリー・テキスト・ボックスおよび関連するフィールドおよびボタンの使用について詳しくは、119 ページの『プロセスでのクエリーの作成』を参照してください。

サンプル

サンプル・プロセスを使用して、さまざまな処理、コントロール・グループ、またはモデリング用データのサブセットの 1 つ以上のセルを作成します。多種多様な構成がサンプリングで使用可能です。

サンプル・プロセスを構成するには

1. フローチャートの編集モードで、1 つ以上の構成済みプロセス (選択プロセスなど) が、「サンプル」プロセス・ボックスへの入力として接続されていることを確認します。
2. フローチャート・ワークスペースでサンプル・プロセスをダブルクリックします。

プロセス設定ダイアログが表示されます。

3. 「入力」ドロップダウン・リストを使用して、サンプリングするセルを選択します。リストには、サンプル・プロセスに接続されたプロセスのすべての出力セルが含まれています。複数のソース・セルを使用するには、「複数セル」オ

プションを選択します。複数のソース・セルが選択されている場合、それぞれのソース・セルで同じサンプリングが実行されます。

注: 選択されたセルはすべて、同じオーディエンス・レベルで定義されていなければなりません。

4. 「**サンプル数**」フィールドを使用して、入力セルごとに作成するサンプルの数を指定します。デフォルトでは、入力セルごとに3つのサンプルが作成され、デフォルト名の「Sample1」、「Sample2」、および「Sample3」が使用されます。
5. デフォルトのサンプル名を変更するには、「**項目名**」列でサンプルを選択してから、「**サンプルの編集**」セクションの「**セル名**」ボックスに新規名を入力します。文字、数字、およびスペースの任意の組み合わせを使用できます。ピリオド(.) またはスラッシュ(/ または ¥) は使用しないでください。

重要: サンプルの名前を変更する場合は、入力セルとしてこのサンプルを使用するすべての後続プロセスを更新する必要があります。サンプル名を変更すると、接続された後続のプロセスが構成解除される場合があります。通常、サンプル名の編集は、後続のプロセスを接続する前に行う必要があります。

6. 以下のいずれかの方法を使用して、サンプルのサイズを指定します。
 - **パーセント (%) でサイズを指定:** このオプションを選択した後、「**サンプルの編集**」セクションの「%」(パーセント)フィールドを使用して、「**項目名**」列で選択したサンプルに使用するレコードのパーセントを指定します。サンプルのサイズを制限する場合は、「**最大データ件数**」フィールドを使用します。デフォルトは「**無制限**」です。何らかの値を変更した後、他の任意のフィールドをクリックし、「**項目名**」のリストの変更を確認します。「**項目名**」列で別のサンプルを選択し、そのサンプル用のパーセントを調整するか、「**残りすべて**」チェック・ボックスを使用して、残りのすべてのレコードをそのサンプルに割り当てます。「**残りすべて**」は、1つの出力セルに対してのみ選択できます。
 - **データ数でサイズを指定:** このオプションを選択した後、「**最大データ件数**」フィールドを使用して、「**項目名**」列で選択したサンプル・グループに割り振るレコードの最大数を指定します。「**項目名**」列で次のサンプルを選択し、そのグループのレコードの最大数を指定するか、「**残りすべて**」チェック・ボックスを使用して、残りのすべてのレコードをそのサンプルに割り当てます。「**残りすべて**」は、1つの出力セルに対してのみ選択できます。
7. 「**項目名**」リストの各サンプルについて、「**サイズ**」が定義されているか、または「**残りすべて**」にチェック・マークが付いていることを確認します。
8. (オプション) 「**サンプル・サイズ計算**」をクリックして、キャンペーン結果を評価する際に、サンプル・サイズの統計的な重みの理解に役立つ計算器を使用します。エラー限度値を入力して、必要なサンプル・サイズを計算することにより、必要な正確性のレベルを指定することができます。また、サンプル・サイズを入力し、結果として生じるエラー限度値を計算することができます。報告される結果の信頼性レベルは95%です。
9. 「**サンプリング方法**」セクションで、以下のいずれかのオプションを使用して、サンプルの作成方法を指定します。
 - **ランダム・サンプル:** 統計的に有効なコントロール・グループまたはテスト・セットを作成する場合に、このオプションを使用します。このオプショ

ンは、指定されたシードに基づいて乱数発生ルーチンを使用して、サンプル・グループにレコードをランダムに割り当てます。シードについては、これらのステップの後半で説明しています。

- **データをソート順に各サンプルに配分:** このオプションは、最初のレコードを最初のサンプルに、2 番目のレコードを 2 番目のサンプルに配置するという方法で、指定されたサンプル数になるまでレコードを順番に配置します。このプロセスは、すべてのレコードがサンプル・グループに割り当てられるまで繰り返されます。このオプションを使用するには、「ソート条件」オプションを指定して、グループへのレコードのソート方法を決定する必要があります。「ソート条件」オプションについては、これらのステップの後半で説明しています。
 - **データをソート順に分割:** このオプションは、最初の N 件のレコードを最初のサンプルに、次のレコードのセットを 2 番目のサンプルに割り振るという方法で、レコードを順番に割り振ります。このオプションは、ソートされた何らかのフィールド (例えば、累積の購買額またはモデル・スコアなど) に基づくトップ十分位数 (またはその他の何らかのサイズ) をベースとしてグループを作成する場合に有用です。このオプションを使用するには、「ソート条件」オプションを指定して、グループへのレコードのソート方法を決定する必要があります。「ソート条件」オプションについては、これらのステップの後半で説明しています。
10. 「ランダム・サンプル」を選択した場合は、ほとんどの場合にデフォルトのシードを受け入れるだけ済みます。
- まれなケースとして、「選択」をクリックして、新規シード値をランダムに生成したり、「乱数種」フィールドに数値を入力することが必要になる場合があります。新規シード値を使用する必要がある場合の例は次のとおりです。
- 全く同じ数のレコードが同じシーケンスに存在し、同一のシード値を使用すると、レコードが毎回同じサンプルに作成される場合。
 - ランダムなサンプルにより、望ましくない結果となることが分かった場合 (例えば、すべての男性が 1 つのグループに割り振られ、すべての女性が別のグループに割り振られるなど)。
11. 「データをソート順に各サンプルに配分」または「データをソート順に分割」を選択した場合、レコードのソート方法を指定する必要があります。以下のとおり、ソート順序はレコードがサンプル・グループに割り振られる方法を決定します。
- a. ドロップダウン・リストから「ソート条件」フィールドを選択するか、「ユーザー定義項目」をクリックして、ユーザー定義項目を使用します。
 - b. 「昇順」を選択して、数値フィールドを昇順 (低から高へ) でソートするか、英字フィールドをアルファベット順にソートします。「降順」を選択すると、ソート順序が逆になります。
12. デフォルトの「プロセス名」および「出力セル名」を変更する場合は、「全般」タブをクリックします。デフォルトでは、出力セル名は、プロセス名、およびその後続のサンプル名と 1 桁の数字から構成されます。デフォルトの「セル・コード」を受け入れるか、「セル・コードを自動生成」ボックスのチェック・マークを外して、コードを手動で割り当てることができます。「説明」に、サンプル・プロセスの目的について明確な説明を入力します。

13. 「OK」をクリックします。

プロセスが構成され、フローチャートで使用可能になります。予期される結果をプロセスが返すかどうかを確認するために、プロセスの実行をテストできます。

サンプル・サイズ計算器について

Campaign には、キャンペーン結果を評価する際に、サンプル・サイズの統計的な重みの理解に役立つようにサンプル・サイズ計算器が用意されています。エラー限度値を入力して、必要なサンプル・サイズを計算することにより、必要な正確性のレベルを指定することができます。また、サンプル・サイズを入力し、結果として生じるエラー限度値を計算することができます。報告される結果の信頼性レベルは 95% です。

サンプル・サイズ計算器を使用するには

1. 「サンプル・プロセスの設定」ダイアログの「サンプル」タブで、「サンプル・サイズ計算」をクリックします。

「サンプル・サイズ計算」ウィンドウが表示されます。

2. 「予想レスポンス率」で、マーケティング・キャンペーンから予測される最小および最大のレスポンス率の推定を入力します。

これらの 2 つの値は、0 から 100 までの間のパーセント値でなければなりません。予想レスポンス率が低いほど、同レベルの正確性を実現するために、サンプル・サイズを大きくする必要があります。

3. 「モデルによる推定」で、モデリングの推定についての情報を入力します。
 - モデルを使用しない場合、「モデルなし」を選択します。
 - モデルを使用する場合、「モデル適応度」を選択してから、適切なモデル適応度のパーセントを入力します。これは、リフト曲線の下領域を表し、「モデル適応度」レポートで報告されます。
4. 特定のエラー限度値を達成するために必要なサンプル・サイズを計算するには、以下を実行します。
 - a. 「エラー限度値 (+ または -)」フィールドで、許容できるエラー限度値として 0 から 100 までのいずれかの値を入力します。
 - b. 「サンプル・サイズの計算」をクリックします。指定されたエラー限度値を達成するために必要な最小サンプル・サイズが「最小サンプル・サイズ」テキスト・ボックスに表示されます。
5. 特定のサンプル・サイズで予期されるエラー限度値を計算するには、以下を実行します。
 - a. 「最小サンプル・サイズ」テキスト・ボックスにサンプル・サイズを入力します。
 - b. 「エラー限度値の計算」をクリックします。

エラー限度値が「エラー限度値 (+ または -)」テキスト・ボックスに表示されます。

6. 作業が終了したら、「完了」をクリックします。

「サンプル・サイズ計算」ウィンドウが閉じます。

注: 計算されたサンプル・サイズをコピー・アンド・ペーストして、「サンプル・プロセスの設定」ダイアログで使用することができます。

オーディエンス

オーディエンス・レベルは、口座、顧客、世帯、製品、ビジネス部門など、使用するターゲット・エンティティを定義します。これらのレベルは、テーブル・マッピング・プロセス中にシステム管理者によって定義されます。

オーディエンス・プロセスをフローチャートで使用して、オーディエンス・レベル間を切り替えたり、オーディエンス・レベルによって ID をフィルターで除外したりします。このプロセスを使用して、すべての、いくつかの、または単一のエンティティを、別のレベルと関連したあるレベルで選択することができます。

例えば、オーディエンス・プロセスを使用して、以下の操作を行うことができます。

- 何らかのビジネス・ルールに基づいて、世帯ごとに 1 人の顧客を選択する (例えば、最も年上の男性、あるいは口座残高が最も多い人など)。
- 特定の顧客群に属するすべての口座を選択する。
- 特定の顧客群に属する、残高がマイナスの口座をすべて選択する。
- 当座預金口座を持っている人がいる世帯をすべて選択する。
- 指定された時間フレーム内に 3 回以上の購買を行った顧客を選択する。

注: オーディエンス・プロセスは定義された任意のテーブルから選択できるため、フローチャートの最上位プロセスとしてこのプロセスを使用して、データを最初に選択することもできます。

オーディエンス・レベル

オーディエンス・レベルは、口座、顧客、世帯、製品、またはビジネス部門など、キャンペーンのさまざまな見込みターゲットを表すために、Campaign 管理者によって定義されます。オーディエンス・レベルは、多くの場合 (ただし、常にそうとは限りません)、階層的に編成されます。以下は、顧客のマーケティング・データベースで一般的に見られる階層オーディエンス・レベルの例です。

- 世帯 > 顧客 > 口座
- 企業 > 部門 > 顧客 > 製品

組織で定義および使用できるオーディエンス・レベルの数に制限はありません。複数のオーディエンス・レベルを使用する場合 (例えば、顧客と世帯など)、オーディエンス・プロセスをどのように使用すればビジネス目標を最も効果的に達成できるかを理解することが重要です。

オーディエンス・レベルは、Campaign 管理者によって作成および保守されます。あるオーディエンス・レベルから別のオーディエンス・レベルに移動する場合、使用するすべてのオーディエンス・レベルが、同じテーブル内で定義されたキーを持っている必要があります。これにより、あるレベルから別のレベルに切り替えるための「ルックアップ」メカニズムが実現します。

オーディエンス・レベルはグローバルであり、マップされた各ベース・テーブルに添付されています。このため、フローチャートがロードされるたびに、オーディエンス・レベルはそのフローチャート内のテーブル・マッピングと共にロードされません。

Campaign 内のテーブルをマップする権限を持っている場合、新規テーブルを 1 つ以上の既存のオーディエンス・レベルにマップできますが、新規のオーディエンス・レベルを作成することはできません。適切な権限を持つユーザー（通常は、システム管理者）のみ、オーディエンス・レベルを作成することができます。

オーディエンス・プロセスでは、入力オーディエンス・レベルと出力オーディエンス・レベルを指定します。入力と出力のオーディエンス・レベルは、同じにものにする（例えば、顧客）ことも、異なるものにする（例えば、顧客および世帯）こともできます。オーディエンス・プロセスを使用して、同じオーディエンス・レベル内にとどまるか、オーディエンス・レベルを切り替えます。

ハウスホールディング

「ハウスホールディング」は、別のオーディエンス・レベルを使用して範囲設定することにより、現在のオーディエンス・レベルのメンバー数を削減することを表す一般用語です。ハウスホールディングの最も一般的な例の 1 つは、各世帯内でターゲットとする単一の個人を特定することです。以下のようなマーケティング・ビジネス・ルールに従って、世帯ごとに 1 人の個人を選択することができます。

- すべての口座内で金銭価値が最も高い口座を持つ個人
- 特定の製品カテゴリーにおける購買数が最も多い個人
- 在職期間が最も長い個人
- 世帯内の 18 歳以上の最も若い男性

オーディエンス・プロセスを使用して、オーディエンス・レベルを変更し、ユーザー指定の基準に従って ID をフィルターに掛けることができます。

レベルの切り替え

一部の複雑なキャンペーンでは、最終的なターゲット・エンティティのリストに到達するために異なるオーディエンス・レベルでの処理が必要になります。このため、あるオーディエンス・レベルで開始し、いくつかの計算を実行してその出力を取得してから、別のオーディエンス・レベルに移動して、他の計算を行うことが必要になる場合があります。

例えば、異なるレベルの複雑な抑制をサポートする必要があるとします。その結果、顧客と口座の間に 1 対多または多対多の関係があるデータ・モデルで、マーケティング・アナリストは以下を実行するキャンペーンを構築することになります。

- 一定の条件を満たす顧客のすべての口座の除去（例えば、債務不履行の口座の除去）。
- 一定の条件を満たす特定の口座の除去（例えば、収益性が低いすべての口座の除去）。

この例では、キャンペーンは顧客レベルで開始して顧客レベルの抑制を実行し（債務不履行の口座の抑制）、口座レベルに切り替えて口座レベルの抑制を適用し（収益性が低い口座の抑制）、その後、顧客レベルに再度切り替えて、最終的なコンタクト情報を取得します。

オーディエンス・プロセスの構成

オーディエンス・プロセスを使用するには、複数のオーディエンス・レベルが定義されている複数のテーブルで作業しなければなりません。これらのレベルは、単一のテーブルで定義され、あるレベルから別のレベルに「変換」するための関係を提供します。

- 1つのキーがテーブルの「プライマリー」キーまたは「デフォルト」キーとして定義されています。（このデフォルト・キーは、このデータ・ソースで最も頻繁に使用されるオーディエンスを表します。）
- 他のキーは、オーディエンス・レベルの切り替えに使用可能な「代替」キーです。

オーディエンス・レベルを切り替えると、Campaign は、同じオーディエンス・レベルで定義されているデフォルト・キーを持つテーブルのみを表示します。異なるオーディエンス・レベルで定期的に作業する場合、Campaign 内で同じテーブルを複数回マップし、マップするたびに異なるプライマリー/デフォルト・キーを使用することが必要になる場合があります。テーブルに関連付けられたデフォルト・レベルは、テーブル・マッピング・プロセス中に指定されます。テーブルのマッピングについて詳しくは、「Campaign 管理者ガイド」を参照してください。

「オーディエンス・プロセスの設定」ダイアログで使用可能なオプションは、以下に示すような、ユーザーが行うさまざまな選択に応じて異なります。

- 入力と出力のオーディエンス・レベルを同じレベルにするか、違うレベルにするか。
- オーディエンス・レベルの値がこれらのテーブルで正規化されるかどうか。
- 選択されたテーブルに対して定義された複数のオーディエンス・レベルがあるかどうか。

このため、以下のセクションで説明するすべてのオプションが、入力と出力のテーブル選択のすべてのペアで使用可能とは限りません。

オーディエンス・プロセスを構成するには

1. キャンペーン内で、編集するフローチャートを開きます。
2. パレットでオーディエンス・プロセスをクリックしてから、ワークスペースをクリックして、プロセスをフローチャートに追加します。
3. オーディエンス・プロセスが、入力としてそのオーディエンス・プロセスによって使用される出力セルを持つ 1 つ以上の構成済みプロセス（選択プロセスやマージ・プロセスなど）に接続されていることを確認します。
4. フローチャート・ワークスペースでオーディエンス・プロセスをダブルクリックします。

プロセス設定ダイアログが表示されます。

5. 「ソース」タブで、「入力」ドロップダウン・リストから入力データ・ソースを選択します。1 つ以上のプロセスがオーディエンス・プロセスに接続されている場合、それらの出力セルもリストに表示されます。

この入力に対応するオーディエンス・レベルが、「入力」フィールドの横に表示されます。オーディエンス・プロセスへの入力がない場合は、オーディエンス・レベルは「選択されていません」と表示されます。

選択オプションも入力オーディエンス・レベルを反映します。例えば、オーディエンス・レベルが「顧客」の入力を選択した場合、「選択」オプションは、「すべてのエントリー」、「数個のエントリー」、および「1 エントリー (顧客単位)」に変わります。

6. 「オーディエンスの選択」ドロップダウン・リストから出力オーディエンスを選択します。リストには、入力データ・ソースと同じオーディエンス・レベルで定義されたキーを含むテーブルに対して定義されたオーディエンス・レベルのみ表示されます。テーブルに複数のレベルが定義されている場合、各レベルが「オーディエンスの選択」リストのエントリーとして使用可能です。

注: 必要なオーディエンス・レベルが表示されない場合、テーブルの再マップが必要になる場合があります。

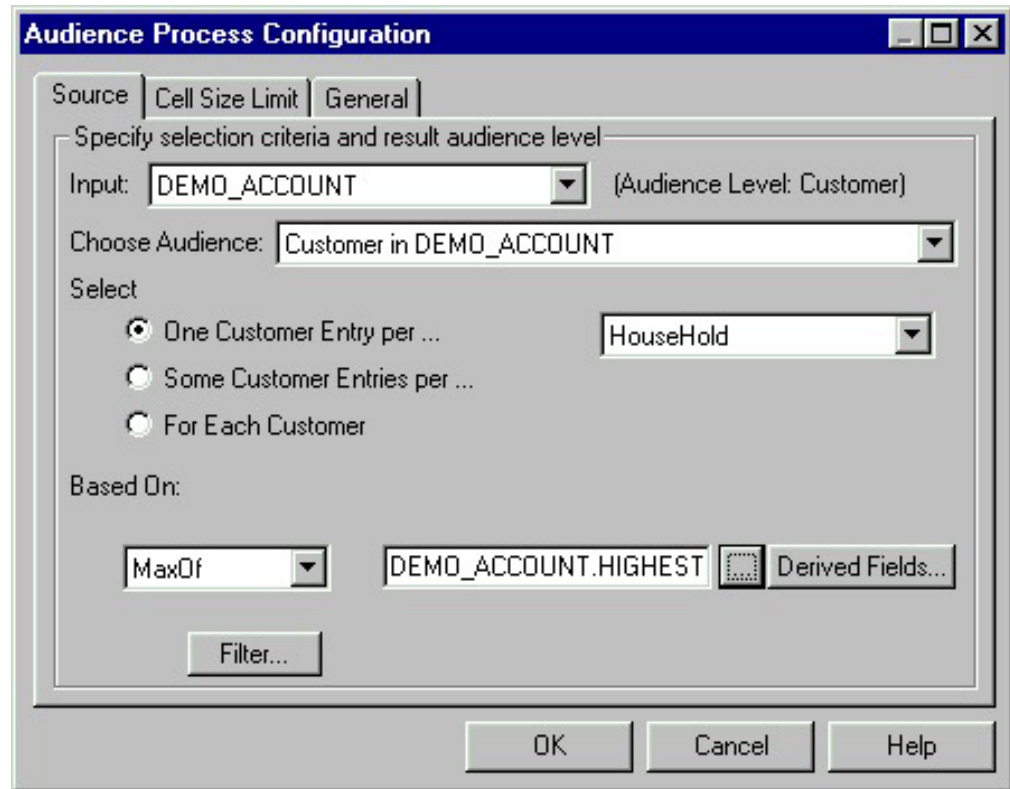
「選択」オプションは現在、入力と出力の両方のオーディエンス・レベルを反映しています。

例えば、入力のオーディエンス・レベルが「世帯」であるときに、出力のオーディエンス・レベルに「個人」を選択すると、「選択」オプションには、「すべての個別 ID エントリー」、「数個の個別 ID エントリー」、「1 つの個別 ID エントリー (世帯 ID 単位)」というラベルが付けられ、あるオーディエンス・レベルから別のオーディエンス・レベルに切り替えるときの ID の選択方法を指定できます。

7. 「選択」および「フィルター」オプションを使用して、レコードが選択される方法を指定します。これらのオプションは、すべての ID を選択するか (この場合は、フィルター・オプションはありません)、レベルを切り替えるか、または同じレベルにとどまるかによって異なります。オーディエンス・レベルを切り替えるかどうかに基づいて選択およびフィルタリングを行う方法については、以下のセクションを参照してください。
 - 入力と出力で同じオーディエンス・レベルを使用する
 - 入力と出力で異なるオーディエンス・レベルを使用する
8. プロセスによって生成される ID の数を制限する場合は、「セル・サイズの制限」タブをクリックします。
9. 「全般」タブをクリックして、「プロセス名」、およびそのプロセスの目的を表す「説明」(例えば、「このボックスは世帯ごとに 1 人の個人にコンタクトする」など)を入力します。また、「出力セル」の名前または「セル・コード」を変更することもできます。
10. 「OK」をクリックします。プロセスが構成され、フローチャート内で使用可能になります。予期される結果をプロセスが返すかどうかを確認するために、プロセスの実行をテストできます。

例: オーディエンス・プロセス

次の図は、構成されたオーディエンス・プロセスを示しています。



- 選択されている入力オーディエンス・レベルは「顧客」です。これは、DEMO_ACCOUNT テーブルのデフォルトのオーディエンス・レベルです (このオーディエンス・レベルは、「入力」フィールドの右側に表示されます)。
- 出力オーディエンス・レベルも同じく「顧客」で、DEMO_ACCOUNT テーブルに定義されています。DEMO_ACCOUNT テーブルには、他にも「ランチ」および「世帯」という 2 つのオーディエンス・レベルが定義されています。
- このプロセスは、HIGHEST_ACC_IND フィールドの最大値に基づいて、「世帯ごとの顧客エントリー (Customer Entry per Household)」を 1 つ選択するように構成されています。

例: レコードのフィルター処理

カウントまたは統計関数 (「最大値選択」、「中央値選択」、「最小値選択」、または「指定なし」) に基づいて ID を選択するようにオーディエンス・プロセスを構成すると、「フィルター」ボタンが使用可能になります。「フィルター」をクリックすると、「選択条件の指定」ウィンドウが表示されます。このウィンドウでは、「基準」計算で使用するレコードを指定するためのクエリー式を入力できます。

注: フィルター基準は、「基準」計算が実行される前に適用されるため、レコードを計算の対象から外すことができます。

例えば、操作が実行される日付範囲を制約する必要があるとします。過去 1 年間の購買トランザクションのみを使用するには、フィルターのクエリー式を次のように入力します。

```
CURRENT_JULIAN() - DATE(PURCH_DATE) <= 365
```

これにより、「金額」フィールドの合計を選択する「基準」計算を実行すると、過去 1 年以内のトランザクションからの金額のみが合計されます。

入力と出力で同じオーディエンス・レベルを使用する

同一のオーディエンス・レベルが「オーディエンスの選択」リストと「入力」リストで選択されている場合、「選択」オプションを使用して、以下の操作を実行できます。

- 『<異なるオーディエンス> ごとに <入力/出力オーディエンス> エントリーを 1 件選択するには』
- 80 ページの『<異なるオーディエンス> ごとに <オーディエンス> レコードを複数件選択するには』
- 80 ページの『所定のオーディエンス・レベルのエントリーごとにエントリーを選択するには』

「選択」オプションは、入力および出力の選択されたオーディエンス・レベルの関係に応じて異なります。意味のないオプションは無効になっています。

注: Campaign では、選択されたオーディエンス・レベルの名前が「選択」オプションのラベルに含まれています。例えば、入力オーディエンス・レベルが「顧客」の場合、「1 エントリーずつ」オプションは「1 顧客エントリーずつ」のように表示されます。以下のセクションでは、オプション・テキストで動的に変化するこの部分は、必要に応じて <入力/出力オーディエンス> のように示されています。

「選択」オプションには、以下のものがあります。

表 12. 「オーディエンス・プロセスの設定」の「選択」オプション

方式	説明	例
1 つずつ (One Per)	別のオーディエンス・レベルによって範囲指定される、入力と出力のオーディエンス・レベルの 1 つのメンバー	世帯ごとに 1 人の顧客
1 つにつき複数 (Some Per)	別のオーディエンス・レベルによって範囲指定される、入力と出力のオーディエンス・レベルの複数のメンバー	世帯内で購買数が平均を超えているすべての顧客
個別 (For Each)	選択されたオーディエンス・レベルのメンバーの数が一定の条件を満たしている場合にメンバーを選択します	アカウント数 > 1、購買数 > 3

<異なるオーディエンス> ごとに <入力/出力オーディエンス> エントリーを 1 件選択するには

入力と出力のオーディエンス・レベルは同じであるが、出力の範囲設定に異なるオーディエンス・レベルが使用されている場合に、このオプションを選択します。例えば、各世帯内で最も古い口座を持つ顧客を 1 人選択することができます。(入力

オーディエンス・レベルと出力オーディエンス・レベルが両方とも「顧客」であり、「世帯」レベルで範囲設定し、MinOf(BaseInfo.AcctStartDt) を使用して選択を行います。)

単一のエンティティが選択される方法を示すビジネス・ルール (例えば、何らかのフィールドの最小値/最大値/中央値など) を指定するか、「指定なし」 (この場合、フィールド選択は使用できません) を選択します。

1. 「入力」に入力ソースを選択し、「オーディエンス」プロセスの出力オーディエンスに同一のオーディエンス・レベルを選択します。

関連する「選択」オプションが使用可能になります。

2. 「1 エントリーずつ」オプションを選択します。

ドロップダウン・リストが、選択されたオプションの隣に表示されます。

3. ドロップダウン・リストからオーディエンス・レベルを選択します。

定義済みの代替オーディエンス・レベルがすべて (入力オーディエンス以外) リストに表示されます。

4. 使用する値を「選択ルール」ドロップダウン・リストから選択します。

- 指定なし: 「選択ルール」の値を選択する必要がなくなります
- 最大値選択: 選択されたフィールドの最大値を返します
- 中央値選択: 選択されたフィールドの中央値を返します
- 最小値選択: 選択されたフィールドの最小値を返します

これらの各関数は、入力オーディエンス・レベルからメンバーを 1 つだけ返します。複数のエントリーが、最大値、最小値、または中央値に関連している場合、最初に検出されたエントリーが返されます。

5. 「指定なし」以外の「選択ルール」基準を選択した場合、関数が動作するフィールドを選択します。このドロップダウン・リストには、「オーディエンスの選択」フィールドで選択されたテーブル、およびマップされたあらゆるディメンション・テーブルのすべてのフィールドが含まれています。「+」記号をクリックして、テーブルを拡張します。作成されたユーザー定義項目が下部にリストされます。

例えば、口座残高が最も多い口座保有者を各世帯から選択するには、「選択ルール」基準に「最大値選択」を選択し、テーブル・フィールドのリストから Acct_Balance を選択します。

「ユーザー定義項目」をクリックして、ユーザー定義項目を作成または選択することもできます。

6. (オプション) 選択基準として件数を選択した場合、「フィルター」ボタンが使用可能になります。

「フィルター」機能を使用して、「選択ルール」の計算に使用可能な ID の数を減らします。例えば、過去 6 カ月間の平均口座残高に基づいて顧客を選択する場合、選択を実行する前に、口座が非アクティブなすべての顧客をフィルターで除外することができます。

「選択ルール」計算を実行する前にレコードをフィルターに掛けるには、「フィルター」をクリックします。「選択条件の指定」ウィンドウが表示されます。

「選択ルール」計算で使用するレコードを指定するためのクエリー式を入力できます。フィルター基準は、「選択ルール」計算を実行する前に適用されるため、レコードを計算の対象から外すことができます。

7. 「OK」をクリックし、クエリーを保存して、「選択条件の指定」ウィンドウを閉じます。
8. 残りのタブのフィールドに入力し、プロセスの構成を続行します。

<異なるオーディエンス> ごとに <オーディエンス> レコードを複数件選択するには

この選択は、オーディエンスごとに複数のエントリーがあることを示しています。この場合、入力と出力のオーディエンス・レベルは同じですが、出力の範囲設定に異なるオーディエンス・レベルが使用されています。このオプションは、例えば、各世帯内で \$100 を超える購入を行った顧客をすべて選択する場合に選択します (入力オーディエンス・レベルと出力オーディエンス・レベルが両方とも「顧客」であり、「世帯」レベルで範囲設定し、Maximum Purchase Value>\$100 を使用)。

「選択ルール」基準は、クエリーの作成に加えて、機能的に同等な GROUPBY マクロ関数を実行できるようにするキーワードもサポートしています。

1. 「入力」に入力ソースを選択し、「オーディエンス」プロセスの出力オーディエンスに同一のオーディエンス・レベルを選択します。関連する「選択」オプションが使用可能になります。
2. 「数エントリーずつ...」オプションを選択します。ドロップダウン・リストが、選択されたオプションの隣に表示されます。
3. ドロップダウン・リストからオーディエンス・レベルを選択します。定義済みの代替オーディエンス・レベルがすべて (入力オーディエンス以外) リストに表示されます。
4. 「選択ルール」フィールドをクリックして、クエリーを入力します。「選択条件の指定」ウィンドウが開きます。
5. 有効なクエリー式を入力または作成してから、「OK」をクリックしてそれを保存し、「選択条件の指定」ウィンドウを閉じます。
6. 残りのタブのフィールドに入力し、プロセスの構成を続行します。

所定のオーディエンス・レベルのエントリーごとにエントリーを選択するには

この選択は、複数のオーディエンス・レベルからの複数の選択があることを示しています。選択されたオーディエンス・レベルのメンバーの数が、一定の条件を満たしている場合に (例えば、アカウント数 > 1 または 購買数 > 3)、このオプションを選択します。

注: このオプションは、入力オーディエンス・レベルが正規化されていない (すなわち、レコード ID が、選択された「レベルの選択 (Choose Level)」テーブルで固

有ではない) 場合にのみ使用可能で、入力と出力のレベルは同一です。これは、出力オーディエンス・テーブルに代替キーが定義されていない場合に使用可能な唯一のオプションです。

1. 「入力」に入力ソースを選択し、「オーディエンス」プロセスの出力オーディエンスに同一のオーディエンス・レベルを選択します。

関連する「選択」オプションが使用可能になります。

2. 「個別 (For Each)」オプションを選択します。

注: このオプションは、入力オーディエンス・レベルが正規化されていない (すなわち、レコード ID が、選択された「レベルの選択 (Choose Level)」テーブルで固有ではない) 場合にのみ使用可能です。

ドロップダウン・リストが、選択されたオプションの隣に表示されます。

3. 「選択ルール」を選択します。

「オーディエンスの選択」で選択したテーブル (すなわち、出力オーディエンス) が正規化されていない場合、重複する項目が結果に含まれている場合があります。重複が発生しないように、レコードを選択するときに Campaign で使用するための「選択ルール」方式を使用できます。(例えば、結果に同じ世帯内の複数の個人が含まれている場合、「選択ルール」を使用して、この機能で構成した基準に基づいて、その世帯から個人を 1 人だけ選択することができます。)

「件数」または「条件」のいずれかの「選択ルール」方式を選択する必要があります。

- 「選択ルール」で使用する「件数」を指定する場合は、以下のとおりです。

このオプションを使用すると、<入力オーディエンス・レベル> ID を選択できます。この場合、<入力オーディエンス・レベル> ID の出現数は指定された条件を満たしています。

異なる関係 (<, <=, >, >=, =) 間を切り替えるには、必要な関係が表示されるまで操作ボタンを繰り返しクリックします。

-- または --

- 「選択ルール」で使用する「条件」を指定する場合は、以下のとおりです。

「条件」の右側のテキスト・ボックスをクリックします。

「選択条件の指定」ウィンドウが表示されます。

有効なクエリー式を入力または作成してから、「OK」をクリックしてそのエントリーを保存し、「選択条件の指定」ウィンドウを閉じます。

4. (オプション) 選択基準として件数を選択した場合、「フィルター」が使用可能になります。

「フィルター」機能を使用して、「選択ルール」の計算に使用可能な ID の数を減らします。例えば、過去 6 カ月間の平均口座残高に基づいて顧客 ID を選択する場合、選択を実行する前に、口座が非アクティブなすべての顧客をフィルターで除外することができます。

「選択ルール」計算を実行する前にレコードをフィルターに掛けるには、「フィルター」をクリックします。「選択条件の指定」ウィンドウが表示されます。

「選択ルール」計算で使用するレコードを指定するためのクエリー式を入力できます。フィルター基準は、「選択ルール」計算を実行する前に適用されるため、レコードを計算の対象から外すことができます。

5. 「OK」をクリックし、クエリーを保存して、「選択条件の指定」ウィンドウを閉じます。
6. 残りのタブのフィールドに入力し、プロセスの構成を続行します。

入力と出力で異なるオーディエンス・レベルを使用する

入力と出力で異なるオーディエンスを「入力」リストと「オーディエンスの選択」リストで選択した場合、「選択」オプションを使用して、以下の操作を実行できます。

- 『すべての <出力オーディエンス・レベル> エントリーを選択するには』
- 83 ページの『数個の <異なる出力オーディエンス・レベル> エントリーを選択するには』
- 83 ページの『<異なる入力オーディエンス> ごとに <出力オーディエンス> を 1 件選択するには』

注: Campaign では、選択されたオーディエンス・レベルの名前が「選択」オプションのラベルに含まれています。例えば、入力オーディエンス・レベルが「顧客」の場合、「1 エントリーずつ」オプションは「1 顧客エントリーずつ」のように表示されます。以下のセクションでは、オプション・テキストで動的に変化するこの部分は、必要に応じて <入力/出力オーディエンス> のように示されています。

「選択」オプションには、以下のものがあります。

表 13. 「オーディエンス・プロセスの設定」の「選択」オプション (異なる入出力)

方式	説明	例
すべて	別のオーディエンス・レベルによって範囲指定される、入力オーディエンス・レベルのすべてのメンバーを選択します	世帯ごとにすべての顧客
数個	指定された条件を満たす ID のみを保持して、出力オーディエンス・レベルの数個のメンバーを選択します	世帯内の 18 歳以上のすべての顧客
1 つずつ (One Per)	入力オーディエンス・レコードごとに出力オーディエンス・レコードを 1 つだけ選択します	世帯ごとに 1 人の顧客

すべての <出力オーディエンス・レベル> エントリーを選択するには

フィルター処理を実行せずに出力オーディエンス・レベルに切り替えるには、このオプションを選択します (例えば、世帯内のすべての顧客、または顧客に属するすべての口座を選択する場合など)。これにより、入力 ID に関連付けられたすべての出力オーディエンス・レベル・エントリーを持つ出力セルが作成されます。このオプションは、選択またはフィルター基準を適用せずに、オーディエンス・レベルを切り替えます。

プライマリー・オーディエンス・レベルから別のオーディエンス・レベルに変更する場合、後続のプロセスではユーザー定義項目は使用できなくなります。

1. 「入力」に入力ソースを選択し、「オーディエンスの選択」に別の出力オーディエンスを選択します。

「選択」オプションが使用可能になります。

2. 「すべての <出力オーディエンス・レベル> エントリー」を選択します。
3. 「OK」をクリックして、「オーディエンス・プロセスの設定」ダイアログを閉じ、構成を保存します。

数個の <異なる出力オーディエンス・レベル> エントリーを選択するには

指定された条件を満たす ID のみを保持して、所定の入力オーディエンス・レベルから異なる出力オーディエンス・レベルに切り替える場合に、このオプションを使用します。例えば、世帯内の 18 歳以上のすべての顧客を選択したり、残高がプラスの顧客の口座をすべて選択したりすることができます。

「選択ルール」基準を使用して、選択した出力オーディエンス・レベルのエントリーを制限するクエリー式を入力することができます。

1. 「入力」に入力ソースを選択し、「オーディエンスの選択」に別の出力オーディエンスを選択します。

「選択」オプションが使用可能になります。

2. 「数個の <出力オーディエンス・レベル> エントリー」をクリックして選択します。

「選択ルール」フィールドが使用可能になります。

3. 「選択ルール」フィールドをクリックして、クエリーを入力します。

「選択条件の指定」ウィンドウが表示されます。

4. 有効なクエリー式を入力または作成してから、「OK」をクリックしてそのクエリーを保存し、「選択条件の指定」ウィンドウを閉じます。
5. 「OK」をクリックして、「オーディエンス・プロセスの設定」ダイアログを閉じ、各エントリーを保存します。

<異なる入力オーディエンス> ごとに <出力オーディエンス> を 1 件選択するには

入力オーディエンス・レコードごとに出力オーディエンス・レコードを 1 つだけ選択する (例えば、顧客ごとに 1 つの電子メール・アドレスを選択するなど) 場合に、このオプションを選択します。単一のエンティティを選択する方法を示すビジネス・ルール (何らかのフィールドの最小値/最大値/中央値など) を指定するか、「指定なし」 (この場合、フィールド選択は使用できません) を選択する必要があります。

このオプションは、入力オーディエンス・レベルが正規化されていない (すなわち、レコード ID が、選択された「レベルの選択 (Choose Level)」テーブルで固有ではない) 場合にのみ使用可能です。

「**選択ルール**」基準は、クエリーの作成に加えて、機能的に同等な GROUPBY マクロ関数を実行できるようにするキーワードもサポートしています。

1. 「**入力**」に入カソースを選択し、オーディエンス・プロセスに出力オーディエンスを選択します。

「**選択**」オプションが使用可能になります。

2. 「<入力オーディエンス・レベル> ごとに <出力オーディエンス・レベル> を **1件選択**」を選択します。
3. 「**選択ルール**」ドロップダウン・リストから値を選択します。

(「**指定なし**」を選択すると、右側のドロップダウン・リストを使用したフィールド選択は非アクティブになります。この選択を行う場合は、ステップ 5 までスキップしてください。)

4. 「**選択ルール**」関数が関連する次のドロップダウン・リストでフィールドを選択します。
 - a. 「**選択ルール**」テキスト・ボックスをクリックします。

「フィールドの選択 (Select Field)」ウィンドウが表示されます。「**オーディエンスの選択**」ドロップダウン・リストで選択したテーブル、およびマップされたあらゆるディメンション・テーブルのすべてのフィールドが表示されます。

「+」記号をクリックすると、テーブルを拡張できます。作成されたユーザー定義項目が下部にリストされます。

- b. フィールドを選択し、「**OK**」をクリックします。
 - c. (オプション) 「**ユーザー定義項目**」をクリックして、ユーザー定義項目を作成します。
5. (オプション) 「**選択ルール**」計算を実行する前にレコードをフィルターに掛けるには、「**フィルター**」を使用します。
 6. 「**OK**」をクリックして、「オーディエンス・プロセスの設定」ダイアログを閉じ、各エントリーを保存します。

抽出

抽出プロセスにより、あるテーブルからフィールドを選択し、以降の処理で使用するために別のテーブルにそれらのフィールドを書き出すことができます。これは、以降の操作のために大容量のデータを扱いやすいサイズに削減するよう設計されており、パフォーマンスの大幅な改善を図ることができます。

抽出プロセスは、セル (例えば、抽出プロセスが「**選択**」プロセスに接続されている場合)、単一テーブル、戦略的セグメント、最適化リスト (Optimize のみ)、または eMessage ランディング・ページ (eMessage のみ) から入力を取得できます。入力として戦略的セグメントを選択した場合、フィールドを抽出するには、事前にそのセグメントをテーブルに結合しておく必要があります。

複数の抽出プロセスを連続して使用する場合は、最後の抽出プロセスにあるフィールドのみが書き出されます。

複数の抽出プロセスを並行して (すなわち、同じフローチャート内の異なるブランチで) 使用する場合、それらのプロセスは、以下に示すように永続的なユーザー定義項目と同じ方法で動作します。

- 抽出されたフィールドは着信セルに添付されます
- 抽出されたフィールドは、そのプロセス内のクエリー実行より前に計算されます
- 以降のプロセスでは抽出された複数のフィールドが使用可能です
- 抽出されたフィールドがコンタクト・プロセスに送信される場合は、次のようになります。
 - 抽出されたフィールドがセルに対して定義されていない場合、その値は NULL です
 - 単一の ID が複数のセルに存在する場合、セルごとに 1 つの行が出力となります
- 抽出されたフィールドがセグメント・プロセスまたは決定プロセスに送信される場合、抽出されたフィールドは、クエリーによるセグメント化で使用できるように、選択されたすべての入力セルに存在している必要があります。

抽出されたテーブル

データは、Campaign サーバー上のバイナリー・ファイル、またはデータマート内の **UAC_EX** 接頭部が付いたテーブルとして抽出されます。

一時テーブルとは異なり、抽出されたテーブルは、フローチャートの実行の終わりに削除されません。抽出されたテーブルは、ユーザーがそのテーブルで操作を実行する (例えば、そのフィールドのプロファイルを作成するなど) ために継続してアクセスできるように、存続している必要があります。

抽出されたテーブルは、それに関連する抽出プロセス、フローチャート、キャンペーン、またはセッションをユーザーが削除するときのみ削除されます。

注: データマート内のスペースを節約するために、システム管理者は **UAC_EX** 接頭部が付いたテーブルを定期的に削除することができます。ただし、これらのテーブルが削除される場合、それらのフローチャートを再実行するか、存在しなくなったテーブルでフィールドのプロファイル作成を試みる前に、それらの影響を受ける抽出プロセスをまず再実行する必要があることに注意してください。再実行しない場合、Campaign によって、「テーブルが見つかりません」というエラーが生成されます。

例: トランザクション・データの抽出

滞納歴のないすべての顧客 (顧客ベースの約 90%) を得るために、過去 3 カ月の購買トランザクションに基づく選択および計算を実行するキャンペーンを設計し、4 GB のデータが必要になると仮定します。

Campaign でこれらの顧客用の一時テーブルを作成した場合でも、例えば、GROUPBY マクロを実行するために、そのテーブルを購買トランザクション・テーブルに再結合することにより、4 GB の行の約 90% を取り出す作業 (さらに、過去 3 カ月のトランザクション以外のすべてのトランザクションを廃棄する作業) が必要になります。

その代わりに、抽出プロセスを構成し（購買トランザクション・レベルに配置します）、過去 3 カ月以内のすべてのトランザクションを取り出して、それらをデータベースのテーブルに置き、その後、複数の GROUPBY マクロおよびその他の計算（例えば、最小/最大、平均）をそのテーブルに対して実行することができます。

eMessage ランディング・ページからデータを抽出する際の前提条件

eMessage ランディング・ページからの入力を受け入れるように抽出プロセスを構成するには、以下の前提条件が満たされている必要があります。

- eMessage をインストール、実行、および使用可能にする必要があります。
- eMessage ランディング・ページが適切に構成されている必要があります。
- メール配信を実行して、メール受信者からのレスポンスを受信する必要があります。

eMessage ランディング・ページについて詳しくは、「eMessage ユーザー・ガイド」を参照してください。

抽出プロセスの構成

抽出プロセスを構成する手順は、以下のどの入力ソースを選択するかによって異なります。

- 『データをセル、単一テーブル、または戦略的セグメントから抽出するには』
- 88 ページの『eMessage ランディング・ページからのデータの抽出』
- 最適化されたリスト（「*Optimize User's Guide*」を参照）

データをセル、単一テーブル、または戦略的セグメントから抽出するには

1. キャンペーン内で、編集するフローチャートを開きます。
2. フローチャート・ワークスペースで抽出プロセスをダブルクリックします。
3. パレットで抽出プロセスをクリックしてから、ワークスペースをクリックして、プロセスをフローチャートに追加します。

プロセス設定ダイアログが表示されます。

4. 「ソース」タブの「入力」リストから、入力セル、単一のテーブル、または戦略的セグメントを選択します。戦略的セグメントを選択した場合、「ソースの選択」リストからテーブルを選択することにより、そのセグメントを任意のテーブルに関連付けます。
5. 以下のように、入力として使用するレコードを指定します。
 - **全データ選択:** 入力データ・ソースにすべてのレコードを含めます。
 - **条件を指定してデータ選択:** クエリーを使用して定義した条件に基づいて、レコードを選択します。
6. 「条件を指定してデータ選択」を選択した場合、以下のいずれかの方法を使用してクエリーを作成します。

- **ポイント & クリック:** 「フィールド名」、「演算子」、「値」、および「AND/OR」列のセル内をクリックし、クエリーを作成するための値を選択します。これは、クエリーを作成する最も簡単な方法で、構文エラーの回避にも役立ちます。
- **SQL 入力:** この方法を使用して未加工の SQL を作成するか、提供されたマクロを使用します。「SQL 入力」内の「入力サポート」を使用して、論理演算子およびストリング関数を含む IBM Unica マクロを選択できます。

「選択項目」リストから、フィールドを選択することができます (IBM Unica Campaign 定義項目とユーザー定義項目を含む)。詳しくは、119 ページの『プロセスでのクエリーの作成』を参照してください。

注: Campaign 定義項目と同じ名前を持つテーブル・フィールドがクエリーに含まれている場合、構文 <table_name>.<field_name> を使用してフィールド名を修飾する必要があります。

7. 「書き込み」タブの「ターゲット・データ・ソース」フィールドを使用して、以下のように出力場所を選択します。
 - 2 進数形式でデータを保管するには、「**IBM Unica Campaign サーバー**」を選択します。
 - UAC_EX 接頭部が付いた固有の名前のテーブルにデータを保管するには、使用可能なデータベースを選択します。
8. 「選択項目」のリストからフィールドを選択して「書き込み項目」リストに追加します。フィールドの削除やフィールドの順序の変更を行う場合は、画面上の各コントロールを使用します。「書き込み」タブのフィールドについて詳しくは、89 ページの『「書き込み」タブのリファレンス』を参照してください。
9. 以下のオプション・タスクを実行します。
 - 選択したフィールドの値のリストをプレビューするには、「**プロファイル**」をクリックします。128 ページの『項目のプロファイル』を参照してください。
 - 「選択項目」のリストに変数を作成するには、「**ユーザー定義項目**」をクリックします。211 ページの『ユーザー定義項目について』を参照してください。
 - 重複 ID を出力から除外するには、「**詳細**」をクリックします。137 ページの『プロセス出力での重複 ID の除外』を参照してください。
10. オプションで「**セル・サイズの制限**」タブを使用して、プロセスで生成される ID の数を制限します。 See 169 ページの『出力セル・サイズの制限』。
11. オプションで、「**ディメンション**」タブを使用して既存のディメンション・テーブルを書き込みテーブルに追加し、結合用のキー項目を指定します。この書き込みテーブルは、選択されたディメンション・テーブルのベース・テーブルになり、下流のプロセスで使用することができます。
12. 「全般」タブをクリックして、「**プロセス名**」、「**出力セル**」の名前、または「**セル・コード**」の変更、ターゲット・セルへのリンク、またはプロセスについての「**説明**」の入力を行います。

ターゲット・セルへのリンクについて詳しくは、178 ページの『プロセス設定ダイアログを使用してフローチャート・セルをターゲット・セルにリンクする方法』を参照してください。

13. 「OK」をクリックします。

予期される結果をプロセスが返すかどうかを確認するために、プロセスの実行をテストできます。

eMessage ランディング・ページからのデータの抽出

eMessage ランディング・ページ・データの抽出を試行する前に、ご使用の IBM Unica 環境が要件を満たしていることを確認してください。詳しくは、86 ページの『eMessage ランディング・ページからデータを抽出する際の前提条件』を参照してください。

1. フローチャートの編集モードで、フローチャート・ワークスペース内の抽出プロセスをダブルクリックします。

プロセス設定ダイアログが表示されます。

2. 「ソース」タブで、「eMessage ランディング・ページ」を選択します。
3. ポップアップ・ウィンドウで、入力として eMessage ランディング・ページを選択します。

注: 抽出プロセスへの入力として選択できる eMessage ランディング・ページは 1 つのみです。複数のランディング・ページからデータを抽出するには、複数の抽出プロセスを構成します。

4. ランディング・ページに使用可能なオーディエンス・レベルが複数ある場合、該当するオーディエンス・レベルをドロップダウン・リストから選択します。使用可能なオーディエンス・レベルが 1 つのみの場合は、それが自動的に選択されます。
5. 「OK」をクリックします。
6. 「書き込み」タブで、出力場所を選択します。
 - 2 進数形式でデータを保管するには、「IBM Unica Campaign サーバー」を選択します。
 - UAC_EX 接頭部が付いた固有の名前のテーブルにデータを保管するには、使用可能なデータベースを選択します。
7. 抽出するフィールドを「選択項目」のリストから選択します。
 - 「追加」をクリックして、選択されたフィールドを「書き込み項目」のリストに追加します。
 - 「書き込み項目」のリストからフィールドを削除するには、削除するフィールドを選択して、「削除」をクリックします。
 - 「1 つ上へ」および「1 つ下へ」ボタンを使用して、「書き込み項目」リスト内のフィールドの順序を変更します。
 - 抽出するフィールドのデフォルトの出力名を変更するには、「書き込み項目」リストでフィールドを選択し、「項目名」列で名前をクリックしてから、新規名を入力します。

「書き込み」タブのフィールドについて詳しくは、『「書き込み」タブのリファレンス』を参照してください。

8. 以下のオプション・タスクを実行します。

- ユーザー定義項目を候補フィールドのリストに追加します。211 ページの『ユーザー定義項目について』を参照してください。
- 重複 ID が出力から除外されることを指定します。137 ページの『プロセス出力での重複 ID の除外』を参照してください。
- 出力セルのサイズを制限します (すなわち、プロセスによって生成される ID の数を制限します)。169 ページの『出力セル・サイズの制限』を参照してください。
- 「全般」タブをクリックして、「プロセス名」、「出力セル」の名前、または「セル・コード」の変更、ターゲット・セルへのリンク、またはプロセスについての「説明」の入力を行います。

ターゲット・セルへのリンクについて詳しくは、178 ページの『プロセス設定ダイアログを使用してフローチャート・セルをターゲット・セルにリンクする方法』を参照してください。

注: eMessage ランディング・ページ属性ではプロファイリングは使用不可です。

9. 「OK」をクリックします。

これで、プロセスが構成されました。予期される結果をプロセスが返すかどうかを確認するために、プロセスをテストできます。

注: 抽出プロセス中に、Campaign は、UCC_LPV 接頭部を使用してシステム・テーブル・データベースに中間ビューを作成します。この内部ビューは、プロセス・ボックスが削除されるまでデータベース内に残されます。ビューを削除する場合、プロセスまたはフローチャートを再実行する前に、それに対応する抽出プロセスを再構成する必要があります。再構成しない場合、Campaign によってテーブルの欠落を示すエラーが生成されます。

「書き込み」タブのリファレンス

次の表は、「書き込み」タブのフィールドについて説明しています。

表 14. 「書き込み」タブのフィールド

項目	説明
ターゲット・データ・ソース	このプロセスの出力が書き込まれる場所。 Campaign Server および接続先のその他の任意のデータ・ソースが「ターゲット・データ・ソース」ドロップダウン・リストから選択可能です。

表 14. 「書き込み」タブのフィールド (続き)

項目	説明
選択項目	<p>入力データ・ソースに基づいて抽出可能なフィールドのリストで、フィールド名およびデータ型を含みます。</p> <p>入力ソースが eMessage のランディング・ページの場合、各フィールド名はランディング・ページの属性です。その属性に特殊文字またはスペースが含まれている場合は、有効なフィールド名に変換されます。すべてのランディング・ページ属性のデータ型は、テキストとしてリストされます。</p> <p>注: スキーマ・オブジェクト名は 30 文字までに制限されません。ご使用の属性名を 30 文字以下に制限して、抽出された出力の有効な列名を作成してください。</p>
書き込み項目	<p>「選択項目」リストから抽出することを選択したフィールド。「項目名」はデフォルトで「書き込み項目」列のフィールド名に設定されます。</p>
「プロフィール」ボタン	<p>「プロフィール」ウィンドウを開きます。このウィンドウでは、選択されたフィールド内のレコードの値および配布を計算します。フィールド名が「選択項目」リストで選択されている場合にのみアクティブになります。</p>
「ユーザー定義項目」ボタン	<p>「ユーザー定義項目の作成」ウィンドウを開きます。</p>
「詳細」ボタン	<p>「詳細設定」ウィンドウを開きます。このウィンドウには、重複レコードをスキップし、Campaign が重複を識別する方法を指定するためのオプションが含まれています。</p>

スナップショット

スナップショット・プロセスを使用して、ID および関連するデータのリストを取得し、それらをテーブルまたはファイルにエクスポートします。

オファーをリストに関連付けたりトラッキングしたりするには、メール・リスト・プロセスまたはコール・リスト・プロセスを使用します。重複行がエクスポートされないようにするには、抽出プロセスを使用して、結果のスナップショットを取得します。

スナップショット・プロセスを構成するには

1. フローチャートの編集モードで、スナップショット・プロセスが、入力としてそのスナップショット・プロセスによって使用される出力セルを持つ 1 つ以上の構成済みプロセスに接続されていることを確認します。

注: 入力セルとして選択するセルはすべて、同じオーディエンス・レベルを持っている必要があります。

2. フローチャート・ワークスペースでスナップショット・プロセスをダブルクリックします。

プロセス設定ダイアログが表示されます。

3. 「スナップショット」タブをクリックします。

- a. 「**入力**」ドロップダウン・リストから、スナップショットのデータ・ソースとして使用する入力セルを指定します。

注: スナップショット・プロセスが、出力セルを提供するプロセスに接続されていない場合、「**入力**」ドロップダウン・リストから選択するセルはありません。ドロップダウン・リストの「**複数セル**」オプションは、入力プロセスが複数のセルを生成する場合にのみ使用可能です。

- b. 「**エクスポート先**」ドロップダウン・リストから、スナップショット出力を書き込むテーブルまたはファイルを指定します。

注: 確認可能な一時ファイルに出力をエクスポートしてスナップショット・プロセスを実行することにより、そのスナップショット・プロセスをテストすることができます。

- 使用するテーブルがリストにない場合、またはマップされていないテーブルに出力する場合は、「**データベース・テーブル**」を選択します。「データベース・テーブルの指定」ウィンドウが表示されるので、このウィンドウでテーブルおよびデータベースの名前を指定します。ここで指定するテーブル名では、ユーザー変数がサポートされています。
 - 「**エクスポート先**」ドロップダウン・リストから「**ファイル**」を選択した場合は、「出力ファイルの指定」ウィンドウが表示されます。このウィンドウで、出力を書き込むファイルのタイプ、そのファイル名、および対応するデータ・ディクショナリーを指定します。
 - 新規ユーザー・テーブルを作成する場合は、「**エクスポート先**」ドロップダウン・リストから「**新規マップ・テーブル**」を選択します。詳しくは、「*Campaign* 管理者ガイド」を参照してください。
- c. 出力ファイルまたはテーブルの更新の処理方法を指定する以下のいずれかのオプションを選択します。
 - **データ追記**。テーブルまたはファイルの末尾に新規の情報を追加します。区切り記号付きファイルにこのオプションを選択する場合、ラベルは最初の行としてエクスポートされません。データベース・テーブルではこのオプションが推奨されます。
 - **データ置換**。テーブルまたはファイルから既存のデータを削除して、新規の情報に置き換えます。
 - **データ更新**。テーブルにエクスポートする場合にのみ使用可能です。スナップショット用に指定されたすべてのフィールドは、プロセスの現在の実行から得られる値で更新されます。
 - **新規ファイル作成**。ファイルにエクスポートする場合にのみ使用可能です。このオプションは、ファイルにエクスポートする場合はデフォルトで選択されます。プロセスを実行するたびに、新規ファイルが作成され、「_1」、「_2」などの値がファイル名に追加されます。
 4. スナップショット・プロセスで書き出されるフィールドを指定します。
 - a. 出力に含めるフィールドを「**選択項目**」リストから選択します。

「*Campaign* 定義項目」のリストを展開して、*Campaign* 定義項目を使用するか、「**ユーザー定義項目**」ボタンをクリックしてユーザー定義項目を使用す

ることができます。複数のフィールドを一度に選択するには **Ctrl** キーを押しながらクリックし、隣接するフィールドの範囲を選択するには **Shift** キーを押しながらクリックします。

- b. 選択したフィールドを「**エクスポート項目**」リストに移動するには、「**追加 >>**」をクリックします。
- c. 「エクスポート項目」リストからフィールドを削除するには、削除するフィールドを選択し、「**<<削除**」をクリックします。
- d. スナップショットの宛先としてテーブルを選択した場合は、そのテーブルのフィールドが「**テーブル項目**」列の下の「**出力項目**」リストに表示されます。「**照合 >>**」をクリックすることにより、一致するフィールドを自動的に見つけることができます。テーブル・フィールド名が完全に一致するフィールドが、「**出力項目**」リストに自動的に追加されます。一致するフィールドが複数ある場合、最初の一致が使用されます。「**<<削除**」または「**追加 >>**」をクリックすることにより、組み合わせを手動で変更することができます。
- e. 必要に応じて、フィールドを選択し、「**1 つ上へ**」または「**1 つ下へ**」をクリックしてリスト内でフィールドを上下に移動することにより、「**エクスポート項目**」リスト内のフィールドを再配列します。

注: フィールドの値を表示するには、そのフィールドを選択して、「**プロフィール**」をクリックします。

5. 重複する ID を持つレコードをスキップすることを指定するか、レコードが出力される順序を指定するには、「**詳細**」をクリックします。

「**詳細設定**」ウィンドウが表示されます。

- a. 重複する ID を持つレコードをスキップすることを指定するには、「**重複 ID のデータを除外**」チェック・ボックスを選択し、重複 ID が返された場合に保持するレコードを決定するために Campaign が使用する基準を選択します。例えば、「**最大値選択**」と「**Household_Income**」を選択して、重複する ID が返されたときに、Campaign が最も高い世帯収入を持つ ID のみエクスポートすることを指定できます。

注: このオプションは、同じ入力セル内の重複のみ削除します。同じ ID が複数の入力セルに出現する場合、スナップショット・データには重複 ID が引き続き含まれていることがあります。すべての重複 ID を削除する場合は、スナップショット・プロセスの上流にあるマージまたはセグメント・プロセスを使用して、重複 ID を消去するか、相互に排他的なセグメントを作成する必要があります。

- b. スナップショット出力を何らかの方法で順序付けることを指定するには、「**出力順**」チェック・ボックス、ソートに使用するフィールド、およびソート順序を選択します。例えば、**Last_Name** および「**昇順**」を選択して、ID のリストを姓の昇順でソートすることを指定できます。
6. 「**OK**」をクリックして、「**詳細設定**」ウィンドウを閉じます。

指定した重複 ID スキップおよびソート順序は、「**スナップショット**」タブの「**エクスポート項目**」リストの下に表示されます。

7. (オプション) 「**全般**」タブをクリックして、名前または注釈、またはその両方をプロセスに割り当てます。

割り当てられた名前がフローチャートのプロセスに表示されます。注釈は、ユーザーがフローチャートのプロセスを指すと表示されます。

8. 「OK」をクリックします。

プロセスが構成され、フローチャート内で使用可能な状態で表示されます。予期される結果をプロセスが返すかどうかを確認するために、プロセスをテストできます。

スケジュール

注: スケジュール・プロセスは Unica スケジューラーとは関係ありません。スケジューラーは、それが実行されていない場合でもフローチャートを開始しますが、フローチャート内のスケジュール・プロセスは、フローチャートが実行されている場合のみ動作します。スケジュール・プロセスを使用するフローチャートをスケジュールするために、スケジューラーを使用してはなりません。

スケジュール・プロセスを使用して、プロセス、一連のプロセス、またはフローチャート全体を開始します。スケジュール・プロセスは、定義された期間中にアクティブです。この期間中、指定されたイベントが発生し、それらのイベントにより、接続された以降のプロセスが実行を開始する場合があります。スケジュール・プロセスの最も一般的な使用法は、フローチャート全体のタイミングを制御することです。

プロセスが実行を開始してからの期間を日、時間、および分単位で設定することにより、スケジュール期間全体を定義するようにスケジュール・プロセスを構成できます。

スケジューリング・オプションは、以下のとおり、きめ細かくかつフレキシブルです。

- 実行するプロセスをさまざまな方法でスケジュールすることができます。例えば、繰り返しによる方法、トリガーまたはカレンダーを使用する方法などです。
- 複数のスケジューリング・オプションを組み合わせることができます。例えば、毎週月曜日の午前 9:00 時にプロセスが実行されるようにするとともに、特定のイベント (Web サイトのヒットなど) によってトリガーが発生した場合にも必ずプロセスが実行されるようにスケジュールすることができます。
- バッチ処理を、例えば、日中のジョブを妨げることのない夜遅い時間に実行されるようにスケジュールできます。

フローチャートのスケジューリングで同時に使用できるオプションの数について既定の制限はありません。ただし、選択したオプション同士が矛盾する内容でない場合に限りです。(例えば、「1 回のみ」と「毎週月曜日」の両方を実行するようにフローチャートをスケジュールすることはできません。)

一般的に、プロセスのすべての入力的正常に実行された場合のみ (すなわち、現在のプロセスに接続されているプロセスがすべて実行された場合。依存関係が一時的でしかない場合も含みます。)、プロセスは実行されます。ただし、複数のスケジュー

ール入力がある場合、その入力のいずれか 1 つが完了したときに（その入力の「and」ではなく「or」）必ずプロセスが実行されません。

トラッキングが使用可能になっているコンタクト・プロセスには、固有のスケジュールが含まれています。フローチャートの真ん中でのスケジュール・プロセスの使用は高度な手法です。必要な動作および正しい結果が得られることを確認してください。

注: フローチャート内のスケジュール・プロセスによって、直前の実行が完了する前にフローチャートを実行するよう指示される場合、Campaign は、直前の実行が終了するまでその要求を保留します。このような方法で、1 つの実行のみ保持されるようにすることができます。このことは、フローチャートの実行回数が、ユーザーが予期する回数より少なくなる場合があることを意味しています。

例えば、フローチャートが実行に 2 時間を要する場合に、10 分間隔で 3 つの実行のトリガーを試みるスケジュール・プロセスを使用すると、Campaign は最初の実行を開始します。スケジュール・プロセスが 2 番目の実行を開始しようとする、Campaign はそれをキューに入れます。スケジュール・プロセスが 3 番目の実行を開始しようとする、Campaign はそれを無視します。最初の実行が完了すると、Campaign は 2 番目の実行を開始します。3 番目の実行が開始されることはありません。

スケジュール・プロセスを構成するには

1. フローチャートの編集モードで、フローチャート・ワークスペース内のスケジュール・プロセスをダブルクリックします。

プロセス設定ダイアログが表示されます。

2. 「スケジュール」タブで、以下のとおり、スケジューリングの条件を指定します。
 - a. 「日」、「時間」、および「分」の各フィールドに適切な値を入力して、「実施期間」の値を指定します。「実施期間」は、スケジュール・プロセスがアクティブになっている時間の合計です。デフォルトでは、「実施期間」は 30 日に設定されます。
 - b. 「実施頻度」ドロップダウン・リストから実行頻度を選択し、以降の接続プロセスをスケジュール・プロセスがいつアクティブにするかを正確に指定します。
 - 「1 回のみ」オプションを選択すると、追加された他のスケジュール・オプションに関係なく、フローチャートは 1 回のみ実行されます。他の値が選択されると、スケジュール・オプションは OR ステートメントとして接続され、スケジュール・プロセスは、いずれかのオプションが満たされたときに、そのスケジュール・プロセスが接続されているプロセスを開始します。
 - 満たされる最初のオプションによって、スケジュールの実行が開始されます。「実施頻度」が唯一の有効なオプションであり、その設定が「1 回のみ」である場合、プロセスは即時に実行されます（遅延またはユーザー承認が有効になっていない場合）。

- 「**時間**」および「**分**」フィールドを使用すると、スケジュールを実行する時間を指定できます。時間の入力形式は、24 時間制（「ミリタリー・タイム」とも呼ばれます）に基づいています。すなわち、9 時 30 分は 9:30 a.m. であり、22 時 45 分は 10:45 p.m. です。時間基準が 24 時間であるため、a.m. または p.m. を指定する必要はありません。
3. 「**実行頻度**」ドロップダウン・リストから「**カスタム設定**」を選択すると、「**カスタム設定**」オプションが有効になります。「**日時指定**」チェック・ボックスまたは「**トリガー指定**」チェック・ボックス、またはその両方を選択して、スケジュールを特定の時間（複数可）に実行するか、または着信トリガーに基づいて実行するかを指定します。トリガーについて、詳しくは「*Campaign* 管理者ガイド」を参照してください。

注: これらの選択は相互に排他的ではありません。すなわち、スケジュールされた時間とトリガーを組み合わせることを選択できます。

- 「**日時指定**」を選択する場合、1 つ以上の日時を指定する必要があります。複数のエントリはコンマで区切る必要があります。「**カレンダー**」をクリックしてカレンダー機能にアクセスし、日時を選択します。
- 「**トリガー指定**」を選択する場合、1 つ以上のトリガーを指定する必要があります。

指定されたトリガーは、「**ツール**」>「**トリガー**」を使用してスケジュール・プロセスに対して定義し、完全に構成する必要があります。このスケジュール・プロセスをアクティブ化できる各トリガーの名前を入力します。複数のトリガーは、コンマで区切ります。トリガー名には、コンマを除く任意の文字を使用できます。トリガー名は、固有でなくてもかまいません。複数のキャンペーンまたはフローチャートで同じトリガーを使用して、それらのキャンペーンまたはフローチャートをすべて同時にアクティブ化することができます。

4. 「**実行時に承認が必要**」チェック・ボックスまたは「**実行前の待機期間**」チェック・ボックス、またはその両方を選択して、「**実行制限**」設定を指定します。

注: これらの選択は相互に排他的ではありません。すなわち、いずれか一方を選択することも両方を選択することもできます。

- 「**実行時に承認が必要**」を選択すると、他のスケジュール条件が満たされるたびに、ユーザー承認を求めるプロンプトが表示され、特定の承認が行われな限り、スケジュール・プロセスはアクティブ化されません。このオプションを指定すると、このオプションは他のあらゆるスケジュール・インディケータに優先し、承認が行われない場合は、プロセスは開始されません。

注: 接続されたクライアントでフローチャートが実行される場合、ユーザー承認はそのクライアントを介してのみ実行できます。クライアントが接続されていない場合は、キャンペーンに対する読み取り/書き込み権限を持つ任意のユーザーがその続行を承認できます。

- 「**実行前の待機期間**」を選択する場合、「**日**」、「**時間**」、および「**分**」の各フィールドを使用して、スケジュール条件が満たされた後、プロセスが実行される前に待機する時間を指定する必要があります。この遅延は、指定された他のすべてのスケジュール・オプションに適用されます。例えば、スケジュー

ル・プロセスが、月曜日の朝 9:00 a.m. に 1 時間の遅延時間で実行されるように構成されている場合、後続のプロセスは 10:00 a.m. に実行を開始します。

5. (オプション) 「**実施後トリガー実行**」チェック・ボックスを選択して、1 つ以上のトリガーを指定することにより、スケジュール実行が完了した後に送信するトリガーを指定します。

「**実施後トリガー実行**」チェック・ボックスを選択すると、Campaign は、スケジュール・プロセスがアクティブ化されるたびに 1 つ以上のトリガーを実行します。発信トリガーはコマンド・ライン (バッチ・ファイルまたはスクリプト・ファイルが可能) を実行します。指定されたトリガーは、「**ツール**」>「**トリガー**」を使用して定義する必要があります。トリガー名を複数指定する場合は、コンマで区切る必要があります。

6. (オプション) 「**全般**」タブをクリックして、名前または注釈、またはその両方をプロセスに割り当てます。

割り当てられた名前がフローチャートのプロセスに表示されます。注釈は、ユーザーがフローチャートのプロセスを指すと表示されます。

7. 「**OK**」をクリックします。

プロセスが構成され、フローチャート内で使用可能な状態で表示されます。予期される結果をプロセスが返すかどうかを確認するために、プロセスをテストできます。

スケジュール・プロセスでカレンダー・ツールを使用するには

「**実施頻度**」ドロップダウン・リストから「**カスタム設定**」を選択すると、カレンダー・ツールが「スケジュール・プロセスの設定」ダイアログで使用可能になります。

これは、日付と時刻を選択できる点を除いて、Campaign の別の場所にあるカレンダー・ツールと同じです。

1. 「スケジュール・プロセスの設定」ダイアログの「**スケジュール**」タブで、「**カレンダー**」をクリックします。このボタンは、「**実施頻度**」ドロップダウン・リストから「**カスタム設定**」を選択した場合にのみ有効になります。

カレンダー・ツールが表示されます。現在の日時がデフォルトで既に選択されています。

2. 以下の方法により、フローチャートを実行または開始する日付を指定します。
 - 表示された月の日付をクリックする
 - 「**月**」ドロップダウン・リストを使用して、月、年、および時刻を変更する
 - 上下の矢印を使用して、年を変更する
3. 「**実行時刻**」フィールドに希望する時刻を入力して時刻をします。使用する形式は hh:mm で、その後に a.m. または p.m. を指定してください。
4. 「**適用**」をクリックして指定された日時を入力し、「**カレンダー**」ウィンドウを開いたままにするか、「**OK**」をクリックして、指定された日時を入力し、「**カレンダー**」ウィンドウを閉じます。

「カレンダー」ウィンドウを開いたままにしておくと、複数の日時選択を容易に入力することができます。

トリガーに基づいたスケジューリング

スケジュール・プロセスは、以下の方法でトリガーを使用することができます。

- 『トリガーによる実行』
- 98 ページの『各実行後のトリガー送信』
- 98 ページの『他のスケジューリング・オプションとトリガーの併用』

トリガーで実行されるようにスケジュール・プロセスを構成するには

1. 「スケジュール・プロセスの設定」ダイアログの「スケジュール」タブで、「実施頻度」ドロップダウン・リストから「カスタム設定」を選択します。

「カスタム設定」機能が有効になります。

2. 「トリガー指定」フィールドに、このスケジュール・プロセスをアクティブ化できる各トリガーの名前を入力します。複数のトリガーは、コンマで区切ります。
 - トリガー名には、コンマを除く任意の文字を使用できます。
 - トリガー名は、固有でなくてもかまいません。複数のキャンペーンまたはフローチャートで同じトリガーを使用して、それらのキャンペーンまたはフローチャートをすべて同時にアクティブ化することができます。

トリガーによる実行

「実行頻度」ドロップダウン・リストから「カスタム設定」を選択すると、「トリガー指定」オプションが使用可能になります。このオプションを使用可能にして、スケジュール・プロセスをアクティブ化する 1 つ以上の着信トリガーを指定します。

「トリガー指定」を使用可能にする場合、1 つ以上のトリガーを指定する必要があります。指定されたトリガーは、「ツール」>「トリガー」を使用してスケジュール・プロセスに対して定義し、完全に構成する必要があります。

着信トリガーは、フローチャートまたはキャンペーンを自動的に作動させる外部イベントです。トリガーは、ユーザーが任意に定義できます。例えば、Web サイト・リンクのクリック、電子メール・メッセージの受信、テレマーケティング担当者の応答標識、データベースのアップロードの完了、定義されたその他の任意のイベントなどです。

「トリガー指定」オプションは、実行のために IBM Unica アプリケーションの `unica_actrg` (ご使用の Campaign インストール済み環境に組み込まれています) を使用します。「トリガー指定」が裏側でどのように動作しているかを理解するには、以下の例を参照すると役立ちます。

例: トリガー指定

オンライン小売業者は、顧客が購買を行うとクロス・セル・オファーがトリガーされるように、トリガーで実行されるクロス・セル・キャンペーンを実施します。

具体的には、顧客が購買を行うと、以下が実行されます。

- Web サイトで unica_actrg 実行可能プログラムが実行され、キャンペーン・コードおよびトリガー名 (web_purchase) が渡されます。
- Campaign リスナーは、キャンペーンがアクティブになっていて、トリガー名が存在することをチェックしてから、スケジュール・プロセスを実行して、キャンペーン・フローチャートを起動させます。

トリガーについて、詳しくは「*Campaign* 管理者ガイド」を参照してください。

各実行後のトリガー送信

発信トリガーはコマンド・ライン (バッチ・ファイルまたはスクリプト・ファイルが可能) を実行します。スケジュール・プロセスが「**実施後トリガー実行**」フィールドのトリガー名をアクティブ化するたびに、Campaign で 1 つ以上のトリガーを実行させることができます。トリガー名を複数指定する場合は、コンマで区切る必要があります。

この機能を使用することにより、発信トリガーを実行可能ファイルに送信することができます。ファイルのフルパスおよび名前を「トリガー」ウィンドウに定義する必要があります。スケジュール・プロセスがアクティブ化されるたびに、Campaign は、指定された実行可能ファイルを実行します。

他のスケジュールリング・オプションとトリガーの併用

トリガーは他のスケジュールリング・オプションと共に使用することも、単独で使用することもできます。組み合わせて使用する場合、例えば、毎週月曜日の 9:00 a.m に実行され、かつ、誰かがインターネット・バナーの広告をクリックするたびに実行されるフローチャートを設定することができます。

例えば、Web サイトのヒットに基づいて「**トリガー指定**」が行われるようにフローチャートをスケジュールし、さらに「**実行前の待機期間**」も指定すると、イベント (Web の「ヒット」) が発生し、かつ待機時間が満了するまでフローチャートは開始されません。

キューブ

キューブ・プロセスは、顧客データベース・テーブルから作成された戦略的セグメントに基づくディメンションからのデータ・キューブの作成をサポートします。

注: キューブ・プロセスは、テクニカル・ユーザーまたは IBM Unica コンサルタントによる使用を目的としています。すべてのグローバル構成体 (例えば、キューブおよび戦略的セグメント) をアプリケーションの「**セッション**」領域で作成することが推奨されます。

ユーザーは、1 つ以上の定義済みセグメントを選択し、キューブを作成してから、データを掘り下げて、フローチャートに含めるために適切なプロセス (例えば、選択プロセス) に変換可能なターゲット・オーディエンスを選択することができます。

キューブ・プロセスを構成するには

「**セッション**」領域で作成されたキューブはいずれもグローバルに使用可能です。

1. キューブ・プロセスを使用してキューブを作成するには、事前に戦略的セグメントまたはディメンション階層を作成しておく必要があります。
2. セッション・フローチャートで、キューブ・プロセスを選択してワークスペースまでドラッグします。
3. フローチャート・ワークスペースでキューブ・プロセスをダブルクリックします。

プロセス設定ダイアログが表示されます。

4. 「ソース」タブで、「入力セグメント」ドロップダウン・リストを使用して、1つ以上のセグメントをキューブの入力として選択します。

重要: 複数のソース・セグメントを選択する場合、それらがすべて同じオーディエンス・レベルを持っていることを確認してください。

5. キューブを定義するために「**キューブ定義**」タブをクリックします。「キューブ定義」ウィンドウが表示されます。

「キューブ定義」ウィンドウでは、以下の操作を実行できます。

- 「**追加**」をクリックして、新規キューブを追加する
 - 既存のキューブを選択して、「**編集**」をクリックして変更する
 - 既存のキューブを選択して、「**削除**」をクリックして削除する
6. キューブを追加するには、以下を実行します。
 - a. 「**追加**」をクリックします。「キューブの編集」ウィンドウが表示されます。
 - b. キューブの名前と説明を該当する領域に入力します。
 - c. 対応するドロップダウン・リストから最大 3 つのディメンションを選択します。ディメンションは、キューブ・ソースが基づいている戦略的セグメントに関連している必要があります。
 - d. キューブに関する情報の入力が完了したら、「**OK**」をクリックします。「キューブの編集」ウィンドウが閉じ、新規キューブ定義が「**キューブ定義**」タブのキューブのリストに表示されます。
 7. 「**追加項目の選択**」タブをクリックして、トラッキングのための追加フィールドを指定します。

「追加項目の選択」ウィンドウが表示されます。

「追加項目の選択」ウィンドウでは、以下の操作を実行できます。

- 「**選択項目**」リストからトラッキングするフィールドを選択し、「**追加>>**」ボタンを使用して、そのフィールドを「**選択済み項目**」リストに移動する。
 - 「**ユーザー定義項目**」をクリックして、トラッキングするユーザー定義項目を選択または作成する。
 - 「**プロファイル**」をクリックして、選択されたフィールドのプロファイルを作成する。
8. (オプション) 「**全般**」タブをクリックして、名前または注釈、またはその両方をプロセスに割り当てます。

割り当てられた名前がフローチャートのプロセスに表示されます。注釈は、ユーザーがフローチャートのプロセスにマウスオーバーすると表示されます。

9. 「OK」をクリックします。

プロセスが構成され、フローチャート内で使用可能な状態で表示されます。予期される結果をプロセスが返すかどうかを確認するために、プロセスをテストできます。

セグメントの作成

セグメントの作成プロセスを使用して、顧客データベース・テーブルからオーディエンス ID のリストを作成します。作成されたセグメントは、選択プロセスの入力として使用したり、ディメンションとキューブを作成するための入力として使用したり、オーディエンス・レベルのグローバル抑制セグメントとして使用することができます。

セグメントの作成プロセスは、Campaign 管理者による使用を想定して設計されています。セグメントの作成プロセスは、Campaign の「セッション」領域で作成する必要があります。これにより、セグメントが戦略的なものとなり、すべてのキャンペーンでグローバルに使用できるようになります。

注: 複数のキャンペーンで使用できるようにするため、すべてのグローバル構成体を Campaign の「セッション」領域で作成することをお勧めします。ただし、セッション・フローチャート内ではなく、キャンペーン内で「セグメントの作成」を使用することができます。

戦略的なセグメントで作業を行うには、以下の処理を実行します。

- 「セッション」領域でセグメントを作成します。
- 「セグメント」領域でセグメントを管理します。
- 「キャンペーン」セクションのキャンペーンで、これらのセグメントを使用します。

セグメントの作成プロセスを構成するには

注: セグメントの作成プロセスは、Campaign 管理者によって使用されるように設計されています。このプロセスは、アプリケーションの「セッション」領域で作成および定義して、セグメントが戦略的で、かつ、すべてのキャンペーンでグローバルに使用できるようにする必要があります。

1. 「編集」モードのセッション・フローチャートで、セグメントの作成プロセスをフローチャート・ワークスペースに追加します。
2. セグメントの作成プロセスを 1 つ以上のデータ操作プロセス (例えば、選択プロセス) に接続することにより、セグメントの作成プロセスに入力データを指定します。
3. セグメントの作成プロセスをダブルクリックします。

プロセス設定ダイアログが表示されます。

4. 「セグメントの定義」タブで、以下を実行します。

- a. 「入力」ドロップダウン・リストから 1 つ以上のソース・セルを選択します。これらのソース・セルはセグメントになります。
- b. 作成されたセグメントを相互に排他的にする場合は、「データの重複を許可しない」を選択します。
- c. 「結果セグメント」領域で、入力セルを強調表示し、「編集」をクリックしてセグメントを構成します。

「セグメントの編集」ウィンドウが表示されます。

5. 「セグメントの編集」ウィンドウから、以下を実行します。
 - a. セグメントに、その目的を表す名前を付け、そのセグメントが行うよう設計されている内容の要旨を記述します。
 - b. 「配置先フォルダー」ドロップダウン・リストで、セグメントを格納するフォルダーを選択します。
 - c. 「一時テーブルのデータ・ソース」ドロップダウン・リストから、戦略的セグメントをキャッシュに入れるデータ・ソースを選択します。

注: データ・ソースの選択は、「Campaign|Server|Optimization」構成ページの「doNotCreateServerBinFile」プロパティが「TRUE」に設定されている場合にのみ必要になります。このプロパティを「TRUE」に設定しない場合、少なくとも 1 つのデータ・ソースを選択する必要があります。

- d. 「セキュリティー・ポリシー」ドロップダウン・リストから、作成されたセグメントに適用するセキュリティー・ポリシーを選択します (適用可能な場合)。
 - e. 終了したら、「OK」をクリックして、「セグメントの定義」タブに戻ります。
6. (オプション) 「全般」タブをクリックして、名前または注釈、またはその両方をプロセスに割り当てます。

割り当てられた名前がフローチャートのプロセスに表示されます。注釈は、ユーザーがフローチャートのプロセスにマウスオーバーすると表示されます。

7. 「OK」をクリックします。

プロセスが構成され、フローチャート内で使用可能な状態で表示されます。

注: セグメントの作成プロセスが本番モードで正常に実行された場合にのみ、戦略的セグメントが作成され、選択できるようになります。セグメントの作成プロセスをテスト・モードで実行しても、戦略的セグメントは作成または更新されません。

セグメントの作成プロセスをテストできますが、テストの実行により、戦略的セグメントが作成されたり、既存の戦略的セグメントが更新されたりすることはありません。

メール・リスト

メール・リスト・プロセスは、コンタクト・プロセスの 1 つです。このプロセスは、フローチャート内の他のプロセスからの出力セルを使用して、ダイレクト・メール・キャンペーンのコンタクト・リストの生成、そのコンタクト・リストへの特定のオファーの割り当て、およびコンタクト履歴の記録を行います。

コンタクト・プロセス (メール・リストまたはコール・リスト) を構成するには

1. 「編集」モードのフローチャートでは、コンタクト・プロセスによって入力として使用される出力セルを持つ 1 つ以上の構成済みプロセスに、そのコンタクト・プロセスが接続されていることを確認してください。

重要: 入力セルとして選択するセルはすべて、同じオーディエンス・レベルを持っている必要があります。

2. フローチャート・ワークスペースでコンタクト・プロセスをダブルクリックします。

プロセス設定ダイアログが表示されます。

3. 「実現」タブで、リスト出力の実現の詳細を指定します。
 - a. 「入力」ドロップダウン・リストから、コンタクト・リストのデータ・ソースとして使用する入力セルを指定します。

注: コンタクト・プロセスが、出力セルを提供するプロセスに接続されていない場合、「入力」ドロップダウン・リストから選択するセルはありません。ドロップダウン・リストの「複数セル」オプションは、入力プロセスが複数のセルを生成する場合にのみ使用可能です。

- b. (オプション) コンタクト・リスト出力を書き込む場所を指定するには、「エクスポート先を有効にする」チェック・ボックスが選択されていることを確認し、ドロップダウン・リストを使用して、以下のいずれかのオプションを指定します。
 - プロセス出力をデータベース・テーブルに書き込む場合は、「エクスポート先を有効にする」ドロップダウン・リストからそのデータベース・テーブルの名前を選択します。
 - 使用するデータベース・テーブルがリストにない場合、またはマップされていないテーブルにプロセス出力を書き込む場合は、ドロップダウン・リストから「データベース・テーブル」を選択し、「データベース・テーブルの指定」ウィンドウを開きます。このウィンドウを使用して、テーブルおよびデータベースの名前を指定します。ここで指定するテーブル名では、ユーザー変数がサポートされています。
 - プロセス出力をファイルに書き込む場合は、「エクスポート先を有効にする」ドロップダウン・リストから「ファイル」を選択し、「出力ファイルの指定」ウィンドウを開きます。このウィンドウを使用して、出力を書き込むファイルのタイプ、そのファイル名、および対応するデータ・ディクショナリーを指定します。
 - 新規ユーザー・テーブルを作成する場合は、「エクスポート先を有効にする」ドロップダウン・リストから「新規マップ・テーブル」を選択します。詳しくは、「Campaign 管理者ガイド」を参照してください。

注: 確認可能な一時ファイルに出力をエクスポートしてコンタクト・プロセスを実行することにより、そのコンタクト・プロセスをテストすることができます。

「エクスポート先を有効にする」チェック・ボックスはデフォルトで選択されています。このチェック・ボックスをクリアすると、ファイルまたはデータベース・テーブルへの出力を伴わずにプロセスを実行することができます。

- c. (オプション) 「サマリー・ファイル」フィールドにパスおよびファイル名を入力して、このプロセスのサマリー・ファイル (.sum) を作成するか、省略符号ボタンをクリックして場所に移動します。サマリー・ファイルには、メーリング・ハウスがメーリング業務を促進するために必要な場合があるエクスポートに関する情報が含まれています。
 - d. (オプション) 「トリガー送信」チェック・ボックスを選択し、送信するトリガーをドロップダウン・リストから選択することにより、プロセスの実行が終了したときにトリガーを送信します。複数のトリガーを送信するには、**Ctrl** キーを押しながらクリックすることにより、追加する各トリガーを選択します。選択された複数のトリガーは、「トリガー送信」フィールドに、コンマで区切って表示されます。
4. 「処理」タブをクリックして、このプロセスで定義されている各ターゲット・セルに 1 つ以上のオファーまたはオファー・リストを割り当てます。「パラメーター」タブをクリックして、各セルのオファー・パラメーターを指定します。
 5. 「カスタマイズ」タブをクリックして、コンタクト・リストに書き出されるフィールドを指定します。
 - a. 出力に含めるフィールドを「選択項目」リストから選択します。

「IBM Unica Campaign 定義項目」リストを展開して、IBM Unica Campaign 定義項目を使用するか、「ユーザー定義項目」ボタンをクリックしてユーザー定義項目を使用することができます。複数のフィールドを一度に選択するには **Ctrl** キーを押しながらクリックし、隣接するフィールドの範囲を選択するには **Shift** キーを押しながらクリックします。

- b. 選択したフィールドを「出力項目」リストに移動するには、「追加>>」をクリックします。
- c. 「出力項目」リストからフィールドを削除するには、削除するフィールドを選択し、「<<削除」をクリックします。
- d. エクスポートの宛先としてテーブルを選択した場合は、そのテーブルのフィールドが「テーブル項目」列の下の「出力項目」リストに表示されます。「照合>>」をクリックすることにより、一致するフィールドを自動的に見つけることができます。テーブル・フィールド名が完全に一致するフィールドが、「出力項目」リストに自動的に追加されます。一致するフィールドが複数ある場合、最初の一致が使用されます。「<<削除」または「追加>>」をクリックすることにより、組み合わせを手動で変更することができます。
- e. 必要に応じて、フィールドを選択し、「1 つ上へ」または「1 つ下へ」をクリックしてリスト内でフィールドを上下に移動することにより、「出力項目」リスト内のフィールドを再配列します。

注: フィールドの値を表示するには、そのフィールドを選択して、「プロファイル」をクリックします。

6. 重複する ID を持つレコードをスキップすることを指定するか、レコードが出力される順序を指定するには、「詳細」をクリックします。

「詳細設定」ウィンドウが表示されます。

- a. 重複する ID を持つレコードをスキップすることを指定するには、「**重複 ID のデータを除外**」チェック・ボックスを選択し、重複 ID が返された場合に保持するレコードを決定するために、Campaign が使用する基準を選択します。例えば、「最大値選択」と「Household_Income」を選択して、重複する ID が返されたときに、Campaign が最も高い世帯収入を持つ ID のみエクスポートすることを指定できます。

注: このオプションは、同じ入力セル内の重複のみ削除します。同じ ID が複数の入力セルに出現する場合、コンタクト・リストには重複 ID が引き続き含まれていることがあります。すべての重複 ID をコンタクト・リストから削除する場合は、コンタクト・プロセスの上流にあるマージ・プロセスまたはセグメント・プロセスを使用して、重複 ID を消去するか、相互に排他的なセグメントを作成する必要があります。

- b. 出力コンタクト・リストを何らかの方法で順序付けることを指定するには、「**出力順**」チェック・ボックス、ソートに使用するフィールド、およびソート順序を選択します。例えば、Last_Name および「昇順」を選択して、ID のリストを姓の昇順でソートすることを指定できます。
7. 「OK」をクリックして、「詳細設定」ウィンドウを閉じます。

指定した重複 ID スキップおよびソート順序は、「カスタマイズ」タブの「出力項目」リストの下に表示されます。

8. 「ログ」タブをクリックして、このプロセスのコンタクト・トランザクションを記録する方法を指定します。

注: コンタクト履歴ログのオプションを有効または無効にするための適切な権限を持っている必要があります。

- a. コンタクト履歴をシステム・テーブルに記録するには、「**コンタクト履歴テーブルに記録**」チェック・ボックスにチェック・マークを付けます。

注: コンタクト情報を Campaign でのトラッキングおよびレポート作成に使用できるようにするには、システム・テーブルにログを記録します。メーリング・リストを構成し、処理 (アドレスの確認やハウスホールディングなど) を実行するメーリング・ハウスにそのメーリング・リストを送る予定の場合は、システム・テーブルには記録しないでください。その代わりに、トラッキング・プロセスを使用して、メーリング・ハウスから返された情報を記録し、オファーがメール送信された顧客のリストのみを取得します。

- b. システム・テーブル以外の別の宛先に追加的に、または代わりに記録するには、「**任意の保存先に記録**」チェック・ボックスにチェック・マークを付けます。

注: 組織が別の形式で情報をさらに処理する必要がある場合に、コンタクト情報を別のテーブルまたはファイルに保管することが必要になる場合があります。また、コンタクト・プロセスによって出力される情報をシステム・テ

ーブルに保存する前に、その情報をテストする場合、システム・テーブルの外部にある情報を記録することが必要な場合もあります。

- c. 「**任意の保存先に記録**」を選択した場合、「**保存先**」ドロップダウン・リストを使用して、テーブルまたはファイルを指定します。

「**ファイル**」を選択した場合は、「**出力ファイルの指定**」ウィンドウが表示されます。このウィンドウで、出力を書き込むファイルのタイプ、そのファイル名、および対応するデータ・ディクショナリーを指定します。

9. 「**選択項目**」リストからフィールドを選択し、「**追加>>**」ボタンを使用して、「**出力項目**」リストにそれらのフィールドを移動することにより、コンタクト履歴に出力するフィールドを指定します。また、「**選択項目**」にユーザー定義項目を使用することもできます。

「**出力項目**」リストからフィールドを削除するには、削除するフィールドを選択し、「**<<削除**」をクリックします。

必要に応じて、フィールドを選択し、「**1 つ上へ**」または「**1 つ下へ**」をクリックしてリスト内でフィールドを上下に移動することにより、「**ログ項目**」リスト内のフィールドを再配列します。

「**照合>>**」をクリックすることにより、一致するフィールドを自動的に見つけることができます。「**テーブル項目**」名が完全に一致するフィールドが、「**ログ項目**」リストに自動的に追加されます。一致するフィールドが複数ある場合、最初の一致が使用されます。

10. 出力ファイルまたはテーブルの更新の処理方法を指定する以下のいずれかのオプションを選択します。
 - **データ追記** — テーブルまたはファイルの末尾に新規コンタクト情報を追加します。区切り記号付きファイルにこのオプションを選択する場合、ラベルは最初の行としてエクスポートされません。データベース・テーブルではこのオプションが推奨されます。
 - **データ置換** — テーブルまたはファイルから既存のデータを削除して、新規のコンタクト情報に置き換えます。
11. コンタクト履歴に書き込まれる情報をカスタマイズするには、「**詳細オプション**」をクリックします。

「**コンタクト履歴ログ・オプション**」ウィンドウが表示されます。

- a. このプロセスが実行されるときにコンタクト履歴が更新されないようにするには、「**処理の作成のみ**」を選択します。

このオプションは、コンタクト履歴を更新せずに 処理テーブルで新しい処理を生成し、基本的に履歴への遅延更新を許容します。例えば、無効なアドレスおよび重複アドレスを後処理で削除する予定のために、コンタクト履歴を作成しない場合があります。オファーが送信される ID のリストの取得を待つ場合、生成されるコンタクト履歴はより小さく、より正確なものになります。

このチェック・ボックスを選択する場合、このウィンドウの適用されなくなった (コンタクト履歴が記録されないため) 他のオプションは無効であることに注意してください。

デフォルトでは、このチェック・ボックスは選択されず、プロセスが実行されるときにコンタクト履歴は更新されます。コンタクト履歴の記録について詳しくは、193 ページの『第 8 章 コンタクト履歴およびレスポンス・トラッキング』を参照してください。

- b. 最新のプロセス実行のパッケージ ID と同じパッケージ ID を持つ新規処理を生成するには、「**前回のパッケージ ID の使用**」を選択します。

同一のコンタクト・プロセスで個人に指定されたオファーはすべて、単一の「パッケージ」とみなされます。デフォルトでは、「**前回のパッケージ ID の使用**」は選択されていません。これにより、コンタクト・プロセスの本番実行ごとに各パッケージに固有の ID が割り当てられることが指定されず。

「**処理の作成のみ**」を選択して、顧客の履歴が更新されないようにした場合は、このチェック・ボックスも選択して、直前の実行のパッケージ ID がオファーの各セットに割り当てられるようにし、それらのオファーを既存のコンタクト履歴にリンクすることができます。

- c. コンタクト履歴をトラッキングするオーディエンス・レベルを「**トラッキング・オーディエンス**」ドロップダウン・リストから選択します。
- d. コンタクト・リストに掲載された人に連絡する日付を「**コンタクト日付**」フィールドに入力します。カレンダーから日付をクリックして選択することもできます。このフィールドに日付を入力しない場合、Campaign は、フローチャートの実行日付を使用します。
- e. 「**コンタクト・ステータス・コード**」ドロップダウン・リストを使用して、トラッキングのステータス・コードを入力します。
- f. 「**ログ**」タブでフィールドを選択したときと同じ方法で、「**追加>>**」、「**<<削除**」、「**照合>>**」、「**1 つ上へ**」、および「**1 つ下へ**」ボタンを使用して、「**選択項目**」および「**ログ項目**」リストに対して、フィールドを選択および移動します。
- g. 記録する追加フィールドの指定が終了したら、「**閉じる**」をクリックします。

プロセス設定ダイアログの「**ログ**」タブに戻ります。

- 12. (オプション) コンタクト・プロセスが次に実行される前に、既存のコンタクト履歴および関連するレスポンス履歴のエントリーの一部またはすべてを消去するには、「**履歴の消去**」をクリックします。

重要: 「**履歴の消去**」は、コンタクト履歴およびレスポンス履歴のレコードをシステム・テーブルから完全に削除します。このデータは回復できません。

- 13. (オプション) 「**全般**」タブをクリックして、名前または注釈、またはその両方をプロセスに割り当てます。

割り当てられた名前がフローチャートのプロセスに表示されます。注釈は、ユーザーがフローチャートのプロセスを指すと表示されます。

- 14. 「**OK**」をクリックします。

プロセスが構成され、フローチャート内で使用可能な状態で表示されます。予期される結果をプロセスが返すかどうかを確認するために、プロセスをテストできません。

コール・リスト

コール・リスト・プロセスはコンタクト・プロセスです。コール・リスト・プロセスを使用して、コンタクト・リストの生成 (例えば、テレマーケティング・キャンペーン用のコンタクト・リストなど)、そのコンタクト・リストへの特定のオファーの割り当て、およびコンタクト履歴の記録を行います。

コール・リスト・プロセスは、メール・リスト・プロセスと同じ方法で構成します。102 ページの『コンタクト・プロセス (メール・リストまたはコール・リスト) を構成するには』を参照してください。

トラッキング

トラッキング・プロセスを使用して、コンタクト・ステータス、またはコンタクト履歴内の既存のレコードの追加のトラッキング・フィールドを更新します。

注: トラッキング・プロセスは、コンタクト履歴内の既存の行の更新のみが可能で、新規行を作成することはできません。

例えば、「推奨」のコンタクト・ステータスを使用してレコードが最初にコンタクト履歴に書き込まれた場合、トラッキング・プロセスを使用して、コンタクトされたコンタクト履歴内のレコードを、「コンタクト済み」のコンタクト・ステータスを使用して後で更新することができます。あるいは、例えば、ダイレクト・メールが送られたすべてのコンタクトが、「コンタクト済み」のコンタクト・ステータスでコンタクト履歴に書き込まれ、ユーザーが配達不能メーリングのリストを後で受け取った場合、「配達不能 (Undeliverable)」のコンタクト・ステータスを使用してそのリストにある個人を更新できます。

トラッキング・プロセスを構成するには

1. フローチャートの編集モードで、トラッキング・プロセスが、入力としてそのトラッキング・プロセスによって使用される出力セルを持つ 1 つ以上の構成済みプロセスに接続されていることを確認します。
2. フローチャート・ワークスペースでトラッキング・プロセスをダブルクリックします。

プロセス設定ダイアログが表示されます。

3. 「ソース」タブをクリックします。
 - a. 「入力」ドロップダウン・リストからソース・セル (複数可) を選択します。
 - b. 「コンタクト日付」ドロップダウン・リストを使用して、トラッキング・プロセスによって更新されるレコードに関連付けるコンタクト日付を選択します。デフォルトでは、「今日」の値が選択されます。また、ユーザー定義項目を使用して「コンタクト日付」の値を設定することもできます。
 - c. コンタクト履歴で更新するレコードに関連付ける「コンタクト・ステータス・コード」を選択します。

4. 「**処理へのマッピング**」タブをクリックします。

「**操作項目候補**」リストが表示され、処理コードに一致させる関連フィールドをこのリストから選択することができます。処理コードは、更新するコンタクト履歴の行を一意的に識別します。

「**操作項目候補**」リストからマッピングに使用するフィールドを選択し、「**追加>>**」ボタンを使用して、「**オファー項目/処理項目の組み合わせ**」リストにそのフィールドを移動し、そのフィールドが処理コードとペアになるようにします。

5. 「**ログ**」タブをクリックして、このプロセスのコンタクト履歴を更新する方法を指定します。

注: コンタクト履歴テーブルの更新を有効または無効にするための適切な権限を持っている必要があります。

a. コンタクト履歴をシステム・テーブルで更新するには、「**コンタクト履歴テーブルに記録**」チェック・ボックスを選択します。

「**コンタクト履歴テーブルに記録**」を選択し、追加のフィールドをコンタクト履歴に書き込む場合は、「**追加項目**」をクリックして、「コンタクト履歴ログ・オプション」ダイアログを表示します。「**追加**」、「**削除**」、「**照合**」、「**1 つ上へ**」、および「**1 つ下へ**」ボタンを使用して、「**ログ**」タブでフィールドを選択したときと同じ方法で、必要なフィールドを「**選択項目**」リストから選択したり、「**ログ項目**」リストに移動したりします。一致しないフィールドは更新されません。

記録する追加フィールドの指定が終了したら、「**閉じる**」をクリックします。

b. システム・テーブルのコンタクト履歴に加えて、またはそれ以外の宛先に記録するには、「**任意の保存先に記録**」チェック・ボックスを選択して、代替のテーブルまたはファイルに書き込めるようにします。

c. 「**任意の保存先に記録**」を選択した場合、「**保存先**」ドロップダウン・リストを使用して、出力をファイルに書き込むか、またはデータベース内の新規テーブルに書き込むかを指定します。

「**ファイル**」を選択した場合は、「**出力ファイルの指定**」ウィンドウが表示されます。このウィンドウを使用して、出力を書き込むファイルのタイプ、そのファイル名、および対応するデータ・ディクショナリーを指定します。

「**新規テーブル**」を選択した場合は、表示される「**新規テーブル定義**」ダイアログを使用して、Campaign でログ出力を書き込む新規テーブルについての情報を指定します。

d. 「**任意の保存先に記録**」を選択した場合は、「**選択項目**」リストからフィールドを選択し、「**追加>>**」ボタンを使用して、「**出力項目**」リストにそれらのフィールドを移動することにより、出力するフィールドを指定します。

また、「**選択項目**」にユーザー定義項目を使用することもできます。

「**出力項目**」リストからフィールドを削除するには、削除するフィールドを選択し、「**<<削除**」をクリックします。

必要に応じて、フィールドを選択し、「1 つ上へ」または「1 つ下へ」をクリックしてリスト内でフィールドを上下に移動することにより、「ログ項目」リスト内のフィールドを再配列します。

「照合>>」をクリックすることにより、一致するフィールドを自動的に見つけることができます。「テーブル項目」名が完全に一致するフィールドが、「ログ項目」リストに自動的に追加されます。一致するフィールドが複数ある場合、最初の一致が使用されます。

- e. 「任意の保存先に記録」を選択した場合のみ、出力ファイルまたはテーブルの更新の処理方法を指定する以下のいずれかのオプションを選択します。
 - **データ追記** — テーブルまたはファイルの末尾に新規コンタクト情報を追加します。区切り記号付きファイルにこのオプションを選択する場合、ラベルは最初の行としてエクスポートされません。データベース・テーブルではこのオプションが推奨されます。
 - **データ置換** — テーブルまたはファイルから既存のデータを削除して、新規のコンタクト情報に置き換えます。
6. (オプション) 「全般」タブをクリックして、名前または注釈、またはその両方をプロセスに割り当てます。

割り当てられた名前がフローチャートのプロセスに表示されます。注釈は、ユーザーがフローチャートのプロセスを指すと表示されます。

7. 「OK」をクリックします。

プロセスが構成され、フローチャート内で使用可能な状態で表示されます。予期される結果をプロセスが返すかどうかを確認するために、プロセスをテストできます。

レスポンス

レスポンス・プロセスは、メール・リストやコール・リストなどのコンタクト・プロセスでコンタクトされた顧客のレスポンスをトラッキングします。レスポンス・プロセスは、プロセス構成時に定義したルールに基づいて、どのレスポンスが有効とみなされるか、およびそれらのレスポンスがキャンペーンまたはオファーにどのように結び付いているかを評価します。レスポンス・プロセスの出力は、複数のレスポンス履歴システム・テーブルに書き込まれます。このテーブルでは、Campaignのパフォーマンス・レポートおよび収益性レポートを使用した分析にデータを利用できます。

レスポンス・プロセスは、最も単純な形式で、選択プロセス (およびオプションで、セグメント・プロセス) に接続されたそれ自身のフローチャートに表示することができます。このようなフローチャートでは、選択プロセスは、レスポンスとそのレスポンス・アクションに関するデータを含むマップ・テーブルから ID を選択します。これらの ID は、セグメント・プロセスによって意味のあるグループにセグメント化され、最終的にはレスポンス・プロセスに渡されます。レスポンス・プロセスでは、レスポンス・トラッキング・ルールが適用されて、レスポンス履歴テーブルに出力が書き込まれます。

レスポンス・プロセスは対応するコンタクト・プロセスと緊密に連携しており、現在トラッキングされているレスポンドーは、特定のオファーによるターゲットとされたセルのメンバーであった可能性があります。そのため、レスポンス・プロセスを構成するには、事前に以下を行う必要があります。

- コンタクト・リストのオーディエンス・レベルを知り、コンタクトおよびトラッキングする各オーディエンス・レベルのコンタクト履歴およびレスポンス履歴のシステム・テーブルがマップされていることを確認する。これは通常、システム管理者が行います。
- レスポンドーをトラッキングするオーディエンス・レベルごとに別個のレスポンス・プロセスを設定する。
- トラッキングするレスポンス・タイプを表すコードを知る。
- トラッキングのためにマップできるように、コンタクト・リストに送信される Campaign 生成コード (キャンペーン、セル、オファー、または処理コード) は何かを知る。
- Campaign で、Campaign システム・テーブル・データベース内に一時テーブルを作成できるようにする (すなわち、AllowTempTables プロパティを TRUE に設定する必要があります)。

レスポンス・プロセスを構成するには

1. フローチャートの編集モードで、レスポンス・プロセスが、入力としてそのレスポンス・プロセスによって使用される出力セルを持つ 1 つ以上の構成済みプロセスに接続されていることを確認します。
2. フローチャート・ワークスペースでレスポンス・プロセスをダブルクリックします。

プロセス設定ダイアログが表示されます。

3. 「ソース」タブをクリックします。
 - a. 「入力」ドロップダウン・リストからソース・セル (複数可) を選択します。ソース・セルは、顧客レスポンス情報を保持するデータマート内のマップされたテーブルから生成されます。

注: レスポンス・プロセスへの入力として区切り記号付きフラット・ファイルを使用する場合、入力ファイルのすべてのデータ型が適切にマップされていることを確認する必要があります。マップの確認はレスポンス・プロセスによって実行されないためです。不一致のデータ型を使用すると (例えば、UA_Treatment.TreatmentCode フィールドが「ストリング」型の場合に、処理コードが「数値」としてマップされている場合など)、一部のデータベース (例えば、DB2® 上のシステム・テーブルなど) でデータベース・エラーが発生します。

- b. 「レスポンス日付」ドロップダウン・リストを使用して、レスポンス・プロセスによって出力されるレコードに関連付ける日付を選択します。デフォルトでは、「今日」の値が選択されます。また、ユーザー定義項目を使用して「レスポンス日付」の値を設定することもできます。
- c. トラッキングする「レスポンス・タイプ・コード」を選択します。レスポンス・タイプ・コードはグローバルに定義されており、すべてのキャンペーンで使用可能です。

4. 「**処理へのマッピング**」タブをクリックします。

「**操作項目候補**」リストが表示されます。このリストから、トラッキングする関連フィールドを選択します。「**オファー項目/処理項目の組み合わせ**」リストの「**オファー/処理属性**」列に、システム内のすべてのオファーまたは処理属性がリストされます。

- a. 「**操作項目候補**」リストからトラッキングするフィールドを選択し、「**追加 >>**」ボタンを使用して、「**オファー項目/処理項目の組み合わせ**」リストにこれらのフィールドを移動し、一致させる適切なフィールドがペアになるようにします。

「**Ctrl+クリック**」を使用すると複数のフィールドを一度に選択することができ、「**Shift+クリック**」を使用すると、隣接するフィールドの範囲を選択することができます。また、「**操作項目候補**」にユーザー定義項目を使用することもできます。

- b. 「**オファー項目/処理項目の組み合わせ**」リストからフィールドを削除するには、削除するフィールドを選択し、「**<<削除**」をクリックします。
- c. 必要に応じて、フィールドを選択し、「**1 つ上へ**」または「**1 つ下へ**」をクリックしてリスト内でフィールドを上下に移動することにより、「**オファー項目/処理項目の組み合わせ**」リスト内のフィールドを再配列します。

注: マップされていないフィールド、および値が使用不可 (または NULL) のフィールドは、レスポンス・アトリビュション (帰属) に使用されません。処理インスタンスがレスポンスの帰属を受け取るには、データが入力されたすべてのフィールドが一致している必要があります (ただし、コントロールは除く)。この場合、そのすべてのコードは無視されます。

5. 「**ログ**」タブをクリックして、レスポンス履歴に記録するフィールドを指定します。

「**選択項目**」リストからフィールドを選択し、「**追加>>**」ボタンを使用して、「**ログ項目**」リストにこれらのフィールドを移動します。また、「**選択項目**」にユーザー定義項目を使用することもできます。

「**ログ項目**」リストからフィールドを削除するには、削除するフィールドを選択し、「**<<削除**」をクリックします。

「**ログ項目**」リスト内のフィールドを再配列するには、フィールドを選択し、「**1 つ上へ**」または「**1 つ下へ**」をクリックしてリスト内でフィールドを上下に移動します。

「**照合>>**」をクリックすることにより、一致するフィールドを自動的に見つけることができます。「**テーブル項目**」名が完全に一致するフィールドが、「**ログ項目**」リストに自動的に追加されます。一致するフィールドが複数ある場合、最初の一致が使用されます。

6. (オプション) 「**全般**」タブをクリックして、名前または注釈、またはその両方をプロセスに割り当てます。

割り当てられた名前がフローチャートのプロセスに表示されます。注釈は、ユーザーがフローチャートのプロセスを指すと表示されます。

7. 「OK」をクリックします。

プロセスが構成され、フローチャート内で使用可能な状態で表示されます。予期される結果をプロセスが返すかどうかを確認するために、プロセスをテストできません。

モデル

モデル・プロセスを使用して、ランタイム・モデル・ファイルを作成します。ユーザーはリアルタイム・スコアリングまたはバッチ・スコアリングにこのファイルを使用できます。このプロセスは、応答する可能性が高い候補者を決定するために顧客または見込み顧客をスコアリングする際に使用できるレスポンス・モデルの作成を自動化します。

通常、フローチャート内でモデル・プロセスを設定し、2つのセルから入力を取得します。2つのセルのうち1つはレスポnder（積極的に反応するか、オファーまたはコミュニケーションを受け取ったときに何らかのアクションを起こすコンタクト）を表し、もう1つは非レスポnder（何のアクションも起こさないコンタクト）を表します。

例えば、2つの選択プロセスを使用して、1つのプロセスでオファーとコンタクトがあった人を選択し、もう1つのプロセスでレスポnderを選択します。次に、マージ・プロセスを使用してレスポnderを除外し、非レスポnderのリストを取得できるようにします。マージ出力と「レスポnder」選択出力をモデル・プロセスに接続し、非レスポnderとレスポnderのセルをそのモデルで使用できるようにします。

別のシナリオとして、選択プロセスを使用して、オファーのすべてのコンタクトを選択してから、セグメント・プロセスを使用して、そのセルをレスポnderと非レスポnderにセグメント化することができます。

モデル・プロセスを構成するには

1. フローチャートの編集モードで、モデル・プロセスが、入力としてそのモデル・プロセスによって使用される出力セルを持つ1つ以上の構成済みプロセスに接続されていることを確認します。
2. フローチャート・ワークスペースでモデル・プロセスをダブルクリックします。

プロセス設定ダイアログが表示されます。

3. 「ソース」タブの「レスポnder」および「ノンレスポnder (Non-Responder)」ドロップダウン・リストから、レスポnderおよび非レスポnderをそれぞれ選択します。ドロップダウン・リストに、モデル・プロセスへの入力セルが取り込まれます。モデル・プロセスへの入力がない場合は、リストは空になります。

注: 両方の入力セルは、同じオーディエンス・レベルを持っている必要があります。

4. 「説明変数」リストから、モデル生成時にモデル・プロセスで使用される変数を選択します。すべての変数を選択して（「すべて使用」をクリック）、モデルリ

ングに最も効果的な入力セットをモデリング・プロセスに決定させることができます。ただし、モデルに価値を付加しない変数を除去することにより (例えば、すべてのレコードに対して同じ値を含む変数、またはすべてのレコードに対して異なる値を含む変数)、自動変数選択プロセスを高速化できます。

注: 変数の予測値について確信が持てない場合は、その値を含めて、その値を使用すべきかどうかをモデル・プロセスに決定させます。

また、モデルの構成にユーザー定義項目を使用することもできます。

5. 「方法」タブで、「**最適モデル (Best Model)**」オプションを使用して、データ・マイニング・アルゴリズムが最適モデルに到達する方法、すなわち、指定された期間に基づくのか、または指定された数の候補モデルの中から選択するのかを選択します。
 - **最適モデル生成期間** – (デフォルト) モデリングの期間を指定できるようにします。「モデル」プロセスは、ユーザーが指定した期間に作成された最適モデルを保持します。デフォルトは 3 時間です。
 - **最適モデル候補数** – 作成するモデルの数を指定できるようにします。「モデル」プロセスは、これらのモデルの中で最適なモデルを保持します。デフォルトは 20 です。
6. 「使用アルゴリズム」ドロップダウン・リストからアルゴリズムを選択し、実行するモデリングのタイプを選択します。1 つ、複数、またはすべてのアルゴリズムを選択できます。

注: 「すべてのアルゴリズム」 (デフォルト) を選択すると、さらに正確なモデルが生成されますが、所要時間が長くなる可能性があります。

7. 「**保持するモデルの最大数**」フィールドに任意の正整数を入力し、保持するモデルの最大数を設定します。デフォルトは 5 です。各トップ・モデルは、指定されたファイル名の末尾にポンド記号 (#) が付加されて保存されます。複数のモデルが保持される場合、モデルのランクを示すインデックスが基本ファイル名に付加されます。

注: 保持することを選択したモデルの数が多いほど、対応する情報を保存するためにより多くのディスク・スペースが必要になります。

8. 「**モデル・ファイル名**」フィールドに、作成されるモデル・ファイルの絶対パス名を指定するか、「参照」をクリックして、ファイルに移動します。プロセスを実行すると、NAME.rtm モデル・ファイルが生成され、このファイルを使用して、スコア・プロセスによるスコアリングを実行できます。
9. (オプション) 「全般」タブをクリックして、名前または注釈、またはその両方をプロセスに割り当てます。

割り当てられた名前がフローチャートのプロセスに表示されます。注釈は、ユーザーがフローチャートのプロセスにマウスオーバーすると表示されます。

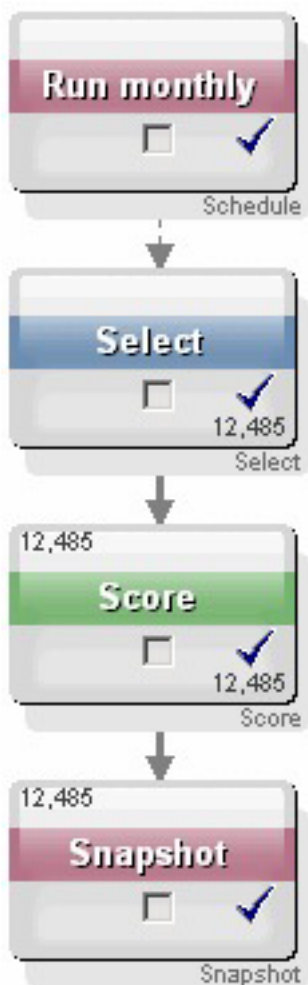
10. 「**OK**」をクリックします。

プロセスが構成され、フローチャート内で使用可能な状態が表示されます。予想される結果をプロセスが返すかどうかを確認するために、プロセスをテストできません。

スコア

スコア・プロセスを使用して、購買を行うか、オファーに応答する各顧客の見込みを評価し、実行しようとしているキャンペーンの最も優良な顧客または見込み顧客を識別します。スコア設定は、PredictiveInsight または Campaign のモデル・プロセスによって作成されるランタイム・モデル・ファイル (.rtm ファイル) からインポートされるモデリング結果に基づいています。

スコア・プロセスは、フローチャート内で以下のように使用することができます。フローチャートが、毎月フローチャートを実行するスケジュール・プロセスによって開始されます。このフローチャートは、データマート内のデータから顧客 ID のリストを生成する選択プロセスに接続されています。次に、ID がスコア・プロセスに送られて、データ・モデルに照らしてスコアの設定が行われます。最後に、スコア・プロセスの結果がスナップショット・プロセスに送られて、スプレッドシートに書き出されます。



スコア・プロセスを構成するには

1. フローチャートの編集モードで、スコア・プロセスが、入力としてそのスコア・プロセスによって使用される出力セルを持つ構成済みプロセスに接続されていることを確認します。
2. フローチャート・ワークスペースでスコア・プロセスをダブルクリックします。

プロセス設定ダイアログが表示されます。

3. 「入力」ドロップダウン・リストを使用して、スコアリングする顧客 ID を含むソース・セルを選択します。

重要: スコアリングするために複数のソース・セルを選択することはできません。

4. 「モデル数」フィールドに、整数を入力するか、上下の矢印ボタンを使用してカウントを増減することにより、作成するモデルの数を指定します。

注: 「パラメーター対象」ドロップダウン・リストには、「モデル数」フィールドに指定したモデル数と同じ数のモデルが、「モデル 1」、「モデル 2」、「モデル 3」などの名前が含まれています。モデルの数を変更すると、「パラメーター対象」ドロップダウン・リストにリストされるモデルが自動的に変更されます。

5. スコアリングするモデルごとに、「スコア項目名」および「モデル・ファイル」を指定します。「パラメーター対象」ドロップダウン・リストを使用して、構成する必要がある各モデルを選択します。
6. 「スコア項目名」フィールドに、そのモデルのスコアリング結果を保管するフィールドの名前を入力します。デフォルト名は、「scoreN_1」です。

フィールドに「MYSCORE」と入力し、指定されたモデルに単一の出力フィールドが定義されている場合、スコア・フィールド名は「MYSCORE」になります。複数の出力がある場合は、スコア・フィールド名は、「MYSCORE_1」、「MYSCORE_2」、「MYSCORE_3」などのようになります。

Campaign によって、使用可能なフィールドのリストが表示される場合、スコア・フィールドはテーブルに属している場合のように表示されます。

7. 「モデル・ファイル」フィールドに、顧客 ID のスコアリングに使用するモデル・ファイルのフルパスとファイル名を入力します。

使用するモデルのフルパスとファイル名を入力するか、「参照」をクリックして、標準の Windows ファイル選択ウィンドウを呼び出します。

8. 「変数の照合」をクリックし、変数名を入力ソースのテーブルのフィールドと照合します。「変数の照合」ウィンドウが表示されます。

顧客を適切にスコアリングするために、モデルで使用される変数を、スコアリングするデータ・セット内の対応するフィールドと照合できることを確認します。例えば、モデルが average_balance 変数を使用する場合、その変数を、スコアリングされるデータ・セット内の平均残高を含むフィールドと照合する必要があります。

- a. データ・セット内のフィールドと照合する「**選択項目**」リスト内のフィールドを選択し、「**追加>>**」ボタンを使用して、それらのフィールドを「**照合結果**」リストに移動します。

「**照合**」をクリックすることにより、一致するフィールド名を自動的に照合することができます。これは、手動照合に優先します。

「**ユーザー定義項目**」をクリックして、ユーザー定義項目を作成することもできます。

重要: スコア・プロセスを構成するには、「**照合結果**」リスト内のすべての変数を照合する必要があります。変数名とフィールド名は一致している必要はありませんが、データ型 (数値またはストリング) は一致していなければなりません。

- b. 変数名の照合が完了したら、「**OK**」をクリックします。

「**変数の照合**」ウィンドウが閉じ、プロセス設定ダイアログの「**スコア**」タブに戻ります。

9. (オプション) 「**全般**」タブをクリックして、名前または注釈、またはその両方をプロセスに割り当てます。

割り当てられた名前がフローチャートのプロセスに表示されます。注釈は、ユーザーがフローチャートのプロセスにマウスオーバーすると表示されます。

10. 「**OK**」をクリックします。

プロセスが構成され、フローチャート内で使用可能な状態が表示されます。予期される結果をプロセスが返すかどうかを確認するために、プロセスをテストできます。

プロセス用のデータ・ソースの選択

オーディエンス、セグメントの作成、キューブ、抽出、モデル、レスポンス、セグメント、および選択などの多くのプロセスでは、プロセスが作用するデータのソースを指定する必要があります。プロセス用のデータ・ソースは、着信セル、セグメント、テーブル、または複数のテーブルの場合があります。

プロセス用のデータ・ソースは、多くの場合、設定ウィンドウの最初のタブ上の「**入力**」フィールドに「**入力**」ドロップダウン・リストを使用して指定します。手順については、各プロセスの構成の説明を参照してください。例えば、57 ページの『**選択プロセスを構成するには**』を参照してください。

入力セル、セグメント、またはテーブルをプロセスへの入力として選択するには

プロセス設定ダイアログの最初のタブで、「**入力**」ドロップダウン・リストから入力セル、セグメント、またはテーブルを選択します。「**入力**」ドロップダウン・リストには、テーブル・カタログ内で現在マップされているベース・テーブルのすべてが、それらのオーディエンス・レベルと共に表示されます。入力セルがある場合、セルと同じオーディエンス・レベルを持つテーブルのみが表示されます。

複数のテーブルをプロセスへの入力として選択するには

複数のテーブルをプロセスへの入力として選択することができます。

1. プロセス設定ダイアログで、「入力」ドロップダウン・リストから「テーブル」>「複数のテーブル」を選択します。

注: 複数のテーブルを選択する場合、各テーブルのオーディエンス・レベルが同じである必要があります。

省略符号ボタンをクリックすることもできます。「テーブルの選択」ウィンドウには、キャンペーンのテーブル・カタログ内のベース・テーブルがすべて表示されます。

2. 選択する各テーブルの横にあるボックスにチェック・マークを付けます。
3. 「OK」をクリックして、プロセス設定ダイアログに戻ります。「入力」項目には「複数のテーブル」が表示されます。これは、省略符号ボタンをクリックして表示できます。

新規テーブルをソースとして選択するためにマップするには

プロセス設定ダイアログで、「入力」ドロップダウン・リストから「テーブル」>「新規テーブル」を選択します。

「新規テーブル定義」ウィンドウでは、「ベース・レコード・テーブル」タイプが事前選択されています。プロセス設定ダイアログで、「テーブル・マッピング」ダイアログからテーブルをマップするのと同じ方法で新規ベース・テーブルをマップします。

注: テーブルのマップを行える、適切な権限が必要です。テーブルのマッピングについて詳しくは、「*Campaign* 管理者ガイド」を参照してください。

プロセス用のデータベース内処理の選択

データベース内処理は、フローチャート・プロセスに対してグローバルおよびフローチャートごとにオンまたはオフにできるオプションの 1 つです。

注: データベース内処理は、一部のデータベースではサポートされません。*Campaign* 管理者は、このオプションがご使用のデータ・ソースで使用可能かどうかを確認することができます。

データベース内処理オプションでは、以下について判断します。

- データベース・レベルまたはローカルの *Campaign* サーバー・レベルで実行される操作。
- 操作の結果に起こること。

データベース内処理オプションでは、通常、データベースからの ID が処理のために *Campaign* サーバーに不必要にコピーされないようにすることによって、フローチャートのパフォーマンスを向上させます。データベース内処理をオンにしている場合、データのソート、結合、マージなどの処理タスクは、可能な場合は常に、

Campaign サーバー上ではなくデータベース・サーバー上で実行され、プロセスの出力セルはデータベース・サーバー上の一時テーブル内に格納されます。

必要なロジックによっては、データベース内処理をオンにしている場合でも、一部の機能が Campaign サーバー上で引き続き実行されます。例えば、Campaign でユーザー定義項目を計算する場合、SQL を使用して計算の一部を実行できるかどうかを確認するために、まずそのユーザー定義項目の式を評価します。簡単な SQL ステートメントを使用してその計算を実行できる場合、その計算は「データベース内」で実行できます。その計算を実行できない場合は、その計算を処理し、フローチャート内の各プロセスでその結果を保持するために Campaign サーバー上に一時テーブルが作成されます。

重要: 出力セル・サイズになんらかの制限を指定しているか、またはそのプロセスで一時テーブルが使用不可になっている場合、データベース内処理は実行できません。

未加工 SQL ステートメントから構成されるカスタム・マクロの処理は、次の制限付きでデータベース内で実行されます。

- すべての未加工 SQL カスタム・マクロが `select` で始まり、またテキストの残りに `from` が 1 つだけ含まれている必要があります。
- <TempTable> 構文への挿入のみをサポートするデータベースの場合、未加工 SQL カスタム・マクロと同じオーディエンス・レベルの同じデータ・ソースに、ベース・テーブルを少なくとも 1 つマップする必要があります。未加工 SQL カスタム・マクロによって選択されたフィールドが一時テーブルのフィールドにとってサイズが大き過ぎる場合、実行時エラーが発生します。

重要: データベース内処理で未加工 SQL を使用する場合、上流プロセスからの一時テーブルと結合するようにその未加工 SQL をコーディングする必要があります。このコーディングを行わないと、上流のプロセスからの結果によって未加工 SQL の結果の有効範囲が限定されません。

データベース内処理をオンまたはオフにする

データベース内処理の設定は、次のように設定することができます。

- フローチャートごとに
- システム全体でグローバルに

このオプションのベスト・プラクティスは、グローバル設定をオフにし、フローチャート・レベルでオプションを設定することです。

フローチャートに対してデータベース内処理をオンまたはオフにするには

個々のフローチャートに対するデータベース内処理オプションによって、グローバル設定が上書きされます。

1. 「編集」モードのフローチャート・ページで、「システム管理」アイコンをクリックして「詳細設定」を選択します。

「詳細設定」ウィンドウが表示されます。

2. 「フローチャート実行中にデータベース内最適化を使用する」チェック・ボックスを選択します。
3. 「OK」をクリックします。

フローチャートを保存して実行すると、データベース内処理が可能な限り使用されます。

データベース内処理をグローバルにオンまたはオフにするには

データベース内処理をグローバルにオンまたはオフにするには、「構成」ページの Campaign > partitions > partition[n] > server > optimization > useInDbOptimization プロパティを適切な値 (TRUE または FALSE) に設定します。

「構成」ページの使用方法については、「*IBM Unica Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

プロセスでのクエリーの作成

特定のプロセスを構成する際に、クエリーを使用してデータ・ソースから特定のデータを返すことができます。Campaign を使用すれば、次のいずれかの方法を使用したクエリーの作成が容易になります。

- 120 ページの『「ポイント & クリック」を使用してクエリーを作成するには』
- 121 ページの『「SQL 入力」を使用してクエリーを作成するには』
- 122 ページの『「入力サポート」を使用してクエリーを作成するには』
- 123 ページの『SQL を使用したクエリーの作成』

Campaign プロセスでのクエリーの評価方法

Campaign プロセス内のクエリーは、数学の規則を使用して左から右に評価されます。

例えば、ステートメントの

```
[UserVar.1] < PDF < [UserVar.2]
```

は、次のように評価されます。

```
([UserVar.1] < PDF) < [UserVar.2]
```

つまり、次に示すように、ステートメントの最初の部分 (**[UserVar.1] < PDF**) が true または false (1 または 0) と評価されてから、その結果が 2 番目のステートメントに渡されます。

```
[1 | 0] < [UserVar.2]
```

この例で PDF が [UserVar.1] より大きく [UserVar.2] より小さいと評価されるためには、次のクエリーを構成する必要があります。

```
[UserVar.1] < PDF AND PDF < [UserVar.2]
```

このステートメントは次のステートメントと同等です。

([UserVar.1] < PDF) AND (PDF < [UserVar.2])

「ポイント & クリック」を使用してクエリーを作成するには

ここでは、プロセス設定ダイアログの「ポイント & クリック」機能を使用してクエリーを作成する方法について説明します。

クエリーを編集するには、クエリー内の任意の項目をダブルクリックして別の値を選択します。「ソースの選択」ドロップダウン・リストから新規項目を選択すると、既存のクエリーが削除されます。

1. セグメント、選択、書き込みなどのクエリーを使用するプロセスでは、クエリーを作成するためのプロセス設定ダイアログにアクセスします。例えば、「選択」プロセス・ボックスを開き、「選択」タブの「条件を指定して顧客 ID を選択」をクリックします。

デフォルトでは、「ポイント & クリック」クエリー・ビルダーが表示されません。

2. クエリーを作成するには、各列のセル（「項目名」、「演算子」、「値」、「AND/OR」）の内部をクリックし、右側のリストの任意の選択項目をダブルクリックします。「プロファイル」オプションが表示されたら、このオプションを使用してフィールドの値を表示することができます。各列の内部をクリックし、次に任意の選択項目をダブルクリックすると、以下の手順でクエリーを作成することができます。
 - 「項目名」を使用して、クエリー対象の項目を指定します。「IBM Unica Campaign 定義項目」を含む「選択項目」のリストから選択することができます。ユーザー定義項目を作成することもできます。
 - 「演算子」を使用して、比較演算子（=、<、>、Between など）を選択します。
 - 項目の「値」を選択します。
 - 別の式を追加するには、「AND/OR」列をクリックし、次に「AND」または「OR」をダブルクリックして、式の結合方法を指定します。
 - 評価の順序を制御するための括弧を追加するには、任意の式を選択し、「追加 (...)」を使用して、括弧のセットを追加します。1 組の括弧を削除する場合は「削除 (...)」を使用し、選択した式内の括弧をすべて削除する場合は「すべて消去 (...)」を使用します。括弧を使用すると、複雑なクエリーを定義する場合に複数の式をグループ化することができます。例えば、次のようなクエリーを定義することができます: (AcctType = 'Gold' AND Rank = 'A')OR NewCust = 'Yes' is different from AcctType = 'Gold' AND (Rank = 'A' OR NewCust = 'Yes')
 - 1 つ以上の式を選択し、「上へ移動」または「下へ移動」を使用して、式の順序を変更します。
 - 任意の式を選択し、「挿入」を使用して、空の行を追加します。
3. 「構文チェック」をクリックして、クエリーの構文が正しいかどうかを確認します。構文の確認によってデータベース・サーバーに負荷がかかることはありません。

Campaign により、構文エラーがあるかどうかが表示されます。

- クエリーの実行結果を確認するには、「**件数確認**」をクリックします。

重要: グローバル抑制およびセル・サイズ制限は、「件数確認」の数には適用されません。クエリーでは、正規化されていないデータを返す場合もあります。実行結果の正確な件数を取得するには、プロセスのテスト実行を行います。

クエリーのテスト中は、進行状況表示バーが表示されます。テストを中止するには、「**キャンセル**」をクリックします。

テストが終了すると、クエリーから返された行数が Campaign によって表示されます。(この数は、キャンペーンの実行時には異なる場合があります。)

- 「**OK**」をクリックします。

「SQL 入力」を使用してクエリーを作成するには

以下の説明では、プロセス設定ダイアログの「SQL 入力」機能を使用した新規クエリーの作成方法について記述しています。

既存のクエリーを編集するには、クエリー・テキスト・ボックス内で直接クエリーのテキストを編集します。

- セグメント、選択、書き込みなどのクエリーを必要とするプロセスでは、クエリー・テキスト・ボックスが組み込まれたプロセス設定ダイアログにアクセスします。

デフォルトでは、「**ポイント & クリック**」クエリー・ビルダーが表示されます。既存のクエリーは、すべてクエリー・テキスト・ボックス内に表示されず。

- 「**SQL 入力**」をクリックします。

「**ポイント & クリック**」クエリー列が、空のテキスト・ボックスに置き換えられます。

- 「入力」のデータ・ソースおよび照会するデータ・ソースを「**ソースの選択**」ドロップダウン・リストから選択します。

「**選択項目**」のリストは、「**ソースの選択**」の選択項目に基づいて表示されます。

- クエリーは次のようにして作成します。

- 「**選択項目**」リストから項目名またはテーブル名を選択し、ダブルクリックしてクエリー・テキスト・ボックスにそれらを入力します。また、一度クリックしてから、「**<-使用**」をクリックしてクエリー・テキスト・ボックスにそれを移動することもできます。
- 必要な演算子と値を入力します。選択した項目の値を表示するために、「**プロファイル**」をクリックできます。

注: 項目名とテーブル名はクエリー・テキスト・ボックスに直接入力できますが、リストからそれらの名前を選択することが構文エラーの発生を防ぐために役立ちます。

- クエリーの構文を検査するには、「**構文チェック**」をクリックします。

検出されたエラーを表示する確認ウィンドウが Campaign によって表示されません。「**OK**」をクリックします

クエリーの構文を検査しても、データベース・サーバーに負荷がかかることはありません。

- クエリーの実行結果を確認する場合は、「**件数確認**」をクリックします。

重要: グローバル抑制およびセル・サイズ制限は、「件数確認」の数には適用されません。クエリーでは、正規化されていないデータを返す場合もあります。正確な結果の数を得るには、プロセスのテスト実行を行います。

クエリーのテスト中は、進行状況表示バーが表示されます。テストを中止するには、「**キャンセル**」をクリックします。

テストが完了すると、クエリーが返した行数を表示する確認ウィンドウが Campaign によって表示されます。(この数は、キャンペーンの実行時には異なる場合があります。)

- クエリーを作成し終わったら、「**OK**」をクリックします。

プロセス設定ボックスが閉じて、「**編集**」モードのフローチャート・ページに戻ります。

「入力サポート」を使用してクエリーを作成するには

「入力サポート」には、クエリーを作成するために使用できる項目と組み合わせることができる選択可能な演算子および関数が用意されています。「入力サポート」は、Campaign のマクロ言語またはカスタム・マクロで、クエリーを構成するために役立ちます。

- セグメント、選択、書き込みなどのクエリーを必要とするプロセスでは、クエリー・テキスト・ボックスが組み込まれたプロセス設定ダイアログにアクセスします。

デフォルトでは、「**ポイント & クリック**」クエリー・ビルダーが表示されません。既存のクエリーは、すべてクエリー・テキスト・ボックス内に表示されません。

- 「**SQL 入力**」をクリックします。

「**ポイント & クリック**」クエリー列が、空のテキスト・ボックスに置き換えられます。「入力サポート」ボタンは有効になっています。

- 「**入力サポート**」をクリックします。

「入力サポート」がクエリー・テキスト・ボックスの下に表示されます。「入力サポート」には、よく使用される演算子を挿入するためのボタン一式、およびマクロの全リストが含まれています。

- クエリーは次のようにして作成します。

- a. 「入力サポート」内のマクロのリストから、使用するマクロを選択し、ダブルクリックしてクエリー・テキスト・ボックスにそのマクロを入力します。マクロを選択すると、「入力サポート」には、選択したマクロの概要説明と構文規則が表示されます。

注: カスタム・マクロを選択した場合、この説明と構文規則はそのマクロを記述した人によって作成されています。

- b. 必要な演算子は、直接入力するか、または「入力サポート」の各ボタンを使用して入力します。

注: 項目名とテーブル名はクエリー・テキスト・ボックスに直接入力できますが、リストからそれらの名前を選択することが構文エラーの発生を防ぐために役立ちます。

5. 「SQL 入力」を使用して、クエリーの作成を続けます。
6. クエリーを作成し終わったら、「閉じる」をクリックします。
「入力サポート」が閉じられます。
7. 「OK」をクリックしてプロセス設定ダイアログを閉じます。

SQL を使用したクエリーの作成

経験豊富な SQL ユーザーの場合、独自の SQL クエリーを作成でき、また他のアプリケーションで作成された SQL クエリーをコピーして貼り付けることによって使用することもできます。未加工 SQL の記述は、Campaign の拡張機能です。つまり、正しい構文と照会結果に対する責任はユーザーにあります。

重要: 選択プロセスで未加工 SQL を使用する場合に正しい結果 (つまり、オーディエンス ID の正しいリスト) を得るためには、データベース内最適化が有効になっていて、選択プロセスに対する入力セルが存在するときに、<TempTable> トークンの使用が必要になります。また、Campaign で非常に大きいテーブルを処理する際のパフォーマンスを大幅に向上させるためには、データベース内最適化を使用しない場合でも <TempTable> トークンを使用します。

SQL クエリーでは、ベース・テーブル上のキーで定義された一意の ID のみからなるリストを返す必要があります。

クエリーでは、次の構文を使用する必要があります。

```
SELECT DISTINCT(<key1> [<key2>,...]) FROM <table> WHERE <condition> ORDERBY <unique_id>
```

このクエリーでは、ソート、およびデータの重複解消を実行するようにデータベースに要求します。DISTINCT 節または ORDERBY 節のいずれかを省略すると、Campaign によって引き続きアプリケーション・サーバー上のデータがソートされて重複が除去されるため、引き続き正しい結果を受け取りますが、パフォーマンスがより低下する可能性が高くなります。

- 「すべての顧客 ID を選択」を選択している場合、選択プロセスが実行される前または後に、特定のデータベース内にあるレコードに対して実行する未加工 SQL コマンドを記述することができます。

- また、上記に加えて選択基準を顧客 ID に適用することを選択している場合、選択基準を作成する際に「クエリー・ビルダー (Query Builder)」での未加工 SQL の使用を有効にすることもできます。これを有効にしない場合、「Unica 式 (Unica Expressions)」および「カスタム・マクロ」を使用できるだけです。

Campaign での未加工 SQL ステートメントの作成

クエリーを必要とするプロセスでは、「詳細設定」機能にアクセスするためのクエリー編集ウィンドウ上の「詳細設定」をクリックします。実際の機能は、プロセスごとに異なります。

例えば、選択プロセスでは「詳細設定」を使用して、未加工 SQL を使用してクエリーを作成でき、また前処理または後処理あるいはその両方の SQL コマンドを実行できます。

「詳細設定」ウィンドウには、以下の 2 つのペインがあります。

- **前処理** — クエリーが実行される前に処理される未加工 SQL を入力する
- **後処理** — クエリーが実行された後に処理される未加工 SQL を入力する

この機能を使用すれば、SQL プロシージャをプロセス実行の一部として取り込むことができ、ETL、ルーチン・マート更新、インライン・パフォーマンス・チューニング、およびセキュリティー機能などの作業で Campaign を使用する際に役立ちます。

「詳細設定」では、以下を行うために前処理および後処理の SQL ステートメントを使用できます。

- データベースのストアド・プロシージャを実行する
- テーブルおよびインデックスを作成、ドロップ、および再作成する
- 他のユーザーまたはグループに対して権限を付与したり、権限を変更したりする
- 複数ステップのデータベース・コマンドを編成する
- 複雑なデータベース・ルーチンの実行 (データベースへの接続に外部スクリプトの使用を必要としない)

SQL ステートメントは、表示されている順に実行されます。

- 前処理 SQL ステートメントは、クエリーの実行前に実行されます。
- 後処理 SQL ステートメントは、クエリーの実行後に実行されます。

選択プロセスのクエリーでは、これらのステートメントは未加工 SQL または標準の処理のいずれかを用いて使用できます。

未加工 SQL クエリーとデータベース内処理

未加工 SQL クエリーを使用したデータベース内処理について詳しくは、117 ページの『プロセス用のデータベース内処理の選択』を参照してください。

TempTable トークンおよび OutputTempTable トークンの未加工 SQL クエリーでの使用

入力セルを保持する「選択」プロセスで未加工 SQL クエリーを使用する場合、Campaign 内の動作はデータベース内最適化が有効か無効かによって異なります。

データベース内最適化が無効の場合、未加工 SQL クエリーからの ID のリストは入力セルからの ID リストに対して自動的に突き合わされるため、結果として生成される ID のリストは予期どおりにそのセルのサブセットです。しかし、データベース内最適化が有効になっている場合、Campaign では「選択」プロセスから生成される ID リストが最終リストであると予期して、入力セルの ID リストに対して、このリストを自動的に突き合わせません。したがって、データベース内最適化が有効になっている場合、中間的な「選択」プロセス（言い換えれば、入力セルを保持する「選択」プロセス）に対して書き込まれる未加工 SQL クエリーで、入力セルに対して正しく結合するために <TempTable> トークンを使用することが非常に重要です。これによって正しい結果が保証されるだけでなく、入力セルに対する結合によって、入力セル内に存在しないオーディエンス ID の、無関係な処理の発生が防がれることで、パフォーマンスも向上します。

注: 最高のパフォーマンスを得るためには、データベース内最適化を使用しない場合でも <TempTable> トークンを使用してください。<TempTable> トークンを使用すると、パフォーマンスが大幅に向上する可能性があります（特に Campaign で非常に大規模なテーブルを処理する場合）。

さらに、<OutputTempTable> トークンの使用によって、データベース内最適化が維持され、オーディエンス ID がデータベースから Campaign サーバーに取得し戻されることが防止されます。

例: TempTable トークンおよび OutputTempTable トークンの使用: 「ゴールド」の顧客（例えば、Indiv.AcctType = ‘ゴールド’）である 1 万人の顧客を選択する Select1 というプロセスがあるとします。そして、次の未加工 SQL クエリーを使用して、第 2 の選択プロセス（「Select2」）に Select1 を接続します。

```
Select p.CustID from Indiv p, <TempTable> where p.CustID =  
<TempTable>.CustID group by p.CustID having sum(p.PurchAmt) > 500
```

この例では、入力セル内に存在する、購入額の合計が 500 ドルを超える顧客（言い換えると、「ゴールド」の顧客タイプの顧客）を選択します。

これに対して、次の未加工 SQL クエリーでは <TempTable> トークンと結合を省略しています。

```
Select p.CustID from Purchases p group by p.CustID having sum(p.PurchAmt) >  
500
```

最初に Purchases テーブル内の顧客すべて（何百万もの顧客になる可能性がある）について個々の購入額の合計を算出してから、その顧客が「ゴールド」の顧客であるかどうかに関係なく、購入額が 500 ドルを超える顧客すべてを選択します。

したがって、最良のパフォーマンスを得るためには、データベース内最適化が無効の場合でも入力セルが存在するときは、<TempTable> トークンを使用して未加工 SQL クエリーを作成します。

この例では、話を単純化するために <OutputTempTable> トークンを使用していませんが、データベース内最適化を維持して、オーディエンス ID がデータベースから

Campaign サーバーに取得し戻されないようにするために、作成する未加工 SQL クエリーには <OutputTempTable> トークンを組み込む必要があります。以下に例を示します。

```
Create table <OutputTempTable> as Select p.CustID from Purchases p,  
<TempTable> where p.CustID = <TempTable>.CustID group by p.CustID having  
sum(p.PurchAmt) > 500
```

未加工 SQL クエリーでの書き込みテーブルの参照

<Extract> トークンを使用して、未加工 SQL によって下流のプロセス内の書き込みテーブルを参照することができます。このトークンを使用して後続の処理用のデータのサブセットを指定します。これによって、大きいテーブルで処理する場合にパフォーマンスが向上する可能性があります。

次の例では、勘定残高が 1,000 ドルを超えている顧客すべての顧客 ID を選択するために書き込みテーブルを照会します。

```
Select p.CUSTOMERID from USER_TABLE p, <Extract> where p.CUSTOMERID =  
<Extract>.CUSTOMERID group by p.CUSTOMERID having sum(p.BALANCE) > 1000
```

複数の抽出プロセスが含まれたフローチャートの場合、<Extract> トークンでは最新の使用可能な書き込みテーブルを必ず参照します。

注: マージ後は、<Extract> トークンは有効な場合も無効な場合もあります。トークンが予期どおりに処理するかどうかを判別するには、フローチャートをテスト実行します。

SQL テキスト入力域で未加工 SQL クエリーを作成するには

1. 「選択」プロセスの「ソース」タブで「条件を指定してデータ選択」オプションを有効にします。
2. 「詳細設定」をクリックします。

「詳細設定」ウィンドウが表示されます。
3. 「未加工 SQL を利用してデータ選択」を有効にします。
4. 「データベース」ドロップダウン・リストから、照会するデータ・ソースを選択します。
5. 対象とするオーディエンスを「オーディエンス・レベル」ドロップダウン・リストから選択します。
6. 「OK」をクリックして「詳細設定」ウィンドウを閉じます。
7. SQL テキスト入力域内でクリックします。
8. クエリーは、次の各方法によって作成します。
 - SQL テキスト入力ペインへの未加工 SQL クエリーの入力
 - 「入力サポート」の使用
 - 「ポイント & クリック」の使用

注: 「ポイント & クリック」をクリックすると、非 SQL クエリー式の作成に戻ります。

9. (オプション) 「件数確認」をクリックします。

重要: グローバル抑制およびセル・サイズ制限は、「件数確認」の数には適用されません。クエリーでは、正規化されていないデータを返す場合もあります。正確な結果の数を得るには、プロセスのテスト実行を行います。

- クエリーの作成およびテストが完了したら、「OK」をクリックし、ウィンドウを閉じて構成を保存します。

複数のコマンドを未加工 SQL ステートメントで渡すには

複数のコマンドを未加工 SQL ステートメントで渡すことができます。

ご使用のデータベースで複数のコマンドの受け渡しが可能の場合、以下の規則に従えば、有効な SQL コマンドを必要なだけ入力することができます。

- 各コマンドが適切な区切り文字で区切られている。
 - 最後のコマンドが select コマンドである必要がある。
 - この select コマンドでは、オーディエンス・レベルを定義する際に必要な関連する項目すべてを、オーディエンス・レベルを定義する順序と同じ順序で選択する必要がある。
 - その他に select ステートメントが使用されていない。
- 「選択」プロセスの「ソース」タブで「条件を指定してデータ選択」オプションを有効にします。
 - 「詳細設定」をクリックします。

「詳細設定」ウィンドウが表示されます。

- クリックして、「未加工 SQL を使用する」を有効にします。

これによって、正確なクエリー構文をデータベースに渡す機能である、未加工 SQL がアクティブになります。

- 使用するデータベース、および必要なオーディエンス・レベルを選択します。

「OK」をクリックします。

- 「条件を指定してデータ選択」テキスト・ボックスに SQL コマンドを入力します。

「OK」をクリックします。

前処理または後処理の SQL ステートメントを指定するには

- 「選択」プロセスの「ソース」タブで、「詳細設定」をクリックします。

「詳細設定」ウィンドウが表示されます。

- 前処理の未加工 SQL ステートメントを入力するには、「前処理」項目の中でダブルクリックし、プロセス実行の前に実行する SQL ステートメントを入力します。
- 次に、その行の「データベース」項目内でクリックし、このステートメントの実行対象のデータベースの名前を選択します。

注: 「データベース」ドロップダウン・リストには、使用できるデータベース（データ・ソースのカテゴリーが Marketing Platform 内の「構成」ページで構成

されているデータベース) がすべて表示されます。このドロップダウン・リスト内にデータベースが表示されない場合は、Campaign のシステム管理者にお問い合わせください。

4. リスト・ペイン内に SQL 関数のみを表示したい場合は、クリックして「SQL」チェック・ボックスを選択します。クリアして、使用できる関数と演算子の全リストを表示するには、再度クリックします。

注: 「詳細設定」ウィンドウで「未加工 SQL を使用する」オプションを既に有効にしている場合、「入力サポート」内の「SQL」オプションは有効になっています。これによって、SQL 演算子と SQL 関数だけが表示されるように、Campaign のマクロ関数が非表示になります。

項目のプロファイル

「プロファイル」機能を使用すれば選択された項目の個別の値リストとそれらの出現の頻度をプレビューすることができます。セグメント・プロセスの「データ項目で作成」ドロップダウン・リスト、または他の各プロセス設定ダイアログの「選択項目」のリストなどの、「プロファイル」ボタンが表示されるプロセスすべてで使用できる項目すべてをプロファイルすることができます。カウントが事前集計されていない限り、現在のセル内にあるレコードだけがカウントに含まれます。

注: 項目をプロファイルするための適切な権限が必要です。この機能へのアクセスに関する疑問点がある場合は、担当のシステム管理者に確認してください。

項目をプロファイルするには

リスト内の任意の項目を選択して「プロファイル」ボタンをクリックすると、Campaign によってその項目がプロファイルされます。任意のマッピングされたデータ・ソース内の任意の項目をプロファイルできます。ユーザー定義項目をプロファイルすることもできます。

1. 「プロファイル」ボタンが用意されているプロセスの構成ウィンドウで、プロファイルしたい項目を選択します。
2. 「プロファイル」をクリックします。

「プロファイル」ウィンドウが開きます。

Campaign によって、選択した項目内のデータがプロファイルされます。プロファイル処理の進行に伴い、カテゴリーと頻度のカウントが更新されます。

注: すべてのカテゴリーが処理されてカウントが完了するように、プロファイル処理が終了するまで待つから、処理結果を使用してください。

プロファイル処理が完了すると、「プロファイル」ウィンドウには以下の情報が表示されます。

- 選択された項目の値のリスト（「カテゴリー」列に表示）と、その値を持つ ID の対応する件数。

注: Campaign は、値をカテゴリ別にまとめてグループ化し、サイズがほとんど同じである複数のセグメントを作成します。カテゴリのデフォルトの最大表示数 (値ごとの階級) は 25 です。カテゴリの最大数は変更できます。

- 右側の「統計情報」ペインには、ID の合計件数と、その項目のデータに関する以下のような詳細情報が表示されます。
 - 検出された NULL 値の数
 - その項目のカテゴリ、つまり値の総数
 - そのデータの統計的な値 (平均値、標準偏差値、最小値、最大値など)。

注: 「平均値」、「標準偏差」、「最小」、「最大」は、ASCII 項目では使用できません。テキスト項目をプロファイルすると、これらの値はすべてゼロで表示されます。

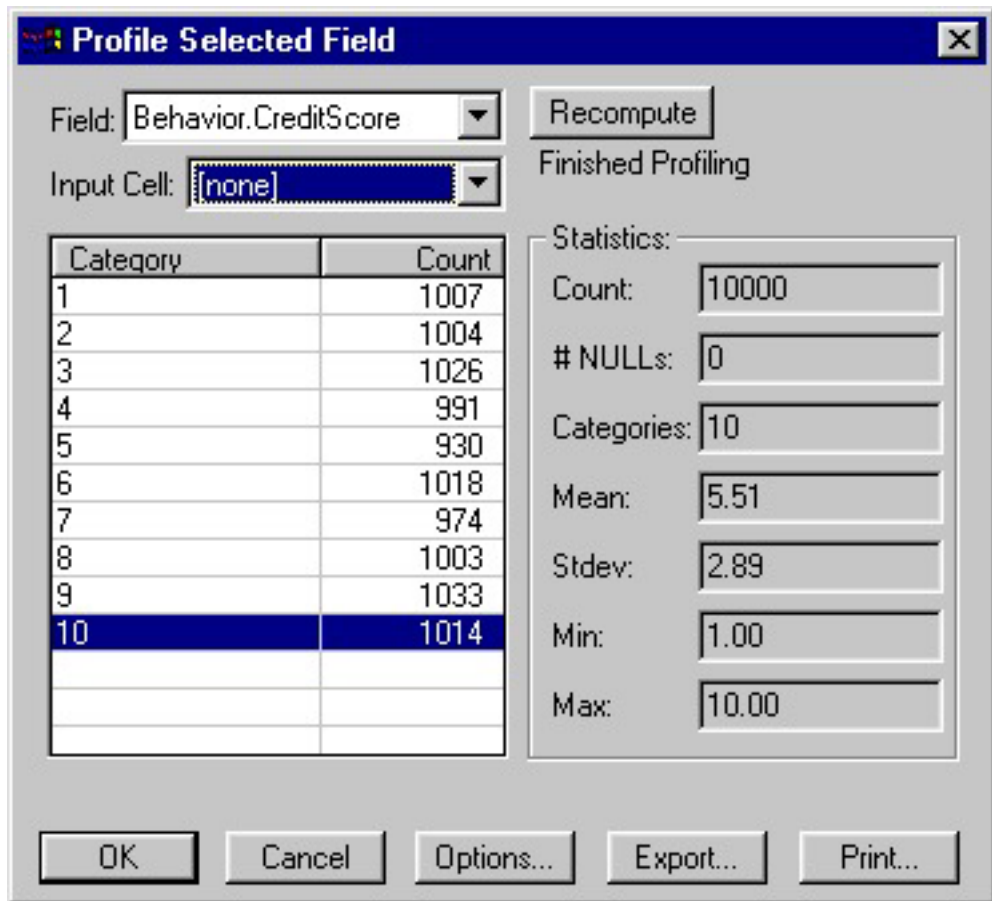
プロファイルでの入力の制限

Campaign で項目がプロファイルされる際に、プロファイルを実行するプロセスへの入力で使用できるセグメントのみが作成されます。

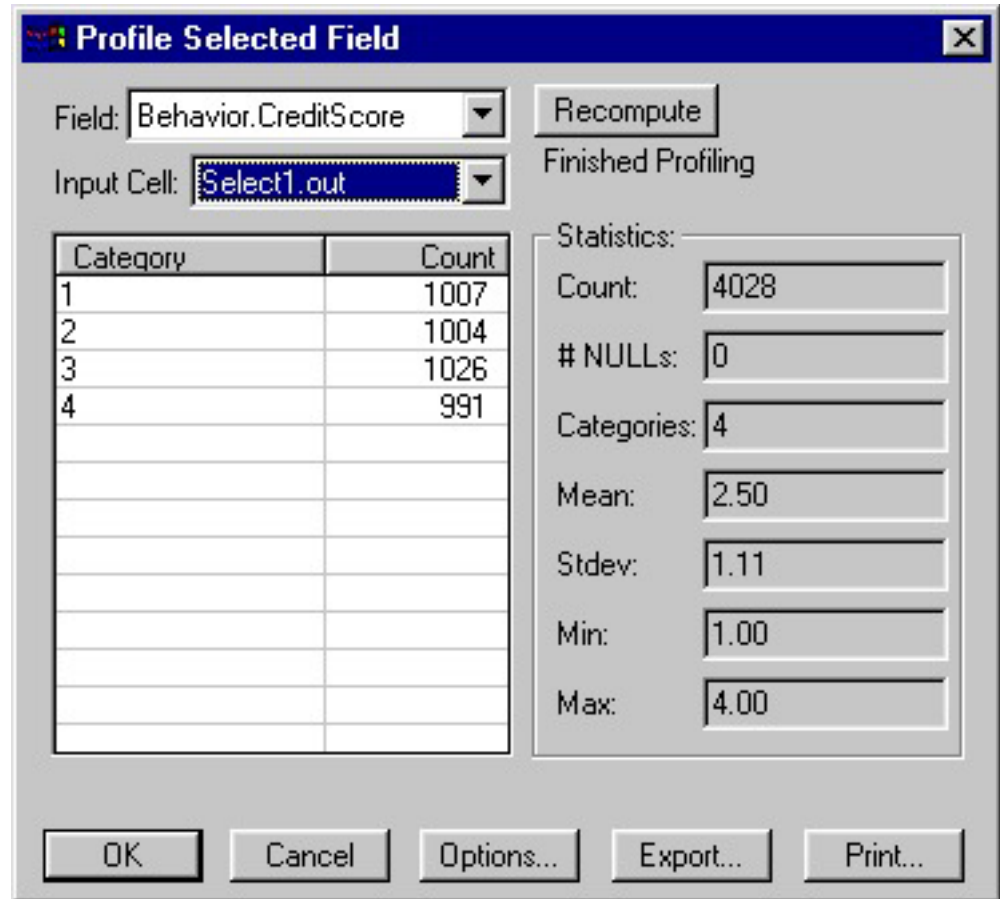
言い換えれば、入力をセグメント・プロセスに制限する場合、入力が制限された項目と同じ項目に基づくデータをプロファイルします。プロファイル結果には、制限された入力で使用できたセグメントを表示できるだけです。

例えば、セグメント・プロセスで、10 の可能性のある信用度のスコア・レベルのリストから「信用度のスコア < 5」に関連付けられた ID のみを選択するためのクエリを使用する場合、同じ項目 (この例では、Behavior.CreditScore) をプロファイルすると、Campaign では残りの 4 つの信用度のスコア・レベルに対応する 4 つのセグメントしか表示できません。

次の各例では、無制限のプロファイル (「プロファイル」ウィンドウの「入力セル」が「なし」に設定されている) と制限されたプロファイル (「入力セル」が Select1.out に設定されている) を比較しています。



「プロファイル」ウィンドウで、「入力セル」が「なし」に設定されています。プロファイルが実行されると、Behavior.CreditScore 項目内の 10 の個別の値がすべて表示されます。



「プロファイル」ウィンドウで、「入力セル」が Select1.out に設定されています。これは、1 から 4 までの信用度のスコアに制限された現在のプロセスに入力を提供する、選択プロセスからの出力セルです。

プロファイルが実行されると、4 つのカテゴリだけが表示され、それぞれが入力セル内の許可する値のいずれかに対応しています。

プロファイルの不許可

リアルタイム・プロファイルを使用すれば、選択済み項目の特性を表示および使用することができます。ただし、この機能は、大規模なデータベースで処理した場合にパフォーマンスに影響を与える可能性があります。このため、Campaign では、このオプションを無効にできます。

リアルタイム・プロファイルが無効になっている状態で「プロファイル」をクリックすると、リアルタイム・プロファイルは許可されていないことを示すメッセージが「プロファイル」ウィンドウの下部に表示されます。

プロファイルが許可されておらず、項目が事前集計されるように構成されていない場合、「プロファイル」ウィンドウにはデータが使用可能ではないことが示され、カウントもカテゴリも表示されず、また「統計情報」の各カウントはすべてゼロです。

事前に計算された値が項目で使用可能な場合、プロファイルを実行すると、実際の値ではなく、これらの事前に計算された値が表示されます。「プロファイル」ウィンドウには、データ・ソースが「インポート済み」であることが表示され、これらの値が最後に計算された日時が表示されます。

リアルタイム・プロファイルの不許可について詳しくは、「*IBM Unica Campaign* 管理者ガイド」を参照してください。

プロファイル・オプションの設定

次のことを行って、プロファイル機能の実行方法に反映することができます。

- 129 ページの『プロファイルでの入力の制限』
- 131 ページの『プロファイルの不許可』

また、「プロファイル・オプション」ウィンドウで次の各オプションを設定することもできます。

- 『プロファイル・セグメントの最大数の指定』
- 133 ページの『メタ・タイプによるプロファイル』

「プロファイル・オプション」ウィンドウにアクセスするには

1. 「プロファイル」オプションが選択できる、任意のプロセス設定ダイアログで、プロファイル用の項目を選択するか、または「プロファイル」をクリックします。

「プロファイル」ウィンドウが表示されます。

2. 「プロファイル」ウィンドウで、「オプション」をクリックします。

「プロファイル・オプション」ウィンドウが表示されます。

プロファイル・セグメントの最大数の指定

項目をプロファイルする際に、Campaign によって、「プロファイル・オプション」ウィンドウで設定されたセグメントの最大数までセグメントが自動的に作成されます。デフォルトでは、最大 25 のセグメントが許可されます。

プロファイルで使用するセグメントの最大数は変更できます。この設定が変更されると、その新規設定は、リセットされるまで後続のすべてのプロファイルで使用されます。

注: プロファイル対象の項目内の個別の値の数が、セグメントの許可された最大数を超えると、プロファイルによって、ほぼ等しいサイズのセグメントに値がまとめられて、セグメントの最大数を超えないようにされます。

プロファイル用のセグメントの最大数を設定するには

1. 「プロファイル」ウィンドウで、「オプション」をクリックします。

「プロファイル・オプション」ウィンドウが表示されます。

2. 「セグメント数」項目に整数を入力して、各項目値をまとめて分類するためのセグメントの最大数を指示します。デフォルト値は 25 です。
3. 「OK」をクリックします。

プロフィールが、セグメント設定の新しい最大数を使用して再計算されます。

メタ・タイプによるプロフィール

プロフィールを行う際に、メタデータ・タイプの情報を使用するかどうかを指定することができます。これは、「プロフィール・オプション」ウィンドウの「メタ・タイプ別プロフィール」チェック・ボックスを有効または無効にすることによって行います。

「メタ・タイプ別プロフィール」を有効にしておくことが、通常望ましい動作です。日付、金額、電話番号、およびその他の数値情報が含まれている項目に関連付けられたデータ型は、ASCII テキストに基づいて単にソートされるのではなく、メタデータ情報を使用して正しくソートされて階級化されます。

例えば、次の表は、日付フィールドのソートでメタ・タイプ情報を使用した場合と使用しなかった場合を示しています。メタ・タイプを使用せずに実行されたプロフィールでは、単に数値的にソートされた結果が生成されますが、メタ・タイプを使用して実行されたプロフィールでは、データが日付としてフォーマット設定されていることが認識され、それに応じてデータがソートされます。

メタ・タイプによるプロフィール	メタ・タイプを使用しないプロフィール
25-DEC-2006	20-FEB-2007
20-FEB-2007	20-MAR-2007
20-MAR-2007	25-DEC-2006

プロフィール・カウントの更新

結果を変更する可能性がある何かが発生した場合 (例えば、新しい値が項目に追加された場合)、またはデータベース・テーブルが更新されている可能性がある場合は常に、プロフィール・カウントを更新することができます。

「プロフィール」ウィンドウで項目のプロフィール結果を更新するには、「再計算」をクリックします。

注: ディメンション・テーブルからのある項目を最初にプロフィールする際に、ディメンション・テーブル内のその項目に一致するカウントが Campaign によって返されます。プロフィール結果を更新するために「再計算」をクリックすると、ディメンション・テーブルにリンクされたベース・テーブルとの、生成された結合からのカウントが、Campaign によって返されます。ベース・テーブルへの結合なしでディメンション・テーブル項目をプロフィールしたい場合、ディメンション・テーブルをベース・テーブルとしてマップします。

プロフィール・カテゴリーをクエリーに挿入するには

プロセス設定ダイアログでのクエリー式の作成中は、クエリー式に項目値を挿入することができます。

1. 選択した項目に対してプロフィールを実行します。
2. プロフィールが完了したら、「プロフィール」ウィンドウでカテゴリーを 1 つダブルクリックして、クエリー・テキスト・ボックス内の現在のカーソル位置にその値を挿入します。

注: 必要な値が表示されない場合、これは 1 つのプロファイル・セグメントにまとめられた複数の値のためである可能性があります。プロファイル・セグメントの最大数をカテゴリーの数 (「プロファイル」ウィンドウで報告される) より大きい数に設定した場合、各項目値は別のカテゴリーとしてリストされます。これによって、既存のすべてのカテゴリーにアクセスすることが可能になります。

プロファイルの結果を印刷するには

1. 「プロファイル」ウィンドウで「印刷」をクリックします。

「ページ設定」ページが表示されます。このページでは、プリンターと印刷オプションを指定できます。

2. 「OK」をクリックして、印刷ジョブのプリンターへの送信を確認します。

プロファイル・データをエクスポートするには

項目のプロファイルの実行後には、区切り記号付きテキスト・ファイルにプロファイル・データをエクスポートすることができます。

1. 「プロファイル」ウィンドウで、「エクスポート」をクリックします。

注: 「エクスポート」ボタンは、プロファイルの完了時にのみ有効になります。

「エクスポート」ウィンドウが表示されます。

2. (オプション) 「先頭行に項目名を出力」チェック・ボックスを選択して、エクスポートされるデータ内に列ヘッダーを含めます。
3. 「エクスポート」をクリックします。

「ファイルのダウンロード (File Download)」ウィンドウが表示されます。

4. 「開く」をクリックしてプロファイル・データを開くか、または「保存」をクリックしてファイルを保存する場所を指定します。

「開く」をクリックした場合、プロファイル・データはスプレッドシート・ウィンドウ内に表示されます。

「保存」をクリックした場合、「名前を付けて保存」ウィンドウが表示されません。

5. 「保存」をクリックした場合、「名前を付けて保存」ウィンドウで、エクスポート・ファイルを保存する場所に移動し、エクスポートするファイルに使用するファイル名を入力します。デフォルトでは、エクスポート・ファイルの名前は Campaign.xls です。
6. 「OK」をクリックします。

指定したファイルにデータがエクスポートされます。「ダウンロードの完了 (Download Complete)」ウィンドウが表示されます。

コンタクト・ログの出力ファイルまたはテーブルの指定

メール・リストやコール・リストなどのコンタクト・プロセスでは、以下に結果を書き込むことができます。

- システム・テーブル
- 指定した、新規または既存の外部ファイル
- マップ解除されたデータベース・テーブル

出力ファイルをコンタクト・ログに指定するには

1. 「編集」モードのフローチャートで、プロセス設定ダイアログの「エクスポート先」または「保存先」ドロップダウン・リストから、「ファイル」を選択します。「ファイル」オプションは、通常リストの下部の、マップ・テーブルのリストの次に表示されます。

「出力ファイルの指定」ウィンドウが表示されます。

2. 書き込むファイルのタイプを選択します。
 - **データ・ディクショナリー付きフラット・ファイル** - 新規固定長ファイルと新規データ・ディクショナリー・ファイルを作成します。
 - **既存のデータ・ディクショナリーに基づくフラット・ファイル** - 新規固定長ファイルを作成し、既存のデータ・ディクショナリー・ファイルを選択します。
 - **区切り記号付きファイル** - 項目値がタブ、コンマ、または他の文字で区切られている、新規ファイルを作成します。
3. 「区切り記号付きファイル」を選択した場合は、次のようにします。
 - オプションの「タブ」、「コンマ」、または「その他」を選択します。「その他」を選択した場合、区切り文字として使用する文字を「その他」項目に入力します。
 - ファイルの最初の行にデータの列ごとのラベルを含める場合は、「先頭行のラベルを含める」にチェック・マークを付けます。
4. 「ファイル名」項目にファイルの完全なパスと名前を入力します。「参照」をクリックして任意のディレクトリーにナビゲートし、既存のファイルを選択することもできます。

注: 出力ファイル名には、ユーザー変数を使用できます。例えば、ファイル名として MyFile<UserVar.a>.txt を指定し、プロセス実行時のユーザー変数「a」の値が「ABC」の場合、MyFileABC.txt という名前のファイルに出力が書き込まれます。フローチャートを実行する前に、ユーザー変数の「初期値」と「現在の値」を設定する必要があることに注意してください。

5. Campaign では、入力したファイルと同じ名前の .dct ファイル、および同じ場所で「データ・ディクショナリー」項目を自動的に埋め込みます。
6. 別のデータ・ディクショナリーを使用するか、またはデータ・ディクショナリーの名前を変更したい場合、「データ・ディクショナリー」項目にそのデータ・ディクショナリー・ファイルの完全なパスと名前を入力します。
7. 「OK」をクリックします。

「出力ファイルの指定」ウィンドウが閉じます。プロセス設定ダイアログに戻り、入力したパスとファイル名が「エクスポート先」/「保存先」項目に表示されます。

データベース・テーブルをコンタクト・ログに指定するには

1. プロセス設定ダイアログで、「エクスポート先」または「保存先」ドロップダウン・リストから「新規テーブル」または「データベース・テーブル」を選択します。このオプションは、通常リストの下部の、マップ・テーブルのリストの次に表示されます。

「データベース・テーブルの指定」ウィンドウが表示されます。

2. テーブル名を指定します。

注: テーブル名には、ユーザー変数を使用できます。例えば、テーブル名として MyTable<UserVar.a> を指定し、ユーザー変数「a」の値がプロセスの実行時に「ABC」の場合、出力は MyTableABC という名前のテーブルに書き込まれます。フローチャートを実行する前に、ユーザー変数の「初期値」と「現在の値」を設定する必要があります。

3. ドロップダウン・リストからデータベース名を選択します。
4. 「OK」をクリックします。

「データベース・テーブルの指定」ウィンドウが閉じます。プロセス設定ダイアログに戻り、入力したデータベース・テーブルの名前が「エクスポート先」/「保存先」項目に表示されます。

5. 指定した名前のテーブルが存在する場合、次の出力データの書き込み用のオプションを選択します。
 - データ追記 - このオプションを選択する場合、出力データと互換性のあるスキーマが既存のテーブルに保持されている必要があります。言い換えると、項目名とデータ型が一致する必要があります。また書き込まれる出力データを項目サイズで考慮する必要があります。
 - データ置換 - このオプションを選択した場合、テーブル内の既存の行が新規出力行で置換されます。

乱数選択用のシードの変更

乱数種は、Campaign でレコードをランダムに選択するために使用する開始点を表します。レコードをランダムに選択する場合、次のようなシチュエーションで乱数種を変更できます。

- 同数のレコードが同じ順序で存在し、このプロセスを実行するごとに同じシード値を使用すると、結果的に同じサンプルに作成されるレコードになる場合。
- 使用している現在のランダム・サンプルが非常に偏った結果を生成する場合 (例えば、データ内のすべての男性が 1 つのグループに属し、すべての女性が別のグループに属す場合)。

レコードを選択するための乱数種を変更するには

プロセス設定ダイアログの「セル・サイズの制限」タブで、次の方法のいずれかで乱数選択の開始点を変更します。

- 「乱数種」テキスト・ボックスに数値を入力する。または
- 入力する代わりに、「選択」をクリックして、Campaign に新しいシード値をランダムに選択させる。

プロセス出力での重複 ID の除外

抽出、コール・リスト、メール・リスト、スナップショットの各プロセスを使用すると、プロセス出力での重複 ID の処理方法を指定することができます。デフォルトでは、出力で重複 ID を許可します。重複 ID を持つレコードを出力から除外するには、以下の手順を実行します。

1. プロセスの設定ウィンドウで、「詳細」をクリックします。

「詳細設定」ウィンドウが表示されます。

- a. 「重複 ID のデータを除外」を選択し、重複 ID が返された場合にどのレコードを残すかを決定するための基準を指定します。例えば、最も高い世帯収入を持つ ID だけをエクスポートするには、「最大値選択」と「Household_Income」を選択します。

注: このオプションでは、同じ入力項目内の重複を除去するだけです。同じ ID が複数の項目で出現する場合、データには引き続き重複 ID を含まれません。重複 ID をすべて除去する場合は、抽出プロセスの上流プロセスであるマージ・プロセスまたはセグメント・プロセスを使用して重複 ID を消去するか、相互に排他的なセグメントを作成する必要があります。

2. 「OK」をクリックして、「詳細設定」ウィンドウを閉じます。

重複 ID の設定が設定ウィンドウに表示されます。

注: 「メール・リスト」プロセス・ボックスまたは「コール・リスト」プロセス・ボックスの「ログ」タブの「重複 ID のデータを除外」オプションは、プロセスで作成されたフルフィルメント・テーブルにのみ関連し、コンタクト履歴に書き込まれたレコードには関連しません。コンタクト履歴テーブルでは、固有の ID だけが処理されます。フローチャートの設計者は、正しいレコードが結果セットに取り込まれることを確認してから、コンタクト履歴テーブルでの処理を行う必要があります。「メール・リスト」プロセス・ボックスまたは「コール・リスト」プロセス・ボックスを表示する前に、抽出プロセスを使用して、結果セットから重複 ID を除外します。これにより、フルフィルメント・テーブルとコンタクト履歴の両方に、正しいレコードが書き込まれるようになります。

「カレンダー」ツールを使用するには

Campaign 全体の日付値を入力できる項目では、「カレンダー」ツールを使用できません。

1. 日付値が必要な項目の横にある省略符号ボタンをクリックします。

カレンダー・ツールが表示されます。デフォルトでは、現在日付が選択されています。

2. 表示されている月の日付をクリックして日付を選択するか、または次のようにします。
 - 「月」ドロップダウン・リストを使用して、月を変更する
 - 上下の矢印を使用して、年を変更する
3. 「OK」をクリックして指定した日付を項目に入力し、「カレンダー」ウィンドウを閉じます。

第 6 章 オファー

オファーとは、1 つ以上の経路 (チャンネル) を使って特定の人々のグループに送られる、マーケティング上の特定のコミュニケーションです。オファーには、単純なオファーと複雑なオファーがあります。例えば、オンライン小売業者からの単純なオファーは、「4 月中にオンラインで購入される全品目の送料が無料になる」という項目から成ることがあります。より複雑なオファーとしては、金融機関からのクレジットカードに、対象となる顧客の信用格付けと地域に基づいて異なるネットワーク、初期の利率、有効期限を個人別に組み合わせて付帯するオファーが考えられます。

Campaign では、1 つ以上のキャンペーンで使用できるオファーを作成します。

オファーは、以下のように再使用可能です。

- 異なるキャンペーン内で
- 異なる特定時点において
- 異なる人々のグループ (セル) を対象として
- オファーのパラメーター化された項目を変化させた、異なる「バージョン」として

いったん使用されたオファーは削除できませんが、回収することはできます。

回収済みのオファーは割り当てられることはなくなり、回収された割り当て済みオファーは提供されなくなります。回収済みオファーは引き続きオファー階層に表示 (ただし、ぼかし表示) され、レポート作成とレスポンス・トラッキングにも引き続き使用することができます。

注: オファー名には文字に関する特定の制限があります。詳しくは、269 ページの『IBM Unica Campaign オブジェクト名での特殊文字』を参照してください。

オファーは、企業が指定した形式に基づく、システム割り当ての固有のオファー・コードによって識別されます。(セキュリティ権限に応じて) オファー・コードのオーバーライドや再生成が可能です。それを行うと、新しいオファー・コードの固有性チェックが Campaign によって行われなくなります。固有でないオファー・コードを作成してレスポンス・トラッキングで使用すると、トラッキング結果が正確でなくなる可能性があります。

オファー・コードについて詳しくは、「*Campaign* 管理者ガイド」の『固有コードの管理』を参照してください。

オファー属性

オファー属性は、オファーを定義する項目です。オファーの属性には、オファー名、説明、チャンネルなどがあります。あるタイプのオファーに固有の属性もあります。例えば、利率は、クレジットカード・オファーの属性として使用できますが、「送料無料」オファーの属性ではありません。

オファー属性には、以下の 3 つのタイプがあります。

- **基本** — オファーを定義するために必要な最低限の項目のセット。つまり、オファー名、固有のオファー・コード、オファーの説明、および関連製品です。
- **標準** — オファーを定義するためのオプションの事前定義項目。例えば、チャンネルは、オファーのオプションの属性として使用できます。
- **カスタム** — 組織のオファーの定義用にカスタム作成された追加の項目。例えば、部門、スポンサー、販売促進用利率および通常利率、在庫維持単位数 (SKU) などです。カスタム属性をオファー・テンプレートに追加して、オファーを詳細に定義したり、オファーを分析したりすることができます (例えば、ロールアップ分析を行うためにカスタム属性ごとにオファーをグループ化することができます)。カスタム属性について詳しくは、「*Campaign 管理者ガイド*」の『カスタム属性』を参照してください。

オファー・テンプレートでオファー属性を定義する場合は、各属性を静的属性かパラメーター化された属性として定義できます。同じオファー属性 (チャンネルなど) は、あるオファー・テンプレートでは静的属性、別のオファー・テンプレートではパラメーター化された属性として定義できます。

- **静的属性** — これらは、オファーの別のバージョンを作成しても値が変わらないオファー属性です。例えば、チャンネル、オファー・コード、オファー名、および説明は、静的オファー属性です。
- **表示されていない静的属性** — 一部の静的属性は、オファー定義の一部であっても、ユーザーがオファー・テンプレートを使用してオファーを作成するときに、ユーザーに対して非表示に設定することができます。したがって、表示されていない属性は、編集できませんが、他のオファー属性と同じ方法でトラッキングおよびレポートの対象にすることが可能です。例えば、表示されていない静的属性を、オファーのコスト (オファーを管理する組織にとってのコスト) にすることができます。この属性の値は変更できませんが、検索で使用したり (例えば、管理コストが \$1.00 未満のすべてのオファーを検索する場合)、レポートに使用したり (例えば、パフォーマンス ROI 分析レポートに使用する場合) することができます。
- **パラメーター化された属性** — これらは、オファーを割り当てるときに、値を入力したり、事前定義ドロップダウン・リストからオプションを選択したり、データベースの項目を使用して値を指定したり、ユーザー定義項目の値を計算したりすることによって、値を指定できるオファー属性です。標準オファー属性またはカスタム・オファー属性は、管理者がオファー・テンプレートの作成時にパラメーターとして設定できます。

オファー・テンプレートのパラメーター化された属性には、オファーの作成時または割り当て時にオーバーライド可能なデフォルト値が指定されています。例えば、クレジットカード・オファーの初期利率をオファー・テンプレートでパラメーター化して、ユーザーがこのテンプレートを使用してオファーを作成する場合に、ドロップダウン・リストからデフォルトの利率として 5.99%、8.99%、または 12.99% を選択できるようにすることができます。このオファーを後でフローチャートに使用して、セルに割り当てる場合、ユーザーは必要に応じて利率を別の値に変更できます。

オファーのバージョン

注: Campaign バージョン 7.x から使われ始めた「オファー・バージョン」という語の意味は、Campaign の旧リリース (5.1 から 6.x) での「オファー・バージョン」と同じではありません。オファー・バージョンは、オファー・ツリー階層に表示されず、バージョン名またはコードがありません。オファー使用法の特定のインスタンスを一意的に識別するには、処理コードを使用する必要があります。

オファー・バージョンは、オファーのパラメーター化された属性を変更するたびに作成され、固有の組み合わせが作成されます。

例えば、クレジット・カード・オファーの以下の属性を変更できます。

- アートワーク (灯台、子猫、レーシング・カー)
- 初期利率 (5.99%、8.99%、または 12.99%)
- オファーの有効な日付 (1 月、6 月、または 9 月中は有効)

したがって、イメージが灯台、初期利率が 5.99%、2006 年 9 月 1 日から 31 日まで有効なオファーを持つカードは、イメージが灯台、初期利率が 5.99%、2007 年 1 月 1 日から 31 日まで有効なオファーを持つカードとは、オファーのバージョンが異なります。

オファー・テンプレート

Campaign で使用可能なオファー・テンプレートを使用して、オファーを作成します。これらのテンプレートは、システム管理者またはオファー管理者によって既に作成されています。各オファー・テンプレートには、テンプレートにアクセスして使用できるユーザーを決定するセキュリティ・ポリシーがあります。表示されるのは、自分がアクセス権限を持っているオファー・テンプレートのみです。

適切なテンプレートを使用して新しいオファーを作成することにより、オファーの作成プロセスが簡素化されます。例えば、クレジット・カード・オファー用に設計されたテンプレートを使用してクレジット・カード・オファーを作成する場合は、クレジット・カード・オファーに関連した項目のみを入力することになります。

管理者は、オファーの情報を指定するときに選択できるドロップダウン・リスト形式の値を作成して、データ検索の時間を短縮したり、データ入力のエラーを減らしたりすることができます。管理者は、属性をオファーで使用するときには新規項目を追加できるドロップダウン・リスト形式としてオファー属性を設計することができます。新しい値を追加できる場合は、オファー属性の横に「追加」ボタンが表示されます。このような属性に新しい値を追加するときに、追加した値を削除することもできます。自分で追加したのではない値を削除することはできません。

オファー・テンプレートは、以下を定義します。

- オファー・コード形式
- テンプレート・コード形式
- オファー属性と、その表示順序
- 各オファー属性が、静的属性、表示されていない属性、パラメーター化された属性のいずれであるか

- オファー属性のデフォルト値

新しいオファー・テンプレートはいつでも追加でき、Campaign で定義できるテンプレートの数に制限はありません。テンプレートは、テンプレートを元にして作成されたオファーの固有属性であるため、テンプレートを検索条件として使用して、オファーを検索できます。

注: オファー・テンプレートを削除することはできませんが、今後使用できないようにするために管理者が回収することができます。回収されたオファー・テンプレートは、オファー・テンプレートのリストでグレー化され、新規オファーを作成するために使用できません。

オファー・テンプレートの管理について詳しくは、「*Campaign 管理者ガイド*」の『オファー・テンプレートの管理』を参照してください。

オファー・リストについて

オファー・リストとは、Campaign 内で作成できるオファーのグループのことで、これを利用すると、複数のオファー、または時間の経過に伴って変化する可能性のあるオファー・セットを簡単に割り当てることができます。

複数のオファー・リストに同じオファーが存在することが可能です。オファー・リストはオファーと同じ階層内に表示されますが、アイコンによって識別されます。単一のオファーには、ドル記号付きの 1 シート・アイコンが表示されます。静的オファー・リストには、ドル記号付きの複数シート・アイコンが表示されます。スマート・オファー・リストには、ドル記号と虫メガネ付きの複数シート・アイコンが表示されます。

オファーと同様に、いったん使用されたオファー・リストは削除できませんが、回収することはできます。

回収済みのオファー・リストは割り当てられることはなくなり、回収された割り当て済みオファー・リストは提供されなくなります。

オファー・リストには以下の 2 つのタイプがあります。

- 『静的オファー・リスト』
- 143 ページの『スマート・オファー・リスト』

注: オファー・リスト名には文字に関する特定の制限があります。詳しくは、269 ページの『IBM Unica Campaign オブジェクト名での特殊文字』を参照してください。

静的オファー・リスト

静的オファー・リストは、リストを明示的に編集しない限り、内容が変わらないオファーの事前定義リストです。静的オファー・リストの制限は、パラメーター化されたオファー属性にデフォルト値が使用されるということです。

一般に、静的オファー・リストは、特定の固定されたオファー・セットを繰り返し再使用する場合に使用します。例えば、5 つの RFM (最新購買日、購買頻度、購買金額) セグメントと、125 のセルがある場合で、各セルに同じオファーを割り当て

る場合は、1つのオファー・セットを静的オファー・リストに作成して、そのオファー・リストを 125 のすべてのセルに割り当てることができます。フローチャートとキャンペーンでも、同じような再使用が可能です。

スマート・オファー・リスト

スマート・オファー・リストは、スマート・リストを使用するたびにさまざまな結果に解決されるオファーの動的リストです。スマート・オファー・リストは、オファー属性、オファーの場所（フォルダーまたはサブフォルダー）、オファー所有者などをベースにできるクエリーによって指定されます。

一般に、スマート・オファー・リストは、定期的に繰り返されるキャンペーンに使用します。スマート・オファー・リストを受け取るようにセルをセットアップしてから、フローチャートを変更することなくスマート・オファー・リストの内容を変更できます。例えば、スマート・オファー・リストを特定のフォルダーの内容となるように設定すると、そのフォルダーを対象としてオファーを追加または削除するだけで、キャンペーンが実行されるたびに配布されるオファーを変更できます。

スマート・オファー・リストを使用する別の例では、配布したいオファーを自動的に返すスマート・オファー・リストを設定することが関係しています。「高価値顧客」セルに、使用可能な「最良のクレジット・カード・オファー」を付与する場合は、最低利率でソートされ、最大サイズが 1 に設定されたすべてのクレジット・カード・オファーが組み込まれたスマート・オファー・リストを設定できます。フローチャート・コンタクト・プロセスの実行時に使用可能な最低利率のクレジット・カード・オファーが、自動的に検索されて高価値セルに付与されます。

セキュリティおよびオファー・リスト

オファー・リストとリストに含まれているオファーが存在するフォルダーに基づいて、オブジェクト・レベルのセキュリティがオファー・リストに適用されます。

静的オファー・リストの作成時は、アクセス権を持っているオファーのみを追加できます。ただし、オファー・リストにアクセスする権限を持つユーザーには、そのリストに含まれているオファーにアクセスする権限が自動的に付与されます。したがって、リストにアクセスできるユーザーは、自分のセキュリティ権限では通常、それらのオファーにアクセスできないとしても、そのオファー・リストや、そこに含まれるすべてのオファーも使用できます。

同様に、スマート・オファー・リストが含まれているフォルダーにアクセスできるユーザーは、そのスマート・オファー・リストを使用できます。このようなユーザーは、特定のオファー（例えば、別の部門のフォルダー内のオファー）に対するアクセス権を通常は持っていないとしても、そのオファー・リストを実行する他のユーザーと同じ結果を得ます。

処理

処理とは、特定の時点のセルとオファーのバージョンの固有の組み合わせのことで、これにより、非常に具体的な方法でレスポンスをトラッキングできるため、レスポンスのトラッキングに処理コードを使用することはベスト・プラクティスです。

処理は、オファーに関連付けられているコンタクト・プロセス (コール・リストまたはメール・リスト) を使用してフローチャートを実行すると、自動的に作成されます。各処理は、システムで生成される処理コードによって一意的に識別され、この形式はオファーを作成する基になったオファー・テンプレートに指定されています。ユーザーは、処理コードをオーバーライドできません。

コンタクト・プロセスを実行する度に (テスト・モードは除く)、Campaign は、以下の詳細を記録します。

- コンタクト・プロセスで割り当てられるオファーのバージョン
- オファーが割り当てられているセル
- オファーのバージョン、セル、および日時のそれぞれの固有の組み合わせの処理コード
- コンタクト・プロセスの実行日

同じコンタクト・プロセスを (本番実行で) 2 回実行すると、それぞれが固有の処理コードを持つ 2 つの処理インスタンスが作成されます。これにより、正確なコンタクト・インスタンスに至るまで、非常に具体的な方法でレスポンスをトラッキングできます。例えば、2 月 15 日に実行するのと同じプロモーションを 1 月 15 日に実行できます。さらに、トラッキングに処理コードを使用する場合は、顧客が両方のプロモーションのターゲットになっているとしても、2 月 15 日のメール配信に回答した顧客を、1 月 15 日のメール配信に回答した顧客から処理コードによって区別することができます。

処理コードは、実行時にのみ生成され、事前印刷コード要件に適していないため、フローチャートの実行前は使用できません。ただし、トラッキングまたはオンデマンド印刷用に Campaign 生成項目として出力すること可能です。

コントロール・グループ

オファーを計画する場合は、そのオファーが割り当てられるセルの検証コントロール・グループを使用するかどうかを考慮する必要があります。コントロール・グループは、オファーを受け取ったアクティブなターゲット・セルからの応答内の「リフト」または相違を比較するために使用できる非コンタクト・グループです。

コントロールは、Campaign のセル・レベルで適用されます。フローチャートのコンタクト・プロセスで、またはターゲット・セル・スプレッドシートから、セルにオファーを割り当てる場合は、ターゲット・セルごとに 1 つのコントロール・セルをオプションで指定できます。

ターゲット・セルへのコントロール・セルの関連付け

単一のコントロール・セルを複数のターゲット・セルのコントロールとして使用できますが、各ターゲット・セルには単一のコントロール・セルしか関連付けることができません。この場合、セルはそのセル ID によって定義されます。単一のコントロール・セルを複数のコンタクト・プロセスで使用する場合、ターゲット・セルに対するコントロール・セルの関係は、各コンタクト・プロセスで同じ方法で構成する必要があります。複数の異なるコントロール関係が必要な場合は、セルのコピーを作成します (例えば、選択プロセスを付加して、前のセルから「すべて選択」

を実行することによって行います)。これにより、コントロール・セルへの異なる関係を適用できる別のターゲット・セルが作成されます。

オファーの処理

オファーに関連した以下のタスクを実行できます。

- 『新規オファーの作成』
- 148 ページの『オファーの複製』
- 150 ページの『オファーを編集するには』
- 150 ページの『オファーまたはオファー・リストを移動するには』
- 151 ページの『オファー・リストへのオファーの追加』
- 151 ページの『オファーの削除』
- 152 ページの『オファーの回収』
- 179 ページの『フローチャート CSP のセルにオファーを割り当てる方法』
- 154 ページの『オファーの検索』
- 156 ページの『サマリー・ページからオファー・レポートを表示するには』

注: オファーを処理するには、適切な権限が必要です。権限については、「*Campaign 管理者ガイド*」を参照してください。

新規オファーの作成

顧客または見込み顧客に伝えるマーケティング・メッセージを表すオファーを作成する必要があります。新規オファーを作成するのか、あるオファーの単なるバージョンを作成するのかは、オファー・テンプレートが管理者によってどのように定義されているかによって異なります。

以下の状況では、新規オファーを作成する必要があります。

- パラメーター化されていないオファー項目を変更する場合
- 追跡用 (例えば、メーラーでの応答コードの事前印刷用) に新規オファー・コードが必要な場合

まったく新しいオファーを作成することに加えて、既存のオファーを複製し、必要に応じて変更することによって、オファーを追加できます。

注: フォルダー内にオファーを作成するには、そのフォルダーを管理しているセキュリティ・ポリシーで適切な権限を持っている必要があります。

新規オファーを追加するには

注: 新規オファーを作成するには、そのオファーのベースとなる少なくとも 1 つのオファー・テンプレートに対するアクセス権限を事前に持っている必要があります。

1. 「キャンペーン」>「オファー」を選択します。

「オファー」ページが表示されます。

2. 「オファーの追加」アイコンをクリックします。

Campaign システムに複数のオファー・テンプレートがある場合は、「オファー・テンプレートの選択」ページが表示されます。存在するオファー・テンプレートが 1 つのみの場合は、テンプレートを選択することなく、「新規オファー」ページが直接表示されます。

3. 新規オファーのベースとなるテンプレートを選択します。選択したオファー・テンプレートの名前、説明、推奨される使い方、オファー・コードおよび処理コードの形式、静的属性およびパラメーター化された属性が表示されます。
4. 「**続行**」をクリックします。

「新規オファー」ページが表示されます。

5. 新規オファーの値 (パラメーター化された属性のデフォルト値を含む) を入力します。

ドロップダウン・リストで値が提供される属性、およびリスト項目の追加が許可される属性の場合、オファーの作成時にリスト項目をここで追加できます。リストに追加した項目は、オファーのカスタム属性に保存され、その後すべてのユーザーが使用できるようになります。変更内容を保存すると、追加したリスト項目を削除することはできません。管理者のみが、カスタム属性を変更することによってリストから項目を削除できます。

注: オファーの名前には、文字に関する特定の制限があります。詳しくは、269 ページの『IBM Unica Campaign オブジェクト名での特殊文字』を参照してください。

6. オファーの詳細の入力が終わったら、「**変更の保存**」をクリックします。

新規オファーの「オファー・サマリー (Offer Summary)」ページが表示されます。

オファーの関連製品

関連製品はオファー・テンプレートの必須属性ですが、各オファーでデータを追加する必要はありません。オファーの作成時に、このオファーに関連付ける製品 ID のリストを返すクエリーを指定できます。次いで、これらの製品 ID を推定レスポンス・トラッキングに使用して、イベント (購入など) をレスポンスと見なす (例えば、オファーに関連付けられているいずれかの関連製品の購入をレスポンスと見なす) かどうかを判別できます。

製品 ID のリストをソース・ファイルからコピーし、新規オファーの作成時に関連製品定義に貼り付けることによって、オファーの作成時に製品 ID のリストをインポートすることもできます。

貼り付けによって関連製品のリストをオファーにインポートするには

1. Campaign で、新規オファーの作成時に、「新規オファー」ページで「**製品 ID をインポート**」をクリックします。「製品の選択」ウィンドウが開きます。
2. コンテキスト・メニューの「コピー」または Ctrl+C を使用して、ソース・ファイルから製品 ID をコピーします。

注: 製品 ID のコピー時は、タブ、コンマ、または改行の 1 つ以上の区切り文字を使用できます。複数の連続した区切り文字は無視されます。製品 ID がテキスト・ストリングの場合、スペースはストリップされず、大文字と小文字も保持されます。

3. コンテキスト・メニューの「貼り付け」または Ctrl+V を使用して、コピーした ID を「製品 ID をインポート」リストに貼り付けます。「製品の選択」ウィンドウでの作業中に、「製品 ID をインポート」リストの項目を手動で追加、編集、または削除することもできます。「製品 ID をインポート」リストに貼り付けることができる項目の数に制限はありません。
4. 「製品 ID をインポート」領域への項目の追加が完了したら、「インポート」をクリックします。

「製品 ID をインポート」領域の ID がインポートされて「次の条件の製品の選択」セクションにリストされ、「PRODUCTID =」が各製品 ID の前に付加されます。インポート中にエラーが検出される場合 (例えば、「製品 ID」項目が数値の場合に英字が使用されている場合や、テキスト製品 ID の最大ストリング長を超えている場合)、各エラーのポップアップが表示されます。各エラーのメモを取り、「OK」をクリックして次のエラーを表示します。

注: インポート機能でインポートできる製品 ID は 1 回のみです。同じ値が重複している場合は、自動的に無視されます。

注: 「製品の選択」ウィンドウで「変更の保存」をクリックするまで、製品 ID の貼り付けとインポートを続行できます。「製品の選択」ウィンドウを終了すると、追加の製品 ID をインポートすることはできません。もう一度「製品 ID をインポート」をクリックすると、既存のクエリーが消去されて新たに作業を開始できます。既存のクエリーを消去したくない場合は、確認のプロンプトが出された場合に「キャンセル」をクリックします。

5. 製品 ID のインポートが完了したら、「変更の保存」をクリックします。「次の条件の製品の選択」リストに表示されていた製品 ID が、オファーのクエリーとして保存され、関連製品の下に製品 ID のリストが表示されます。
6. オファーの作成を続行します。

オファーの関連製品クエリーを編集するには

オファーの関連製品のリストのインポート後に、そのリストはクエリーとして保存されます。オファーの編集時に、クエリー条件を追加することも含めて、このクエリーを編集できます。

1. Campaign で、関連製品のリストを編集するオファーを開きます。
2. 関連製品のリストの下で、「クエリーの編集」をクリックします。「製品の選択」ウィンドウが開き、現在クエリーに含まれている ID のリストが「次の条件の製品の選択」の下に表示されます。
3. 「<<」ボタンを使用して選択した項目をリストから除去したり、上矢印ボタンおよび下矢印ボタンを使用して項目の順序を変更したりして、クエリーを編集します。UA_Products テーブルの属性 (製品 ID を含む) を使用してクエリー節を追加し、「>>」ボタンを使用して、クエリー節を「次の条件の製品の選択」リストに移動します。

4. クエリーの編集が完了したら、「変更の保存」をクリックしてクエリーを保存します。
5. オファーの「編集」ページで「変更の保存」をクリックして、オファーを保存します。

オファーの関連製品クエリーを消去するには

オファーの関連製品のリストのインポート後に、そのリストはクエリーとして保存されます。オファーの編集時に、クエリー内のすべての既存の製品 ID を含めてクエリー全体を消去できます。

1. Campaign で、関連製品のリストを消去するオファーを開きます。
2. 関連製品のリストの下で、「製品 ID をインポート」をクリックします。製品 ID をインポートすることによってすべての既存の条件がリセットされることを示す警告が表示されます。
3. 「OK」をクリックします。ID が表示されていない「製品の選択」ウィンドウが開きます。これで、新しい製品 ID をインポートするか、ID をインポートせずにクエリーを空のままにすることができます。
4. 「変更の保存」をクリックして、クエリーを保存します。
5. オファーの「編集」ページで「変更の保存」をクリックして、オファーを保存します。

選択した製品を関連製品クエリーから削除するには

クエリー全体を消去するのではなく、選択した製品をクエリーから削除できます。

1. Campaign で、選択した製品 ID を関連製品から削除するオファーを開きます。
2. 関連製品のリストで、Ctrl キーを押しながらマウスで選択することによって、削除するアイテムを選択します。
3. 削除するアイテムの選択が完了したら、「削除」をクリックします。選択したアイテムが関連製品から削除されます。
4. 「変更の保存」をクリックして、オファーを保存します。

オファーの複製

新しいオファーを作成するために既存のオファーを複製すると、データを入力する時間を節約できます。アクティブなオファーだけでなく、回収したオファーも複製できます。複製によって作成されるオファーには、固有のオファー・コードが自動的に割り当てられ、「<元のオファーの名前> のコピー」という名前が付けられます。また、このオファーの説明、セキュリティー・ポリシー、およびオファー属性値は、元のオファーと同じです。

注: 複製されるオファーは、元のオファーと同じフォルダーに作成されますが、後で別の場所に移動することができます。オファーを複製および移動するには、適切な権限を持っている必要があります。

「オファー」ページからオファーを複製するには

1. 「キャンペーン」>「オファー」を選択します。「オファー」ページが表示されます。

- 複製するオファーが含まれているフォルダーにナビゲートします。
- 複製するオファーの横にあるチェック・ボックスを選択します。
- 「**選択したオファーの複製**」アイコンをクリックします。 確認ウィンドウが表示されます。
- 「**OK**」をクリックして先へ進みます。 選択したオファーが複製され、オファーのリストに表示されます。

オファーのサマリー・ページからオファーを複製するには

- コピーするオファーの「オファー・サマリー (Offer Summary)」ページで、「**重複オファーを作成**」アイコンをクリックします。 確認ウィンドウが表示されません。
- 「**OK**」をクリックして先へ進みます。 各項目に元のオファーの値が事前に取り込まれた、新しいオファー・コードを持つ「**新規オファー**」ページが編集モードで表示されます。
- 変更する値 (オファー名と説明を含む) を編集します。

注: オファーの名前には、文字に関する特定の制限があります。詳しくは、269ページの『IBM Unica Campaign オブジェクト名での特殊文字』を参照してください。

- 「**変更の保存**」をクリックして、新規オファーを作成します。 オファーが保存され、新規オファーの「オファー・サマリー (Offer Summary)」ページが表示されます。

オファーのグループ化

報告または分析を目的として、オファーをグループ化できます。例えば、さまざまなチャネルを介して、さまざまな時期にオファーされた「**配送料無料**」オファーに対するレスポンス率を確認できます。

注: グループ化またはロールアップを目的として、レポートでオファー属性を使用するには、レポート管理者がレポートをカスタマイズする必要があります。

オファーは、以下の 2 とおりの方法でグループ化できます。

- 属性の使用
- フォルダーの使用

属性の使用

「オファー・グループ化項目」として使用する任意の数のカスタム属性をオファー内に作成できます。例えば、さまざまな大学提携クレジット・カード・プロモーションがある場合は、「**領域**」という名前のカスタム属性を作成して、レポートに使用することができます。これにより、西海岸の大学の校友と対比してニューイングランド大学の校友をターゲットにしたオファーをグループ化することができます。

カスタム属性を使用するオファーを作成する場合は、値を手動で入力する必要があります。パラメーター化された属性の値もコピーされるため、類似のオファーを複製して、データ入力の手間を省くこともできます。

オファーを識別しグループ化するために、オファー属性をスマート・オファー・リスト内で使用することもできます。

フォルダーでのオファーのグループ化

レポートを作成するために、オファーをフォルダー内でグループ化すると作業しやすくなる場合があります。関連するすべてのオファーを同じフォルダー内に維持して、レポート作成対象のオファーの入力を求めるプロンプトが出されたときに、そのフォルダーをターゲットとして指定すると、そのフォルダー（およびそのサブフォルダー）内のすべてのオファーがレポート作成対象として自動的に選択されます。

注：この方法でレポート作成対象にフォルダーとサブフォルダーの内容を含めた場合、それらのオファーの「ロールアップ」レポートは作成されません。これらのオファーは、フォルダー構造に含まれているという事実に基づいて単純に選択されただけです。

オファーを編集するには

既存のオファーがコンタクト・プロセスで使用されているかどうかに関係なく、役割と権限に基づいて、既存のオファーをいつでも編集できます。

注：オファーが運用で使用されると（運用で実行され、コンタクト履歴に記録されているフローチャート内のセルに割り当てられると）、編集できるのは、オファーの名前、説明、およびパラメーター化されたオファー属性のデフォルト値のみになります。この制限によって、Campaign は、既に個人に配布されたオファーの正確なオファーの詳細を追跡できます。

1. 「キャンペーン」>「オファー」を選択します。「オファー」ページが表示されます。
2. 編集するオファーにナビゲートし、ハイパーリンクされたオファー名をクリックします。オファーの「サマリー」ページが読み取り専用モードで表示されます。
3. 「編集」アイコンをクリックして、「編集」モードに入ります。
4. 変更を行います。

注：オファーの名前には、文字に関する特定の制限があります。詳しくは、269 ページの『IBM Unica Campaign オブジェクト名での特殊文字』を参照してください。

5. 変更が完了したら、「変更の保存」をクリックします。変更内容が保存され、読み取り専用のオファー・ページが表示されます。

オファーまたはオファー・リストを移動するには

1 つ以上のオファーをフォルダー間で移動できます。オファーを移動するための手順はオファー・リストを移動するための手順と同じであり、オファーとオファー・リストは、同じ操作で移動できます。

注：Campaign のオブジェクトを移動する場合は、さまざまなロケーションへのアクセスが、さまざまなセキュリティ・ポリシーによって制御されている可能性があります。

ることを認識しておく必要があります。オファーをフォルダーに移動できるのは、それを行う権限のあるセキュリティー・ポリシーを持っている場合のみです。

1. 「オファー」 ページから、移動するオファーまたはオファー・リストを選択して、「**選択したアイテムの移動**」アイコンをクリックします。

オファーを移動する別の方法は、「オファー・サマリー」 ページを表示して「**別のフォルダーに移動**」アイコンをクリックするという方法です。ただし、この代替方法は、オファーの移動のみに使用でき、オファー・リストの移動には使用できないことに注意してください。

「アイテムの移動」 ウィンドウが表示されます。

2. 選択したアイテムの移動先のフォルダーにナビゲートします。
3. 「**このロケーションを受け入れる**」 をクリックします。

選択したオファーまたはオファー・リストが、選択したフォルダーに入れられます。

オファー・リストへのオファーの追加

静的オファー・リストへのオファーの追加は、オファー・リストの作成時、またはオファー・リストを編集して行うことができます。

注: 新しく作成したオファーは、スマート・オファー・リストの照会基準を満たしていれば、何も操作を行わなくてもスマート・オファー・リストに追加することができます。

オファーの削除

オファーまたはオファー・リストを削除するには、適切な権限を持っている必要があります。さらに、システム保全性を保つために、Campaign では、システム・テーブルで参照されているオファーまたはオファー・リストを削除できません。これには、以下のようなオファーまたはオファー・リストが含まれます。

- キャンペーンに関連付けられているオファーまたはオファー・リスト
- コンタクト履歴にデータが追加されているフローチャートのコンタクト・プロセス内のセルに割り当てられているオファーまたはオファー・リスト
- フローチャートの最適化プロセスのセルに割り当てられているオファーまたはオファー・リスト

重要: このような状態のオファーまたはオファー・リストを削除しようとする、オファーまたはオファー・リストが削除ではなく回収されることを示す確認メッセージが表示されます。システム・テーブルで参照されているオファーまたはオファー・リストが今後使用されないようにするには、オファーまたはオファー・リストを削除するのではなく、回収する必要があります。

削除するオファーが静的オファー・リストに属している場合は、削除を確認するよう求められます。処理の続行を選択すると、削除されたオファーが、静的オファー・リストから自動的に削除されます。

削除されるオファーが割り当てられたセルを含むコンタクト・プロセスは、構成済みの状態にとどまりますが、オファーはプロセス構成ダイアログで「不明なオファー」として示され、フローチャートの実行時に警告が生成されます。

オファーを削除するための手順はオファー・リストを削除するための手順と同じであり、オファーとオファー・リストは、同じ操作で削除できます。

オファーまたはオファー・リストを削除するには

1. 「オファー」ページから、削除するオファーまたはオファー・リストを選択して、「**選択したアイテムを削除**」アイコンをクリックします。

または

削除するオファーの「オファー・サマリー (Offer Summary)」ページで、「**オファーの削除**」アイコンをクリックします。確認ウィンドウが表示されます。

2. 「**OK**」をクリックします。「オファー」ページが表示されます。削除されたオファーは、表示されていません。

オファーの回収

適切な権限を持っている場合は、今後使用されないよう、オファーおよびオファー・リストを回収できます。オファーを回収しても、そのオファーが既に使用されているキャンペーンまたはフローチャートは影響を受けず、そのオファーをベースにして生成されたシステム・テーブル・データ (コンタクトやレスポンス履歴など) とのデータ保全性が維持されます。

回収されたオファーは、オファー階層に表示されたままですが、グレー化されます。これらは、検索機能を使用して検索でき、新規オファーを作成するために複製でき、レポートに使用することができます。ただし、割り当てたり、オファー・リストの一部として配布したりすることはできません。

回収されたオファーを削除することによって、静的オファー・リストをクリーンアップできます。スマート・オファー・リストは、クエリー基準と一致する回収されていないオファーのみに解決されるため、クリーンアップが不要です。

注: オファーを回収すると、再び有効にすることはできません同じ詳細を持つオファーが必要な場合は、回収したオファーを複製して新しいオファーを作成できます。

オファーを回収するための手順はオファー・リストを回収するための手順と同じであり、オファーとオファー・リストは、同じ操作で回収できます。

オファーまたはオファー・リストを回収するには

1. 「オファー」ページで、回収したいオファーまたはオファー・リストを選択して、「**選択したリストの回収**」アイコンをクリックします。

オファーを回収する別の方法は、「オファー・サマリー」ページを表示して「**オファーの回収**」アイコンをクリックするという方法です。ただし、この方法を使用できるのはオファーの場合だけです。オファー・リストの場合は使用できません。

2. 「OK」をクリックします。

選択したオファーとオファー・リストが回収され、グレイで表示されます。

オファーをプロセス設定ダイアログからセルに割り当てるには

注: Campaign 環境が Marketing Operations と統合されている場合は、Marketing Operations を使用して、オファーまたはオファー・リストをキャンペーン・プロジェクトのターゲット・セル・スプレッドシート・フォームの出力セルに割り当てる必要があります。Campaign 環境がレガシー・キャンペーンにアクセスするように構成されている場合は、このガイドの説明に従って、オファーまたはオファー・リストをレガシー・キャンペーン内の出力セルに割り当てます。レガシー・キャンペーンの場合は、2 とおりの方法でオファーをセルに割り当てることができます。つまり、キャンペーンのターゲット・セル・スプレッドシートから割り当てる方法と、プロセス設定ダイアログを使用する方法です。詳しくは、2 ページの『IBM Unica Marketing Operations との統合について』を参照してください。

コンタクト・プロセスの設定ウィンドウから、オファーまたはオファー・リストを出力セルに割り当てることができます。

コンタクト・プロセスを構成する前に、使用するオファーまたはオファー・リストが存在していることを確認します。

1. 「編集」モードのフローチャートで、オファーを割り当てるセルが入っているコンタクト・プロセスをダブルクリックします。プロセス設定ダイアログが表示されます。
2. 「処理」タブをクリックします。

「セルに対応するオファーを指定します」インターフェースが表示され、プロセスに定義されているターゲット・セルごとに 1 行が表示されます。

3. テーブルに表示されるターゲット・セルごとに、「オファー」列をクリックして選択可能なオファーのドロップダウン・リストから選択するか、「オファー指定」をクリックします。

注: 入力セルがターゲット・セル・スプレッドシート (TCS) に定義されているトップダウン・セルにリンクされていて、オファーまたはオファー・リストが TCS のセルに既に割り当てられている場合は、それらがここに表示されます。必要に応じて、これらの割り当てをオーバーライドできます。コンタクト・プロセスで行った変更は、フローチャートの保存後に TCS に反映されます。

4. 検証コントロール・グループを使用するには、「検証コントロール・グループを使用」チェック・ボックスを選択します。

オファー割り当てテーブルが動的に更新され、ターゲット・セルがコントロールかどうか、またどのセルが現行セルのコントロールであることを示すための追加の列が表示されます。

- a. セルごとに、「コントロール?」列をクリックし、「Y」または「N」を選択して、コントロール・セルかどうかを示します。デフォルトで、この設定は「N」です。コントロール・セルとして指定されているセルには、オファーを割り当てることはできません。コントロール・セルとして指定されると、こ

これらのセルは「**コントロール・セル**」ドロップダウン・リストに表示され、これらをターゲット・セルに対するコントロールとして選択できるようになります。

- b. コントロール・セルではないセルごとに、「**コントロール・セル**」ドロップダウン・リストからコントロール・セルを指定します (オプション)。このリストには、「**コントロール? = Y**」と指定したセルの名前が追加されます。
5. 「**パラメーター**」タブをクリックして、各セルのオファー・パラメーターを指定します。割り当てるオファーにパラメーター化された属性が含まれている場合は、デフォルト値を表示し、必要に応じてそれらの値をオーバーライドできます。オファーごとに、1つのパラメーターにつき1行が表示されます。例えば、1つのオファーに4つのパラメーター化された属性が含まれている場合、このオファーでは4つの行が表示されます。
6. 「**対象セル**」ドロップダウン・メニューを使用して、指定したパラメーター値が割り当てられるセルを指示します。

複数のセルがあり、**[すべてのセル]** を選択すると、パラメーターごとに1つのオファーにつき1行が表示されます。「**指定値**」項目に入力する値が、そのオファーを受け取るすべてのセルに割り当てられます。

複数のセルに同じオファーを割り当てる場合で、セルごとにパラメーター値が異なる場合は、**[すべてのセル]** ビューに、これらのパラメーターの **[複数の値]** が表示されます。

個々のセルを選択すると、テーブルには、選択したセルに割り当てられているオファーのみが表示されます。「**指定値**」項目に入力する値は、そのセルにのみ割り当てられます。

注: 入力するパラメーター値が多数ある場合は、**[すべてのセル]** オプションを使用して、ほとんどのセルに適用可能な値を適用してから、個々のセルを選択してパラメーター値をオーバーライドすることで、データ入力の手間を省くことができます。

7. 必要に応じて、「**指定値**」項目の値を編集します。

注: 定数、ユーザー定義項目、またはテーブル項目をパラメーター値として使用できます。

8. オファーの割り当てと、オファーのパラメーター値の指定が完了したら、残りのプロセス構成を完了する必要があります。

オファーの検索

Campaign は、オファーの検索はサポートしますが、オファー・リストの検索はサポートしません。以下のいずれかの基準で、オファーの基本検索を実行できます。

- 名前または名前の一部
- 説明または説明の一部
- オファー・コードまたはオファー・コードの一部
- 所有者名

さらに、オファー属性および指定した値に基づくクエリーを使用してオファーまたはオファー・リストを検索するために、詳細検索機能を使用することができます。

オファーを検索するために詳細検索を使用するには

1. オファー・フォルダーから、「詳細検索」アイコンをクリックします。

「詳細検索オプション」ウィンドウが表示されます。

2. 「条件の作成」セクションで、「検索する属性」項目に使用するオファー属性を選択します。
3. 選択した属性のタイプに基づいて、検索のための条件をさらに入力できます。以下に例を示します。
 - 「オファー当たりのコスト」属性で、\$10.00 以下の値を検索します。
 - 「終了日」属性で、指定の日付 11/30/2007 を検索します。
 - 「説明」属性で、ストリング「2005」が含まれていない、指定した値を検索します。
4. 「AND>>」または「OR>>」をクリックして一連の基準を「次の条件でオファーを検索」セクションに移動し、クエリーを作成します。「次の条件でオファーを検索」セクションから条件を削除するには、「<<」をクリックします。

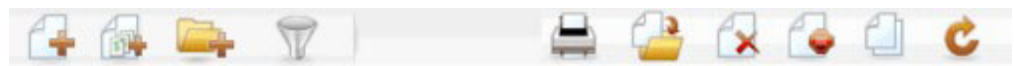
注: クエリーで使用する演算子 (例えば、「=」、「>」、「以下が含まれる」、「値で始まる」など) に基づいて、複数の値か単一の値のみを選択できます。演算子を使用して複数の値を選択するときは、「OR」条件を作成することになる場合がありますことに注意してください。例えば、「Color =」と指定し、blue、red、および white を色として選択するクエリーを作成する場合は、「Color = blue OR color = red OR color = white」というクエリーを作成することになります。

5. クエリーの作成が完了したら、「検索」をクリックします。

「検索結果」ページに、検索基準に一致するオファーが表示されます。

「オファー一覧」ページのアイコン

「オファー一覧」ページでは以下のアイコンが使用されます。



以下の表では、左側のアイコンから右側のアイコンへの順番で説明します。

表 15. 「オファー一覧」ページのアイコン

アイコン名	説明
オファーの追加	新規オファーを追加する場合にクリックします。
リストの追加	新規オファー・リストを追加する場合にクリックします。
サブフォルダーの追加	新規オファーのサブフォルダーを追加する場合にクリックします。

表 15. 「オファー一覧」 ページのアイコン (続き)

アイコン名	説明
詳細検索	「詳細検索オプション」ダイアログを開く場合にクリックします。このダイアログで、オファーを検索するための属性と値を指定できます。
項目の印刷	各オファーの横のチェック・ボックスをクリックして 1 つ以上のオファーを選択してから、このアイコンをクリックして、選択したオファーを印刷します。
選択したアイテムの移動	各オファーの横のチェック・ボックスをクリックして 1 つ以上のオファーを選択してから、このアイコンをクリックして、選択したオファーを移動します。
選択したアイテムの削除	各項目の横のチェック・ボックスをクリックして 1 つ以上のオファーまたはオファー・リストを選択してから、このアイコンをクリックして、選択した項目を削除します。
選択したリストの回収 (Retire Selected Lists)	各項目の横のチェック・ボックスをクリックして 1 つ以上のオファーまたはオファー・リストを選択してから、このアイコンをクリックして、選択した項目を回収します。
選択したオファーの複製	各オファーの横のチェック・ボックスをクリックして 1 つ以上のオファーを選択してから、このアイコンをクリックして、選択したオファーを複製します。
オファーの再読み込み	ページ上のオファーおよびオファー・リストの一覧を更新する場合にこのアイコンをクリックします。

サマリー・ページからオファー・レポートを表示するには

オファーのレポートには、オファーのサマリー・ページからアクセスできます。これらのレポートは、現在のオファーについてのデータのみが提供されている点を除けば、アプリケーションの「キャンペーン分析」領域で使用可能なレポートと同じです。

1. 「キャンペーン」 > 「オファー」 をクリックします。

「オファー」 ページが表示されます。

2. フォルダー構造をナビゲートして、レポートを表示するオファーを見つけます。
3. オffer名をクリックします。

「オファー・サマリー」 ページが表示されます。

4. 「レポート」 タブをクリックします。
5. 「レポート・タイプ」 ドロップダウン・リストからレポートを選択します。

選択したレポートが、Campaign によって表示されます。

オファー・リストの処理

オファー・リストでは、以下のタスクを実行できます。

- 『静的オファー・リストを追加するには』
- 『スマート・オファー・リストを追加するには』
- 158 ページの『オファー・リストを編集するには』
- 158 ページの『オファー・リストの移動』
- 159 ページの『オファー・リストの削除』
- 159 ページの『オファー・リストの回収』
- 159 ページの『セルへのオファー・リストの割り当て』

注: オファー・リストを処理するには、適切な権限が必要です。権限について詳しくは、「*Campaign 管理者ガイド*」を参照してください。

静的オファー・リストを追加するには

1. 「キャンペーン」>「オファー」を選択します。

「オファー」ページが表示されます。

2. 「リストの追加」アイコンをクリックします。

「新規オファー・リスト」ページが表示されます。

3. オファー・リストの名前、セキュリティー・ポリシー、および説明 (オプション) を入力します。

注: オファー・リストの名前には、文字に関する特定の制限があります。詳しくは、269 ページの『IBM Unica Campaign オブジェクト名での特殊文字』を参照してください。

4. 「これをスマート・オファー・リストにする (This is a smart offer list)」チェック・ボックスは、チェック・マークを外したままにします。
5. 「含まれているオファー」セクションで、ツリーまたはリスト・ビューを使用して、リストに追加するオファーを選択します。選択したオファーを「>>」ボタンを使用して「含まれているオファー」ボックスに移動します。
6. オファーの選択が完了したら、「変更の保存」をクリックします。新しいリストの「オファー・リスト・サマリー」ページが表示されます。

スマート・オファー・リストを追加するには

1. 「キャンペーン」>「オファー」を選択します。

「オファー」ページが表示されます。

2. 「リストの追加」アイコンをクリックします。

「新規オファー・リスト」ページが表示されます。

3. オファー・リストの名前、セキュリティー・ポリシー、および説明 (オプション) を入力します。
4. 「これをスマート・オファー・リストにする (This is a smart offer list)」チェック・ボックスを選択します。

5. 「含まれているオファー」セクションで、既存のオファー属性、それらの値、AND および OR 演算子を使用して、このオファー・リストにオファーを含めるための条件を作成します。
6. 必要に応じて、「検索アクセスを制限 (すべてのユーザー)」の下にあるフォルダー・ビューを使用して、選択したフォルダーに検索を制限します。検索結果にサブフォルダーを含めるには、「サブフォルダーを含める」チェック・ボックスを選択します。

注: この検索の結果として選択されたオファーは、ユーザーが通常はオファーを表示したりオファーにアクセスしたりする権限を持っていないとしても、このオファー・リストに対するアクセス権限を持つすべてのユーザーに対して使用可能になります。

7. 必要に応じて、「一致するオファーのソート条件」の下にあるドロップダウン・リストを使用して、一致するオファーをソートする基準となるオファー属性を選択し、ソートを昇順にするのか降順にするのかを選択します。
8. 必要に応じて、検索結果を一致する最初の「X」個のオファーに制限するかどうかを示します。デフォルトで、制限はありません。
9. スマート・オファー・リストの基準を定義し終えたら、「変更の保存」をクリックします。新しいリストの「オファー・リスト・サマリー」ページが表示されません。

オファー・リストを編集するには

オファー・リストの変更を保存すると、オファー・リストを使用するキャンペーンは、次回の実行時に最新のオファー・リスト定義を自動的に使用します。

1. 「キャンペーン」>「オファー」を選択します。

「オファー」ページが表示されます。

2. 編集するオファー・リストのハイパーリンクされた名前をクリックします。

オファー・リストの「サマリー」タブが表示されます。

3. 「編集」アイコンをクリックします。

オファー・リストの詳細が「編集」モードで表示されます。

4. 必要な変更を行います。

オファー・リストの名前には、文字に関する特定の制限があります。詳しくは、269 ページの『IBM Unica Campaign オブジェクト名での特殊文字』を参照してください。

5. 変更が完了したら、「変更の保存」をクリックします。リストの「オファー・リスト・サマリー」ページが表示されます。

オファー・リストの移動

オファーを移動する場合と同じステップを実行して、1 つ以上のオファー・リストをフォルダー間で移動できます。また、オファーとオファー・リストは、同じ操作で移動できます。

オファー・リストの削除

オファーを削除する場合と同じステップを実行して、1 つ以上のオファー・リストを削除できます。また、オファーとオファー・リストは、同じ操作で削除できます。

オファー・リストの回収

今後使用されないよう、オファー・リストをいつでも回収できます。オファー・リストを回収しても、そのリストに含まれているオファーは影響を受けません。

回収されたオファー・リストは、オファー階層に表示されたままですが、グレー化されます。これらは、レポートの対象として使用可能ですが、割り当てることができなくなります。

注: オファー・リストを回収すると、再び有効にすることはできません。回収したオファー・リストと同じ詳細を持つオファー・リストが必要な場合は、オファー・リストを手動で再作成する必要があります。

オファーを回収する場合と同じステップを実行して、オファー・リストを回収します。また、オファーとオファー・リストは、同じ操作で回収できます。

セルへのオファー・リストの割り当て

注: Campaign 環境が Marketing Operations と統合されている場合は、Marketing Operations を使用して、オファーまたはオファー・リストをキャンペーン・プロジェクトのターゲット・セル・スプレッドシート・フォームの出力セルに割り当てる必要があります。Campaign 環境がレガシー・キャンペーンにアクセスするように構成されている場合は、このガイドの説明に従って、オファーまたはオファー・リストをレガシー・キャンペーン内の出力セルに割り当てます。レガシー・キャンペーンの場合は、2 とおりの方法でオファーをセルに割り当てることができます。つまり、キャンペーンのターゲット・セル・スプレッドシートから割り当てる方法と、プロセス設定ダイアログを使用する方法です。詳しくは、2 ページの『IBM Unica Marketing Operations との統合について』を参照してください。

コンタクト・プロセスでオファー・リストをセルに割り当てる方法は、個々のオファーを割り当てる場合と同じです。オファーとオファー・リストは任意の組み合わせで同じセルに割り当てることができます。

ただし、オファー・リストに含まれているオファーのパラメーター化された属性については、そのデフォルト値が使用されます。オファー・リストに含まれているオファーにパラメーター値を割り当てることはできません。パラメーター化された値を変更する必要がある場合は、以下のいずれかを行うことができます。

- 既存のオファーに関連付けられているデフォルト値を変更し、その希望のデフォルト値を使用してオファーのコピーを作成し、オファー・リストでその値が確実に使用されるようにする。
- オファー・リストの外部でオファーを個々に割り当てる。

Marketing Operations が Campaign と統合されている場合のオファーの管理

IBM Unica Campaign 環境が IBM Unica Marketing Operations と統合されている場合、オファー管理には 2 つのオプションがあります。

- Marketing Operations バージョンの機能によってオファーが管理されるようにシステムが構成されている場合は、「操作」メニューの「オファー」オプションを使用します。この方法によるオファーの作成について詳しくは、「*IBM Unica Marketing Operations and Campaign 統合ガイド*」を参照してください。
- Campaign バージョンの機能によってオファーが管理されるようにシステムが構成されている場合は、「キャンペーン」メニューの「オファー」オプションを使用します。

どのオファー管理オプションがシステムで構成されているのかについては、システム管理者に確認してください。

Marketing Operations の資産を Campaign のオファーで使用方法

Marketing Operations と Campaign の両方がインストールされていて、Marketing Operations 用の IBM Unica Marketing Asset Management アドオンのライセンス交付を受けている場合、Marketing Operations の資産ライブラリー内のデジタル資産をキャンペーンに組み込むことができます。例えば、Marketing Operations の資産ライブラリーに格納されている製品ロゴをオファーに組み込むことができます。

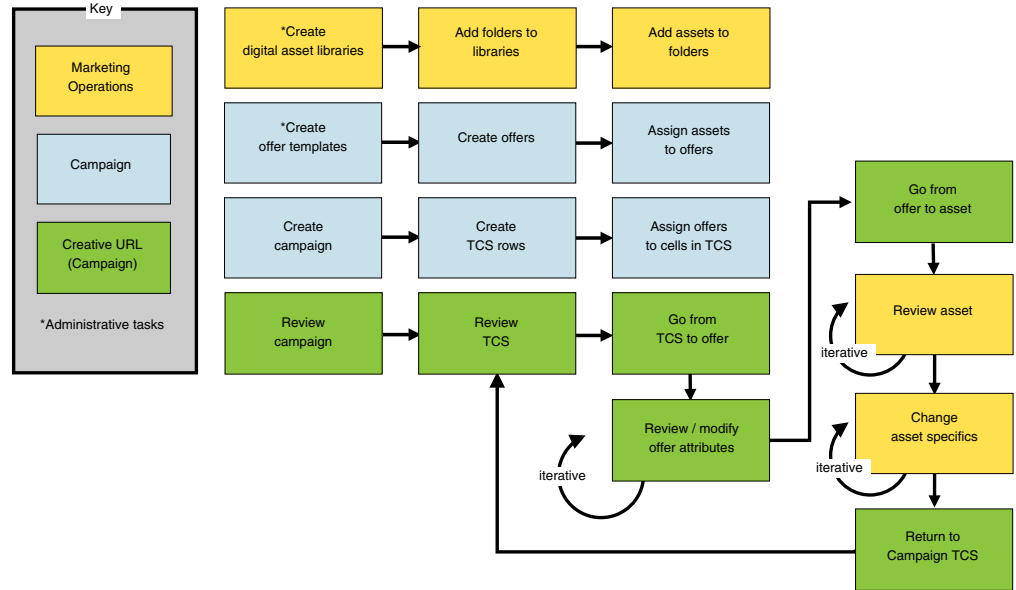
資産をオファーに組み込むには、**CreativeURL** 属性を持つテンプレートを基にしてオファーを作成します。「クリエイティブ URL」とは、Marketing Operations の資産の場所を指すポインターのことです。**CreativeURL** 属性が指す資産が、オファーに組み込まれます。

「**CreativeURL**」属性を使用すると、オファー、オファー・テンプレート、またはキャンペーンの構成時に、Campaign から Marketing Operations へシームレスに移動することができます。

例えば、キャンペーンを作成または編集する際に、ターゲット・セル・スプレッドシート (TCS) 内のセルから、そのセルに関連するオファーに移動することができます。そのオファーから、Marketing Operations 内の関連する資産に移動して、この資産を表示または変更することができます。キャンペーンですぐに使用できるように、新しい資産をライブラリーにアップロードすることもできます。

考えられるワークフローの例を以下に示します。実際のワークフローは、この例とは異なる場合があります。

重要: Campaign は、Marketing Operations と統合されていても統合されていなくてもかまいません。ただし、オファーの統合は無効 にしてください。オファーの作成は、Campaign によって実行されます。



Marketing Operations の資産を Campaign のオファーで使用する方法

このトピックでは、Marketing Operations のデジタル資産を Campaign のオファーに関連付ける方法について説明します。

資産は、マーケティング・プログラムで使用することを意図した電子ファイルです。例えば、ロゴ、ブランド・イメージ、マーケティング調査ドキュメント、参照資料、企業販促用品、ドキュメント・テンプレートなどがあります。Marketing Operations と Campaign の両方を使用する場合、Marketing Operations の資産ライブラリー内のファイルを Campaign のオファーの一部として組み込むことができます。資産をオファーに組み込むには、**CreativeURL** 属性を使用します。「クリエイティブ URL」とは、Marketing Operations の資産ライブラリー内のファイルを指すポインターのことです。

表 16. Marketing Operations の資産を Campaign のオファーで使用する方法

タスク	詳細
前提条件: Marketing Operations に資産ライブラリーを作成してデータを追加します。	ファイルのリポジトリとして機能する資産ライブラリーは、Marketing Operations 管理者が作成します。Marketing Operations ユーザーは、デジタル資産をアップロードし、資産ライブラリーのフォルダー内でそれらの資産を編成することができます。 前提条件とガイドラインのリストについては、「Campaign 管理者ガイド」を参照してください。
前提条件: 「CreativeURL」属性をオファー・テンプレートに追加します。	Campaign 管理者は、テンプレートの定義時に「CreativeURL」属性をオファー・テンプレートに追加します。 詳しくは、「Campaign 管理者ガイド」を参照してください。

表 16. Marketing Operations の資産を Campaign のオファーで使用する方法 (続き)

タスク	詳細
<p>CreativeURL 属性を持つテンプレートを基にオファーを作成し、このオファーに資産を 1 つ関連付ける。</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 「キャンペーン」 > 「オファー」を選択し、「オファーの追加」アイコンをクリックして、「CreativeURL」属性が含まれているテンプレートを選択します。 2. 「新規オファー」ページを使用して、オファー (名前、セキュリティ・ポリシー、その他の情報) を定義してから、「クリエイティブ URL」の「ライブラリーの参照」をクリックします (ステップ 2 から 5 は、ターゲット・セル・スプレッドシートのビュー・モードから実行することもできます)。 注: 統合 UMO-UC 環境の場合は、他の場所 (サーバーなど) に格納されている資産について、「クリエイティブ URL」項目に URL を入力することができます。 3. ポップアップで、開くライブラリーをクリックします。ライブラリー・ウィンドウが開きます。 4. ライブラリー・ウィンドウで、資産ライブラリー内のフォルダーに移動して、このオファーで使用する資産を選択します。 5. 資産を追加するには、「資産の追加」をクリックし、資産の名前、所有者、その他の情報を定義します。「ファイル」項目で「アップロード」をクリックして、資産を参照します。ファイル、プレビュー・ファイル、またはサムネールをアップロードすることができます。 6. プロンプトに従って、資産を選択してライブラリーにアップロードし、変更内容を保存し、資産を受け入れます。 7. 「変更の保存」をクリックして、オファーを保存します。 <p>これで、指定した資産へのリンクが「クリエイティブ URL」項目に組み込まれました。</p>
<p>キャンペーンのターゲット・セル・スプレッドシート (TCS) 内のセルにオファーを割り当てる。</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 「キャンペーン一覧」ページに移動して任意のキャンペーンをクリックし、「ターゲット・セル」タブを選択して TCS を編集します。 2. 「割り当て済みのオファー」列をクリックして、「1 つまたは複数のオファーの選択」をクリックします。 3. 「オファーの選択」ウィンドウを使用して、作成したオファーを選択します。 4. 編集内容を保存して TCS を終了します。 <p>これで、Marketing Operations のデジタル資産がキャンペーンに組み込まれました。通常、キャンペーンはこの後、以下の手順で説明するレビュー・プロセスと調整プロセスを通過します。</p>

表 16. Marketing Operations の資産を Campaign のオファーで使用する方法 (続き)

タスク	詳細
<p>オプションで、オファーを変更する。</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 「キャンペーン一覧」ページに移動して任意のキャンペーンをクリックし、「ターゲット・セル」タブを選択して TCS を編集します。 2. 「割り当て済みのオファー」列をクリックして、「オファーの表示」をクリックします。 3. 「オファー詳細の表示/編集」ウィンドウが開きます。オファーを選択して、「プレビュー」をクリックします。(オファーを削除する場合は、オファーを選択して「削除」をクリックします)。 4. 編集用にオファーを開くには、ポップアップ・ウィンドウの上部にある「編集」アイコンをクリックします。 5. オファーが編集用に表示されたら、パラメーター化された属性の値を編集することができます。以下のようにして、Marketing Operations 資産にアクセスすることもできます。 <ol style="list-style-type: none"> a. 「クリエイティブ URL」項目の「ライブラリーの参照」リンクをクリックします。 b. ウィンドウが表示されたら、ライブラリーをクリックします。 c. ウィンドウが表示されたら、資産ライブラリー内のフォルダーに移動し、このオファーで使用する資産を選択します。 d. 資産を追加する場合は、「資産の追加」をクリックして必要な情報を入力します。「ファイル」項目で「アップロード」をクリックして、資産を参照します。ファイル、プレビュー・ファイル、またはサムネールをアップロードすることができます。プロンプトに従ってアクションを実行してください。 e. 「変更の保存」をクリックして、オファーを保存します。 <p>これで、選択した資産へのリンクが「クリエイティブ URL」項目に組み込まれました。</p>
<p>保存して終了します。</p>	<p>IBM Marketing Operations のウィンドウを終了して、Campaign TCS に戻ります。編集内容を保存して TCS を終了します。</p>

第 7 章 セル

セルとは、Campaign において 1 つ以上のオファーの割り当て先となる ID (データベース内の顧客 ID や見込み顧客 ID など) のリストのことです。

セルは、フローチャートでデータ操作プロセスを構成および実行して作成します。これらの出力セルは、同じフローチャート内の他のプロセス (その作成元プロセスのダウンストリーム) で、入力として使用することもできます。

フローチャートで生成される各セルには、以下が含まれます。

- システム生成の**セル・コード**。セル・コードはシステム管理者が決定する標準形式になっており、生成時には固有になっています。セル・コードの固有性については、フローチャートの構成パラメーター AllowDuplicateCellCodes が「No」に設定されていない限りチェックされません。「No」の場合、セル・コードは現在のフローチャート内のみで固有であることが強制されます。セル・コードとセル・コード・ジェネレーターについては、「*Campaign 管理者ガイド*」を参照してください。IBM Unica Marketing が提供する構成パラメーターについては、「*Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。
- システム生成の**セル名**。現在のフローチャート内で固有です。

フローチャート内でセルを作成するほかに、ターゲット・セル・スプレッドシートにプレースホルダー・セル・コードを作成することもできます。後でこれを、フローチャートで作成したセルにリンクすることができます。

セル名およびセル・コード

セル名とセル・コードは重要です。セルを出力するかまたはセルを入力として使用するプロセス間のリンクが、セル名とセル・コードによって確立されるためです。

セル・コード

セル・コードはシステム管理者が決定する標準形式になっており、生成時には固有になっています。セル・コードは編集可能であるため、セル・コードの固有性については、フローチャートの構成パラメーター AllowDuplicateCellCodes が「No」に設定されていない限りチェックされません。「No」の場合、セル・コードは現在のフローチャート内のみで固有であることが強制されます。ターゲット・セル・スプレッドシート (TCS) では、固有性についてのチェックは行われません。セル・コードおよびセル・コード・ジェネレーターについては、「*Campaign 管理者ガイド*」を参照してください。IBM Unica Marketing が提供する構成パラメーターについては、「*Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

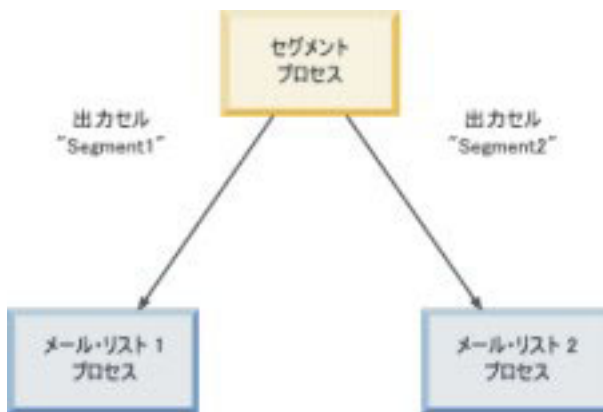
セル名

注: セル名には文字に関する特定の制限があります。詳しくは、269 ページの『IBM Unica Campaign オブジェクト名での特殊文字』を参照してください。

デフォルトでは、セル名はその生成元のプロセスに基づいて決まります (例えば、セルが「Select1」というプロセスによって生成された場合、デフォルトのセル名は「Select1」です) が、オーバーライドすることは可能です。プロセス名を変更すると、そのプロセスによって生成されたセル名も、そのプロセス内、および同じフローチャート内の接続されたダウンストリーム・プロセス内の両方で、自動的に変更されます。セル名を変更すると、そのセルと、そのセルを入力として使用するダウンストリーム・プロセスの間のリンクにも影響する可能性があります。

例えば、Segment1 および Segment2 という 2 つの出力セルを生成するセグメント・プロセスがあり、これらのセルが 2 つのメール・リスト・プロセス (Mail List 1 および Mail List 2) への入力として使用される場合、それらのメール・リスト・プロセスを既に接続してしまった後にセグメント・セルの名前を変更するときは、Campaign が新しいセル名をどのように処理するかを理解することが必要になります。

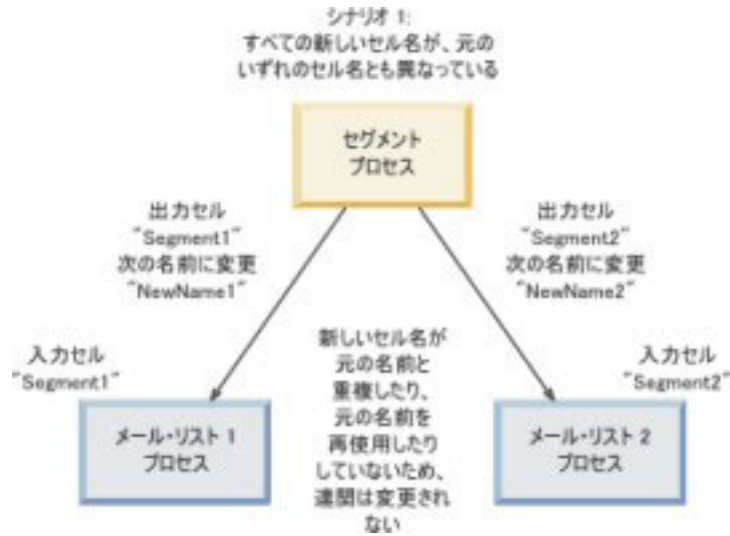
次の図は、2 つのセルを出力するセグメント・プロセスがあり、その各セルがダウンストリームのメール・リスト・プロセスの入力になる、という基本的な例を示しています。



例: セルの名前変更のシナリオ

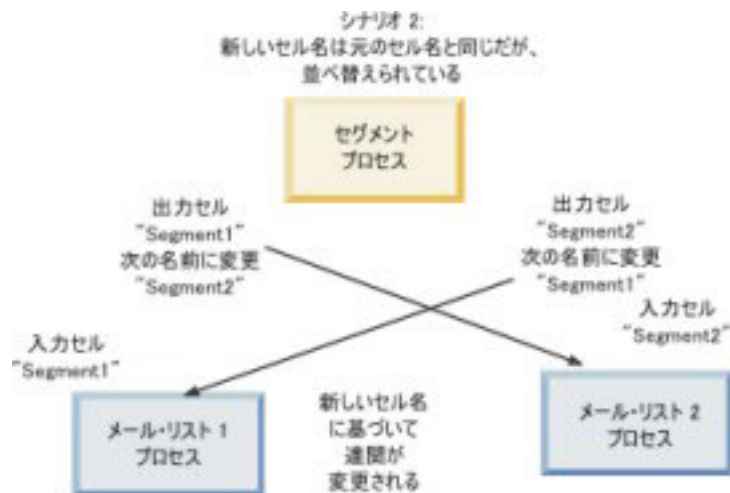
シナリオ 1: すべての新規セル名が元のどの名前とも異なる場合

新規セル名が元のデフォルトの名前とオーバーラップしない場合 (つまり、この例では、セグメント出力セルのどちらにも名前として「Segment1」も「Segment2」も使用しない場合)、Campaign はセルの元の「順序」に基づいて元のリンクを維持できます。この状況では、元のセル名のどちらともオーバーラップや再使用がないため、セグメント・プロセスの出力セルと 2 つそれぞれのメール・リスト・プロセスとの間のリンクは変更されないまま維持されます。次の図を参照してください。

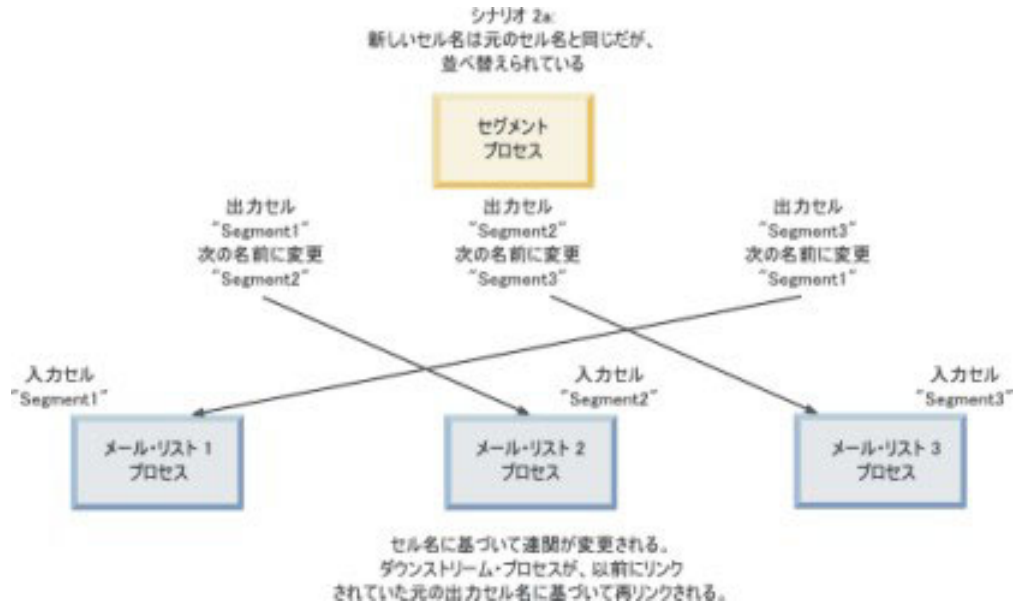


シナリオ 2: 新規セル名セットが元のセル名セットと同じだが、順序 が変更されている場合

セル用に選択した新規名が元の名前セットとまったく同じで、単純に順序変更しただけの場合、ダウンストリーム・プロセスは使用可能な出力セルを名前（つまり、新規セル名の名前）で探すため、必要に応じてリンクが切り替わります。この例では、名前変更されて新たに Segment2 となった出力セルは Mail List 2 への入力セルとなり、新たに Segment1 となったセルは Mail List 1 への入力セルとなります。次の図を参照してください。

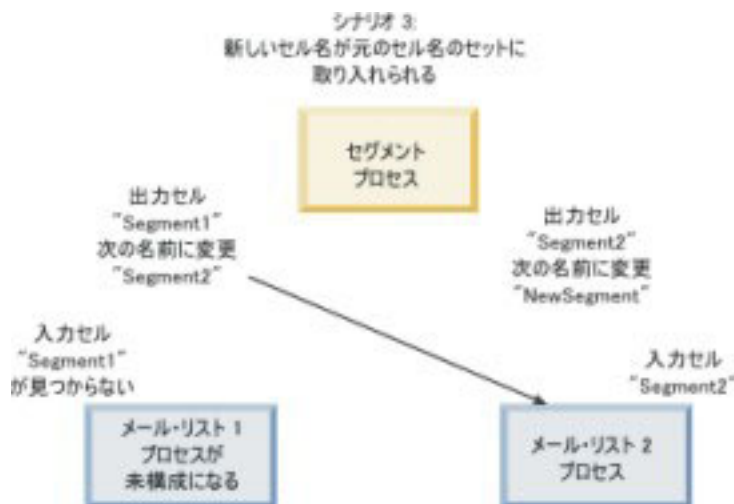


次の図は、3 つの出力セルおよび入力セルがある場合の同じ状況を示しています。



シナリオ 3: 新規セル名セットが元のセル名の一部とオーバーラップし、新しいセル名が導入された場合

新しい名前が元の名前の一部とオーバーラップし、新しいセル名が追加された場合、元のセル名セットの名前を使用するリンクは認識可能ですが、それ以外のリンクは切断されます。例えば、セル「Segment1」を「Segment2」に名前変更し、セル「Segment2」を「NewSegment」に名前変更すると、新しい「Segment2」は Mail List2 に接続されますが、Mail List1 は、「Segment1」という名前の入力セル名を見つけれないため、構成解除されます。



セルの操作

セルに関して以下の作業を行うことができます。

- 『フローチャート・プロセス内でセルを作成する方法』
- 『出力セル・サイズの制限』
- 173 ページの『セル名の変更』
- 174 ページの『セル名のリセット』
- 175 ページの『セル名とセル・コードのコピーおよび貼り付けについて』
- 176 ページの『セル・コードの変更』
- 178 ページの『プロセス設定ダイアログを使用してフローチャート・セルをターゲット・セルにリンクする方法』
- 179 ページの『プロセス設定ダイアログを使用してフローチャート・セルをターゲット・セルからリンク解除する方法』
- 179 ページの『フローチャート CSP のセルにオファーを割り当てる方法』
- 180 ページの『セルへのオファー・リストの割り当て』
- 180 ページの『セルに割り当てられたオファーでパラメーターを設定する方法』

フローチャート・プロセス内でセルを作成する方法

セルは、フローチャート内のいずれかのデータ操作プロセス (オーディエンス、抽出、マージ、選択など) の出力として作成します。

1. **編集**モードのフローチャートで、データ操作プロセスを構成します。
2. プロセスを実行すると、(プロセスのタイプおよび構成の詳細に応じて) 1 つ以上のセルがそのプロセスの出力として作成されます。

注: フローチャート内でセルを作成するほかに、ターゲット・セル・スプレッドシートにプレースホルダー・セルを作成して、後でそれらをフローチャートのセルにリンクすることもできます。

出力セル・サイズの制限

オーディエンス、抽出、マージ、選択などのデータ操作プロセスによって生成される ID の数を制限するには、プロセス設定ダイアログの「**セル・サイズの制限**」タブをクリックします。

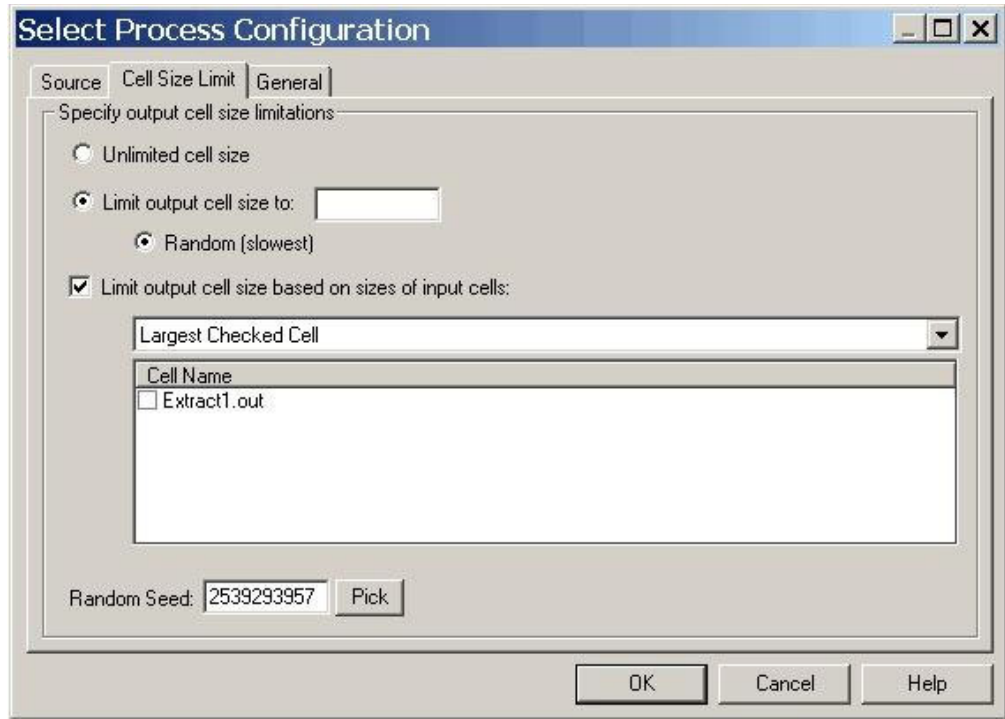
出力セル・サイズを制限するためのオプションは、そのプロセスがセルまたはテーブルからの入力を受け入れるかどうかによって異なります。どちらのタイプの入力も受け入れることができるプロセスでは、「セル・サイズの制限」ウィンドウが動的に変化して、入力タイプに応じたオプションが表示されます。

- 出力セルから入力を受け取るプロセス
- テーブルから入力を受け取るプロセス

どちらのタイプの入力でも、ID のランダム選択で使用するランダム・シードも変更可能です。

出力セルから入力を受け取るプロセス

プロセスが出力セルから入力を受け取る場合、「セル・サイズの制限」タブを使用して、出力される ID の数を制限します。



このウィンドウでは、出力セル・サイズに設ける制限を指定します。

- **セル・サイズの制限なし:** このプロセスのタブの照会基準または選択基準を満たすすべての ID が返されます。これはデフォルト・オプションです。
- **セル・サイズの上限指定:** 照会基準を満たすすべての ID からランダムに選択された固有の ID が、指定した数だけ正確に返されます。このテキスト・ボックスに、返されるようにする ID の数を入力します。この方法では、Campaign はセルから入力を受け取るプロセスにおいて、データベースから返された重複解消済みレコードを入力セルのレコードと照合してから、ランダム選択を行って最終セル・サイズに達するようにします。プロセスからプロセスに渡されるセル内の ID リストは常に固有であることに注意してください。

注: 「ランダム」オプションを使用してレコードを選択すると、すべての ID を Campaign サーバーに取得する必要があるため、大量の一時スペースが使用され、処理時間が最も長くなります。このオプションは、正確に N 件のレコードが返されることが重要な場合にのみ使用してください。

入力セル・サイズに基づいた出力セル・サイズの制限

セルから入力を受け取るプロセスでは、接続された着信プロセスからのセル・サイズを属性として使用して、出力セル・サイズを制限することができます。これは、実際にそのセル・データまたは ID を使用していない場合でも可能です。

例えば、それぞれが 1 つの出力セルを持つ 3 つのプロセスを選択プロセスに接続する場合、選択プロセスへの実際のデータ入力として 3 つの着信セルの 1 つしか

使用しない可能性があります、それ以外の着信セルの属性を使用して選択プロセスの出力セル・サイズを指定することができます。実線は、出力セルが実際に選択プロセスによって使用されたプロセスを接続し、点線は、出力セルがデータ入力として使用されず、選択プロセスと一時的な関係のみを持つプロセスを接続します。

サイズ属性を、現在のプロセスの出力セル・サイズの制限に使用する入力セルを指定するには、「**入力セル・サイズに基づく制限**」チェック・ボックスを使用します。これらのオプションの一部は、指定する「**セル・サイズの上限指定**」値と併用することで機能します。

入力セルのサイズに基づいて出力セル・サイズを制限する方法:

1. プロセスで「**セル・サイズの制限**」タブをクリックします。

「セル・サイズの制限」ウィンドウが表示されます。

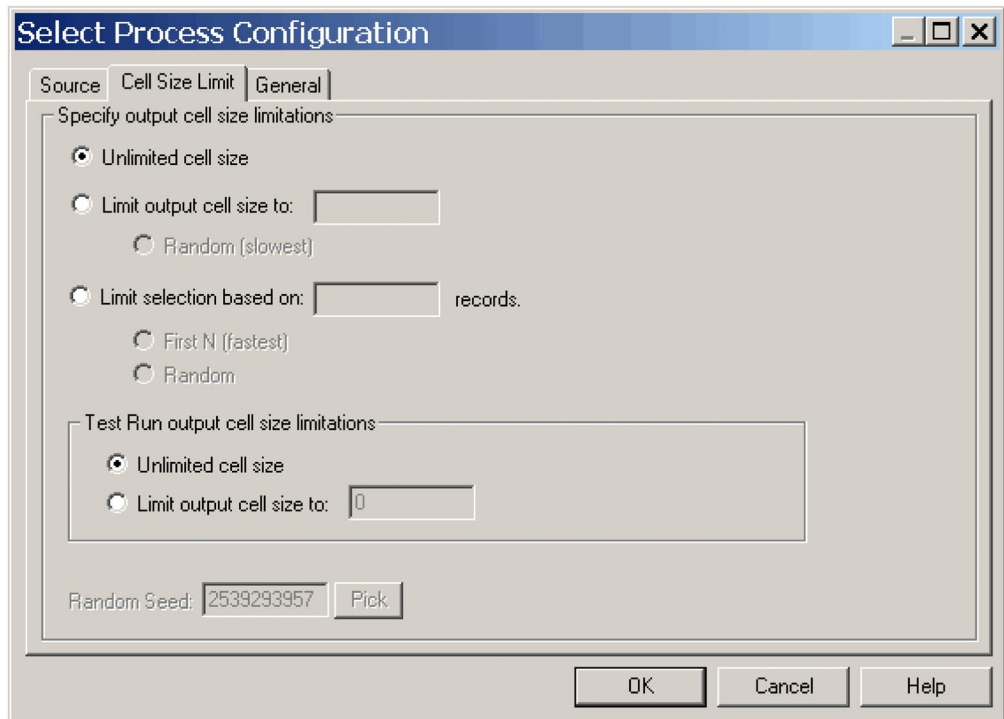
2. プルダウン・リストからオプションを選択して、制限を計算する方法を選択します。

- **選択したセルの最大値** — 出力セル・サイズが、選択した入力セルのうち、最大のセルのサイズを超えてはならないことを指定します。例えば、サイズがそれぞれ 250、500、および 100 のセル A、B、および C をチェック対象として選択する場合、このプロセスの出力セルのサイズは、入力セルのサイズの最大値である 500 に制限されます。
- **指定した上限値と選択されたセルの合計値の差** — このオプションは、上記で指定された「**セル・サイズの上限指定**」の値と組み合わせて使用します。このオプションは、出力セル・サイズが、上記の「**セル・サイズの上限指定**」項目に指定された数値と、選択したすべての入力セルの合計との差を超えてはならないことを指定します。例えば、「**セル・サイズの上限指定**」の値として 1000 を入力し、それぞれのサイズを 100 および 200 と指定してチェック対象入力セル A および B を入力した場合、このプロセスの出力セルのサイズは $1000 - (100+200) = 700$ に制限されます。
- **選択したセルの最小値** — 出力セル・サイズは、選択したどの入力セルのサイズも超えてはならないことを指定します。例えば、サイズがそれぞれ 250、500、および 100 のセル A、B、および C をチェック対象として選択する場合、このプロセスの出力セルのサイズは、入力セル・サイズの最小値である 100 に制限されます。
- **選択したセルの合計値** — 出力セル・サイズが、選択したすべての入力セルの合計サイズ (和) を超えてはならないことを指定します。例えば、サイズがそれぞれ 250、500、および 100 のセル A、B、および C をチェック対象として選択する場合、このプロセスの出力セルのサイズは、3 つすべての入力セルのサイズの合計である 850 に制限されます。

3. 入力セルのリストで、出力セル・サイズの基準となるサイズを持つ入力セルのチェック・ボックスを選択します。

テーブルから入力を受け取るプロセス

プロセスがテーブル (または、戦略的セグメント。ただし、このオプションが許容されるプロセスの場合) から入力を受け取る場合、「**セル・サイズの制限**」ウィンドウが表示されます。



このウィンドウを使用して、出力セル・サイズに制限を指定します。**制限オプション**間の主な相違点は、リソースへの影響と、データ・ソースが正規化されていない場合の最終結果レコード数です。

- **セル・サイズの制限なし:** このプロセスのタブの照会基準または選択基準を満たすすべての ID が返されます。これはデフォルト・オプションです。
- **セル・サイズの上限指定:** 照会基準と一致するすべての ID からランダムに選択された、指定数の固有 ID が正確に返されます。返されるようにする ID の数を入力します。Campaign はランダム選択の前に ID セット全体で重複解消を行い、そのうえで指定された数のレコードのみを保存するため、ID 項目に重複が存在する場合でも固有 ID のリストが返されます。

注: このオプションでレコードを選択すると、すべての ID を Campaign サーバーに取得する必要があるため、大量の一時スペースが使用され、時間も最も長くなります。このオプションは、ID 項目でデータが正規化されていないときに、正確に N 件のレコードが返されることが重要な場合にのみ使用してください。

- **出力件数の指定:** このオプションは、照会基準を満たした Campaign レコード数に上限を設ける場合に使用します。このオプションにより、最終的なレコード・セットを選択する際に費やされる時間とメモリー・リソースは削減されますが、結果的に、指定した数より少ない固有 ID が返される場合があります。
 - **最初の N 件 (最速):** Campaign は、照会基準を満たす最初のレコードのみをデータベースから取得します。Campaign は、指定された数のレコードを受け取るとレコードの受け入れを停止します。Campaign はこの後に、それらの ID の重複解消を行います。そのため、データが正規化されていない場合は、指定数より少ない固有レコードが最終結果に含まれることとなります。これは、データの取得にかかる時間が少なく、使用一時スペースも少ないため、最も迅速な方法です。

- **ランダム:** Campaign は、照会基準を満たすすべてのレコードをデータベースから取得した後に、指定された数のレコードをそれらのレコードからランダムに選択します。この後 Campaign は、保存されたそれらの ID の重複解消を行います。そのため、データが正規化されていない場合は、指定数より少ない固有レコードが最終結果に含まれることになります。このオプションでは、ランダムに選択されたレコードのみが Campaign によって取得および保管されるため、使用一時スペース量は少なくなります。

テスト実行の出力のセル・サイズ制限の適用

オーディエンス・プロセスや選択プロセスなどの一部のプロセスでは、テスト実行用に特別にセル・サイズを制限することもできます。このセクションで示すオプションを使用して、テスト実行で返され、その後に処理されるデータの量を制御してください。

- **セル・サイズの制限なし** — これはデフォルト・オプションです。このプロセスの「ソース」タブの照会基準または選択基準によって返される ID の数は変わりません。このオプションを使用すると、本番実行中に対象となるすべてのデータに対してテスト実行が行われますが、オファー履歴とコンタクト履歴へのデータ挿入は行われません。
- **セル・サイズの上限指定** — 照会基準と一致するすべての ID からランダムに選択された、指定数の ID が正確に返されます。このテキスト・ボックスに、返されるようにする ID の数を入力します。この方法では、Campaign はランダム選択の前に ID セット全体で重複解消を行い、そのうえで指定された数のレコードのみを保存するため、ID 項目に重複が存在する場合でも固有 ID のリストが返されます。

注: このオプションでレコードを選択すると、すべての ID を Campaign サーバーに取得する必要があるため、大量の一時スペースが使用され、時間も最も長くかかります。このオプションは、ID 項目でデータが正規化されていないときに、正確に N 個のレコードが返されることが重要な場合にのみ使用してください。

セル名の変更

デフォルトでは、プロセス内で作成されるセルの名前は、そのプロセス名と一致します。複数のセルを作成するプロセスでは、出力セル名はプロセス名とセグメント名を連結した名前になります。例えば、3 つのセグメントを作成する「Segment1」というセグメント・プロセスでは、デフォルトの出力セル名は

「Segment1.Segment1」、「Segment1.Segment2」、および「Segment1.Segment3」となります。

セル名は、その作成元のプロセスの名前にリンクするように設計されています。プロセス名を編集すると、セル名も自動的に変更されます。

ただし、セル名を編集すると、プロセス名へのリンクが削除されます。つまり、それ以降にプロセス名を変更した場合、セル名は自動的に変更されなくなります。

フローチャート・プロセス内のセルの名前を変更する方法

注: 出力セル名への変更を保存すると、セル・コードに対して「自動生成」が選択されている場合は、セル・コードが再生成されます。セル・コードを変更したくない場合は、セル名の編集前に「自動生成」のチェック・マークを外しておきます。

1. **編集モード**のフローチャートで、出力セル名を変更するプロセスをダブルクリックします。そのプロセスのプロセス設定ダイアログが表示されます。
2. 「**全般**」タブをクリックします。プロセス名や出力セル名など、プロセスの全般情報が表示されます。
3. 「**出力セル名**」項目にカーソルを置いてテキストが選択されるようにし、セル名を編集します。
4. 「**OK**」をクリックします。変更が保存されます。セル名を編集したためにプロセス名と一致しなくなった場合、これらの名前はリンクされなくなります。

注: フローチャートを保存しても、どのようなタイプの検証もトリガーされません。フローチャートが正しく構成され、エラーがないことを確認するには、手動でフローチャートの検証を実行できます。

セル名のリセット

デフォルトでは、プロセス内で作成されるセルの名前は、そのプロセス名と一致します。複数のセルを作成するプロセスでは、出力セル名はプロセス名とセグメント名を連結した名前になります。例えば、3つのセグメントを作成する「Segment1」というセグメント・プロセスでは、デフォルトの出力セル名は

「Segment1.Segment1」、「Segment1.Segment2」、および「Segment1.Segment3」となります。

プロセスの名前を変更した場合、セル名も自動的に変更されるため、セル名とプロセス名のリンクは維持されます。

ただし、セル名を手動で変更したためにプロセス名と相違するようになると、セル名とプロセス名はリンクされなくなります。リンクを復元するには、セル名を変更してプロセス名と同じ名前にします。

セル名をリセットする方法

1. **編集モード**のフローチャートで、出力セル名をリセットするプロセスをダブルクリックします。そのプロセスのプロセス設定ダイアログが表示されます。
2. 「**全般**」タブをクリックします。プロセスの全般情報が表示されます。
3. 次のステップは、単一のセルを出力するプロセス、または複数のセルを出力するプロセスのどちらを編集するかによって異なります。
 - 単一のセルを出力するプロセスでは、「**出力セル名**」項目のテキストを編集して、その名前が「プロセス名」項目に表示されているプロセス名と同じになるようにします。
 - 複数のセルを出力するプロセスでは、「**セル名のリセット**」をクリックします。セル名がデフォルトの形式 (すなわち、現在のプロセス名とセグメント名を連結した形式) に戻されます。

これで、プロセス名とセル名は再リンクされます。この時点でプロセス名を変更すると、出力セル名も自動的に変更されます。

4. 「**OK**」をクリックします。変更が保存され、プロセス設定ダイアログが閉じます。

セル名とセル・コードのコピーおよび貼り付けについて

複数のセルを出力するプロセスでは、コピーおよび貼り付け機能を使用して、「出力セル」グリッドで複数の出力セル名およびセル・コードを編集することができます。

グリッド内のすべてのセルをコピーおよび貼り付けする方法

複数のセルを出力するプロセスでは、コピーおよび貼り付け機能を使用して、「出力セル」グリッドで複数の出力セル名およびセル・コードを編集することができます。

1. **編集モード**のフローチャートで、セル名とセル・コードをコピーおよび貼り付けるプロセスをダブルクリックします。そのプロセスのプロセス設定ダイアログが表示されます。
2. 「**全般**」タブをクリックします。「出力セル」グリッドなど、プロセスの全般情報が表示されます。
3. 「出力セル」グリッドで、任意の場所をクリックしてすべてのセルを選択します。カーソル位置に関係なく、常にすべてのセルが貼り付け対象として選択されます。

注: 「セル・コードを自動生成」チェック・ボックスをクリアしていない限り、「セル・コード」列は選択も編集もできません。

4. 「**コピー**」をクリックします。すべてのセルがクリップボードにコピーされます。
5. セルの貼り付け先の左上の位置にくるセルの中をクリックします。
6. 「**貼り付け**」をクリックします。コピー元と同じサイズのセル・ブロックの元の内容が、コピーされたセルの内容によって置き換えられます。

外部スプレッドシートからセル名とセル・コードを貼り付ける方法

1. 外部スプレッドシートまたは他のアプリケーションから、そのアプリケーションのコピー機能を使用してセルまたはテキストを選択してコピーします。
2. Campaign 内において、**編集モード**のフローチャートで、セル名とセル・コードをコピーおよび貼り付けるプロセスをダブルクリックします。そのプロセスのプロセス設定ダイアログが表示されます。
3. 「**全般**」タブをクリックします。「出力セル」グリッドなど、プロセスの全般情報が表示されます。

注: 「セル・コードを自動生成」チェック・ボックスをクリアしていない限り、「セル・コード」列は選択も編集もできません。内容を「セル・コード」列に貼り付ける場合は、必ずこのチェック・ボックスをクリアしてください。

4. コピーした内容の貼り付け先であるセルの中をクリックします。長方形のセル・グループをコピーおよび貼り付ける場合は、その長方形の左上のセルになるセルの中をクリックします。
5. 「**貼り付け**」をクリックします。コピーしたセルの内容により、同じサイズのセル・ブロックの元の内容が置き換えられます。

セル・コードの変更

デフォルトでは、セルのコードは、システム管理者がすべてのセル・コードに対して定義した形式に基づき、システムが自動的に生成します。セル・コードの固有性は、フローチャートとキャンペーン全体で強制的に確保されますが、フローチャート構成パラメーター `AllowDuplicateCellCodes` を「Yes」に設定している場合は、フローチャート内でセル・コードを複製することができます。

IBM Unica Marketing によって提供される中央構成パラメーター内の構成パラメーターについて詳しくは、「*Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

注: デフォルトのシステム生成セル・コードをオーバーライドすることはできますが、手動で入力するセル・コードもセル・コードの形式に従っている必要があります。この形式は、プロセス設定ダイアログの「セル・コード」項目の下に表示されます。コードの形式は以下のように定数と変数によって表されます。大文字は英字の定数を表し、小文字の「n」は数字を表します。例えば、セル・コードの形式が「Annn」の場合、セル・コードの長さは 4 文字、先頭文字は大文字の「A」、その後 3 桁の数字が続くことを表します。この形式のセル・コード例は「A454」です。

フローチャート・プロセス内のセルのコードを変更する方法

1. **編集モード**のフローチャートで、出力セル名を変更するプロセスをダブルクリックします。そのプロセスのプロセス設定ダイアログが表示されます。
2. 「**全般**」タブをクリックします。プロセスの全般情報が表示されます。
3. 「**自動生成**」チェック・ボックスが選択されている場合は、選択をクリアします。「セル・コード」項目が編集可能になります。
4. 「セル・コード」項目で、セル・コードを編集します。変更したコードは、「セル・コード」項目の下の表示されているセル・コードの形式に従っている必要があることを覚えておいてください。
5. セル・コードの編集が完了したら、「**OK**」をクリックします。プロセス設定ダイアログが閉じ、変更が保存されます。

「ターゲット・セルの照合とリンク」ダイアログを使用してフローチャート・セルを照合およびリンクする方法

各プロセスの設定ダイアログからセルをリンクするだけでなく、「ターゲット・セルの照合とリンク」ダイアログからフローチャート全体のターゲット・セルのリンクと管理を行うことができます。これを行う前に、キャンペーンのターゲット・セル・スプレッドシートにプレースホルダーのセル・コードおよびセル名が存在することを確認してください。自動照合を実行する場合は、ターゲット・セル・スプレッドシートで定義されているセルが、出力セル名と同じ名前、または少なくとも先頭の 3 文字が同じ名前になっていることを確認します。

1. **編集モード**のフローチャートで、「**オプション**」 > 「**ターゲット・セルの照合とリンク**」オプションを選択します。

「ターゲット・セルの照合とリンク」ダイアログが表示され、左のペインには使用可能なターゲット・セル、右のペインにはフローチャート出力セルが表示されています。

2. 名前に基づいてターゲット・セルとフローチャート出力セルを自動照合するには、「**自動照合**」をクリックします。

正しく自動照合されたセルは、右のペインにステータスが「**正確**」または「**最適一致 (Best Match)**」として表示されます。照合が済んだターゲット・セルは赤で表示されます。

3. 照合されたこれらのセル・ペアのリンクを完了するには、「**OK**」をクリックしてそれらを保存し、ダイアログを閉じます。

フローチャートの実行結果が失われることを示す警告が表示されます。「**OK**」をクリックして先に進みます。

このフローチャートで次回「**ターゲット・セルの照合とリンク**」ダイアログを表示すると、照合とリンクを行ったセルのステータスが「**リンク済み**」と表示されます。

注: ターゲット・セルのリンクは、フローチャートを保存するまでデータベースに保存されません。フローチャートの変更をキャンセルすると、セルのリンクはデータベースに保存されません。

「ターゲット・セルの照合とリンク」ダイアログを使用してフローチャート・セルを照合解除またはリンク解除する方法

注: コンタクト履歴が関連付けられているセルをリンク解除すると、それらのセルが「**回収**」されます。回収されたセルはターゲット・セル・スプレッドシートには表示されないため、その場所では見えなくなります。ターゲット・セル・スプレッドシートにセルを保持するには、リンクを解除する前に、そのセルのコンタクト履歴を削除します。

1. **編集モード**のフローチャートで、「**オプション**」 > 「**ターゲット・セルの照合とリンク**」オプションを選択します。

照合またはリンクされているセルは右のペインに表示され、それぞれのステータスが「**ステータス**」列に示されています。

2. 照合されているすべてのセル・ペアを照合解除するには、「**すべて照合解除**」をクリックします。

照合解除されたターゲット・セルが「**使用可能なターゲット・セル**」ペインで更新され、出力セルの「**ステータス**」列および「**ターゲット・セル名**」列がクリアされます。リンクされているセル・ペアは変更されません。

3. リンクされているすべてのセル・ペアをリンク解除するには、「**すべてリンク解除**」をクリックします。

前にリンクされていたペアはリンク解除されますが、照合対象のまま維持されます。「**使用可能なターゲット・セル**」リストに、それらのターゲット・セルが照合されているターゲット・セルとして赤で表示されるようになります。

注: ターゲット・セルのリンクは、フローチャートを保存するまでデータベースに保存されません。フローチャートの変更をキャンセルすると、セルのリンクはデータベースに保存されません。

「ターゲット・セルの照合とリンク」ダイアログを使用してフローチャート・セルを手動で照合およびリンクする方法

1. 編集モードのフローチャートで、「オプション」 > 「ターゲット・セルの照合とリンク」オプションを選択します。

「ターゲット・セルの照合とリンク」ダイアログが表示され、左のペインには使用可能なターゲット・セル、右のペインにはフローチャート出力セルが表示されています。

2. 照合するターゲット・セルとフローチャート出力セルのペアを 1 つ以上選択し、「照合 > >」をクリックします。

選択したターゲット・セルが選択したフローチャート出力セルと順番に照合されます。正しく照合された出力セルには「手動」というステータスが表示され、照合が済んだターゲット・セルは赤で表示されます。

3. 照合されたこれらのセル・ペアのリンクを完了するには、「OK」をクリックしてそれらを保存し、ダイアログを閉じます。

フローチャートの実行結果が失われることを示す警告が表示されます。「OK」をクリックして先に進みます。

このフローチャートで次回「ターゲット・セルの照合とリンク」ダイアログを表示すると、照合とリンクを行ったセルのステータスが「リンク済み」と表示されます。

注: ターゲット・セルのリンクは、フローチャートを保存するまでデータベースに保存されません。フローチャートの変更をキャンセルすると、セルのリンクはデータベースに保存されません。

プロセス設定ダイアログを使用してフローチャート・セルをターゲット・セルにリンクする方法

これを行う前に、キャンペーンのターゲット・セル・スプレッドシートにプレースホルダーのセル・コードおよびセル名が存在することを確認してください。

1. 編集モードのフローチャートで、出力セルをターゲット・セル・スプレッドシートのセルにリンクするプロセスをダブルクリックします。そのプロセスのプロセス設定ダイアログが表示されます。
2. 「全般」タブをクリックします。プロセスの全般情報が表示されます。
3. 「ターゲット・セルの選択」ウィンドウにアクセスします。
 - 単一のセルを出力するプロセス (例えば、選択プロセス) で、「ターゲット・セルへのリンク...」をクリックします。
 - 複数のセルを出力するプロセス (例えば、セグメント・プロセス) で、リンクするセルごとに「出力セル名」行または「セル・コード」行をクリックします。表示される省略符号ボタンをクリックします。

現在のキャンペーンのターゲット・セル・スプレッドシートで定義されているセルを表示する、「ターゲット・セルの選択」ウィンドウが表示されます。

4. 「ターゲット・セルの選択」ウィンドウで、現在の出力セルのリンク先のセルの行を選択します。
5. 「OK」をクリックします。「ターゲット・セルの選択」ウィンドウが閉じます。プロセス設定ダイアログの出力セル名とセル・コードが、ターゲット・セル・スプレッドシート内のセルのコードと名前に置き換えられます。これらはイタリックで表示され、ターゲット・セル・スプレッドシートにリンクされていることを示します。
6. 「OK」をクリックします。プロセス設定ダイアログが閉じ、変更が保存されます。

プロセス設定ダイアログを使用してフローチャート・セルをターゲット・セルからリンク解除する方法

重要: コンタクト履歴が関連付けられているセルをリンク解除すると、それらのセルが「回収」されます。回収されたセルはターゲット・セル・スプレッドシートには表示されないため、その場所では見えなくなります。ターゲット・セル・スプレッドシートにセルを保持するには、リンクを解除する前に、そのセルのコンタクト履歴を削除します。

1. 編集モードのフローチャートで、出力セルをターゲット・セル・スプレッドシートのセルからリンク解除するプロセスをダブルクリックします。そのプロセスのプロセス設定ダイアログが表示されます。
2. 「全般」タブをクリックします。プロセスの全般情報が表示されます。
3. 「ターゲット・セルの選択」ウィンドウにアクセスします。
 - 単一のセルを出力するプロセス (例えば、選択プロセス) で、「ターゲット・セルへのリンク...」をクリックします。
 - 複数のセルを出力するプロセス (例えば、セグメント・プロセス) で、リンク解除するセルの「出力セル名」行または「セル・コード」行をクリックします。表示される省略符号ボタンをクリックします。

現在のキャンペーンのターゲット・セル・スプレッドシートで定義されているセルを表示する、「ターゲット・セルの選択」ウィンドウが表示されます。現在リンクされているセルが強調表示されます。

4. 「ターゲット・セルの選択」ウィンドウで、[リンクされていません] を選択します。そのセル名とセル・コードは強調表示されなくなります。
5. 「OK」をクリックします。「ターゲット・セルの選択」ウィンドウが閉じます。プロセス設定ダイアログの出力セル名とセル・コードがイタリック表示されなくなり、ターゲット・セル・スプレッドシートにリンクされていないことを示します。
6. 「OK」をクリックします。プロセス設定ダイアログが閉じ、変更が保存されます。

フローチャート CSP のセルにオファーを割り当てる方法

この操作を行うには、事前にオファーとセルを作成しておく必要があります。

1. 編集モードのフローチャートで、オファーを割り当てる出力セルがあるプロセスをダブルクリックします。そのプロセスのプロセス設定ダイアログが表示されません。
2. 「処理」タブをクリックします。プロセスのオファー割り当てインターフェースが、そのプロセスへのすべての入力セルを表示するグリッドとともに表示されません。
3. コンタクトから完全に除外されているコントロール・グループを使用する場合は、「検証コントロール・グループを使用」チェック・ボックスにチェック・マークを付けます。コントロール・グループに関連する列がターゲット・セル・グリッドに追加されます。
4. 各セルで、「コントロール?」列をクリックし、Y または N を選択して、そのセルがコントロール・セルかどうかを示します。セルがコントロール・セルであることを指定すると、そのセルの残りの列は無効になり、そのセルにコントロール・セルもオファーも指定できなくなります。セルがコントロール・セルでないことを指定すると、そのセルにコントロール・セルおよびオファーを指定することができます。
5. コントロール・セルでない各セルで、コントロールとなるセル、および 1 つ以上のオファーを指定します。

オファーを割り当てるには、以下の 2 つの方法があります。

- セルの「オファー」列をクリックして、選択可能なオファーのリストまたは複数のオファーを表示して、そこから選択します。
- 「オファー指定...」をクリックして「オファー指定」ウィンドウを開きます。このウィンドウで、「追加>>」および「<<削除」ボタンを使用して「選択対象オファー」リストから「割り当て済みオファー」リストにオファーを移動します。

注: 複数のセルに 1 つ以上のオファーを割り当てるには、オファーを割り当てるすべての行を選択し、「オファー指定...」をクリックして、「オファー指定」ウィンドウを開きます。

6. プロセス内のセルへのオファーの割り当てを完了したら、「OK」をクリックします。プロセス設定ダイアログが閉じ、変更が保存されます。

セルへのオファー・リストの割り当て

オファー・リストをセルに割り当てる方法は、フローチャートから行う場合でもターゲット・セル・スプレッドシートで行う場合でも、単一のオファーまたは複数のオファーをセルに割り当てるときと同じです。ただし、オファー・リスト内にオファー内のパラメーターの値を指定することはできません。パラメーター化されたオファー項目のデフォルト値が使用されます。

セルに割り当てられたオファーでパラメーターを設定する方法

フローチャートのコンタクト・スタイル・プロセス (CSP) でオファーをセルに割り当てたら、割り当てたオファーでパラメーター化された属性に値を指定することができます。

1. **編集モード**のフローチャートで、該当するプロセス (パラメーター化されたオファー属性に値を設定する入力セルがあるプロセス) をダブルクリックします。そのプロセスのプロセス設定ダイアログが表示されます。
2. 「**パラメーター**」タブをクリックします。各入力セルのパラメーター値を指定するためのインターフェースが表示されます。
3. 「**対象セル**」項目で、ドロップダウン・リストを使用して名前によって特定のセルを選択するか、**[すべてのセル]** を選択して、複数のセルに同じパラメーター値を割り当てます。省略符号ボタンをクリックして「**セルの選択 (Select Cells to Use)**」ウィンドウを開くこともできます。このウィンドウでは、入力として使用するセルを選択することができます。

選択したセル、またはすべてのセルについて、オファー/パラメーターの組み合わせごとに 1 行表示されます。

注: **[すべてのセル]** を選択すると、セル/オファー/パラメーターの複合ビューが表示されます。

4. 各オファー/パラメーターの組み合わせで、「**指定値**」列をクリックして、ドロップダウン・リスト (該当する場合) で選択可能な値を表示するか、またはその項目のテキストを編集します。そのオファーを受け取ったすべてのセルで、パラメーター値が、入力した値に設定されます。

注: 複数のセルがあり、すべてが同じオファーに割り当てられているものの、同じパラメーターにそれぞれ異なる値が指定されている場合、そのオファーに対して 1 行が表示されますが、「**指定値**」列の下に **[複数の値]** という値が表示されます。

5. オファー・パラメーターの値の指定を完了したら、「**OK**」をクリックします。プロセス設定ダイアログが閉じ、変更が保存されます。

ターゲット・セル・スプレッドシートについて

注: ご使用の Campaign 環境が Marketing Operations と統合されている場合、Marketing Operations を使用してターゲット・セル・スプレッドシートを操作できるようにする必要があります。その Campaign 環境がレガシー・キャンペーンにアクセスできるように構成されている場合は、本書の説明に従ってレガシー・キャンペーンのターゲット・セル・スプレッドシートを操作してください。詳しくは、2 ページの『IBM Unica Marketing Operations との統合について』を参照してください。

ターゲット・セル・スプレッドシート (TCS) は、キャンペーン内のフローチャートで使用されているすべてのセルとその詳細 (割り当てられているオファーなど) を表示する、キャンペーンごとのスプレッドシート・タイプ機能です。この機能は、キャンペーンのフローチャートで使用されているすべてのセルのアクセス可能ビューを表示するだけでなく、セル・ベースでオファー割り当てを行うツールでもあります。

ターゲット・セル・スプレッドシートはいつでも編集でき、これを保存すると、値が Campaign システム・テーブルに書き込まれます。

以下のような 2 つのモードで使用できます。

- **トップダウン** — ターゲット・セル・スプレッドシートですべてのターゲット・セルおよびコントロール・セルを作成してから、後でそれらのセルをフローチャートで作成されたセルにセル・コードを使用してリンクします。TCS 内で作成されたセルの場合、「フローチャートで使用されている」項目以外の項目は、すべて TCS で編集することができます。
- **ボトムアップ** — フローチャート・プロセスで作成した各ターゲット・セルは、フローチャートの保存後、TCS に表示されるようになります。フローチャートから作成されたセルの場合、カスタム属性のみ TCS で編集することができます。

2 つのモードはいつでも切り替え可能です。ただし、通常はあまり頻繁に行われません。トップダウンとボトムアップの定義タスクは、それぞれ異なる人々によって実行される傾向があるためです。

重要: 関連するキャンペーン内のいずれかのフローチャートが編集または実行されたときに、ターゲット・セル・スプレッドシートが編集されてしまう可能性を最小限に抑えるビジネス・ルールを導入する必要があります。異なるユーザーがフローチャートと TCS を同時に編集すると (例えば、あるユーザーがフローチャート内からコンタクト・プロセスを編集し、別のユーザーが TCS から同じセルのオファー割り当てを変更した場合など)、誤ったデータが保存され、競合が発生する可能性があります。

ただし、モードの切り替えが必要になる場合もあります。例えば、フローチャートでの作業中に、ターゲット・セルがトップダウン・モードで TCS に定義されていないことに気が付いた場合、そのフローチャートを保存してからトップダウン・モードに切り替え (TCS に移動してセルを作成します)、その後、ボトムアップ・モードに戻すことができます (フローチャートに戻り、TCS の新しいセルにリンクします)。これで、コンタクト・プロセスが正しく構成されます。

トップダウン・モードで TCS に作成されたセルは、ボトムアップ・モードで未使用になっている場合でも、無効として表示 (ぼかし表示) されることはありません。

ターゲット・セル・スプレッドシートのセル・ステータス情報

Campaign のターゲット・セル・スプレッドシートには、各セルの現在のステータスが表示されます。表示されるステータスには、セル数、前回の実行タイプ (フローチャート、ブランチ、またはプロセスの本番実行あるいはテスト実行)、前回の実行時刻などがあります。セル数は、実行されたフローチャート内の出力セルにリンクされている、セルごとの固有のオーディエンス ID の数です。このセル・ステータスは、対応するプロセスについて最も新しく保存された本番実行またはテスト実行の結果です。

セル・ステータス情報は、Campaign (スタンドアロン時) または Marketing Operations (統合時) のターゲット・セル・スプレッドシートに表示されます。

セル数の更新

プロセス設定を変更すると、前の実行結果はすべて失われ、ターゲット・セル・スプレッドシートの「セル数」、「前回の実行タイプ」、および「前回の実行時刻」

の各列はブランクになります。セル数を更新するには、フローチャート、ブランチ、またはプロセスを本番モードまたはテスト・モードで実行して、その後にフローチャートを保存する必要があります。

以下のタイプのプロセス設定変更における、TCS のセル数に対する影響に注意してください。

- **ターゲット・セルへのフローチャート出力セルのリンク。** 次回の本番実行またはテスト実行が保存されるまで、セル数はブランクのままです。
- **ターゲット・セルからのフローチャート出力セルのリンク解除。** 前の実行結果はすべて削除され、セル数はブランクです。

セル数を手動で更新する方法

ターゲット・セル・スプレッドシート内のセル数は、本番でフローチャート、ブランチ、またはプロセスを実行したとき、またはテスト実行を保存したときに自動的に更新されます。実行の完了時に TCS が開いていた場合は、「セルのステータスを取得」アイコンをクリックすることにより、手動でセル数を更新する必要があります。

ターゲット・セル・スプレッドシートの操作

ターゲット・セル・スプレッドシート (TCS) の操作については、以下のトピックを参照してください。

- 『ターゲット・セル・スプレッドシートに 1 つの行を追加する方法』
- 184 ページの『ターゲット・セル・スプレッドシートに複数の空白行を追加する方法』
- 184 ページの『ターゲット・セル・スプレッドシート内の行を複製する方法』
- 185 ページの『ターゲット・セル・スプレッドシート内で検索する方法』
- 185 ページの『現在のセルがコントロール・セルであるかどうかを指定する方法』
- 185 ページの『現在のセルに対するコントロール・セルを指定する方法』
- 186 ページの『ターゲット・セル・スプレッドシートでセル・コードを生成して使用する方法』
- 186 ページの『ターゲット・セル・スプレッドシートを編集する方法』
- 187 ページの『外部ソースからターゲット・セル・スプレッドシートにデータを貼り付ける方法』
- 190 ページの『ターゲット・セル・スプレッドシート内のセルにオファーを割り当てる方法』
- 190 ページの『ターゲット・セル・スプレッドシート内のセルからオファーを割り当て解除する方法』
- 191 ページの『割り当て済みオファーまたはオファー・リストを表示する方法』

ターゲット・セル・スプレッドシートに 1 つの行を追加する方法

1. セルを追加するキャンペーンで、「ターゲット・セル」タブをクリックします。

現在のキャンペーンのターゲット・セル・スプレッドシートが表示されます。

2. 「編集」アイコンをクリックします。

スプレッドシートが編集モードで表示されます。フローチャートで使用されている既存のセルは色付きで強調表示されています。

3. 「セルの追加」アイコンをクリックします。

スプレッドシートの下部に 1 行追加されます。

ターゲット・セル・スプレッドシートに複数の空白行を追加する方法

1. セルを追加するキャンペーンで、「ターゲット・セル」タブをクリックします。現在のキャンペーンのターゲット・セル・スプレッドシートが表示されます。
2. 「編集」アイコンをクリックします。

スプレッドシートが編集モードで表示されます。フローチャートで使用されている既存のセルは色付きで強調表示されています。

3. 「多数のセルの追加」アイコンをクリックし、ドロップダウン・リストから「N 件の空白行」を選択します。「複数の新規行を追加」ウィンドウが表示されます。
4. 「作成する行数」項目に、追加する行数を入力します。
5. 「ターゲット・セルの作成」をクリックします。

スプレッドシートの下部に、セル・コードとセル名が挿入済みの新規ターゲット・セル行が追加されています。

6. スプレッドシートの新規セルに追加情報 (ある場合) を入力し、「保存」または「保存して戻る」をクリックして変更を保存します。

ターゲット・セル・スプレッドシート内の行を複製する方法

1. セルを複製するキャンペーンで、「ターゲット・セル」タブをクリックします。現在のキャンペーンのターゲット・セル・スプレッドシートが表示されます。
2. 「編集」アイコンをクリックします。

スプレッドシートが編集モードで表示されます。フローチャートで使用されている既存のセルは色付きで強調表示されています。

3. 複製する行を選択します。
4. 「多数のセルの追加」アイコンをクリックし、ドロップダウン・リストから「N 件の重複行」を選択します。

「複数の新規行を追加」ウィンドウが表示されます。

5. 「作成する行数」項目に、追加する行数を入力します。
6. 「ターゲット・セルの作成」をクリックします。

選択した行の下に、セル・コードとセル名が挿入済みの新規ターゲット・セル行が追加されています。「フローチャートで使用 (Used in Flowchart)」を除く他のすべての列の値が、元のセル行からコピーされます。

7. スプレッドシートの新規セルに追加情報 (ある場合) を入力し、「保存」または「保存して戻る」をクリックして変更を保存します。

ターゲット・セル・スプレッドシート内で検索する方法

ターゲット・セル・スプレッドシートの検索機能では、ストリングの一部を入力して、スプレッドシートの任意の列にある一致を見つけることができます。例えば、検索項目に「924」と入力すると、コードが「A0000000924」のセルを含む行と、「Offer9242007」という名前のオファーに割り当てられたセルの行の両方が一致となります。

注: 検索機能は、編集モードのターゲット・セル・スプレッドシートでのみ使用できます。

1. セルを検索するキャンペーンで、「**ターゲット・セル**」タブをクリックします。

現在のキャンペーンのターゲット・セル・スプレッドシートが表示されます。

2. スプレッドシートで「**編集**」リンクをクリックします。

スプレッドシートが**編集モード**で表示されます。フローチャートで使用されている既存のセルは色付きで強調表示されています。

3. 「**検索**」をクリックします。
4. 「**検索**」ウィンドウで、検索するストリングを入力し、「**ストリングの検索 (Find String)**」をクリックします。

その検索ストリングで最初に見つかった一致を含む行が強調表示されます。

5. スプレッドシートで一致の検索を続行するには、「**次を検索**」をクリックします。

現在のセルがコントロール・セルであるかどうかを指定する方法

1. **編集モード**のターゲット・セル・スプレッドシートで、編集するセルの「**コントロール・セル**」列をクリックします。

セルが編集可能になり、ドロップダウン・リストが表示されます。

2. ドロップダウン・リストから「**はい**」または「**いいえ**」を選択して、現在のセルがコントロール・セルかどうかを示します。
3. 「**保存**」または「**保存して戻る**」をクリックして変更を保存します。

重要: コントロール・セル (例えば、セル A) を 1 つ以上のターゲット・セルのコントロールとして割り当て、後でセル A をターゲット・セルに変更した場合、セル A は、前にそれをコントロールとして使用していたターゲット・セルから、そのコントロールとして削除されます。

現在のセルに対するコントロール・セルを指定する方法

1. **編集モード**のターゲット・セル・スプレッドシートで、編集するセルの「**コントロール・セル・コード**」列をクリックします。

セルが編集可能になり、ドロップダウン・リストが表示されます。コントロール・セルとして指定されている (つまり、「**コントロール・セル**」列の値が「**はい**」になっている) セルのセル・コードが、コントロール・セルとして選択できるようになります。

2. 現在のセルのコントロールとして使用するセルをドロップダウン・リストから選択します。
3. 「保存」または「保存して戻る」をクリックして変更を保存します。

ターゲット・セル・スプレッドシートでセル・コードを生成して使用する方法

この機能は、ターゲット・セル・スプレッドシートで使用する固有のセル・コードを Campaign によって生成する場合に使用します。

1. 編集モードのターゲット・セル・スプレッドシートで、「セル・コードの生成」アイコンをクリックします。

生成されたセル・コードを含むウィンドウが表示されます。

2. このウィンドウの中をクリックし、マウスを使用してセル・コードを選択します。
3. 右クリックして、コンテキスト・メニューから「コピー」を選択します。
4. セル・コードを貼り付けるターゲット・セル・スプレッドシート内の項目をクリックします。
5. 右クリックして、コンテキスト・メニューから「貼り付け」を選択します。生成されたセル・コードがターゲット・セル・スプレッドシートに貼り付けられます。
6. 「保存」または「保存して戻る」をクリックして変更を保存します。

ターゲット・セル・スプレッドシートを編集する方法

何らかの時点でターゲット・セル・スプレッドシート内のセルの属性を編集する場合は、関連するキャンペーン内のフローチャートの編集中または実行中に同時に行わないように注意してください。

重要: 異なるユーザーがフローチャートと TCS を同時に編集すると (例えば、あるユーザーがフローチャート内から CSP を編集し、別のユーザーが TCS から同じセルのオファー割り当てを変更した場合など)、誤ったデータが保存され、競合が発生する可能性があります。

1. セルを編集するキャンペーンで、「ターゲット・セル」タブをクリックします。

現在のキャンペーンのターゲット・セル・スプレッドシートが表示されます。

2. 「編集」アイコンをクリックします。

編集モードのスプレッドシートが表示されます。フローチャートで使用されている既存のセルは色付きで強調表示されています。

3. 編集するセルの項目をクリックし、変更を行います。
4. スプレッドシート内で選択した行を上下に移動する場合、または選択した行を削除する場合は、Campaign ツールバーのアイコンを使用してください。
5. 編集を完了したら、「保存」または「保存して戻る」をクリックして変更を保存します。

外部ソースからターゲット・セル・スプレッドシートにデータを貼り付ける方法

1. セルを編集するキャンペーンで、「ターゲット・セル」タブをクリックします。現在のキャンペーンのターゲット・セル・スプレッドシートが表示されます。
2. スプレッドシートで「編集」リンクをクリックします。スプレッドシートが編集モードで表示されます。フローチャートで使用されている既存のセルは色付きで強調表示されています。
3. 外部アプリケーションで、ターゲット・セル・スプレッドシートに貼り付けるセルの内容またはテキストをコピーします。
4. 編集モードのターゲット・セル・スプレッドシートで、コピーした内容を貼り付けるセルをクリックするか、または複数のセルを選択する場合は、**Shift** キーを押したまま、セルをクリックして選択します。
5. 右クリックして、コンテキスト・メニューから「貼り付け」を選択します。コピーしたセルの内容が、選択したセルに貼り付けられます。
6. 「保存」または「保存して戻る」をクリックして変更を保存します。

.csv ファイルからターゲット・セル・スプレッドシートにデータをインポートする方法

大量のターゲット・セル・データを、.csv 形式のファイルからターゲット・セル・スプレッドシートにインポートすることができます。このファイルは、『ターゲット・セル・スプレッドシートにインポートするための CSV ファイルの必須形式』で説明している形式にする必要があります。

1. ターゲット・セル・データをインポートするキャンペーンで、「ターゲット・セル」タブをクリックします。現在のキャンペーンのターゲット・セル・スプレッドシートが表示されます。
2. スプレッドシートの「ターゲット・セルのインポート」アイコンをクリックします。
3. 「TCS のインポート」ダイアログで、「参照」ボタンを使用してインポートする .csv ファイルに移動し、ファイルを選択して、「ファイルの選択」ダイアログで「開く」をクリックします。
4. 「インポート」をクリックします。
5. ターゲット・セル・スプレッドシートの既存のセルの下に付加された .csv ファイルの内容によって、その TCS が更新されます。

ターゲット・セル・スプレッドシートにインポートするための CSV ファイルの必須形式

ターゲット・セル・スプレッドシートにデータを正しくインポートするには、準備するコンマ区切り値 (.csv) ファイルが以下の形式と一致している必要があります。ターゲット・セル・スプレッドシートの内容をエクスポートする際には、これがデータのエクスポート形式にもなります。

- ファイルには、事前定義およびカスタムのセル属性と一致する列名があるヘッダ行を含める必要があります。
- 各行には、ヘッダ行に指定された数と同じ数の列が必要です。

- データのない列は、ブランクのまま残す必要があります。
- カスタム属性の値は、適切なデータ型に変換されます。日付の場合、日付ストリングはユーザーのロケールの形式になっている必要があります。

列名	説明	必須	有効な値
CellName	ターゲット・セルの名前。	はい	
CellCode	このターゲット・セルに割り当てられたセル・コード。空の場合は Campaign がセル・コードを生成します。それ以外の場合、指定された値が使用されます。	はい (ただし、この行が IsControl = Yes としてマークされている場合)。	セル・コードは、定義されたセル・コード形式と一致している必要があります。
IsControl	この行のセルがコントロール・セルか通常のターゲット・セルかを示します。	いいえ	Yes、No
ControlCellCode	IsControl = Yes としてマークされているセルの CellCode。	いいえ	IsControl = Yes としてマークされているセルに対して存在する有効なセル・コード。
AssignedOffers	セミコロンで区切ったオファー・セット、オファー・リスト、またはこれらの組み合わせ。	いいえ	オファーはオファー・コードを使用して指定でき、オファー・リストはオファー・リスト名を使用して指定できます。形式は OfferName1[OfferCode1]; OfferName2[OfferCode2]; OfferListName1[]; OfferListName2[] です。この場合、オファー名はオプションですが、オファー・コードは必須です。また、空の大括弧があるオファー・リスト名は必須です。
FlowchartName	関連するフローチャートの名前。	いいえ。この列には Campaign がデータを挿入します。指定しても無視されます。エクスポート用にデータが挿入されます。	

列名	説明	必須	有効な値
CellCount	このセルの数。	いいえ。この列には Campaign がデータを挿入します。指定しても無視されます。エクスポート用にデータが挿入されます。	
LastRunType	前回のフローチャート実行のタイプ	いいえ。この列には Campaign がデータを挿入します。指定しても無視されます。エクスポート用にデータが挿入されます。	
LastRunTime	前回のフローチャート実行の時刻	いいえ。この列には Campaign がデータを挿入します。指定しても無視されます。エクスポート用にデータが挿入されます。	
Custom Attr1	データのインポート対象の定義済みカスタム・セル属性ごとに、1 つの列を追加します。	いいえ	カスタム属性のデータ型およびユーザーのロケール/形式で要求される有効値。

ターゲット・セル・スプレッドシートからデータをエクスポートする方法

ターゲット・セル・スプレッドシートの内容を、.csv 形式でローカル・ドライブまたはネットワーク・ドライブ上の場所にエクスポートすることができます。TCS の内容全体がエクスポートされます。内容のサブセットを選択することはできません。

1. TCS の内容をエクスポートするキャンペーンで、「**ターゲット・セル**」タブをクリックします。現在のキャンペーンのターゲット・セル・スプレッドシートが表示されます。
2. 「**ターゲット・セルのエクスポート**」アイコンをクリックします。
3. 「**ファイル・ダウンロード**」ダイアログで「**保存**」をクリックします。

4. 「名前を付けて保存」ダイアログで、ファイルのファイル名を指定し、ファイルの保存先ディレクトリーに移動し、「保存」をクリックします。「ファイル・ダウンロード」ダイアログにダイアログが完了したことが示されます。
5. 「閉じる」をクリックしてターゲット・セル・スプレッドシートに戻ります。

ターゲット・セル・スプレッドシート内のセルにオファーを割り当てる方法

ターゲット・セル・スプレッドシート内のセルへのオファーの割り当ては「トップダウン」モードで行うことができます。

1. セルにオファーを割り当てるキャンペーンで、「ターゲット・セル」タブをクリックします。現在のキャンペーンのターゲット・セル・スプレッドシートが表示されます。
2. スプレッドシートで「編集」リンクをクリックします。スプレッドシートが編集モードで表示されます。フローチャートで使用されている既存のセルは色付きで強調表示されています。
3. 編集モードのターゲット・セル・スプレッドシートで、オファーを割り当てるセルの行の「割り当て済みのオファー」列をクリックします。

「オファーの検索 (Search Offers)」アイコンが表示されます。

4. 「オファーの検索 (Search Offers)」アイコンをクリックします。

「オファーの選択」ウィンドウが表示されます。

5. 「オファーの選択」ウィンドウで、オファー・フォルダー内を移動して 1 つ以上のオファーまたはオファー・リストを選択するか、「検索」タブをクリックして、名前、説明、またはコードによってオファーを見つけます。
6. 現在のセルに割り当てるオファー (複数可) を選択したら、「承認して閉じる」をクリックします。

「オファーの選択」ウィンドウが閉じ、選択したオファーが「割り当て済みのオファー」列に挿入されます。

7. セルへのオファーの割り当てを完了したら、「保存」または「保存して戻る」をクリックして変更を保存します。

ターゲット・セル・スプレッドシート内のセルからオファーを割り当て解除する方法

オファーをセルに割り当てた後に、それらを割り当て解除することができます。

1. セルからオファーを割り当て解除するキャンペーンで、「ターゲット・セル」タブをクリックします。現在のキャンペーンのターゲット・セル・スプレッドシートが表示されます。
2. スプレッドシートで「編集」リンクをクリックします。スプレッドシートが編集モードで表示されます。フローチャートで使用されている既存のセルは色付きで強調表示されています。
3. 編集モードのターゲット・セル・スプレッドシートで、オファーを割り当て解除するセルの行の「割り当て済みのオファー」列をクリックします。

「**オファーの表示**」アイコンが表示されます。

4. 「**オファーの表示**」アイコンをクリックします。

「**オファー詳細の表示/編集**」ウィンドウが表示され、「**割り当て済みオファー**」セクションに割り当て済みオファーまたはオファー・リストが表示されます。

5. セルから削除するオファーまたはオファー・リストを選択 (複数可) し、選択した項目を「>>」ボタンをクリックして「**削除済みオファー**」セクションに移動します。
6. オファーまたはオファー・リストの削除を完了したら、「**変更の承認**」をクリックします。

「**オファー詳細の表示/編集**」ウィンドウが閉じ、削除されたオファーまたはオファー・リストはセルの「**割り当て済みのオファー**」列に表示されなくなります。

7. セルからのオファーの割り当て解除を完了したら、「**保存**」または「**保存して戻る**」をクリックして変更を保存します。

割り当て済みオファーまたはオファー・リストを表示する方法

オファーまたはオファー・リストをセルに割り当てたら、割り当て済みオファーを表示したり、割り当て済みオファー・リストの内容をプレビュー表示したりすることができます。

1. セルに割り当てられているオファーまたはオファー・リストを表示するキャンペーンで、「**ターゲット・セル**」タブをクリックします。現在のキャンペーンの**ターゲット・セル・スプレッドシート**が表示されます。
2. スプレッドシートで「**編集**」リンクをクリックします。スプレッドシートが編集モードで表示されます。フローチャートで使用されている既存のセルは色付きで強調表示されています。
3. **編集モード**の**ターゲット・セル・スプレッドシート**で、割り当て済みオファーまたはオファー・リストを表示するセルの行の「**割り当て済みのオファー**」列をクリックします。

「**オファーの表示**」アイコンが表示されます。

4. 「**オファーの表示**」アイコンをクリックします。

「**オファー詳細の表示/編集**」ウィンドウが表示され、「**割り当て済みオファー**」セクションに割り当て済みオファーまたはオファー・リストが表示されます。

5. オファー・リストを選択し、「**オファー・リスト・プレビュー**」をクリックします。

選択したオファー・リストの「**サマリー**」ページが表示され、含まれているオファーのプレビューが表示されます。

「ターゲット・セル」タブのアイコン

「ターゲット・セル」タブでは以下のアイコンが使用されます。



以下の表では、左側のアイコンから右側のアイコンへの順番で説明します。

表 17. 「ターゲット・セル」タブのアイコン

アイコン名	説明
編集	ターゲット・セル・スプレッドシート (TCS) を編集する場合に、このアイコンをクリックします。 注: ターゲット・セル・スプレッドシートを編集するには、適切な権限が必要です。詳しくは、「 <i>Marketing Platform 管理者ガイド</i> 」を参照してください。
ターゲット・セルのインポート	.csv ファイルの内容をターゲット・セル・スプレッドシートにインポートする場合に、このアイコンをクリックします。
ターゲット・セルのエクスポート	このターゲット・セル・スプレッドシートの内容をすべて .csv ファイルにエクスポートする場合に、このアイコンをクリックします。
セルのステータスを取得	ターゲット・セル・スプレッドシート内のデータを更新する場合に、このアイコンをクリックします。

第 8 章 コンタクト履歴およびレスポンス・トラッキング

Campaign では、「コンタクト履歴」という一般用語は、以下に関して取得された情報を表します。

- 送信されたオファー
- 送信先の顧客 (あるいは、オーディエンス・レベルに応じて、アカウントまたは世帯)
- 使用したチャネル
- 日付

例えば、キャンペーンのターゲット顧客のリストは、キャンペーンのフローチャート内のコンタクト・プロセスの出力 (例えば、コール・リストやメール・リスト) として生成することができます。各ターゲット顧客は、1 つ以上のオファーに割り当てられているセルに属します。コール・リストまたはメール・リストのプロセスが実動モード (テスト・モードではなく) で実行され、コンタクト履歴への記録が有効になっている場合、詳細は Campaign システム・データベース内の複数のテーブルに書き込まれます。

これらのテーブルを併せてコンタクト履歴が構成されます。コンタクト履歴には、フローチャートの実行時に各セル内の各 ID に指定された特定のオファー・バージョン (パラメーター化されたオファー属性の値を含む)、およびいかなるコミュニケーションも受信しないように抑制されているコントロール・セルのメンバーが記録されます。

Campaign 内のコントロール・セルは常に検証コントロール (つまりコンタクトなしコントロール) であるため、コントロール・セルに属する顧客にはオファーを割り当てることができず、それらの顧客はコンタクト・プロセス出力リストに含まれません (ただし、コンタクト履歴テーブルには書き込まれます)。

コンタクト履歴およびオーディエンス・レベル

Campaign は、システム管理者が定義したオーディエンス・レベルごとにそれぞれ別のコンタクト履歴および詳細コンタクト履歴を記録し、保守します。各オーディエンス・レベルには、Campaign システム・データベース内に独自の関連コンタクト履歴テーブルおよび詳細コンタクト履歴テーブルがあります。ただし、これらのテーブルは、データベース内の同じ基盤物理テーブルにマップすることができます。

コンタクト履歴およびオーディエンス・レベルについて詳しくは、「*Campaign* 管理者ガイド」を参照してください。

詳細コンタクト履歴

セルのすべてのメンバーが同じ扱いをされる場合 (すなわち、全員に同じオファー・バージョンが提供される場合)、基本のコンタクト履歴が記録されます。しかし、同じセル内の複数の異なる個人が異なる数のオファーを受け取る場合、またはそれぞれ異なるオファー・バージョンを受け取る場合 (同じセル内の個人がそれぞ

れ異なるオファー・バージョンを受け取るようにオファーがカスタマイズされている場合)、Campaign は、各個人が受け取った内容を正確に詳細コンタクト履歴に記録します。

また、制御情報もすべて詳細コンタクト履歴に記録され、個人が検証コントロール・グループとして選択されていない場合に受け取っているはずの、特定のオファーを識別します。この情報により、リフトおよび ROI の計算に関するターゲット・セル対コントロール・セルの適切な分析および比較が可能になります。

詳細コンタクト履歴は短期間で大規模に拡大する可能性があります、極めて詳細なレベルのレスポンス・トラッキングの実行およびターゲット・セルとコントロール・セルの分析を可能にする、すべてのデータを提供します。

コンタクト履歴テーブルへのエントリーの書き込み

コンタクト履歴テーブルにエントリーが書き込まれるのは、フローチャートのコンタクト・プロセス (コール・リストまたはメール・リスト) が、コンタクト・ログ・オプションを有効にした本番モードで実行された場合のみです。テスト実行では、コンタクト履歴テーブルへの書き込みは行われません。

適切な権限がある場合は、コンタクト・プロセスの構成ウィンドウでコンタクト履歴への記録を有効または無効にすることができます。

重要: コンタクト・プロセスを含むフローチャートの場合は、フローチャートの本番実行のつど、コンタクト履歴を生成できるのは 1 回のみである点に注意してください。同じ ID リストから複数のコンタクトを生成するには、ID リストのスナップショットを作成し、フローチャートを実行するたびにそのリストから読み取りを行います。もう 1 つは、同じ ID リストを複数のコンタクト・プロセスへの入力として使用する方法です。

コンタクト履歴への記録が有効である場合、コンタクト履歴に以下の詳細が取得されます。

- コンタクトの日時 (デフォルトでは、コンタクト・プロセスが実行された時点)
- コンタクト・プロセスに割り当てられたオファー・バージョン (パラメーター化されたオファー属性値を含む)
- 各 ID に提供された正確なオファー・バージョン
- ターゲット・セルおよびコントロール・セルの場合、オファー・バージョン、セル、および日時の、それぞれの固有の組み合わせをトラッキングするための処理コード

フローチャートのコンタクト・プロセスの本番実行は、以下のシステム・テーブルに影響します。

- 処理履歴 (UA_Treatment)
- ベース・コンタクト履歴 (UA_ContactHistory)
- 詳細コンタクト履歴 (UA_DtlContactHist)
- オファー履歴

コンタクト履歴の場合に書き込みが行われるシステム・テーブルについて詳しくは、「*Campaign* 管理者ガイド」を参照してください。

処理履歴 (UA_Treatment)

フローチャートが本番モードで実行されるたびに、処理履歴テーブル (UA_Treatment) に行が追加されます。つまり、フローチャートが定期的に行われるようにスケジュールしている場合、フローチャートの実行時に新たな実行が行われるたびに、コンタクト・セルとコントロール・セルの両方で、セルごとの各オファーに対して 1 つずつ、新しい処理セットが生成されます。これにより、Campaign では、処理が生成されるたびに別個のインスタンスとして記録することで、可能な限り最もきめ細かなトラッキングが実現します。処理履歴がベース・コンタクト履歴と連動することで、圧縮性の高い効率的な方法ですべてのコンタクト履歴情報が保管されます。ベース・コンタクト履歴テーブル (UA_ContactHistory) には該当するオーディエンスのセル・メンバーシップ情報のみが記録されます。それに対し、処理履歴テーブル (UA_Treatment) には各セルに提供される処理が記録されます。

各処理インスタンスはグローバルに固有の処理コードによって識別されます。このコードをレスポンス・トラッキングで使用して、特定の処理インスタンスに直接帰属させることができます。

コントロールが使用された場合、処理履歴にはコントロール・セルのデータも記録されます。ターゲット・セルに提供されたオファーに関連する行は、ターゲット処理と呼ばれます。コントロール・セルに提供されたオファーに関連する行は、コントロール処理と呼ばれます。コンタクト・プロセスでコントロール・セルがターゲット・セルに割り当てられた場合、ターゲット処理にコントロール処理が関連付けられます。各コントロール処理には固有の処理コードも割り当てられます。ただし、それらのコードは検証コントロールのメンバーには配布されません。コントロール処理コードが生成される目的は、コントロールの識別用にカスタム・フローチャート・ロジックが使用される、カスタム・レスポンス・トラッキングを可能にすることです。レスポンスを正確なコントロール処理インスタンスに帰属させられるよう、コントロール処理コードを調べて、イベントと関連付けることができます。

ベース・コンタクト履歴 (UA_ContactHistory)

ターゲット・セルおよびコントロール・セルについて、コンタクト ID、セル、およびフローチャート実行日時の組み合わせごとに、ベース・コンタクト履歴テーブルに 1 行ずつ書き込まれます。

相互に排他的なセル・メンバーシップ

セルが相互に排他的なセルであり、各 ID が 1 つのセルにしか属することができない場合、割り当てられたオファーの数に関係なく、単一のコンタクト・プロセス内で処理されるときは、各 ID がコンタクト履歴テーブル内の 1 行を占めることとなります。例えば、「低価値」、「中価値」、および「高価値」のセグメントに対応するセルを定義していて、顧客が一時点においてそれらのセグメントの 1 つにしか属することができない場合が、このケースに該当します。同じコンタクト・プロセス内で「高い価値」セグメントに 3 つのオファーが提供された場合でも、ベース・コンタクト履歴にはセル・メンバーシップが記録されるため、ベース・コンタクト履歴に書き込まれるのは 1 行のみです。

排他的でないセル・メンバーシップ

しかし、個人が複数のターゲット・セルに属することができる場合（例えば、各ターゲット・セルが複数の異なる資格ルールに基づいてオファーを受け取り、顧客がそれらのオファーのうちゼロ、1 個、または複数を受け取る資格がある場合）、各個人は、自分がメンバーになっているセルの数に応じた行数をコンタクト履歴テーブルに占めることとなります。

例えば、「過去 3 カ月以内に購入を行った顧客」および「前四半期に少なくとも \$500 払った顧客」という 2 つのセルを定義した場合、個人はこれらのセルの 1 つまたは両方のメンバーになることができます。個人が両方のセルのメンバーである場合、コンタクト・プロセスを実行すると、その個人のベース・コンタクト履歴に 2 つのエントリーが書き込まれます。

個人が複数のターゲット・セルに属しているために、その人のコンタクト履歴テーブルに複数の行が書き込まれる場合でも、同じコンタクト・プロセスで提供されたすべてのオファーは単一の「パッケージ」または「邪魔なもの」と見なされます。コンタクト履歴テーブル内の固有の「パッケージ ID」は、個人の特定コンタクト・プロセスの特定実行インスタンスによって書き込まれた行を、まとめてグループ化します。1 人の個人または 1 件の世帯に対する「邪魔なもの」が複数生じるのは、その個人または世帯が別個のコンタクト・プロセスにある複数のセルに属していた場合のみです。

追加でトラッキングする項目のコンタクト履歴への書き込み

追加でトラッキングする項目を作成して、ベース・コンタクト履歴テーブルに挿入することができます。例えば、処理テーブルからの処理コード、あるいはオファー属性を、追加でトラッキングする項目としてコンタクト履歴に書き出すことができます。

ただし、ベース・コンタクト履歴に取得されるのはセル・メンバーシップであり、各ターゲット・セルまたはコントロール・セルで書き込まれるのはオーディエンス ID ごとに 1 行であるため、追加でトラッキングする項目をオファーまたは処理データとともにベース・コンタクト履歴に挿入する場合、各ターゲット・セルまたはコントロール・セルの最初の処理のみが書き出されるので注意してください。

例

セル	関連するコントロール・セル	セルに提供されるオファー
TargetCell1	ControlCell1	OfferA、OfferB
TargetCell2	ControlCell1	OfferC
ControlCell1	-	-

リストされたオファーを TargetCell1 および TargetCell2 に割り当てるコンタクト・プロセスを含むフローチャートが（コンタクト履歴への書き込みを有効にして）本番で実行されると、セル、提供されるオファー、および実行日時の組み合わせごとに 1 つの処理が作成されます。つまり、この例では以下の 6 つの処理が作成されます。

処理	処理コード
OfferA を受け取る TargetCell1	Tr001
OfferB を受け取る TargetCell1	Tr002
OfferA を受け取る ControlCell1	Tr003
OfferB を受け取る ControlCell1	Tr004
OfferC を受け取る TargetCell2	Tr005
OfferC を受け取る ControlCell1	Tr006

追加でトラッキングする項目として処理コードをベース・コンタクト履歴に追加した場合、各セルの最初のターゲット処理またはコントロール処理のみが書き出されます。したがってこの例では、各セルの最初の処理に対応する 3 つの行のみがベース・コンタクト履歴に書き込まれます。

セル	処理コード
TargetCell1	Tr001
ControlCell1	Tr003
TargetCell2	Tr005

この理由により、オファー・レベルの属性をベース・コンタクト履歴テーブルに取得することは、適切な方法でない場合があります。完全な履歴情報が、以下の場合にしか提供されないためです。

- 任意のターゲット・セルに 1 つのオファーのみが割り当てられている、および
- 各コントロール・セルが 1 つのターゲット・セルのみに割り当てられている

それ以外のインスタンスではすべて、最初の処理（またはコントロール処理）に関連付けられたデータのみが出力されます。代替手段としては、システム・テーブル UA_ContactHistory および UA_Treatment を結合することにより、データベース・ビューを使用してオファー・レベル情報をフラット化し、その情報にアクセスできるようにすることです。この情報を代替コンタクト履歴に出力することもできます。

注: 詳細コンタクト履歴および代替コンタクト履歴では、動作が異なります。つまり、処理ごとに 1 行ずつ（セルごとに 1 行ずつではなく）書き込まれます。したがって、追加でトラッキングする項目としてオファー属性情報を出力する場合、すべての処理の行が書き出されるので、完全な処理情報を表示できます。

コンタクト履歴に対する更新

新しいエントリーは、コンタクト履歴テーブルの既存エントリーの後に付加されます。「履歴の消去」機能を使用すると、選択したエントリーを手動で消去できます。

詳細コンタクト履歴 (UA_DtlContactHist)

詳細コンタクト履歴テーブルへの書き込みが行われるのは、同じセル内の複数の個人がそれぞれ異なるバージョンのオファーを受け取る、というシナリオを使用する場合のみです。例えば、同じセルのメンバーが同じ住宅ローンのオファーを受け取っているが、そのオファーは、個人 A が金利 5% のオファーを受け取り、一方で個人 B が金利 4% のオファーを受け取るようにカスタマイズできる、といった場

合です。詳細コンタクト履歴には、個人が受け取るオファー・バージョンごとに各 1 行、および個人が受け取っているはずのオファー・バージョンに基づいたコントロール・セルごとに各 1 行が含まれます。

オファー履歴

オファー履歴は複数のシステム・テーブルで構成されます。これらのテーブルには、本番で使用されたオファー・バージョンに関する正確な情報がまとめて保管されます。オファー履歴テーブルに新規行が追加されるのは、パラメーター化されたオファー属性値の組み合わせが固有である場合のみです。それ以外の場合は、既存の行が参照されます。

コンタクト履歴テーブルについて詳しくは、「*Campaign* 管理者ガイド」を参照してください。

コンタクト履歴への書き込みの無効化

重要: コンタクト履歴への書き込みを無効にすることは可能ですが、コンタクト履歴への記録を無効にしないことがベスト・プラクティスです。本番でキャンペーンを実行し、コンタクト履歴に記録しない場合、基礎にある何らかのデータに変更があった場合、後日この履歴を正確に再生成することはできません。

ただし、以下の 2 つの方法により、コンタクト履歴テーブルに書き込みを行わずにコンタクト・プロセスを実行できます。

- 『テスト実行の実施』
- 『ログ・オプションを無効にする方法』

テスト実行の実施

コンタクト履歴テーブルにエントリーが書き込まれるのは、フローチャートのコンタクト・プロセス (コール・リストまたはメール・リスト) が、コンタクト・ログ・オプションを有効にした本番モードで実行された場合のみです。テスト実行では、コンタクト履歴テーブルへの書き込みは行われません。

ログ・オプションを無効にする方法

各コンタクト・プロセスは、本番実行中のコンタクト履歴への記録を無効にするように構成できます。

1. コンタクト履歴への記録を無効にするコンタクト・プロセスをダブルクリックします。プロセス設定ダイアログが表示されます。
2. 「ログ」タブをクリックします。コンタクト・トランザクションのログを構成するためのウィンドウが表示されます。
3. コンタクト履歴への記録を抑制するには、「コンタクト履歴テーブルに記録」および「任意の保存先に記録」チェック・ボックスをクリアします。

オプションで、「詳細オプション」をクリックして「コンタクト履歴ログ・オプション」ウィンドウを表示することもできます。このウィンドウで、コンタクト

履歴にどの情報を記録するかをさらに詳しく制御できます。詳しくは、102 ページの『コンタクト・プロセス (メール・リストまたはコール・リスト) を構成するには』を参照してください。

4. 「OK」をクリックします。プロセス設定ダイアログが閉じ、変更が保存されます。このコンタクト・プロセスを実行した場合、これらのオプションを再び有効にするまで、コンタクト履歴テーブルにも代替のログ保存先にもエントリーは書き込まれません。

コンタクト履歴およびレスポンス履歴の消去

例えば、誤って本番実行が行われた場合、または本番実行後にキャンペーンを取り消すことを決定した場合などに、コンタクト履歴またはレスポンス履歴のレコードを消去することができます。

重要: コンタクト履歴およびレスポンス履歴を消去すると、このデータがデータベースから完全に削除されます。消去されたコンタクト履歴およびレスポンス履歴は復元できません。後で復元する必要がある場合は、履歴を消去する前にシステム・テーブル・データベースをバックアップしてください。

すべての Campaign システム・テーブル間の参照整合性は常に保持されます。すべてのコンタクト履歴テーブルは同時に書き込まれ、コンタクト履歴のクリーンアップもすべてのコンタクト履歴テーブルで同時に行われます。例えば、処理テーブルのエントリーは、ベース・コンタクト履歴テーブルまたは詳細コンタクト履歴テーブルにそれらを参照するエントリーがある場合は削除できません。

コンタクト履歴を消去できるのは、それを実行する適切な権限がある場合、および関連するレスポンス履歴レコードがない場合のみです。したがって、コンタクト履歴を消去する場合は、関連するレスポンス履歴も消去する必要があります。

重要: 一般的な状況では、対応するレスポンスが記録されているコンタクト履歴は削除しないことが最良です。ただし、そのようなコンタクト履歴を削除する必要がある場合は、関連するコンタクト履歴とレスポンス履歴のレコードをすべて消去するか、レスポンス履歴レコードのみを消去するかを選択できます。

コンタクト履歴およびレスポンス履歴の消去方法

重要: コンタクト履歴を消去すると、コンタクト履歴レコードがシステム・テーブルから完全に削除されます。このデータは復元できません。

1. 「編集」モードのフローチャートで、履歴を消去するコンタクト・プロセスをダブルクリックします。プロセス設定ダイアログが表示されます。
2. 「ログ」タブをクリックします。コンタクト・トランザクションのログを構成するためのウィンドウが表示されます。
3. 「履歴の消去」をクリックします。「コンタクト履歴の消去」ウィンドウが表示されます

注: コンタクト履歴エントリーが存在しない場合に「履歴の消去」をクリックすると、消去するエントリーがないことを示すエラー・メッセージが表示されません。

4. 該当する履歴の消去オプションを選択します。すべてのエントリーの消去、選択した日付範囲のすべてのエントリーの消去、または実行日時によって識別される特定のフローチャートの実行の消去を選択できます。
5. 「OK」をクリックします。
 - 選択したエントリーに対応するレスポンス履歴レコードが存在しない場合、確認メッセージが表示されます。
 - 選択したどのエントリーにも対応するレスポンス履歴レコードがない場合、「履歴の消去オプション」ウィンドウが表示されます。以下のいずれかのオプションを選択します。
 - 関連するすべてのコンタクト履歴およびレスポンス履歴のレコードを消去する: 指定したエントリーに対応するコンタクト履歴およびレスポンス履歴の両方を消去します。
 - 関連するレスポンス履歴のレコードのみを消去する: 指定したエントリーに対応するレスポンス履歴のみを消去します。コンタクト履歴レコードは消去されません。
 - キャンセル: コンタクト履歴またはレスポンス履歴のいずれのレコードも消去されません。
6. 選択した操作が完了すると、指定したレコードが消去されたことを示す確認メッセージが表示されます。
7. 「OK」をクリックして確認メッセージを閉じます。
8. 「OK」をクリックしてプロセス設定ダイアログを閉じます。

レスポンス・トラッキングについて

Campaign では、「レスポンス・トラッキング」という用語は、個人によって生じたイベントまたは操作が、それらの個人に提供されたオファーへの応答として生じたかどうかを決定するプロセスを表します。レスポンス・トラッキングには、検証コントロール・グループ内の個人の動作をトラッキングして、それらの個人がコンタクトされなくても望まれた操作を実行したかどうかを確認する作業も含まれます。

Campaign では、キャンペーンへのレスポンスに関する以下の情報が取得されます。

- 応答者 — トラッキング対象のレスポンス・タイプと動作が一致したオーディエンス・エンティティ (個々の顧客または世帯) のリスト。
- 応答者が実行した操作、およびその操作の日時 — 例えば、Web サイトでのクリックスルー、購入、特定のアイテムの購入など。
- 応答対象のオファー処理 — Campaign 生成のコード (キャンペーン・コード、オファー・コード、セル・コード、または処理コード)、および応答者によって返された非ヌル値のオファー属性がすべて、レスポンス・トラッキングのために照合されます。
- レスポンスがどのように見なされるか — 一致した、Campaign 生成コードまたはオファー属性の非ヌル値に基づき、レスポンスがどの程度キャンペーンに帰属しているか、応答者がオリジナルのターゲット・グループまたはコントロール・グループに属していたかどうか、および有効期限前にレスポンスを受け取ったかどうかを判別します。

レスポンス・トラッキングの実行

レスポンス・トラッキングは、レスポンス・プロセスを含むフローチャートを作成することにより実行します。レスポンス・プロセスは、選択プロセスまたは抽出プロセスを通じてアクション・テーブルから入力を受け取ります。アクション・テーブルは、すべてのアクションまたはイベントのレコードを含むファイルまたはテーブルです。これらのアクションまたはイベントを評価することで、それらをレスポンスとして任意のコンタクトまたはコントロールの処理に帰属させる必要があるかどうかを確認します。

レスポンス・プロセスはオファーへのレスポンスと見なす ID を処理、評価、および出力するように構成します。これは、アクション・テーブルのレスポンス・コード、またはその他の標準またはカスタムのオファー属性 (あるいはこれらのコードと属性の両方) を何らかの形で組み合わせて照合を行った内容に基づきます。レスポンス・プロセスにマップされる Campaign 生成のコード (キャンペーン・コード、オファー・コード、セル・コード、または処理コード) はすべて、「対象のレスポンス・コード」と見なされます。レスポンス・プロセスにマップされるその他のオファー属性 (標準、カスタムを問わず) はすべて、「対象のレスポンス属性」と見なされます。例えば、「関連製品」項目は、推定レスポンスをトラッキングするためのオファー属性として使用できます。レスポンス処理ロジックでは、対象のレスポンス・コードと対象のレスポンス属性の両方を使用して、直接レスポンスと推定レスポンスを判別します。

レスポンス・プロセスを実行すると、それらのレスポンスがレスポンス履歴システム・テーブル (UA_ResponseHistory、または各オーディエンス・レベルの同等テーブル) に書き込まれます。コンタクト履歴と同様に、トラッキングするオーディエンス・レベルごとにレスポンス履歴システム・テーブルが 1 つずつ存在します。

レスポンス履歴で取得されたデータは、Campaign 内でパフォーマンス・レポートを使用して分析に使用できるようになります。

Campaign は、レスポンス・トラッキングに関連する以下のデータを自動的に記録します。

- レスポンスが直接レスポンス (1 つ以上の Campaign 生成のコードが返されたもの)、推定レスポンス (レスポンス・コードが返されなかったもの) のどちらであるか
- レスポンスを受け取ったのが、特定のオファー・バージョンの有効期限の前か後か
- 応答者がキャンペーンのターゲット・セルまたはコントロール・セルのどちらかに属しているか
- レスポンスが固有であるか複製であるか
- 完全一致、断片一致、および複数一致の各アトリビューションのスコア
- レスポンスに起因するレスポンス・タイプ (アクション)

複数のレスポンス・トラッキング・フローチャートの使用

企業のすべてのキャンペーン用に単一のレスポンス・トラッキング・フローチャートを使用することができます。単一のアクション・テーブルを使用する場合、通常

はシステム管理者が、データを処理用にそのアクション・テーブルに書き込むよう、セッションのフローチャートをセットアップしています。

ただし、Campaign の実装環境で、利便性のために、それぞれが別個のレスポンス・トラッキング・フローチャートに関連している、1 つ以上のアクション・テーブルを使用する場合があります。

複数のレスポンス・トラッキング・フローチャートを使用するのは、以下の場合です。

- 複数の異なるオーディエンス・レベルのレスポンスをトラッキングする場合
- リアルタイム処理とバッチ処理という対照的な要件がある場合
- 大量のデータの複製を避けたい場合
- 異なるシチュエーション用に特定のデータをハードコーディングしたい場合
- カスタムのレスポンス処理ロジックが必要な場合

複数の異なるオーディエンス・レベルのレスポンスをトラッキングする場合

(必須) レスポンスを受け取り、トラッキングするオーディエンス・レベルごとに、レスポンス・トラッキング・フローチャートが 1 つずつ必要です。レスポンス・プロセスは着信セルのそのオーディエンス・レベルで動作し、そのオーディエンス・レベルに該当するレスポンス履歴テーブルに、自動的に書き込みを行います。2 つの異なるオーディエンス・レベル (例えば、顧客と世帯) のレスポンスをトラッキングするには、ほとんどの場合、2 つの別個のレスポンス・トラッキング・フローチャート内にある、2 つの異なるレスポンス・プロセスが必要です。

リアルタイム処理とバッチ処理という対照的な要件がある場合

(必須) レスポンス・トラッキング・セッションのほとんどはバッチ・フローチャートであり、アクション・テーブルに挿入されたイベントを定期的に処理します (例えば、顧客の購入の夜間処理)。レスポンス・トラッキングの実行頻度は、アクション・テーブルに挿入されるトランザクション・データの利用可能性に応じて異なります。

例えば、異なる複数のチャネル (Web とダイレクト・メールなど) からのレスポンスを処理する場合、各チャネルごとに着信トランザクション・データが利用可能になる頻度が異なるため、それぞれ別個のレスポンス処理セッションが必要になる可能性があります。

大量のデータの複製を避けたい場合

(オプション) 大量のトランザクション・ボリューム (例えば、1 日当たり数百万件の販売トランザクション) を評価する必要がある場合、アクション・テーブルにそのデータを ETL (Extract, Transform, Load) するのではなく、レスポンス・トラッキング・フローチャートを作成して、ソース・データに対して直接マップすることができます。

例えば、抽出プロセスで e-commerce システムの購入トランザクション履歴テーブルから (特定の日付範囲に基づき) 直接トランザクションをプルするレスポンス・トラッキング・フローチャートを作成し、さらに、この抽出からその履歴テーブル内の列に直接マップするレスポンス・プロセスを作成することができます。

異なるシチュエーション用に特定のデータをハードコーディングしたい場合

(オプション) 異なるシチュエーション (例えば、異なるチャネル) 用に特定のデータ (例えば、レスポンス・タイプ) をハードコーディングすることができます。例えば、あるチャネル (例えば、「コール・センター」など) に固有の特定のレスポンス・タイプ (例えば、「質問」) のみをトラッキングする必要がある場合、ユーザー定義項目を作成してそれらのレスポンスをフィルタリングし、それをレスポンス処理フローチャートで使用して、コール・センター・データベースからすべての質問をプルすることができます。データを単一のアクション・テーブルに書き込むより、ユーザー定義項目を使用してレスポンス・トラッキングに必要なデータを作成し、そのデータをソースから直接プルする方が便利な場合があります。

カスタムのレスポンス処理ロジックが必要な場合

(オプション)。レスポンスを帰属させるための独自のルールを作成する必要がある場合、カスタムのレスポンス・トラッキング・ロジックを実装するための別個のレスポンス・トラッキング・フローチャートを作成することができます。例えば、「3個買ったら 1 個無料」オファーへの応答者を識別する必要がある場合、複数のトランザクションを調べて、個人が応答者として適格かどうかを判断する必要があります。適格な個人を見つけたら、その個人をレスポンス・プロセスに入力し、処理コードと該当するレスポンス・タイプを使用してレスポンスを記録することができます。

マルチパート・オファー・コードを使用したレスポンス・トラッキング

マルチパート・オファー・コード (つまり、2 つ以上のコードで構成されるオファー・コード) から成るユーザー定義項目を使用して、レスポンスをトラッキングすることができます。オファー・コードのすべての部分は、パーティション全体の `offerCodeDelimiter` 構成プロパティを使用して連結されている必要があります。次の例では、デフォルトの区切り記号「-」を使用して連結された 2 つの部分から成る `MultipleOfferCode` というユーザー定義項目が作成されます。

```
MultipleOfferCode = string_concat(OfferCode1, string_concat("-", OfferCode2))
```

ユーザー定義項目を操作項目候補として使用するようにレスポンス・プロセスを構成する場合は、ユーザー定義項目を、マルチパート・コード内の各オファー・コードのオファー/処理属性と照合する必要があります。

レスポンス・トラッキングの日付範囲

レスポンス・トラッキングでは、有効なオファー期間 (すなわち、発効日以降、および有効期限以前) 内にレスポンスが行われたかどうかを記録するほかに、すべてのオファーについてレスポンスが有効な日付範囲外に行われたかどうかを記録します。Campaign はオファーの有効期限後の構成可能期間に基づき、すべてのオファーの遅延レスポンスをトラッキングして、正式な終了日後にオファーが呼び戻された頻度に関するデータを提供します。

Campaign のレスポンス・トラッキングの日付範囲はグローバルに設定され、すべてのキャンペーン・オファーに適用されます。システム管理者は、オファーの有効期限後にレスポンスをトラッキングする日数を設定します。

この日付設定により、イベントと一致する可能性のある処理インスタンス数が自動的に制限されます。日付範囲を狭くすると、パフォーマンスが向上します。処理テーブルから返される、一致の可能性のあるインスタンスの数が少なくなるためです。

日付範囲の設定について詳しくは、「*Campaign 管理者ガイド*」の『キャンペーン終了後にレスポンスを記録する日数の設定 (Setting the number of days after a campaign ends to record responses)』を参照してください。

コントロールのレスポンス・トラッキング

コントロール・グループのレスポンスは、レスポンス・プロセスを使用してオファ어의レスポンスと同時にトラッキングされます。

コントロール・セルのレスポンスは、レスポンス・コードがすべて最初に破棄される点を除き、推定レスポンスと同じ方法で処理されます。コントロール・セルのメンバーからのレスポンスについては、レスポンス・トラッキング・コードはすべて無視され、すべての対象の属性はコントロール処理インスタンスに照らして、一致があるか確認されます。Campaign は、すべてのコントロール処理に対して生成される内部のグローバルに固有の処理コードを使用します。ただし、コントロール処理コードは提供されません。コントロール処理は常にコンタクトなしの検証コントロールであるためです。

同じイベントがターゲット処理インスタンスとコントロール処理インストールの両方に帰属する場合も考えられます。例えば、ある特定の顧客が女性部門における購入の 10% についてのオファ어의ターゲットとなっていて、その顧客がその店舗からの購入に関するモニターを行う検証コントロール・グループのメンバーでもある場合に、その顧客がクーポンを使って購入を行うと、そのイベントはターゲット処理インスタンス (クーポンの処理コードを使用) とコントロール処理インスタンスの両方に関連付けられます。また、コントロール処理インスタンスは、有効な日付範囲内および有効期限切れ後もターゲット処理インスタンスと同じ方法で記録されます。これにより、ターゲット・セルの遅延アクティビティーに関する有効なコントロール比較が可能になります。

コントロール・セルのレスポンスでは完全一致アトリビューションまたは断片一致アトリビューションは使用されず、常に複数一致アトリビューションが使用されます。つまり、応答者がオファ어의コントロール・セルに属しており、その応答者のアクションが複数のコントロール処理の推定レスポンスとして適格性が認められた場合、これらの一致するコントロール処理はすべて、そのレスポンスについてのクレジット (帰属) を受け取ります。

カスタマイズされたオファ어의レスポンス・トラッキング

データ駆動型でカスタマイズされた、つまりユーザー定義あるいはパラメーター化されたオファ어項目を使用して、複数の異なるオファer・バージョンを生成した場合、それらのカスタマイズされたオファerにレスポンスを正しく帰属させるには、アクション・テーブルに、パラメーター化されたオファer属性項目を表す項目が含まれている必要があります。これらの項目がレスポンス・プロセスに対象の属性としてマップされ、書き込まれると、それらの項目を使用してレスポンスをオファer・バージョンまたは処理インスタンスに対して逆向きに照合することができま

す。これらの「対象の属性」の値を持つレスポンスは、オファー・バージョン履歴に、その処理へのアトリビューションについてその個人に関して記録された値と正確に一致している必要があります。

例えば、出発空港と到着空港によってカスタマイズされたフライト・オファーがある場合、アクション・テーブルには「出発空港」と「到着空港」の項目が含まれている必要があります。各フライトの購入トランザクションにはこれらの値が含まれ、レスポンス・トラッキングでは、個人によって購入された特定のフライトを、その人にプロモーションされたオファー・バージョンと照合できます。また、これらの項目はコントロール・グループのメンバーの推定レスポンスのトラッキングにも使用され、それらのメンバーが、自身にプロモーションされているはずのフライトを購入したかどうかを確認されます。

レスポンス・タイプ

レスポンス・タイプとはトラッキング対象の特定のアクションのことで、クリックスルー、照会、購入、アクティベーション、使用などがあります。各レスポンス・タイプは固有のレスポンス・コードによって表されます。レスポンス・タイプおよびレスポンス・コードは Campaign レスポンス・タイプ・システム・テーブルでグローバルに定義され、すべてのオファーで使用できます。ただし、すべてのレスポンス・タイプがすべてのオファーに関連しているわけではありません。例えば、ダイレクト・メール・オファーでクリックスルー・レスポンス・タイプを見受けることは考えられません。

イベントがアクション・テーブルに書き込まれる際に、各イベント行に書き込めるレスポンス・タイプは 1 つのみです。アクションのレスポンス・タイプ項目が空(ヌル)の場合、デフォルトのレスポンス・タイプ(「不明」としてトラッキングされます。

単一のイベントを複数のレスポンス・タイプに関連付ける必要がある場合、レスポンス・タイプごとに 1 行ずつ、複数の行をアクション・テーブルに書き込む必要があります。例えばある金融機関が、アクティベーション後の最初の月の間における新規クレジット・カードの購入使用レベルを、レスポンス・タイプ「Purch100」、「Purch500」、および「Purch1000」でトラッキングする場合、\$500 の購入では、「Purch100」と「Purch500」の両方のレスポンス・タイプでイベントを生成する必要があると考えられます。その購入が両方の条件を満たすためです。

まとめて 1 つのレスポンス・イベントとして構成される、個々のトランザクションの複合シーケンスを検出する必要がある場合、適格なトランザクションを探すモニター・セッションが別個に必要であり、これらが検出されると、イベントがアクション・テーブルに送信されます。例えば、ある小売業者のプロモーションで、12 月中に 3 枚の DVD を購入した顧客に特典が用意されている場合、フローチャートを作成することにより、各顧客の DVD 購入枚数を計算し、3 枚以上購入した顧客を選択し、それらの顧客を特殊なレスポンス・タイプ(例えば、「Purch3DVDs」と共にアクション・テーブルに書き込むことができます。

レスポンス・タイプについて詳しくは、「Campaign 管理者ガイド」を参照してください。

レスポンス・カテゴリー

Campaign のレスポンスは以下の 2 つのカテゴリーに分類されます。

- 直接レスポンス — オファーと共に送信された 1 つ以上の Campaign 生成のトラッキング・コードが返されており、返された対象の属性が一致する必要があります。
- 推定レスポンス — トラッキング・コードは返されていませんが、レスポンス・トラッキングに使用されるオファー属性が少なくとも 1 つ返されて、一致しています。検証コントロール・グループからのレスポンスは、常に推定レスポンスです。

直接レスポンス

レスポンスは、以下の場合に直接レスポンスと見なされます。

- 応答者が、Campaign によって生成された該当する可能性のある 1 つ以上のターゲット処理インスタンスと正確に一致する、Campaign 生成のコード (キャンペーン・コード、セル・コード、オファー・コード、または処理コード) を 1 つ以上返した。

かつ

- 返された「対象の属性」(すなわち、トラッキングのためにレスポンス・プロセスにマップされた任意のオファー属性のことで、標準またはカスタムのもの) の値が、処理の属性の値と正確に一致している。

例えば、処理コードが対象のレスポンス・コードであり、「レスポンス・チャンネル」が対象の属性である場合、処理コードの値が「XXX123」、レスポンス・チャンネルの値が「小売店」である着信レスポンスは、対応する値がそれぞれ「XXX123」および「Web」である処理に対する直接一致とは見なされません。

対象の属性がヌル値のレスポンスは、そのオファー属性を持つ処理と照合することはできません。例えば、「金利」の値がないレスポンスは、オファー属性として金利を含むオファー・テンプレートから作成されたオファーと照合することはできません。

ただし、処理に存在しない対象の属性の値を持つレスポンスの場合、照合は抑制されません。例えば、「金利」オファー属性のないオファー・テンプレートから無料配送オファーが作成された場合に、「金利」が対象の属性であるとする、Campaign が配送料無料オファーに関連する処理に対して該当する一致があるか検討するときに、着信レスポンスの「金利」属性の値は問題になりません。

レスポンス・トラッキングでは、有効なオファー期間 (すなわち、発効日以降、および有効期限以前) 内にレスポンスが行われたかどうか、またはレスポンスが有効な日付範囲外に行われたかどうかを検査されます。Campaign は、オファーの有効期限後の構成可能な期間中の遅延レスポンスをトラッキングします。

また、レスポンス・トラッキングでは、直接レスポンスが、最初にコンタクトされたグループ (すなわち、ターゲット・セル) に属する応答者から送信されたかどうかも識別されます。

注: 直接レスポンスが最初にターゲットとなっていたグループから送信されたものでなかった場合、そのレスポンスは「ウィルス性」レスポンス、つまり、「伝達されたもの」と見なされます。これは、その応答者が最初にオファーを受け取ったわけではないが、何らかの方法で有効なレスポンス・コードを取得したことを意味します。

レスポンスのうちのいくつがターゲット・グループから送信されたかを把握することは、有益であると考えられます。特に、高価値顧客を獲得しようとする場合は重要です。パフォーマンス・レポートでこれらの値を取り出して、最初のターゲット・グループから送信された直接レスポンスの数と、ウィルス性レスポンスの数を確認することができます。

直接レスポンスは、完全一致の場合と不完全一致の場合があります。

直接完全一致

レスポンスは、それが帰属する単一のターゲット処理インスタンスを Campaign が一意的に識別できる場合に直接完全一致であると見なされます。

注: トラッキングには Campaign 生成の処理コードを使用することがベスト・プラクティスです。その処理コードが返された場合、Campaign が常に、帰属する処理インスタンスを一意的に識別できるためです。

例えば、あるオファーでクーポン・コードとしてコンタクト・フローチャートから生成された処理コードを使用した場合に、そのオファーのターゲット・セルのいずれかに属する応答者によって処理コードが返されると、そのレスポンスはそのオファーの直接完全一致となります。

該当するトラッキング・コードまたは属性を複数受け取った場合、処理インスタンスをカウントするには、すべてのコードと属性値が正確に一致している必要があります。つまり、応答者がオファー・コード、処理コード、および非ヌル値のオファー属性を提供した場合、それらはすべて、処理内のコードおよびオファー属性値と完全に一致していなければなりません。

直接不完全一致

レスポンスは、それが帰属する処理インスタンスを Campaign が一意的に識別できないものの、返されたトラッキング・コード (複数の場合もあり) が、該当する可能性のある複数のターゲット処理インスタンスと一致する場合に、直接不完全一致と見なされます。

このレスポンスについてのクレジット (帰属) を受け取るターゲット処理インスタンスを絞り込むために、Campaign は、いずれかのターゲット処理インスタンスが応答者にコンタクトした場合、その応答者にコンタクトしなかった処理インスタンスをすべて破棄します。どのターゲット処理インスタンスも応答者にコンタクトしなかった場合、すべてのインスタンスが保持され、ウィルス性レスポンスについてのクレジットを受け取ります。

例えば、高価値セグメントに属する顧客が、高価値および低価値の両方の顧客に提供されたキャンペーンからオファーを受け取り、オファー・コードを返した場合、これは当初 2 つのターゲット処理インスタンス (1 つは高価値セル、1 つは低価値セル) と一致します。このレスポンス・トラッキング・ルールを適用すると、実際

には高価値セルの処理インスタンスがこの応答者をターゲットとしていて、低価値セルの処理インスタンスはそうでなかったため、後者のインスタンスは破棄されます。高価値顧客グループに関連する処理インスタンスのみが、このレスポンスについてのクレジットを受け取ります。

さらに、そのレスポンス日付が、残りのいずれかの処理インスタンスの有効日付範囲内に該当した場合、その発効日から有効期限までの範囲に該当しない処理インスタンスはすべて破棄されます。

例えば、同じキャンペーンの 1 月インスタンスと 2 月インスタンスの両方で 1 人の顧客にコンタクトが行われ、オファー・コードが返された場合、これは、2 つのターゲット処理インスタンス (1 月と 2 月) と一致します。各オファー・バージョンがその発行月の終わりに有効期限切れとなった場合、2 月にレスポンスが行われると、1 月の処理インスタンスは有効期限切れになっているため、破棄されることとなります。2 月の処理インスタンスのみが、このレスポンスについてのクレジットを受け取ります。

レスポンス・トラッキング・ルールが適用され、無効なターゲット処理インスタンスがすべて破棄された後、Campaign は別のアトリビューション方式を使用して、残りの処理インスタンスに与えるクレジットを計算します。

推定レスポンス

レスポンスは、以下の条件が満たされたときに推定レスポンスと見なされます。

- Campaign 生成のトラッキング・コード (キャンペーン・コード、セル・コード、オファー・コード、または処理コード) が返されていない
- 応答者がターゲット・セルまたはコントロール・セルに属している
- レスポンス・トラッキングに使用されたオファー属性の少なくとも 1 つが返された
- 返されたオファー属性がすべて一致している

対象の属性がヌル値のレスポンスは、そのオファー属性を持つ処理と照合することはできません。例えば、「金利」の値がないレスポンスは、オファー属性として金利を含むオファー・テンプレートから作成されたオファーと照合することはできません。

ただし、処理に存在しない対象の属性の値を持つレスポンスの場合、照合は抑制されません。例えば、「金利」オファー属性のないオファー・テンプレートから無料配送オファーが作成された場合に、「金利」が対象の属性であるとする、Campaign が配送料無料オファーに関連する処理に対して該当する一致があるか検討するときに、着信レスポンスの「金利」属性の値は問題になりません。

さらに、レスポンスが推定レスポンスと見なされるためには、その応答者がコンタクトされている (すなわち、ターゲット・セルまたはコンタクトされたグループに属している) 必要があります。

例えば、洗濯用洗剤を \$1 割引クーポンが顧客に送信され、その顧客が洗濯用洗剤を購入した場合 (たとえクーポンの引き換えが行われなくても)、Campaign は、そのターゲット処理インスタンスに対する肯定的なレスポンスを推定します。

コントロール・グループからの推定レスポンス

コントロール・グループ (Campaign において常に検証コントロールであるグループ) のメンバーからのレスポンスはすべて、推定レスポンスです。推定レスポンスの照合は、検証コントロール・グループのメンバーからのレスポンスの帰属確認のための唯一のメカニズムです。

コントロール・グループのメンバーはいかなるコミュニケーションも受け取らないため、返すべきトラッキング・コードを持ち得ません。

レスポンス・トラッキングでは、コントロール・グループのメンバーをモニターして、オファーを受け取っていなくても望まれた操作を実行したかどうかを確認します。例えば、あるキャンペーンが、当座預金口座オファーを使用して、当座預金口座を持たない顧客のグループをターゲットとしているとします。コントロール・グループのメンバーがトラッキングされ、当座預金口座オファーと同じ期間内に当座預金口座を開いたかどうかを確認されます。

着信イベントもすべて評価され、それらがコントロール処理インスタンスの推定レスポンスの可能性があるかどうかを確認されます。レスポンス・コードはすべて破棄され、残りの対象の属性は、コントロール処理インスタンスに対して評価され、レスポンスの帰属についての可能性が確認されます。

アトリビューション方式

Campaign は、オファーに対するレスポンスの帰属度を測る方法として以下の 3 つの方式をサポートします。

- 最適一致
- 断片一致
- 複数一致

これら 3 つのレスポンス・アトリビューション方式はすべて、同時に使用され、レスポンス履歴の一部として記録されます。これらの方式を 1 つだけ、どれかを組み合わせ、または全部を選択して、さまざまなパフォーマンス・レポートで使用し、キャンペーンとオファーのパフォーマンスを評価することができます。

レスポンス・アトリビューションは、(処理インスタンスが応答者にコンタクトしなかったため、またはターゲット・インスタンスが有効期限切れのため) 無効なレスポンスが破棄された後に残っているターゲット処理インスタンスで実行されます。

例えば、3 つのオファーが提供されたターゲット・セル内の応答者が 1 つのセル・コードを返したとします。この場合、正確な処理インスタンスを識別できません。最適一致アトリビューションでは、3 つのオファーのうち 1 つを選んですべてのクレジット (帰属) をそれに与えます。断片一致アトリビューションでは、3 つのオファーそれぞれに 1/3 ずつのクレジットを与えます。複数一致アトリビューションでは、応答についてのすべてのクレジットを 3 つすべてのオファーに与えます。

最適一致

最適一致アトリビューションでは、単一のターゲット処理インスタンスのみが応答についてのすべてのクレジット (帰属) を受け取り、一致する他のすべての処理インスタンスが受け取るクレジットはゼロです。1 つの応答に対して複数の処理イン

タンスが一致する場合、Campaign は最新のコンタクト日付を持つ処理インスタンスを最適一致として選択します。同じコンタクト日時を持つ処理インスタンスが複数ある場合、Campaign は任意でそのいずれかにクレジットを与えます。

注: 同じコンタクト日時を持つ処理インスタンスが複数ある場合に、毎回同じインスタンスにクレジットが与えられますが、Campaign が特定の処理インスタンスを選択すると想定することはできません。

断片一致

断片一致アトリビューションでは、一致する n 個すべての処理インスタンスが、レスポンスについてそれぞれ $1/n$ のクレジット (帰属) を受け取ります。これにより、すべてのアトリビューション・スコアの合計は 1 になります。

複数一致

複数一致アトリビューションでは、一致する n 個すべての処理インスタンスが、レスポンスについてのすべてのクレジット (帰属) を受け取ります。これは、処理のクレジットの過大評価につながる可能性があるため、注意して使用する必要があります。コントロール・グループは常に、複数のアトリビューションを使用してトラッキングされます。コントロール・グループのメンバーからのレスポンスはすべて、すべてのクレジットを受け取ります。

第 9 章 保管オブジェクト

頻繁に使用するキャンペーン・コンポーネントがある場合は、それらを保管オブジェクトとして設計および保存するようにしてください。保管オブジェクトをフローチャート間およびキャンペーン間で再使用することにより、時間を節約でき、キャンペーン間でより一貫性が保たれるようになります。

Campaign の保管オブジェクトには、以下のタイプがあります。

- ユーザー定義項目
- ユーザー変数
- カスタム・マクロ
- テンプレート
- テーブル・カタログ

ユーザー定義項目について

ユーザー定義項目は、データ・ソースには存在しない変数であり、1 つ以上の既存の項目（データ・ソースが異なる場合でも）から作成されます。多くのプロセスで、構成ウィンドウには「**ユーザー定義項目**」ボタンがあり、このボタンを使用すると、テーブルへの出力をクエリー、セグメント化、ソート、計算、および提供するための新しい変数を作成できます。

明示的に作成するユーザー定義項目は、作成時に「**固定する**」オプションを有効にすることによって、後続のプロセスで使用可能にすることができます。

一般に、プロセスで使用可能なユーザー定義項目は、「**ユーザー定義項目**」フォルダーにリストされています。ユーザー定義項目は、ユーザー定義項目が作成されたプロセスでのみ使用可能です。プロセスでユーザー定義項目を作成しなかった場合は、このリストに「**ユーザー定義項目**」フォルダーは表示されません。

ユーザー定義項目を後続プロセスではない別のプロセスで使用するには、ユーザー定義項目式を「**ユーザー定義項目式**」リストに保管します。「ユーザー定義項目式」リストに組み込むと、ユーザー定義項目がすべてのプロセスおよびすべてのフローチャートで使用できるようになります。

ユーザー定義項目の作成

ユーザー定義項目は、ユーザー定義項目をサポートするプロセスの構成ウィンドウから作成します。

ユーザー定義項目式に使用できるのは、プロセス構成ダイアログで選択されたテーブルの項目のみです。目的のテーブルが表示されていない場合は、そのテーブルがソース・テーブルとして選択されていることを確認してください。

ユーザー定義項目の命名上の制約

ユーザー定義項目の名前には、以下の制約があります。

- ユーザー定義項目の名前は、以下のタイプの名前と同じにすることはできません。
 - INSERT、UPDATE、DELETE、WHERE などのデータベース・キーワード。
 - マップされたデータベース・テーブル内の項目。
- ユーザー定義項目の名前に Yes や No という単語を使用することはできません。

これらの命名上の制約に従わないと、正しくない名前ของผู้ザー定義項目が呼び出された場合に、データベース・エラーが発生して接続が切断される可能性があります。

注: ユーザー定義項目の名前には、文字に関する特定の制約もあります。詳しくは、269 ページの『IBM Unica Campaign オブジェクト名での特殊文字』を参照してください。

ユーザー定義項目を作成するには

1. ユーザー定義項目をサポートするプロセスの構成ウィンドウから、「ユーザー定義項目」をクリックします。

「ユーザー定義項目の作成」ウィンドウが表示されます。

2. 「項目名」項目に、新しいユーザー定義項目の名前を入力します。

このプロセスで以前に作成したすべてのユーザー定義項目が、「項目名」ドロップダウン・リストに表示されます。新しいユーザー定義項目を作成するには、別の名前を入力します。

3. この項目の計算値を保管して渡す場合は、「固定する」チェック・ボックスを選択します。
4. ユーザー定義項目の式を直接「式」テキスト・ボックスに入力するか、「入力サポート」をクリックして「入力サポート」を使用します。「条件項目」リストにリストされている項目を使用し、項目名を選択して「<- 使用」をクリックすることで、項目名を「式」テキスト・ボックスに挿入することもできます。

ユーザー定義項目が NULL 値になるように定義できます。ユーザー定義項目を Campaign マクロで使用する場合は、スナップショットの NULL 値を返すには NULL を使用し、文字列データ・タイプ付きの NULL 値を返すには NULL_STRING を使用します。

ユーザー定義項目に文字列を定数として入力できます。文字列を使用する場合は、二重引用符で囲む必要があります。例えば、"my string" のようにします。数値文字列には引用符は不要です。

5. (オプション)「構文チェック」をクリックして、入力したユーザー定義項目の構文を検査します。

問題がある場合はエラー・メッセージが表示され、構文が正しい場合は「構文チェックは OK です」と表示されます。

6. 「OK」をクリックして、新しいユーザー定義項目を保存し、プロセス構成ダイアログに戻ります。

既存のユーザー定義項目から新しいユーザー定義項目を作成するには

1. ユーザー定義項目をサポートするプロセスの構成ウィンドウから、「ユーザー定義項目」をクリックします。

「ユーザー定義項目の作成」ウィンドウが表示されます。

2. 「項目名」ドロップダウン・リストから、新しいユーザー定義項目を作成する基となる既存のユーザー定義項目を選択します。

選択したユーザー定義項目の式が「式」領域に表示されます。

3. 既存のユーザー定義項目の名前を、新しいユーザー定義項目に付けたい名前に変更します。

重要: ユーザー定義項目の名前に「Yes」または「No」という語を使用することはできません。このような名前を使用すると、これらのユーザー定義項目が呼び出されるときにデータベースが切断されます。

4. ユーザー定義項目式を必要に応じて編集します。
5. 「OK」をクリックして、新しいユーザー定義項目を保存し、プロセス構成ダイアログに戻ります。

カスタム・マクロを使用してユーザー定義項目を作成するには

1. ユーザー定義項目をサポートするプロセスから、「ユーザー定義項目」をクリックします。

「ユーザー定義項目の作成」ウィンドウが表示されます。

2. 「ユーザー定義項目の作成」ウィンドウで、「入力サポート」をクリックします。

カスタム・マクロのリストが「入力サポート」に表示されます。

3. リストのマクロをダブルクリックして、マクロを選択します。

マクロの宣言および説明が表示され、マクロが「入力サポート」ウィンドウに挿入されます。

4. 「条件項目」リストから適切な項目を選択して、式を完成させます。
5. 「OK」をクリックして、新しいユーザー定義項目を保存し、プロセス構成ダイアログに戻ります。

ユーザー定義項目の保管

ユーザー定義項目は、ユーザー定義項目が作成されたプロセスと、後続のプロセス内でのみ使用可能です。例えば、プロセス内に、以下の式で Pct_Usage という名前のユーザー定義項目を定義するとします。

$(\text{Curr_bal} / \text{Credit_limit}) * 100$

Pct_Usage は他のプロセス（「固定する」が有効になっている場合は、その直後のプロセス以外）では使用できません。

ただし、他のクエリーを保存するのと同じ方法で、ユーザー定義項目の定義を保存できます。ユーザー定義項目の定義を「ユーザー定義項目式」リストに保管して、

名前 (例えば、Pct_of_limit_used) を付けることができます。後で、同じフローチャートまたは別のフローチャート内の別のプロセスで同じユーザー定義項目を使用する場合は、最初から再構成するのではなく、「**ユーザー定義項目式**」リストから Pct_of_limit_used を選択して、ユーザー定義項目式を挿入することができます。

ユーザー定義項目を保存するには

1. ユーザー定義項目をサポートするプロセスで、保存するユーザー定義項目を作成します。
2. 「ユーザー定義項目式」をクリックします。

「式の保存/呼び出し」ウィンドウが表示されます。

3. 「**現在の式を保存する**」を選択します。
4. 「**OK**」をクリックします。
5. 「式の保存」ウィンドウを使用して、このユーザー定義項目を保存する場所、セキュリティ・ポリシー (該当する場合)、およびこの項目に関する説明を指定します。
6. 「**保存**」をクリックします。

注: 既に作成されているユーザー定義項目を保存する場合は、「**項目名**」ドロップダウン・リストからユーザー定義項目を選択します。ユーザー定義項目式が「**式**」領域に表示されている場合は、「**保存された式 (Stored Expressions)**」をクリックします。

ユーザー定義項目式を使用するには

1. ユーザー定義項目をサポートするプロセスで、「**ユーザー定義項目**」をクリックするか、「**ツール**」>「**ユーザー定義項目式**」をクリックして、「式の呼び出し/整理」ウィンドウにアクセスします。
2. ユーザー定義項目式のリストから、使用するユーザー定義項目式を選択します。

ユーザー定義項目を永続化するには

ユーザー定義項目を永続化すると、計算値を保管して後続のプロセスで使用できるように、Campaign に指示を与えることになります。これにより、Campaign が、これらの値をフローチャートのダウンストリームで再計算する必要がなくなるため、時間とリソースが節約されます。

1. ユーザー定義項目をサポートするプロセスの構成ウィンドウから、「**ユーザー定義項目**」をクリックします。

「ユーザー定義項目の作成」ウィンドウが表示されます。

2. この項目の計算値を保管して渡す場合は、「**固定する**」チェック・ボックスを選択します。

例: 永続的なユーザー定義項目

選択プロセスを、ユーザー定義項目に対する制約に基づいて ID を選択するように構成し、そのユーザー定義項目が組み込まれている選択されたレコードを出力する

ためにスナップショット・プロセスに接続することができます。ユーザー定義項目を永続的とマークする場合、計算値が選択プロセスからスナップショット・プロセスに渡されます。

永続的なユーザー定義項目の別の用途は、集約型のユーザー定義項目 (AVG や GROUPBY など) に使用するというものです。これらの集約項目は現行セル内の複数行のデータに基づいて計算されるため、これらの集約項目の値はセルの内容が変わると変更されます。永続的なユーザー定義項目では、元の計算値を保持し、その値を他のプロセスに伝えることができます。ユーザー定義項目を再計算する場合、計算値は現行セル内の残りのレコードに基づいて取得します。

例えば、2 つの選択プロセスからの入力を処理するスナップショット・プロセスなどのように、複数の入力を処理するプロセスがある場合、ダウンストリーム・プロセスは、すべての永続的なユーザー定義項目を使用できます。

永続的なユーザー定義項目が、すべての着信選択プロセスで使用可能になっているわけではない場合で、スナップショット・プロセスの出力に組み込まれている場合、そのスナップショット・プロセスは、その永続的なユーザー定義項目を持たない選択プロセスのすべての出力行の永続的なユーザー定義項目について NULL 値を表示します。

永続的なユーザー定義項目が、すべての着信選択プロセスで使用可能になっているわけではない場合で、これを使用してセグメント・プロセスを定義する場合、セグメント・プロセスでは、その永続的なユーザー定義項目を持たない選択プロセスのセグメントは空になります。

すべての選択プロセスで使用可能になっているわけではない複数の永続的なユーザー定義項目を使用する式でセグメントを定義しようとすると、セグメント・プロセスは未構成のままになります。

以下のガイドラインが永続的なユーザー定義項目 (PDF) に適用されます。

- PDF がインバウンド・セル (ベクトル) にアタッチします
- PDF がクエリー実行前に計算されます
- 以下のプロセスで複数の PDF が使用可能です。
 - スナップショット: PDF がセルに定義されていない場合、値は NULL です。単一 ID が 1 つのセルより大きい場合、セルごとに 1 行が出力されます。
 - セグメント: 複数の入力セルを選択する場合、PDF は項目別のセグメントに使用できません。PDF は、クエリーがセグメント内で使用する場合は、すべての選択済み入力セルに存在している必要があります。
- PDF は、データ内での ID 値の発生回数に関係なく、ID 値ごとに単一値 (ランダムに選択される) のみを保持します。したがって、出力にテーブル項目が含まれていない (IBM Unica ID は含まれている) 場合は、ID 値ごとのレコードは 1 つのみです。

ただし、テーブル項目に基づいてユーザー定義項目を使用する場合、出力にはテーブル項目が間接的に組み込まれます。したがって、ID 値のインスタンスごとにレコードがあります。(言い換えると、ID 値がデータ内で 7 回発生する場合、7 個のレコード出力があります。)

永続的なユーザー定義項目は、オーディエンス ID ごとに単一の値のみを保管します。この値は、使用可能な値からランダムに選択されます。つまり、非正規化データを処理する場合は、目的の動作を実現するために GROUPBY マクロ関数を使用する必要があります。

例えば、購入トランザクション・テーブルから顧客が行った単一トランザクションの最高金額を検索して、これをダウンストリーム処理の永続的なユーザー定義項目として保存するとします。以下のようなユーザー定義項目を作成（および永続的なユーザー定義項目として永続化）できます。

```
Highest_purchase_amount = groupby(CID, maxof, Purch_Amt)
```

以下のような非正規化購入トランザクション・データに対する計算結果は、以下のようになります。

CID	DATE	PURCH_AMT	HIGHEST_PURCHASE_AMOUNT
A	1/1/2007	\$200	\$300
A	3/15/2007	\$100	\$300
A	4/30/2007	\$300	\$300

ユーザー定義項目を永続化する場合、任意の値（すべて \$300）が（ランダムに）選択され、顧客 A の \$300 の値が永続化されます。

2 番目の少し不明瞭な例では、固有のモデル X のスコア設定テーブルから予測モデル・スコアを選択します。ユーザー定義項目は、以下のようになっています。

```
ModelX_score = groupby(CID, maxof, if(Model = 'X', 1, 0), Score)
```

データは、以下のとおりであるとしてします。

CID	MODEL	SCORE	MODELX_SCORE
A	A	57	80
A	B	72	80
A	X	80	80

ユーザー定義項目 ModelX_Score を永続化すると、スコア値が 80 である目的の結果が引き出されます。以下のユーザー定義項目を作成するのは、誤りです。

```
Bad_ModelX_score = if(Model = 'X', Score, NULL)
```

これは、以下のような結果になります。

CID	MODEL	SCORE	BAD_MODELX_SCORE
A	A	57	NULL
A	B	72	NULL
A	X	80	80

ユーザー定義項目 Bad_ModelX_score を永続化する場合、永続化される値は NULL または 80 です。非正規化データを処理する場合で、ユーザー定義項目の値がすべ

て同じでない場合は、そのユーザー定義項目を永続化すると、結果として任意の値が返される場合があります。例えば、`Derived_field_Score = SCORE` と定義して、これを永続化すると、顧客 A の値は 57、72、または 80 になります。目的の動作となるようにするには、`GROUPBY` マクロを顧客 ID に対して使用し、ユーザー定義項目の値がその顧客のすべてのデータで同じ になるようにする必要があります。

ユーザー変数について

`Campaign` は、ユーザー変数をサポートします。このユーザー変数は、クエリーおよび式を作成する場合にプロセス構成中に使用できます。

ユーザー変数を使用するためのガイドライン

ユーザー変数には、以下のガイドラインが適用されます。

- ユーザー変数は、ユーザー変数が定義され使用されるフローチャートに対してローカルですが、そのフローチャート内でグローバル・スコープを持ちます。
- ユーザー変数は、`UserVar.UserVarName` という構文を使用します。
- ユーザー変数には「初期値」があります。これは、ユーザー変数が「ユーザー変数」ダイアログで最初に定義されるときに割り当てられる値です。「初期値」は、フローチャートの実行を行う前に「現在の値」を設定するためだけに使用されます。これは、`Campaign` がフローチャート実行中に使用する「現在の値」です。

注: ユーザー変数の「現在の値」が設定されていない状態でプロセスまたはブランチを実行すると、`Campaign` はこのユーザー変数を解決できなくなります。

`Campaign` は、フローチャートを実行する前に、ユーザー変数の「現在の値」を「初期値」に設定するだけで、その他の処理は実行しません。

- ユーザー変数の「現在の値」は、選択プロセスの「ユーザー定義項目」ウィンドウで変更できます。
- ユーザー変数は、定数または式 (`UserVar.myVar = Avg(UserTable.Age)` など) に設定できます。

注: 複数の値 (テーブル内のレコードごとに 1 つの値を返す `UserTable.Age+3` など) を返す式を使用する場合、ユーザー変数は最初に返される値に設定されます。

- ユーザー変数を SQL ステートメント内で使用する場合は、ユーザー変数を引用符 (単一引用符でも二重引用符でも) で囲まないでください。
- オブジェクト名をデータベースに渡す場合 (例えば、フローチャート名を含むユーザー変数を使用する場合)、特定のデータベースでサポートされている文字だけでオブジェクト名が構成されていることを確認する必要があります。そうしないと、データベース・エラーを受け取ります。
- ユーザー変数の値は、プロセス実行時に渡すことができます。
- ユーザー変数は、アウトバウンド・トリガーでサポートされています。
- ユーザー変数は、カスタム・マクロでの使用がサポートされています。

ユーザー変数を作成するには

1. 「編集」モードのフローチャートで、「オプション」アイコンをクリックして「ユーザー変数」を選択します。
「ユーザー変数」ダイアログが表示されます。
2. 「変数名」列で、<項目を追加するにはここをクリック> ホット・スポットをクリックして、新規ユーザー変数の名前を入力します。
3. 「データ型」列で、ドロップダウン・リストからデータ型を選択します。データ型を選択しない場合、「OK」をクリックすると、アプリケーションによって「なし」が選択されます。

データ型を「なし」にすると、予測不能な結果を生じるおそれがあります。この発生を回避するために、正しいデータ型を指定します。

4. 「初期値」列に、ユーザー変数の初期 (開始) 値を入力します。また、列内でクリックすると使用可能になる省略符号ボタンをクリックして、選択可能な値の項目のプロファイルを作成することもできます。
5. 「現在の値」列に、ユーザー変数の現行値を入力します。また、列内でクリックすると使用可能になる省略符号ボタンをクリックして、選択可能な値の項目のプロファイルを作成することもできます。
6. 作成するユーザー変数ごとに、これらのステップを繰り返します。
7. ユーザー変数を定義し終わったら、「OK」をクリックします。

アプリケーションによって、これらの新規ユーザー変数が保管されます。これらの変数は、後でプロセスの構成時にアクセスできます。

フローチャート実行が行われると、各ユーザー変数の「現在の値」がユーザー変数ごとに「現在の値」セクション内に表示されます。現行値が初期値と異なる場合、「デフォルトに戻す」をクリックして、初期値を復元することができます。

注: ユーザー変数の「現在の値」が選択プロセスで再定義される場合、「現在の値」を「初期値」に手動でリセットしても、フローチャート、ブランチ、またはプロセスの実行中のユーザー変数の値には影響を与えません。

カスタム・マクロについて

カスタム・マクロは、IBM Unica 式、未加工 SQL、または値を含む未加工 SQL のいずれかを使用して作成するクエリーです。カスタム・マクロは、変数もサポートしているため、カスタム・マクロの設計により置換される、保存されたクエリーよりもはるかに強力です。

カスタム・マクロを保存して、フローチャート内でのプロセスの構成や、ユーザー定義項目の定義に使用できます。

未加工 SQL がサポートされることにより、アプリケーション・サーバーで未加工データをフィルタリングしたり操作したりするのではなく、複雑なトランザクションをデータベースで実行できるようになるため、パフォーマンスが向上します。

Campaign は、以下の 3 つのタイプのカスタム・マクロをサポートしています。これらのマクロでサポートされる変数の数に制限はありません。

- IBM Unica 式を使用するカスタム・マクロ
- 未加工 SQL を使用するカスタム・マクロ
- 未加工 SQL を使用し、指定した値が含まれているカスタム・マクロ

重要: 技術的な知識を持たないユーザーがカスタム・マクロを使用できるため、カスタム・マクロを作成する場合は、カスタム・マクロがどのように機能するのかを注意深く説明したり、類似したマクロを特別なフォルダーにまとめたりして、ユーザーがカスタム・マクロを誤って使用したり、予期しないデータを取り出したりしないようにする必要があります。

カスタム・マクロを作成するには

1. 「編集」モードのフローチャート・ページで、「オプション」アイコンをクリックして「カスタム・マクロ」を選択します。

「カスタム・マクロ」ダイアログが表示され、既存のカスタム・マクロが表示されます。

2. 「新規項目」をクリックします。
3. 「保存先」ドロップダウン・リストから、カスタム・マクロの保存先のフォルダー・ロケーションを選択します。
4. 「名前」項目で、カスタム・マクロを参照できるように、以下の構文を使用してカスタム・マクロの名前と宣言を入力します。

MacroName(var1,var2,...)

表現する必要があるのは、カスタム・マクロの名前 (固有でなければならない) と変数のリストです。

「MacroName」は英数字でなければなりません。MacroName 文字列にスペースを使用することはできませんが、下線 () は使用できます。

注: カスタム・マクロと組み込みマクロが同じ名前の場合は、カスタム・マクロが優先します。ベスト・プラクティスとして、混乱を避けるために、カスタム・マクロにはオペレーターの名前や Campaign の組み込みマクロと同じ名前を付けないでください。新しいカスタム・マクロを常に使用し、組み込みマクロをアクセス不能にする場合は例外です。

重要: 変数名は、「式」ウィンドウのカスタム・マクロ定義の変数名と同じでなければならない、括弧で囲んだコンマ区切りリストとして表現する必要があります。

5. 「セキュリティ・ポリシー」ドロップダウン・リストから、新しいカスタム・マクロのセキュリティ・ポリシーを選択します。
6. オプションで、「説明」項目を使用して新しいカスタム・マクロの説明を入力し、カスタム・マクロの目的と各変数が表す内容を明確にします。
7. 「式の分類」ドロップダウン・リストから、作成するカスタム・マクロの種類を選択します。
 - 「SQL(ID)」を選択する場合は、「データベース」項目のドロップダウン・リストからデータベースを選択する必要もあります。

- 「SQL(ID+ データ)」を選択する場合は、「データベース」項目のドロップダウン・リストからデータベースを選択し、「値タイプ」ドロップダウン・リストから項目の値タイプを選択する必要があります。ここで選択する値タイプが正確であることを確認してください。そうでないと、後でこのクエリーのプロファイルを作成しようとする、と、「タイプが一致しない」という主旨のエラーが発生します。
 - 値タイプとして「テキスト」を選択した場合は、「データ長 (バイト数)」項目に値タイプのデータ長をバイト単位で指定します。このバイト単位のデータ長の情報は、データベースから取得する必要があります。データベースへのアクセス権限がない場合や、この情報を取得できない場合は、256 (最大データ長) と入力します。
8. 「式」項目内をクリックして、「選択条件の指定」ウィンドウを開きます。
 9. クエリー式を作成します。使用できる変数の数に制限はありません。変数の構文は英数字で、変数は不等号括弧 (<>) で囲む必要があります。オペランド (値と文字列) と演算子には、変数を使用できます。

重要: フローチャート・ユーザー変数をカスタム・マクロ定義に使用しないでください。カスタム・マクロはグローバルですが、フローチャート・ユーザー変数はグローバルでないためです。

例: ID と値を選択する未加工 SQL を使用するカスタム・マクロ

10. 「保存」をクリックして、カスタム・マクロを保存します。

カスタム・マクロが保管され、名前によってアクセスできるようになります。

11. 「閉じる」をクリックして、「カスタム・マクロ」ダイアログを終了します。

カスタム・マクロを使用するためのガイドライン

カスタム・マクロを作成または使用するときは、以下のガイドラインに留意してください。

- カスタム・マクロの名前は英数字でなければなりません。名前文字列にスペースを使用することはできませんが、下線 (`_`) は使用できます。
- データ・ソースがプロパティ `ENABLE_SELECT_SORT_BY = TRUE` で構成されている場合は、返されるレコードを作業を行っているオーディエンス・レベルのオーディエンス・キー項目によってソートするために、「**ORDER BY**」節を指定して未加工 SQL カスタム・マクロを作成する必要があります。そうしないと、ソート順が期待どおりでない場合は、カスタム・マクロをスナップショット・プロセスのユーザー定義項目で使用するとエラーが生成されます。
- カスタム・マクロから返された値を比較しない場合、値が数値の場合は、ゼロ以外の値は `TRUE` として扱われ (したがって、これらの値に関連付けられている ID が選択される)、ゼロの値は `FALSE` として扱われます。文字列値は常に `FALSE` として扱われます。
- 未加工 SQL を使用するカスタム・マクロを作成する場合は、一時テーブルを使用すると、処理する必要があるデータ量にスコープを設定することによって未加工 SQL のパフォーマンスが大幅に高速化される場合があります。

カスタム・マクロの基礎ロジックで一時テーブルを使用する場合は、ロジックで障害が起こらないように一時テーブルがデータベースに保存されます。

ただし、カスタム・マクロを最上位 `SELECT` で使用する場合は、一時テーブルをデータベースに保存するために Campaign が使用する履歴がないため、ロジックは失敗します。

したがって、未加工 SQL を使用するカスタム・マクロを作成する場合は、同じカスタム・マクロの 2 つのバージョンを作成する必要がある場合があります。1 つは一時テーブル・トークンを使用するカスタム・マクロで、もう 1 つは一時テーブル・トークンを使用しないカスタム・マクロです。

一時テーブル・トークンを使用しないカスタム・マクロは、ツリーの最上位 (例えば、最初の `SELECT`) で使用できます。一時テーブル・トークンを使用するカスタム・マクロは、利用する一時テーブルがあれば、ツリーの最上位以外の場所で使用できます。

- カスタム・マクロから返される値を結合する場合、非正規化データに対してクエリーを実行すると、期待どおりの動作ではない自己結合が発生する可能性があります。

例えば、値を返す未加工 SQL をベースにしたカスタム・マクロを使用し、(例えば、スナップショット・プロセスで) カスタム・マクロと、カスタム・マクロのベースになっているテーブルの別の項目を出力する場合、Campaign は、そのテーブルに対して自己結合を実行します。テーブルが正規化されていない場合は、デカルト積になります (つまり、表示されるレコード数が予想より多くなります)。

- カスタム・マクロの定義は現行プロセスにコピーされないため、カスタム・マクロは自動的に参照になります。

実行時に、カスタム・マクロは **UA_CustomMacros** システム・テーブル内 (ここに定義が保管されます) でカスタム・マクロの定義を検索することによって解決され、その後、使用または実行されます。

- 保存されたクエリーとは異なり、カスタム・マクロの名前は固有で、フォルダー・パスとは無関係でなければなりません。5.0 より前のリリースでは、A という名前の保存されたクエリーを、例えば F1 と F2 の両方のフォルダーに置くことが可能でした。

Campaign は、旧リリースの保存されたクエリーをサポートします。ただし、非固有の保存されたクエリーへの参照では、次の古い構文を使用する必要があります。

storedquery(<クエリー名>)

- カスタム・マクロ内のユーザー変数を解決する場合、**Campaign** は、構文の検査時にユーザー変数の現在の値を使用します。現在の値がブランクのままの場合、**Campaign** はエラーを生成します。
- 一時テーブル・トークンは、現行プロセスが使用できる一時テーブル内の一連のオーディエンス ID によってデータベースからプルダウンされるデータ量にスコープを設定する、パフォーマンス最適化詳細機能として提供されています。この ID の一時テーブル・リストは、現行セル内の ID のスーパーセットである可能性があります。したがって、一時テーブルに対して実行される集約関数 (平均や合計など) はサポートされず、間違った結果を生成する可能性があります。
- 複数の異なるデータベースでカスタム・マクロを使用する場合、未加工 SQL は特定のデータベースに固有である可能性があるため、未加工 SQL ではなく IBM Unica 式を使用することをお勧めします。
- カスタム・マクロに未加工 SQL や別のカスタム・マクロが含まれている場合は、未加工 SQL が実行される前にカスタム・マクロが解決され、実行され、値が返されます。
- **Campaign** は、コンマをパラメーターの区切り記号として扱います。コンマをパラメーターのリテラル文字として使用する場合は、次の例のように大括弧 ({}) でテキストを囲みます。

```
TestCM( {STRING_CONCAT(UserVar.Test1, UserVar.Test2) } )
```

- **Campaign** は、未加工 SQL コードを使用するカスタム・マクロのパラメーターで簡単な置換をサポートしています。例えば、フローチャートで、次のクエリーを含む選択プロセス・ボックスを設定するとします。

```
exec dbms_stats.gather_table_stats(tabname=> <temptable>,ownname=>
'autodcc')
```

この場合、**Campaign** は、<temptable> トークンを実際の一時テーブルに正常に置換します。テーブル名は、単一引用符で囲む必要があることに注意してください。

以下の表は、**Campaign** が、クエリーおよびユーザー定義項目でカスタム・マクロを扱う方法を示しています。

クエリーおよびユーザー定義項目でのカスタム・マクロ (選択、セグメント、およびオーディエンス・プロセス)

カスタム・マクロの種類	使用方法
未加工 SQL: ID	別個のクエリーとして実行します。ID リストが他の結果とマージされます。 カスタム・マクロに他のカスタム・マクロと未加工 SQL が含まれている場合は、カスタム・マクロが解決され、実行されてから、未加工 SQL が実行されます。
未加工 SQL: ID + 値	返される値が式または比較で使用されることが期待されます。 この方法で値が使用されない場合、Campaign は、ゼロ以外の値を ID 選択用に TRUE として扱い、ゼロの値と文字列を FALSE として扱います。
IBM Unica 式	式が解決され、構文チェックが実行されます。テーブルごとに 1 つのクエリーがサポートされ、ID が突き合わされてマージされます。

未加工 SQL クエリー (選択、セグメント、およびオーディエンス・プロセス)

カスタム・マクロの種類	使用方法
未加工 SQL: ID	カスタム・マクロが解決されてから、クエリーが実行されます。
未加工 SQL: ID + 値	サポートされていません。
IBM Unica 式	式は解決されますが、構文チェックは実行されません。式が間違っている場合は、実行時にデータベース・サーバーによって検出されます。

カスタム・マクロを管理するには

カスタム・マクロを編成するためのフォルダー構造を作成できます。その後、この構造内で、あるフォルダーから別のフォルダーにカスタム・マクロを移動できます。

1. 「編集」モードのフローチャート・ページで、「オプション」アイコンをクリックして「カスタム・マクロ」を選択します。

「カスタム・マクロ」ダイアログが表示されます。

2. 「項目リスト」をナビゲートして、編集するマクロを選択します。

「詳細情報」領域に、選択したマクロの詳細情報が表示されます。

3. 「編集/移動」をクリックして、選択したマクロを編集または移動します。

「カスタム・マクロの編集/移動 (Edit/Move Custom Macros)」ダイアログが開きます。

4. マクロの名前を変更し、説明を編集し、マクロを保管するフォルダー/ロケーションを変更するか、「編集」をクリックして式を編集できます。
5. 「保存」をクリックして、変更を保存します。
6. 「閉じる」をクリックして、「カスタム・マクロ」ダイアログを終了します。

テンプレートについて

テンプレートは、フローチャートから選択されて保存されたプロセスのグループです。テンプレートでは、1 つ以上のプロセスを 1 回のみ設計および構成することができ、それらのプロセスをテンプレート・ライブラリーに保存できます。テンプレートは、プロセス構成およびテーブル・マッピングを保存し、任意のセッションまたはキャンペーンで使用できます。

テンプレートをテンプレート・ライブラリーにコピーするには

テンプレートをテンプレート・ライブラリーにコピーすることで、テンプレートを追加できます。

1. 「編集」モードのフローチャートで、テンプレートとして保存するプロセスを選択します。 **Shift** キーを押しながらクリックすることにより、また、**Ctrl** キーを押しながらクリックすることにより、複数のプロセスを選択できます。
2. コピーするプロセスを右クリックして、「テンプレート・ライブラリーへのコピー」を選択します。

「テンプレートの保存」ウィンドウが表示されます。

3. テンプレートの名前を「名前」項目に入力します。

名前文字列にスペースを使用することはできません。テンプレートは名前で識別され、この名前はテンプレートが保管されているフォルダー内で固有でなければなりません。

4. (オプション) フリー・フォームのテキスト記述を「説明」項目に入力します。
5. (オプション) テンプレートを配置するフォルダーを選択します。リストから既存のフォルダーを選択するか、「新規フォルダー」を選択して新しいフォルダーを作成します。現在選択されているフォルダーが、「項目リスト (Item List)」の上にある「保存先」項目の後に表示されます。新しいフォルダーを作成するには、「新規フォルダー」をクリックします。テンプレートを編成および保管するために作成できるフォルダーの数に制限はありません (階層構造のネスト・フォルダーを含む)。
6. 「保存」をクリックします。

テンプレート・ライブラリーからテンプレートを貼り付けるには

テンプレート・ライブラリーから、作成中のフローチャートにテンプレートを貼り付けることができます。

1. 「編集」モードのフローチャート・ページで、「オプション」アイコンをクリックして「テンプレート」を選択します。

「テンプレート」ダイアログが表示されます。

2. 「項目」リストからテンプレートを選択します。
3. 「テンプレートの貼り付け」をクリックします。

選択したテンプレートがフローチャート・ワークスペースに貼り付けられます。

注: 挿入されたプロセスは、既にフローチャート内にある他のプロセスの上に表示される場合があります。挿入されたすべてのプロセスは、グループとして移動しやすいように、最初から選択された状態になります。

他のセッションまたはキャンペーンは、テンプレート・ライブラリーを介してテンプレートにアクセスできます。さまざまなテーブル・マッピングを持つフローチャートにテンプレートを貼り付ける場合、後続のマッピングは拡大されますが、テーブル名が同じでない限り、新しいマッピングによって置き換えられることはありません。

テンプレートを管理するには

このコマンドによって、新規フォルダーを作成し、テンプレートを編集、移動、および削除できます。

1. 「編集」モードのフローチャート・ページで、「オプション」アイコンをクリックして「テンプレート」を選択します。

「テンプレート」ダイアログが表示されます。

2. 「項目リスト」から、編集または移動するテンプレートを選択します。
3. 「編集/移動」をクリックします。

「テンプレートの編集/移動 (Edit/Move Stored Templates)」ダイアログが開きます。

4. 「保存先」項目で、テンプレートの移動先のフォルダー/ロケーションを指定します。
5. テンプレートの名前を変更したり、テンプレートに関連付けられている説明を編集したりすることもできます。
6. 「保存」をクリックして、変更を保存します。
7. 「閉じる」をクリックして、「テンプレート」ウィンドウを終了します。

テーブル・カタログについて

テーブル・カタログは、マップされたユーザー・テーブルの集合です。テーブル・カタログには、各フローチャートで再利用するための、ユーザー・テーブル・マッピング・メタデータ情報すべてが保管されます。テーブル・カタログは、既定では .cat 拡張子を使用してプロプラエタリー・バイナリー・フォーマットで保管されます。

テーブル・カタログの作成および作業については、「*Campaign 管理者ガイド*」を参照してください。

テーブル・カタログにアクセスするには

「編集」モードのフローチャート・ページで、「オプション」アイコンをクリックして「テーブル・カタログ」を選択します。

「テーブル・カタログ」ダイアログが表示されます。

注: 管理者権限を持っている場合は、「キャンペーン設定」ページから保管されたカタログにアクセスすることもできます。詳しくは、「Campaign 管理者ガイド」を参照してください。

テーブル・カタログを編集するには

1. 「編集」モードのフローチャート・ページで、「オプション」アイコンをクリックして「テーブル・カタログ」を選択します。

「テーブル・カタログ」ダイアログが表示されます。

2. 「項目リスト」で目的のテーブル・カタログを選択します。

「詳細情報」領域に、選択したテーブル・カタログの詳細情報 (テーブル・カタログ名とファイル・パスを含む) が表示されます。

3. 「編集/移動」をクリックします。
4. テーブル・カタログの名前を変更し、テーブル・カタログの説明を編集し、テーブル・カタログを保管するフォルダー/ロケーションを変更することができます。
5. 「保存」をクリックします。
6. 「テーブル・カタログ」ウィンドウで「閉じる」をクリックします。

テーブル・カタログを削除するには

重要: テーブル・カタログの削除には、Campaign インターフェースだけを使用してください。テーブルを削除した場合やファイル・システム内のテーブル・カタログを直接変更した場合、Campaign はシステム内のデータ安全性を保証できません。

1. 「編集」モードのフローチャート・ページで、「オプション」アイコンをクリックして「テーブル・カタログ」を選択します。

「テーブル・カタログ」ウィンドウが表示されます。

2. 「項目リスト」で目的のテーブル・カタログを選択します。

「詳細情報」領域に、選択したテーブル・カタログの詳細情報 (テーブル・カタログ名とファイル・パスを含む) が表示されます。

3. 「削除」をクリックします。

選択したテーブル・カタログの削除を確認するよう求める確認メッセージが表示されます。

4. 「OK」をクリックします。
5. 「テーブル・カタログ」ウィンドウで「閉じる」をクリックします。

第 10 章 セッション

キャンペーンと同様、セッションは個々のフローチャートで構成されています。ただし、セッションでは、すべてのキャンペーンでグローバルに使用可能な永続的なデータ構造（戦略的セグメント、保管されたディメンション階層、キューブなど）を作成できます。セッションを使用して、以下のフローチャートを作成できます。

- キャンペーン間で必要なデータを変換する
- PredictiveInsight 入力ファイルを作成する
- 戦略的セグメントを収容する

注：フローチャートの設計時は、プロセス間で循環依存関係を作成することがないように注意してください。例えば、フローチャートには、CreateSeg プロセスへの入力を提供する選択プロセスがあります。選択プロセスが出力を提供するのと同じ CreateSeg プロセスによって作成されるセグメントを、選択プロセスで入力として選択すると、循環依存関係が作成されます。この状態は、このプロセスを実行しようとするとエラーになります。

セッションの操作

セッションでは、以下のタスクを実行できます。

- 『セッションを作成するには』
- 231 ページの『セッションの編成について』
- 228 ページの『セッションを表示するには』
- 228 ページの『セッションのサマリー詳細を編集するには』
- 229 ページの『セッション・フローチャートを編集するには』
- 229 ページの『セッションのコピーについて』
- 229 ページの『セッションの実行について』
- 229 ページの『セッションを移動するには』
- 230 ページの『セッションを削除するには』

注：セッションで作業するには、適切な権限が必要です。権限については、「Campaign 管理者ガイド」を参照してください。

セッションを作成するには

1. 「キャンペーン」>「セッション」を選択します。

「セッション一覧」ページに、会社のセッションを編成するために使用されるフォルダー構造が表示されます。「セッション一覧」ページ内でサブフォルダーを以前に開いている場合は、そのサブフォルダーが表示されます。

2. セッションの追加先となるフォルダーの内容が表示されるまで、フォルダー構造をナビゲートします。
3. 「セッションの追加」アイコンをクリックします。

「新規セッション」ページが表示されます。

4. セッションの名前、セキュリティー・ポリシー、および説明を入力します。

注: セッションの名前には、文字に関する特定の制限があります。詳しくは、269 ページの『IBM Unica Campaign オブジェクト名での特殊文字』を参照してください。

5. 「変更の保存」をクリックします。

注: 「保存とフローチャートの追加」をクリックして、セッションのフローチャートの作成をすぐに開始することもできます。

セッションを表示するには

1. 「キャンペーン」 > 「セッション」を選択します。

「セッション一覧」ページが表示されます。

2. 表示するセッションの名前をクリックして、セッションの「サマリー」タブを開きます。

または

3. 表示するセッションの名前の横にある「タブの表示」アイコンをクリックします。

「サマリー」とセッション内のフローチャートの名前がコンテキスト・メニューに表示されます。

4. 表示するセッション・タブを選択します。

選択したタブにセッションが表示されます。

セッションのサマリー詳細を編集するには

1. 「キャンペーン」 > 「セッション」を選択します。

「セッション一覧」ページが表示されます。

2. サマリー詳細を編集するセッションの名前をクリックします。

「サマリー」タブにセッションが表示されます。

3. 「サマリーの編集」アイコンをクリックします。
4. 「サマリー」タブで、必要な編集を行います。

注: セッションの名前には、文字に関する特定の制限があります。詳しくは、269 ページの『IBM Unica Campaign オブジェクト名での特殊文字』を参照してください。

5. 変更が完了したら、「変更の保存」をクリックします。

変更内容が保存され、セッションが閉じます。

セッション・フローチャートを編集するには

1. 「キャンペーン」>「セッション」を選択します。

「セッション一覧」ページが表示されます。

2. フローチャートを編集するセッションの名前の横にある「タブを編集」アイコンをクリックします。
3. コンテキスト・メニューから、編集するフローチャートの名前をクリックします。

「フローチャート」ページが「読み取り専用 (Read Only)」モードで表示されず。

4. 「編集」アイコンをクリックして、フローチャートを「編集」モードで開きます。
5. フローチャートに対して必要な変更を行います。
6. 変更が完了したら、「保存」または「保存して終了」をクリックします。

セッション・フローチャートのプロパティを編集するには

1. フローチャートを編集用に開きます。
2. フローチャート・ツールバーの「プロパティ」をクリックします。

「フローチャート・プロパティの編集」ページが表示されます。

3. フローチャートの名前または説明を変更します。

注: フローチャートの名前には、文字に関する特定の制限があります。269 ページの『IBM Unica Campaign オブジェクト名での特殊文字』を参照してください。

4. 「変更の保存」をクリックします。

変更したフローチャート詳細が保存されます。

セッションのコピーについて

セッションではなく、セッション内のフローチャートをコピーします。

セッションの実行について

セッションを実行するには、セッションの各フローチャートを実行する必要があります。

セッションを移動するには

組織上の目的で、セッションをフォルダー間で移動できます。

注: 移動しようとしているセッションのフローチャートがユーザーによって編集されている場合は、セッションを移動すると、フローチャート全体が失われる可能性があります。セッションを移動する場合は、編集用に開いているセッション内のフローチャートがないことを確認してください。

1. 「キャンペーン」>「セッション」を選択します。

「セッション一覧」ページが表示されます。

2. 移動するセッションが入っているフォルダーを開きます。
3. 移動するセッションの横にあるチェック・ボックスを選択します。複数のセッションを選択して同じ場所に一度に移動できます。
4. 「移動」アイコンをクリックします。

「アイテムの移動」ウィンドウが表示されます。

5. セッションの移動先のフォルダーをクリックします。

フォルダーの横にある + 記号をクリックしてフォルダーを開き、リストをナビゲートします。

6. 「このロケーションを受け入れる」をクリックします。

注: フォルダーをダブルクリックすると、場所の選択と受け入れを 1 回の手順で行うこともできます。

セッションが宛先フォルダーに移動します。

セッションの削除について

セッションを削除する場合は、セッションおよびすべてのフローチャート・ファイルが削除されます。再使用する目的で保管しておきたいセッションの一部がある場合、それらを保管オブジェクトとして保存できます。詳しくは、211 ページの『ユーザー定義項目について』を参照してください。

重要: 関連付けられているコンタクトまたはレスポンス履歴レコードを持つセッションを削除すると、すべての対応するコンタクトおよびレスポンス履歴レコードが削除されます。関連付けられているコンタクトおよびレスポンス履歴を保持する必要がある場合は、セッションを削除しないでください。

セッションを削除するには

1. 「キャンペーン」>「セッション」を選択します。

「セッション一覧」ページが表示されます。

2. 削除するセッションが入っているフォルダーを開きます。

フォルダー名をクリックしてフォルダーを開くか、「セッション一覧」をクリックして「セッション一覧」ページを表示するか、「親フォルダー」をクリックして現在開いているフォルダーを開くことによって、フォルダー構造をナビゲートします。

3. 削除するセッションの横にあるチェック・ボックスを選択します。複数のセッションを選択して一度に削除できます。
4. 「選択項目の削除」アイコンをクリックします。

注: 関連付けられているコンタクトまたはレスポンス履歴レコードを持つセッションを削除しようとする、すべての対応するコンタクトおよびレスポンス履歴レコードが削除されることが警告メッセージで示されます。対応するコンタクト履歴およびレスポンス履歴を保持する必要がある場合は、「キャンセル」をクリックします。

5. 確認ウィンドウで「OK」をクリックします。

セッションが削除されます。

セッションの編成について

フォルダーまたは一連のフォルダーを作成することによってセッションを編成できます。その後、作成したフォルダー構造内で、あるフォルダーから別のフォルダーにセッションを移動できます。

フォルダーを追加、移動、および削除して、セッションを編成できます。フォルダーの名前および説明を編集することもできます。

セッション・フォルダーを追加するには

1. 「キャンペーン」>「セッション」を選択します。

「セッション一覧」ページが表示されます。

2. サブフォルダーの追加先のフォルダーをクリックして「サブフォルダーの追加」をクリックするか、単に「サブフォルダーの追加」をクリックしてフォルダーを最上位に追加します。

「サブフォルダーの追加」ページが表示されます。

3. フォルダーの名前、セキュリティ・ポリシー、および説明を入力します。

注: フォルダーの名前には、文字に関する特定の制限があります。詳しくは、269 ページの『IBM Unica Campaign オブジェクト名での特殊文字』を参照してください。

4. 「変更の保存」をクリックします。

「セッション一覧」ページが表示されます。作成した新しいフォルダーまたはサブフォルダーが表示されます。

セッション・フォルダーの名前および説明を編集するには

1. 「キャンペーン」>「セッション」を選択します。

「セッション一覧」ページが表示されます。

2. 名前を変更するフォルダーをクリックします。
3. 「名前の変更」アイコンをクリックします。

「サブフォルダー名の変更」ページが表示されます。

4. フォルダーの名前と説明を編集します。

注: フォルダーの名前には、文字に関する特定の制限があります。詳しくは、269 ページの『IBM Unica Campaign オブジェクト名での特殊文字』を参照してください。

5. 「変更の保存」をクリックします。

「セッション一覧」ページが表示されます。フォルダーまたはサブフォルダーの名前が変更されます。

セッション・フォルダーを移動するには

重要: 移動しようとしているセッションのフローチャートがユーザーによって編集されている場合は、セッションを移動すると、フローチャートの結果またはフローチャート全体が失われる可能性があります。セッションを移動する場合は、編集用に開いているセッション内のフローチャートがないことを確認してください。

1. 「キャンペーン」>「セッション」を選択します。

「セッション一覧」ページが表示されます。

2. 移動するサブフォルダーが入っているフォルダーをクリックします。
3. 移動するフォルダーの横にあるチェック・ボックスを選択します。複数のフォルダーを選択して同じ場所に一度に移動できます。
4. 「移動」アイコンをクリックします。

「アイテムの移動」ウィンドウが表示されます。

5. サブフォルダーの移動先のフォルダーをクリックします。

フォルダーの横にある + 記号をクリックしてフォルダーを開き、リストをナビゲートします。

6. 「このロケーションを受け入れる」をクリックします。

注: フォルダーをダブルクリックすると、場所の選択と受け入れを 1 回の手順で行うこともできます。

サブフォルダーと、そのすべての内容が宛先フォルダーに移動します。

セッション・フォルダーを削除するには

フォルダーを削除するには、事前にフォルダーの内容を移動または削除する必要があります。

注: フォルダーを削除するために必要な権限を持っている場合、Campaign で、そのフォルダー内のサブフォルダーを削除することもできます。

1. 「キャンペーン」>「セッション」を選択します。

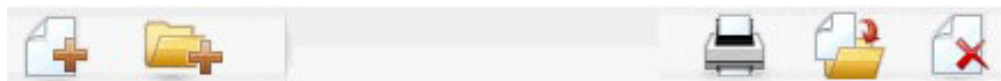
「セッション一覧」ページが表示されます。

2. 削除するサブフォルダーが入っているフォルダーを開きます。
3. 削除するフォルダーの横にあるチェック・ボックスを選択します。複数のフォルダーを選択して一度に削除できます。
4. 「選択項目の削除」アイコンをクリックします。
5. 確認ウィンドウで「OK」をクリックします。

フォルダーと、下位のすべての空のサブフォルダーが削除されます。

「セッション一覧」ページのアイコン

「セッション一覧」ページでは、以下のアイコンが使用されます。



以下の表では、左側のアイコンから右側のアイコンへの順番で説明します。

注: Campaign インターフェースの多くのアイコンは、権限が必要な機能に関連付けられています。詳しくは、「Marketing Platform 管理者ガイド」を参照してください。以下の「セッションの追加」および「サブフォルダーの追加」アイコンは、適切な権限がなければ表示されません。

アイコン名	説明
セッションの追加	新規セッションを追加する場合にクリックします。
サブフォルダーの追加	新規セッション・サブフォルダーを追加する場合にクリックします。
項目の印刷	各セッションの横にあるチェック・ボックスをクリックして1つ以上のセッションを選択してから、このアイコンをクリックすると、選択したセッションが印刷されます。
移動	各セッションの横にあるチェック・ボックスをクリックして1つ以上のセッションを選択してから、このアイコンをクリックすると、選択したセッションの移動先が指定されます。
選択項目の削除	各項目の横にあるチェック・ボックスをクリックして1つ以上のセッションを選択してから、このアイコンをクリックすると、選択したセッションが削除されます。

戦略的セグメントについて

戦略的セグメントは、ID のグローバル永続リストです。戦略的セグメントは、すべてのキャンペーンでグローバルに使用できるよう、通常は Campaign 管理者がセッション・フローチャートでセグメント化プロセスを使用して作成するセグメントに過ぎません。

Campaign は複数の戦略的セグメントをサポートし、それぞれの戦略的セグメントおよびオーディエンス・レベル用に作成される ID リストは Campaign システム・テーブルに保管されます。1つのキャンペーン内で関連付けることができる戦略的セグメントの数に制限はありません。

戦略的セグメントは、キューブで使用されることが多いです。キューブは、どの ID リストからでも作成できますが、戦略的セグメントをベースにすれば、より強力なものになります。戦略的セグメントをベースにしたキューブは、グローバルであり、さまざまなセグメント・レポートによって分析可能であるためです。

戦略的セグメントは、グローバル抑制セグメントとして使用できます。グローバル抑制セグメントは、特定のオーディエンス・レベルに対して、フローチャート内のセルから自動的に除外される ID のリストを定義します。

戦略的セグメントは、オプションで 1 つ以上の IBM Unica データ・ソースを指定できます。このデータ・ソースには、戦略的セグメントがキャッシュされます(つまり、戦略的セグメントを使用するフローチャートごとに戦略的セグメント ID のアップロードが必要にならないようにデータベースに保管されます)。このようにすると、戦略的セグメントを使用する際のパフォーマンスを大幅に向上させることができます。

キャッシュされた戦略的セグメントは、TempTablePrefix 構成パラメーターが割り当てられる一時テーブルに保管されます。

注: 戦略的セグメントを処理するには、適切な権限が必要です。権限については、「Campaign 管理者ガイド」を参照してください。

戦略的セグメントのパフォーマンスの向上

デフォルトで、セグメント化プロセスは、アプリケーション・サーバー上にセグメント bin ファイルを作成します。これは、大規模な戦略的セグメントの場合は、完了するまでに長時間かかる場合があります。Campaign がバイナリー・ファイルを更新すると、行を除去してから、キャッシュ・テーブルに行を再度挿入します。ファイル全体がソート用に再書き込みされます。非常に大規模な戦略的セグメントの場合(例えば、4 億個の ID が入っている場合)、大部分の ID が変更されていないとしても、ファイル全体の再書き込みに長い時間がかかります。

パフォーマンスを向上させるために、「構成」ページで

「doNotCreateServerBinFile」プロパティを使用して、戦略的セグメントが、アプリケーション・サーバー上に bin ファイルを作成するのではなく、データ・ソース内に一時テーブルを作成するように指定できます。このプロパティを「TRUE」に設定する場合、セグメント化プロセスの構成で、少なくとも 1 つのデータ・ソースを指定する必要があります。

さらに、インデックスの作成や統計の生成などのパフォーマンス最適化は、キャッシュ・セグメント・テーブルには適用できませんが、セグメント一時テーブルと一緒に使用できます。「構成」ページのPostSegmentTableCreateRunScript、SegmentTablePostExecuteSQL、および SuffixOnSegmentTableCreation プロパティは、これらのパフォーマンス最適化をサポートしています。

「構成」ページのプロパティについて詳しくは、「Campaign 管理者ガイド」を参照してください。

戦略的セグメントを作成するための前提条件

戦略的セグメントを作成する前に、以下を行う必要があります。

- 戦略的セグメントを編成する方法、使用するフォルダー階層および命名規則を決定する。
- 自分にとって確実に重要な戦略的セグメントを決定する。
- 戦略的セグメントの背後のロジックを決定する。

- さまざまな戦略的セグメント間の関係を識別する。
- 戦略的セグメントに適したオーディエンス・レベルを識別する。
- 戦略的セグメントを更新する頻度を決定する。
- 各戦略的セグメントで定義する詳細のレベルを決定する。例えば、1 つのセグメントにすべての抑制を入れる必要があるかなど。
- 戦略的セグメント履歴をアーカイブ・フォルダーに保持するかどうかを決定する。
- 作成する戦略的セグメントのサイズと、パフォーマンスに与える潜在的な影響を考慮する。 234 ページの『戦略的セグメントのパフォーマンスの向上』を参照してください。

戦略的セグメントを作成するには

注: 戦略的セグメントを処理するには、適切な権限が必要です。権限については、「Campaign 管理者ガイド」を参照してください。

セグメント化プロセスが運用モードで正常に実行された場合のみ、戦略的セグメントが作成され、選択できるようになります。セグメント化プロセスを構成するだけでは、十分ではありません。このプロセスをテスト・モードで実行しても、戦略的セグメントは作成されず、既存の戦略的セグメントが更新されることもありません。

1. セッションを作成するか、既存のセッションを編集用に開きます。

注: セグメントの名前には、文字に関する特定の制限があります。詳しくは、269 ページの『IBM Unica Campaign オブジェクト名での特殊文字』を参照してください。

2. 最終出力プロセスがセグメント化プロセスであるフローチャートを作成します。
3. フローチャートの作成が完了したら、「保存して戻る」をクリックします。

フローチャートが保存されます。戦略的セグメントが「セグメント一覧」ページにリストされ、すべてのキャンペーンで使用できるようになります。

例: 戦略的セグメントを作成するセッション・フローチャート

Campaign のセッション領域のフローチャートで、2 つの選択プロセスを追加します。1 つは、データマート内のマップされたテーブルの特定の項目からすべてのレコードを選択するプロセスで、もう 1 つはオプトアウトとして分類されているために全体の ID リストから削除する必要がある、同じデータマートのすべてのレコードを選択するプロセスです。

次に、入力がこれら 2 つの選択プロセスの出力セルで構成されるマージ・プロセスを使用して、オプトアウト ID を除去し、適格 ID の出力セルを作成します。

次に、マージ・プロセスからの適格 ID が渡されるセグメント・プロセスを追加します。このセグメント・プロセスでは、適格 ID が 3 つの個別の ID グループに分割されます。

最後に、セグメント化プロセスを追加して、3 つのセグメントをオーディエンス ID のグローバル永続リストとして出力します。

フローチャートを運用モードで実行して戦略的セグメントを作成し、複数のキャンペーンで使用できるようにします。

「セグメント一覧」ページからセグメントを表示するには

1. 「キャンペーン」>「セグメント」を選択します。

「セグメント一覧」ページが表示されます。

2. 表示するセッションの名前をクリックします。

「サマリー」ページにセグメントのサマリー情報が表示されます。

表 18. セグメントのサマリー情報

要素	説明
説明	セグメント化プロセスで提供されるセグメントの説明
ソース・フローチャート	セグメントが定義されたフローチャートの名前
オーディエンス・レベル	セグメントのオーディエンス・レベル
現在のデータ件数	このセグメント内の ID の数と、このセグメントを最後に実行した日付
使用しているキャンペーン	このセグメントを使用するすべてのキャンペーンのリスト (これらのキャンペーンへのリンクを含む)

キャンペーンのサマリー・ページから戦略的セグメントを表示するには

1. 表示するセグメントを使用しているキャンペーンのサマリー・ページに移動します。
2. 「関連セグメント」リストで、セグメントの名前をクリックします。

セグメントの「サマリー」ページが表示されます。

セグメントのサマリー詳細を編集するには

1. 「キャンペーン」>「セグメント」を選択します。

「セグメント一覧」ページが表示されます。

2. サマリー詳細を編集するセグメントの名前をクリックします。

「サマリー」タブにセグメントが表示されます。

3. セグメントの名前または説明に対して、必要な編集を行います。

注: セグメントの名前には、文字に関する特定の制限があります。詳しくは、269 ページの『IBM Unica Campaign オブジェクト名での特殊文字』を参照してください。

4. 変更が完了したら、「変更の保存」をクリックします。

変更内容が保存され、セグメントが閉じます。

戦略的セグメントのソース・フローチャートを編集するには

1. 「キャンペーン」>「セグメント」を選択します。

「セグメント一覧」ページが表示されます。

2. フローチャートを編集するセグメントの名前をクリックします。

セグメントの「サマリー」ページが表示されます。

3. 「ソース・フローチャート」の下で、フローチャートへのリンクをクリックします。

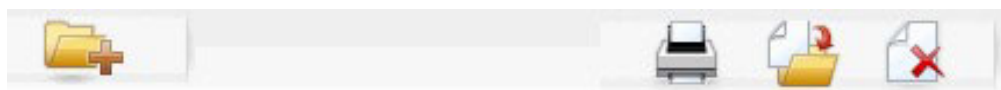
「フローチャート」ページが「読み取り専用 (Read Only)」モードで開きます。

4. 「編集」をクリックして、フローチャートを「編集」モードで開きます。
5. フローチャートに対して必要な変更を行います。
6. 変更が完了したら、「保存」または「保存して終了」をクリックします。

重要: 既存の戦略的セグメントは、更新されたフローチャートを運用モードで再実行するまで更新されません。

「セグメント一覧」ページのアイコン

「セグメント一覧」ページでは、以下のアイコンが使用されます。



以下の表では、左側のアイコンから右側のアイコンへの順番で説明します。

表 19. 「セグメント一覧」ページのアイコン

アイコン名	説明
サブフォルダーの追加	新規セグメント・サブフォルダーを追加する場合にクリックします。
詳細検索	「詳細検索オプション」ダイアログを開く場合にクリックします。このダイアログでは、オファーを検索するための属性および値を指定できます。
印刷	各セグメントの横にあるチェック・ボックスをクリックして1つ以上のセグメントを選択してから、このアイコンをクリックすると、選択したセグメントが印刷されます。
移動	各セグメントの横にあるチェック・ボックスをクリックして1つ以上のセグメントを選択してから、このアイコンをクリックすると、選択したセグメントの新しい場所が指定されます。
選択項目の削除	各セグメントの横にあるチェック・ボックスをクリックして1つ以上のセグメントを選択してから、このアイコンをクリックすると、選択したセグメントが削除されます。

戦略的セグメントの実行

データマートの内容が変更された場合は、戦略的セグメントを再生成する必要があります。戦略的セグメントを再生成するには、そのセグメントが作成されたフローチャートを運用モードで実行します。テスト実行モードで「出力を有効にする」を設定しても、何の影響もありません。戦略的セグメントは運用モードでのみ出力されます。

注: セグメント化プロセスを運用モードで再実行すると、そのプロセスによって作成された既存の戦略的セグメントが削除されます。つまり、新しいセグメント化プロセスの実行が正常に完了しない場合、またはその実行中に、既存の戦略的セグメント (グローバル抑制を含む) のユーザーに対して「無効なセグメント」エラーが表示される可能性があります。

戦略的セグメントの編成

フォルダーまたは一連のフォルダーを作成することによって、戦略的セグメントを編成できます。その後、作成したフォルダー構造内で、あるフォルダーから別のフォルダーに戦略的セグメントを移動できます。

注: 戦略的セグメントが入っているフォルダーは、戦略的セグメントに適用されて戦略的セグメントに対するアクセス、編集、または削除を実行できるユーザーを決定するセキュリティ・ポリシーを指定します。

セグメント・フォルダーを追加するには

フォルダーを追加、移動、および削除して、セグメントを編成できます。フォルダーの名前および説明を編集することもできます。

1. 「キャンペーン」 > 「セグメント」を選択します。

「セグメント一覧」ページが表示されます。

2. サブフォルダーの追加先のフォルダーをクリックします。
3. 「サブフォルダーの追加」アイコンをクリックします。

「サブフォルダーの追加」ページが表示されます。

4. フォルダーの名前、セキュリティ・ポリシー、および説明を入力します。

注: フォルダーの名前には、文字に関する特定の制限があります。詳しくは、269 ページの『IBM Unica Campaign オブジェクト名での特殊文字』を参照してください。

5. 「変更の保存」をクリックします。

「セグメント一覧」ページが表示されます。作成した新しいフォルダーまたはサブフォルダーが表示されます。

セグメント・フォルダーの名前および説明を編集するには

1. 「キャンペーン」 > 「セグメント」を選択します。

「セグメント一覧」ページが表示されます。

2. 名前を変更するフォルダーをクリックします。

3. 「名前の変更」をクリックします。

「サブフォルダー名の変更」ページが表示されます。

4. フォルダ-の名前と説明を編集します。

注: フォルダ-の名前には、文字に関する特定の制限があります。詳しくは、269 ページの『IBM Unica Campaign オブジェクト名での特殊文字』を参照してください。

5. 「変更の保存」をクリックします。

「セグメント一覧」ページが表示されます。フォルダ-またはサブフォルダ-の名前が変更されます。

セグメント・フォルダ-を移動するには

重要: 移動しようとしているセグメントのソース・フローチャートがユーザーによって編集されている場合は、セグメントを移動すると、フローチャート全体が失われる可能性があります。サブフォルダ-を移動する場合は、編集用に開いているソース・フローチャートがないことを確認してください。

1. 「キャンペーン」>「セグメント」を選択します。

「セグメント一覧」ページが表示されます。

2. 移動するサブフォルダ-が入っているフォルダ-を開きます。

フォルダ-名をクリックしてフォルダ-を開くか、「セグメント一覧」をクリックして「セグメント一覧」ページを表示するか、フォルダ-名をクリックしてツリー構造でフォルダ-を開くことによって、フォルダ-構造をナビゲートします。

3. 移動するフォルダ-の横にあるチェック・ボックスを選択します。複数のフォルダ-を選択して同じ場所に一度に移動できます。

4. 「移動」アイコンをクリックします。

「アイテムの移動」ウィンドウが表示されます。

5. サブフォルダ-の移動先のフォルダ-をクリックします。

フォルダ-の横にある + 記号をクリックしてフォルダ-を開き、リストをナビゲートします。

6. 「このロケーションを受け入れる」をクリックします。

注: フォルダ-をダブルクリックすると、場所の選択と受け入れを 1 回の手順で行うこともできます。

サブフォルダ-と、そのすべての内容が宛先フォルダ-に移動します。

セグメント・フォルダ-を削除するには

フォルダ-を削除するには、事前にフォルダ-の内容を移動または削除する必要があります。

注: フォルダーを削除するために必要な権限を持っている場合、Campaign で、そのフォルダー内のサブフォルダーを削除することもできます。

1. 「キャンペーン」>「セグメント」を選択します。

「セグメント一覧」ページが表示されます。

2. 削除するサブフォルダーが入っているフォルダーを開きます。

フォルダー名をクリックしてフォルダーを開くか、「セグメント一覧」をクリックして「セグメント一覧」ページを表示するか、フォルダー名をクリックしてツリー構造でフォルダーを開くことによって、フォルダー構造をナビゲートします。

3. 削除するフォルダーの横にあるチェック・ボックスを選択します。複数のフォルダーを選択して一度に削除できます。
4. 「選択項目の削除」アイコンをクリックします。
5. 確認ウィンドウで「OK」をクリックします。

フォルダーと、下位のすべての空のサブフォルダーが削除されます。

セグメントを移動するには

組織上の目的で、戦略的セグメントをフォルダー間で移動できます。

重要: 移動しようとしているセグメントのソース・フローチャートが編集用に開いている場合は、セグメントを移動すると、フローチャート全体が失われる可能性があります。サブフォルダーを移動する前に、編集用に開いているソース・フローチャートがないことを確認してください。

1. 「キャンペーン」>「セグメント」を選択します。

「セグメント一覧」ページが表示されます。

2. 移動するセグメントが入っているフォルダーを開きます。
3. 移動するセグメントの横にあるチェック・ボックスをクリックします。複数のセグメントを選択して同じ場所に一度に移動できます。
4. 「移動」アイコンをクリックします。

「アイテムの移動」ウィンドウが表示されます。

5. セグメントの移動先のフォルダーをクリックします。

フォルダーの横にある + 記号をクリックしてフォルダーを開き、リストをナビゲートします。

6. 「このロケーションを受け入れる」をクリックします。

注: フォルダーをダブルクリックすると、場所の選択と受け入れを 1 回の手順で行うこともできます。

セグメントが宛先フォルダーに移動します。

戦略的セグメントの削除

戦略的セグメントは、以下の方法で削除できます。

- 「セグメント一覧」ページで、戦略的セグメントをフォルダーの場所から削除する。この方法で戦略的セグメントを削除すると、当初これらの戦略的セグメントを生成したセグメント化プロセスを、運用モードで再実行する場合は、これらの戦略的セグメントが再作成されます。詳しくは、『セグメントを削除するには』を参照してください。
- 戦略的セグメントを作成したセグメント化プロセスを削除する。戦略的セグメントは、フローチャートが保存される場合にのみ削除されます。この方法で削除する戦略的セグメントは復旧できません。詳しくは、フローチャートのプロセスの削除に関する説明を参照してください。
- 戦略的セグメントを作成したセグメント化プロセスが入っているフローチャートを削除する。この方法で削除する戦略的セグメントは復旧できません。詳しくは、フローチャートの削除に関する説明を参照してください。

セグメントを削除するには

「セグメント一覧」ページから戦略的セグメントを直接削除するには、以下の手順を実行します。

注: この方法で戦略的セグメントを削除すると、当初これらの戦略的セグメントを生成したセグメント化プロセスを、運用モードで再実行する場合は、これらの戦略的セグメントが再作成されます。

1. 「キャンペーン」 > 「セグメント」を選択します。

「セグメント一覧」ページが表示されます。

2. 削除するセグメントが入っているフォルダーを開きます。
3. 削除するセグメントの横にあるチェック・ボックスを選択します。複数のセグメントを選択して一度に削除できます。
4. 「選択項目の削除」アイコンをクリックします。
5. 確認ウィンドウで「OK」をクリックします。

セグメントが削除されます。

注: このセグメントが入っているアクティブなフローチャートがまだある場合、これらのフローチャートを実行すると、このセグメントを再作成することができます。このセグメントの削除時に、このセグメントが入っているフローチャートが編集用を開いていた場合にも、このセグメントは再作成されます。

グローバル抑制およびグローバル抑制セグメントについて

グローバル抑制機能を使用して、Campaign でフローチャート内のすべてのセルから自動的に除外される ID のリスト (オーディエンス・レベル別) を指定します。

これを行うには、このユニーク ID のリストを戦略的セグメントとして作成してから、そのセグメントを特定のオーディエンス・レベルのグローバル抑制セグメントとして指定します。オーディエンス・レベルごとに 1 つのグローバル抑制セグメントしか構成できません。

注: グローバル抑制セグメントの指定および管理には、適切な権限が必要であり、通常は Campaign 管理者によって実行されます。詳しくは、「IBM Unica Campaign 管理者ガイド」を参照してください。

グローバル抑制の適用

あるオーディエンス・レベルに対してグローバル抑制セグメントが定義されている場合、そのオーディエンス・レベルに関連付けられた最上位の「選択」、「書き込み」、または「オーディエンス」のいずれかのプロセスで、グローバル抑制セグメントの ID が出力セルから自動的に除外されます (特定のフローチャートでグローバル抑制が明示的に無効になっている場合を除く)。既定では、各フローチャートでグローバル抑制が有効になっているため、構成したグローバル抑制を適用するために操作を行う必要はありません。

既定ではグローバル抑制が有効になりますが、グローバル戦略的セグメントそのものを作成した「セグメント化」プロセスが含まれるフローチャートの場合は、例外となります。この場合、グローバル抑制は常に無効になります (グローバル抑制セグメントを作成するオーディエンス・レベルの場合のみ)。

注: 「選択」、「書き込み」、または「オーディエンス」プロセスで件数確認を実行する場合、グローバル抑制は考慮されないことにも注意してください。

グローバル抑制が設定されたオーディエンスの切り替え

フローチャート内でオーディエンス 1 からオーディエンス 2 に切り替える場合、これらのオーディエンス・レベルごとに 1 つのグローバル抑制が定義されているときは、オーディエンス 1 のグローバル抑制セグメントが入力テーブルに適用され、オーディエンス 2 のグローバル抑制セグメントが出力テーブルに適用されます。

グローバル抑制の無効化

個々のフローチャートのグローバル抑制を無効にできるのは、適切な権限がある場合のみです。適切な権限がない場合は、設定を変更できないので、既存の設定でフローチャートを実行する必要があります。

管理者は、グローバル抑制のオーバーライド権限を特定のユーザーに付与して、そのユーザーが、通常は抑制されている ID (汎用検証グループ内の ID など) に連絡できる特別なキャンペーンを設計および実行できるようにすることができます。

フローチャートのグローバル抑制を無効にするには

1. フローチャートを編集用を開きます。
2. 「システム管理」アイコンをクリックして、「詳細設定」を選択します。
3. 「詳細設定」ウィンドウで「このフローチャートのグローバル抑制を無効にする」チェック・ボックスにチェック・マークを付けます。
4. 「OK」をクリックします。

ディメンション階層について

ディメンション階層は、ID の任意のリストに適用可能な一連の SQL 選択クエリーです。戦略的セグメントと同様、ディメンション階層は選択プロセスでグローバルに使用可能にしたり、キューブを構成するための基礎として使用したりすることができます。

最もよく指定されるディメンションには、時間、地理、製品、部門、および流通チャネルなどがあります。ただし、ビジネスやキャンペーンと最も関係のある、どのような種類のディメンションでも作成できます。

キューブのビルディング・ブロックとして、ディメンションはさまざまなレポート (集約レベルが増加している全製品の総売上高、地理別の経費対売上高のクロス集計表分析など) の基礎になります。ディメンションは単一のキューブに限定されず、多数のキューブで使用できる。

ディメンション階層はさまざまなレベルで構成されていて、このレベルはディメンション要素 (略して要素) で構成されています。

Campaign は、レベルおよび要素 (それぞれ数の制限なし) と、以下で構成されるディメンションをサポートします。

- 顧客分析レポート作成および視覚的選択の入力として作成されたデータ・ポイント
- ドリルダウン機能をサポートするためのカテゴリ (数の制限なし) へのロールアップ。 (ディメンションの境界をまたぐときに明確にロールアップする必要があるため、要素は相互に排他的で、オーバーラップしないようにする必要があります。)

例: ディメンション階層

以下の 2 つの例は、データマート内に作成され、Campaign にマップされる基本的なディメンション階層を示しています。

例: 「年齢」ディメンション階層

最下位: (21–25)、(26–30)、(31–35)、(36–45)、(45–59)、(60+)

ロールアップ: 若年 (18–35)、中年 (35–59)、高齢 (60+)

例: 「所得」ディメンション階層

最下位: >\$100,000、\$80,000–\$100,000、\$60,000–\$80,000、\$40,000–\$60,000

ロールアップ: 高所得 (> \$100,000)、中所得 (\$60,000–\$100,000)、低所得 (< \$60,000) (> \$100,000)、(\$60,000–\$100,000)、(< \$60,000)

ディメンション階層の作成

Campaign でディメンションを使用するには、以下を行う必要があります。

- テーブルまたはデータマートの区切り記号付きフラット・ファイルに階層ディメンションを定義および作成します。
- この階層ディメンション・テーブルまたはフラット・ファイルを、Campaign のディメンションにマップします。

注: 階層ディメンションは、Campaign システム管理者または IBM Unica コンサルティング・チームのメンバーによってデータマート内に作成され、Campaign の外部の操作です。また、階層ディメンションの最下位では、未加工 SQL または純粋な IBM Unica 式 (カスタム・マクロ、戦略的セグメント、またはユーザー定義項目がない) を使用して、個々の要素を定義する必要があることに注意してください。

この階層ディメンションが Campaign にマップされると、Campaign が、このコードを実行してさまざまなロールアップを実行します。

階層ディメンションを Campaign ディメンションにマップするには

注: 以下の説明は、階層ディメンションがデータマートに既に存在していることを前提にしています。

注: ほとんどすべての場合に、ディメンションはキューブを作成するために使用されるため、アプリケーションの「セッション」領域のフローチャートからディメンションを作成できます。

1. 以下のいずれかの場所から、「ディメンション階層」ウィンドウにアクセスします。
 - 「編集」モードのフローチャートで「システム管理」アイコンをクリックし、「ディメンション階層」を選択します。
 - 「管理設定」ページで「ディメンション階層の管理」を選択します。

「ディメンション階層」ウィンドウが表示されます。

2. 「新規ディメンション」をクリックします。

「ディメンションの編集」ウィンドウが表示されます。

3. 作成するディメンションについて、以下の情報を入力します。
 - ディメンション名
 - 説明
 - ディメンション内のレベルの数 (ほとんどの場合、このディメンションをマップするデータマートの階層ディメンション内のレベルに対応している必要があります)。
 - このディメンションをキューブのベースとして使用する場合は、「データの重複を許可しない」にチェック・ボックスにチェック・マークを付けておく必要があります (Campaign では、このオプションはデフォルトでチェック・マークが付いています)。そうしないと、要素の値はキューブ内でオーバーラップできないため、このディメンションを使用してキューブを作成するときにエラーを受け取ります。
4. 「テーブル・マッピング」をクリックします。

「テーブル定義の編集」ウィンドウが表示されます。
5. 以下のいずれかのオプションを選択します。
 - 既存ファイルにマップ
 - 選択したデータベースの既存テーブルにマップ

テーブルをマップするための手順に進みます。詳しくは、「Campaign 管理者ガイド」を参照してください。

注: ディメンション階層のテーブルをマップする場合は、正常にマップするために、「Level1_Name」、「Level2_Name」などの項目名がテーブル内に存在している必要があります。

ディメンションのテーブルのマッピングが完了したら、「ディメンションの編集」ウィンドウに新規ディメンションのディメンション情報が表示されます。

6. 「OK」をクリックします。

「ディメンション階層」ウィンドウに、新しくマップされたディメンションが表示されます。

7. ディメンション階層を保管して、将来使用できるようにしたり、再作成する必要をなくしたりするには、「ディメンション階層」ウィンドウで「保存」をクリックします。

ディメンション階層を更新する

Campaign は、ディメンション階層の自動更新をサポートしていません。基礎データが変わった場合は、ディメンション階層を手動で更新する必要があります。

注: キューブは戦略的セグメントに基づくディメンションで構成されているため、戦略的セグメントを更新するたびにディメンションを更新する必要があります。

1. 以下のいずれかの場所から、「ディメンション階層」ウィンドウにアクセスします。
 - 「編集」モードのフローチャートで「システム管理」アイコンをクリックし、「ディメンション階層」を選択します。
 - 「管理設定」ページで「ディメンション階層の管理」を選択します。

「ディメンション階層」ウィンドウが表示されます。

2. 「すべて更新」をクリックします。

注: 個々のディメンションを更新するには、ディメンションを選択してから「更新」をクリックします。

保管ディメンション階層をロードする

1. 以下のいずれかの場所から、「ディメンション階層」ウィンドウにアクセスします。
 - 「編集」モードのフローチャートで「システム管理」アイコンをクリックし、「ディメンション階層」を選択します。
 - 「管理設定」ページで「ディメンション階層の管理」を選択します。

「ディメンション階層」ウィンドウが表示されます。

2. ロードするディメンション階層を強調表示して、「ロード」をクリックします。

キューブについて

キューブとは、多くのディメンション階層によって提供されるクエリーごとの ID リストの同時セグメンテーション (ほとんどの場合、戦略的セグメント) です。キューブの作成後、任意の時点で、キューブの 2 つのディメンションをドリリングするセグメント・クロス集計レポートを表示できます。

キューブを作成する前に、以下の事前タスクを実行する必要があります。

- 戦略的セグメントの作成
- 戦略的セグメントに基づくディメンションの作成
- 以下のガイドラインがキューブに適用されます。
- キューブ・メトリックは、どの Campaign 式としても定義できますが、以下の制限があります。
 - 指定可能な追加の NUMERIC メトリックの数に制限はなく、それらのメトリックの最小、最大、合計、平均が Campaign によって計算されます。選択したメトリックは、ユーザー定義項目または永続的なユーザー定義項目にすることができます。
 - セル数 (最小、最大、平均、合計数の % など) の集約関数は、自動的に計算されます。
 - 属性値 (平均 (年齢) など) の集約関数は、最小、最大、合計、および平均を自動的に計算します。
 - 複数の属性値を含む式 (例えば、(attribute1 + attribute2)) は、ユーザー定義項目でサポートされます。
 - キューブ・プロセスは、ユーザー定義項目と永続的なユーザー定義項目をサポートします。
 - Groupby 式 (例えば、(groupby_where (ID, balance, avg, balance, (txn_date > reference_date)))) は、ユーザー定義項目でサポートされます。
 - ユーザー変数 (キューブ・プロセスと同じフローチャートで定義され、Distributed Marketing に公開されている) を含む式は、ユーザー定義項目と永続的なユーザー定義項目でサポートされます。(Distributed Marketing については、「*Distributed Marketing User's Guide*」を参照してください)。
 - 未加工 SQL を使用する式は、未加工 SQL カスタム・マクロを使用するユーザー定義項目でサポートされます。
 - カスタム・マクロを使用する式は、ユーザー定義項目でサポートされます。
- キューブは最大 3 つのディメンションで構成されていますが、メトリックは同時に 2 つのディメンションについてのみ表示できます。表示されていない 3 番目のディメンションは計算され、サーバー上に保管されますが、その特定のレポートの視覚的選択レポートには使用されません。
- キューブはセルおよびセグメントに基づいて作成できます (例えば、トランザクション・レベルで作成できます)。ただし、キューブをセルに基づいて作成する場合、そのキューブはそのフローチャートでのみ使用できます。このため、戦略的セグメントをキューブのベースにすることができます。
- テーブルが正規化されていない限り、オーディエンス・レベルで多対多の関係でディメンションを定義すると、予期しない結果となる可能性があります。Campaign によって使用されるキューブ・アルゴリズムは、正規化されたテーブル

に依存しています。キューブを選択して作成する前に、データを（例えば、データ準備セッションを介して顧客レベルに）ロールアップすることによって正規化します。

注: 非正規化ディメンションをベースにしてキューブを作成する場合、キャンペーンがディメンション ID を処理する方法のために、クロス集計レポートで合計数が間違っ て計算されます。非正規化ディメンションを使用する必要がある場合は、2 つのディメンションのみを持つキューブを作成し、非正規化ディメンションの最低レベルのメトリックとして、顧客 ID ではなくトランザクションを使用します。トランザクション合計は正しく計算されるからです。

- キューブのディメンションを作成する場合は、ディメンションに名前、オーディエンス・レベル、そのディメンションに対応するテーブルを指定する必要があります。後で、セッションまたはキャンペーン・フローチャートで作業するとき、データベース・テーブルをマップする場合と同様に、このディメンションをマップします。
- キューブの作成は、ユーザーがキューブにアクセスしていないとき（通常は営業時間後や週末）に行う必要があります。

第 11 章 レポート

Campaign では、以下のタイプのレポートを使用できます。

- 標準レポート: Campaign に組み込まれています。これらのレポートには、「キャンペーン分析」ページからアクセスします。
- キャンペーン・レポート・パックのサンプル・レポート: Campaign が IBM Cognos® に統合されている場合に使用できます。これらのレポートには、「キャンペーン分析」ページ、または特定のオブジェクト (キャンペーンやオファーなど) の「分析」タブからアクセスします。
- 関連製品のサンプル・レポート: Campaign が IBM Cognos に統合されている場合で、Campaign 関連製品 (eMessage、Interact、Distributed Marketing など) のレポート・パックをインストールしてある場合に使用できます。これらのレポートには、各製品の「分析」ページ、および特定のオブジェクト (キャンペーンやオファーなど) の「分析」タブからアクセスします。詳しくは、各製品の資料を参照してください。
- フローチャート・セル・レポート。これは、セッションまたはキャンペーンの特定のフローチャートのセルについての情報を提供します。セル・レポートには、フローチャートを「編集」モードで表示しているときに「レポート」アイコンを使用してアクセスします。

レポート・タイプ

Campaign は、以下の 3 つの一般的なレポート・タイプをサポートしています。

- システム全体のレポート — Campaign 内の複数のオブジェクトのレポート。これらのレポートには、メイン・ナビゲーション・ペインの「分析」リンクから起動される「キャンペーン分析」ページからアクセスします。例えば、「キャンペーン分析」ページのフォルダーから、「キャンペーン・カレンダー」レポートにアクセスできます。このレポートは、システムのすべてのキャンペーンをカレンダー形式で表示します。
- オブジェクト固有のレポート — 特定のオブジェクト (キャンペーンやオファー) に関するレポート。これらのレポートには、オブジェクトの「分析」タブからアクセスします。例えば、キャンペーンの「分析」タブから、「オファー別のキャンペーン・パフォーマンス・サマリー (Campaign Performance Summary by Offer)」レポートにアクセスできます。このレポートは、対応するキャンペーン別にオファーがグループ化された状態で、キャンペーンおよびオファーのパフォーマンスのサマリーを提供します。
- フローチャート・セル・レポート — セッションまたはキャンペーンの特定のフローチャートのセルに関連したさまざまな情報を提供するレポート。セル・レポートには、フローチャートを「編集」モードで表示しているときに「レポート」アイコンをクリックしてアクセスできます。

注: オブジェクトのフローチャート、「分析」タブ、および「キャンペーン分析」ページにアクセスできるかどうかは、アクセス権限によって決まります。

Campaign リスト・ポートレット

このセクションでは、Campaign レポート・パッケージがインストールされていないとしても、ダッシュボード上で使用できる標準の Campaign ポートレットについて説明します。

レポート	説明
My Custom Bookmarks (カスタム・ブックマーク)	このレポートを表示しているユーザーが作成した Web サイトまたはファイルへのリンクのリスト。
最近使ったキャンペーン	このレポートを表示しているユーザーが作成した最新のキャンペーンのリスト。
最近使ったセッション	このレポートを表示しているユーザーが作成した最新のセッションのリスト。
キャンペーン・モニター・ポートレット (Campaign Monitor Portlet)	このレポートを表示しているユーザーが作成した、実行済みまたは現在実行中のキャンペーンのリスト。

Campaign IBM Cognos レポート・ポートレット

このセクションでは、Campaign レポート・パッケージで使用可能なダッシュボード・ポートレットについて説明します。

レポート	説明
Campaign 投資収益率比較 (Campaign Return on Investment Comparison)	レポートを表示しているユーザーが作成または更新したキャンペーンの ROI の概要を比較する IBM Cognos レポート。
Campaign レスポンス率比較 (Campaign Response Rate Comparison)	レポートを表示しているユーザーが作成または更新した 1 つ以上のキャンペーンのレスポンス率を比較する IBM Cognos レポート。
Campaign オファー別の収益比較 (Campaign Revenue Comparison by Offer)	レポートを表示しているユーザーが作成または更新したオファーが含まれているキャンペーン当たりの、収益と日付を比較する IBM Cognos レポート。
過去 7 日間のオファー・レスポンス数 (Offer Responses for Last 7 Days)	レポートを表示しているユーザーが作成または更新した各オファーに基づいて、過去 7 日間で受け取ったレスポンスの数を比較する IBM Cognos レポート。
オファー・レスポンス率比較 (Offer Response Rate Comparison)	レポートを表示しているユーザーが作成または更新したオファー別のレスポンス率を比較する IBM Cognos レポート。

レポート	説明
オファー・レスポンスの内訳 (Offer Response Breakout)	レポートを表示しているユーザーが作成または更新したさまざまなアクティブ・オファーを表示する IBM Cognos レポート (ステータス別)。

レポートの操作

Campaign でレポートを使用するための情報については、以下のセクションで説明されています。

- 『レポートへのアクセスと表示』
- 252 ページの『レポート・コントロール』
- 253 ページの『レポート・ツールバー』
- 253 ページの『レポートを電子メールで送信するには』
- 253 ページの『さまざまな形式でのレポートの表示』
- 255 ページの『レポートの再実行』

レポートへのアクセスと表示

レポートにアクセスできるかどうかは、オブジェクトまたは機能に対するアクセス権限によって決まります。例えば、フローチャートを編集する権限がない場合は、フローチャートのセル・レポートにアクセスできません。

レポートには、Campaign の以下のセクションからアクセスできます。

- 「分析」メニューの「キャンペーン分析」リンク — このリンクは「キャンペーン分析」ページを開き、このページには Campaign 内のすべての使用可能なレポートのフォルダーが表示されます。フォルダーのリンクをクリックして、実行できるレポートのサブフォルダーまたはリストを表示します。レポートが、変更された日時と一緒にリストされます。
- オブジェクトの「分析」タブ — このキャンペーン、オファー、またはセグメントのレポートへのリンクを表示します。ページの右上にある「レポート・タイプ」ドロップダウン・リストから、表示するレポートのタイプを選択します。
- 「編集」モードのフローチャート・ページ — ページ上部の「レポート」リンクは、フローチャートのセル・レポートを開きます。セル・レポートにアクセスできるかどうか、またセル・レポートをエクスポートできるかどうかは、アクセス権限によって決まります。

「キャンペーン分析」ページからレポートを表示するには

1. 「分析 (Analytics)」 > 「キャンペーン分析」を選択します。

「キャンペーン分析」ページが表示され、Campaign で使用可能なレポートのフォルダーが表示されます。

2. 表示するレポートが入っているフォルダーをクリックします。フォルダーの内容 (存在する場合はサブフォルダーも) を表示したページが表示されます。
3. 表示するレポートのリンクをクリックします。レポートでフィルタリングが可能な場合は、「レポート・パラメーター」ウィンドウが開きます。

4. レポートのフィルター基準となる 1 つ以上のオブジェクトを選択します。アクセス権限を持っている特定のオブジェクトのみが選択対象として表示されることに注意してください。複数のオブジェクト選択が可能なレポートの場合は、**Ctrl** キーを押しながら複数のオブジェクトを選択します。
5. レポート用のオブジェクトの選択が完了したら、「**レポート作成**」をクリックします。レポートが同じウィンドウ内に表示されます。

キャンペーンの「分析」タブからレポートを表示するには

1. レポート対象のキャンペーンを選択します。「キャンペーン・サマリー」ページが表示されます。
2. 「**レポート**」タブをクリックします。右上に「レポート・タイプ」ドロップダウン・リストが表示されています。
3. ドロップダウン・リストから、表示するレポートのタイプを選択します。レポートが同じウィンドウ内に表示されます。

フローチャートからセル・レポートを表示するには

セル・レポートにアクセスできるかどうかは、アクセス権限によって決まります。例えば、フローチャートを編集または確認 (保存しないで編集) する権限がない場合は、フローチャートのセル・レポートにアクセスできません。さらに、セル・レポートの表示またはセル・レポートのエクスポートを行うためには明示的なアクセス権限が必要です。システム定義の管理役割の、セル・レポートに関連した権限について詳しくは、「*Campaign 管理者ガイド*」を参照してください。

1. フローチャートの「**編集**」モードで、「**レポート**」アイコンをクリックします。「セル別詳細レポート」ウィンドウが表示されます。デフォルトで、「セル・リスト」レポートが表示されます。右上に「対象データ」ドロップダウン・リストが表示されています。
2. ドロップダウン・リストから、表示するレポートのタイプを選択します。レポートが同じウィンドウ内に表示されます。
3. (オプション) 「**オプション**」をクリックして表示設定を選択したり、「**印刷**」または「**エクスポート**」をクリックして現在のセル・レポートを印刷またはエクスポートしたりすることができます。

レポート・コントロール

レポートを表示用に生成する場合は、以下のコントロールと情報を使用できます。

- **レポートの生成時刻** — レポート・ページの右下に表示されます。
- **レポートの生成日付** — レポート・ページの左下に表示されます。
- **上/下コントロール** — これらのリンクをクリックすると、レポートの先頭または末尾が表示されます。現在のレポートに複数のページがある場合にのみ表示されます。
- 「**前ページ/次ページ (Page up/Page down)**」コントロール — レポートの前のページまたは次のページを表示するには、該当するリンクをクリックします。現在のレポートに複数のページがある場合にのみ表示されます。

レポート・ツールバー



注: レポート・ツールバーは、Cognos によって生成されたレポートでのみ表示されます。このツールは、カレンダー・レポートやセグメント・レポート、またはフローチャート内のセル・レポートでは使用できません。

レポートが生成されるとレポート・ツールバーが表示され、以下のタスクを実行できるようになります。

- **このバージョンを保持 (Keep this version):** レポートを電子メールで送信します
- **ドリルダウン/ドリルアップ (Drill Down/Drill Up):** デイメンション・ドリル機能に対応しているレポートで使用されます。
- **関連リンク (Related links):** デイメンション・ドリル機能に対応しているレポートで使用されます。
- **表示形式 (View format):** レポートのデフォルト表示形式は HTML です。ドロップダウン・リストから別の表示形式を選択できます。現在選択されている表示オプションに応じて、表示形式アイコンが変わります。

レポートを電子メールで送信するには

このオプションを使用するには、SMTP サーバーが Cognos と連携するようにセットアップされている必要があります。この機能が使用不可になっている場合は、レポート管理者に確認してください。

Cognos ライセンスを IBM Unica 製品と一緒に取得した場合は、レポートにリンクを組み込むためのオプションはサポートされません。この機能を使用するには、Cognos のフル・ライセンスを購入する必要があります。

1. レポートの実行が完了したら、レポート・ツールバーの「このバージョンを保持 (Keep this version)」をクリックして、「電子メール・レポート (Email Report)」ドロップダウン・リストを選択します。「電子メール・オプションの設定 (Set the email options)」ページが表示され、電子メールの受信者と、オプションのメッセージ・テキストを指定できるようになります。
2. レポートを電子メール・メッセージの添付ファイルとして送信する場合は、「レポートを添付する (Attach the report)」チェック・ボックスを選択して、「レポートにリンクを組み込む (Include a link to the report)」チェック・ボックスをクリアします。
3. 「OK」をクリックします。要求が電子メール・サーバーに送信されます。

さまざまな形式でのレポートの表示

注: すべてのレポートをあらゆる形式で表示できるわけではありません。例えば、複数のクエリーを使用するレポートは、CSV 形式または XML 形式で表示することはできません。

レポート・ビューアーを使用すると、以下の形式でレポートを表示できます。

- HTML
- PDF
- Excel
- CSV
- XML

レポートを HTML 形式で表示するには

HTML は、レポートを表示するためのデフォルトの形式です。レポートを他の形式で表示している場合に HTML 形式に切り替えるには、「レポート」ツールバーの「表示形式 (View format)」アイコンをクリックして、ドロップダウン・リストから「HTML 形式で表示 (View in HTML Format)」を選択します。ページが最新表示された後で、レポートが複数ページにまたがっている場合は、「レポート」コントロールを使用してレポートをナビゲートできます。

レポートを PDF 形式で表示するには

レポートが生成されたら、「レポート」ツールバーで「表示形式 (View format)」アイコンをクリックし、ドロップダウン・リストから「PDF 形式で表示 (View in PDF Format)」を選択します。ページが最新表示され、レポートが PDF 形式で表示されます。PDF リーダー・コントロールを使用して、レポートを保存または印刷できます。

レポートを Excel 形式で表示するには

レポートの生成後に、「レポート」ツールバーの「表示形式 (View format)」アイコンをクリックして、「Excel オプションで表示 (View in Excel Options)」を使用します。プロンプトが出されたら、ファイルを開くのか保存するのかを指定します。

- 保存しないでレポートを表示するには、「開く」をクリックします。レポートが、Excel 形式の単一ページとして表示されます。
- レポートを保存するには、「保存」をクリックしてプロンプトの指示に従います。

レポートを CSV (コンマ区切り値) 形式で表示するには

レポートが生成されたら、「レポート」ツールバーで「表示形式 (View format)」アイコンをクリックして「Excel 表示オプション (View in Excel Options)」をクリックし、ドロップダウン・リストから「CSV 形式で表示 (View in CSV Format)」を選択します。新しいウィンドウが開きます。ファイルを開くのか保存するのかを尋ねるウィンドウが表示されます。

- 保存しないでレポートを表示するには、「開く」をクリックします。レポートが、スプレッドシート形式の単一ページとして表示されます。
- レポートを保存するには、「保存」をクリックします。「名前を付けて保存」ウィンドウが開きます。ファイルを保存する場所に移動し、「ファイル名」フィールドに名前を入力します (デフォルトでは、このファイルは .xls ファイルとして保存されます)。「保存」をクリックします。ファイルの保存が完了すると、「ダウンロード完了 (Download complete)」ウィンドウが表示されます。

レポートを XML 形式で表示するには

レポートが生成されたら、「レポート」ツールバーで「表示形式 (View format)」アイコンをクリックし、ドロップダウン・リストから「XML 形式で表示 (View in XML Format)」を選択します。ページが最新表示され、レポートが同じウィンドウ内に XML 形式で表示されます。

レポートの再実行

レポートは、最新のデータを反映するよう、データ・ソースに対して生成されます。表示するレポートについて、レポートを最後に実行した後にデータが変更されていると考えられ、最新バージョンを確認したい場合は、レポートを再実行できます。

Campaign のレポートのリスト

このセクションでは、Campaign で使用可能なレポートを、以下のカテゴリ別に説明します。

標準レポート:

- 『フローチャート・セル・レポート』
- 261 ページの『セグメント・クロス集計レポート』
- 262 ページの『キャンペーン・カレンダー』

Campaign レポート・パックで提供されるレポート (オプション):

- 262 ページの『キャンペーンおよびオファーのリストのレポート』
- 262 ページの『パフォーマンス・レポート』

IBM Unica レポートのインストールと構成については、インストール・ガイドと「*IBM Unica Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

各レポートで使用されるデータ項目、クエリー、および式については、「*IBM Unica Campaign Report Specifications*」資料を参照してください。

フローチャート・セル・レポート

セル・レポートは、セッションまたはキャンペーンの特定のフローチャート内のセルに関連したさまざまな情報を提供します。すべてのセル・レポートには、フローチャートを「編集」モードで表示しているときに「レポート」メニューからアクセスできます。

Campaign は、以下のタイプのセル・レポートをサポートしています。

- 256 ページの『「セル・リスト」レポート』
- 256 ページの『セル・プロファイル・レポート』
- 258 ページの『セル・クロス集計レポート』
- 259 ページの『セル・コンテンツ・レポート』
- 260 ページの『「セル・ウォーターフォール」レポート』

セル・レポートを印刷およびエクスポートするには

任意のセル・レポートを印刷したり、Excel スプレッドシートにエクスポートしたりするには、「セル別詳細レポート」 ページの上部にある「印刷」または「エクスポート」 ボタンをクリックします。

「セル・リスト」レポート

「セル・リスト」レポートは、現在のフローチャート内で使用されているすべてのセルについての情報を提供します。この情報は、フローチャートにおけるすべてのプロセス実行のセル出力の結果です。

「セル・リスト」レポートを生成するには:

1. 既存のフローチャートを「編集」モードで開くか、新しいフローチャートを作成します。
2. 「レポート」アイコンをクリックします。

「セル別詳細レポート」ウィンドウが表示され、デフォルトで「セル・リスト」レポートが表示されます。レポートでは、フローチャートの各セルが 1 行に 1 つ表示されています。

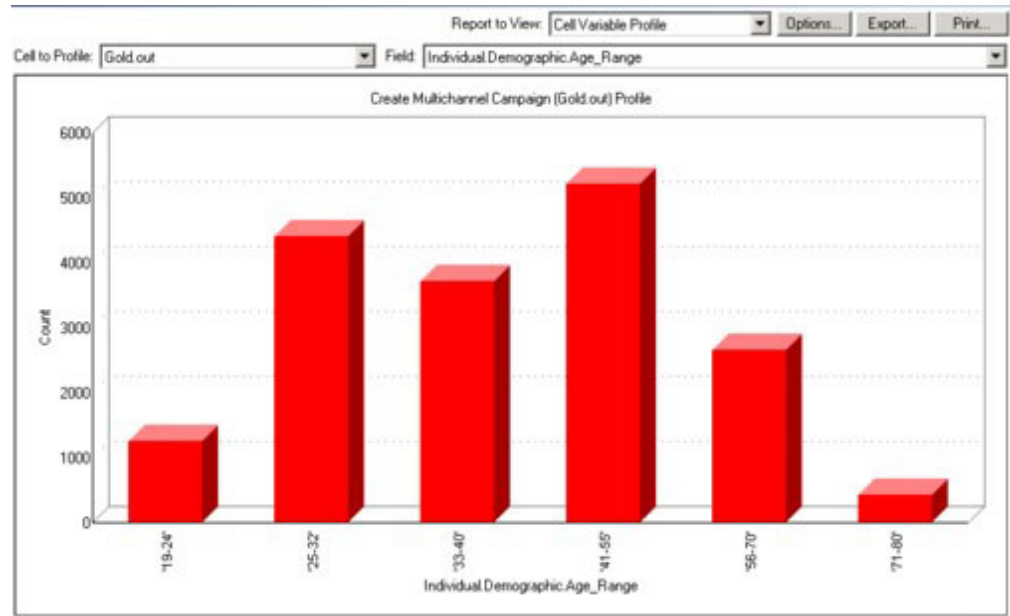
このレポートでは、フローチャートを前回実行したときのデータが表示されます。ステータス列は、実行されたフローチャート実行の種類 (テスト実行または本番実行) を示しています。

3. (オプション) ツリー表示とテーブル表示を切り替えるには、「オプション」をクリックします。「レポート・オプション」ウィンドウが表示され、以下のいずれかのオプションを選択できるようになります。
 - ツリー表示 — フローチャート・セルをフォルダー階層のようなツリー表示で表示します。このビューの各レベルは、フローチャート内のレベルを表しています。上位フォルダーを展開したり折りたたんだりして、下位の項目を表示したり非表示にしたりすることができます。
 - テーブル表示 — フローチャート・セルをテーブル形式で表示します。これはデフォルト・オプションです。

セル・プロファイル・レポート

「セル・プロファイル」レポートは、選択したセルの 1 つの変数に関連付けられているデータを表示します。例えば、以下の図は、マルチチャネルのリテンション・キャンペーンの Gold.out セル (ゴールド・クレジット・カードを持つクライアント用) を示しています。Gold.out セルに属している年齢層を示すために、Age-Range 変数が表示されています。

セル・プロファイル・レポート



「セル・プロファイル」レポートを生成するには:

1. 既存のフローチャートを「編集」モードで開くか、新しいフローチャートを作成します。
2. 「レポート」アイコンをクリックします。「セル別詳細レポート」ウィンドウが表示され、デフォルトで「セル・リスト」レポートが表示されます。レポートでは、フローチャートの各セルが 1 行に 1 つ表示されています。
3. 「対象データ」ドロップダウン・リストから、「セル・プロファイル」を選択します。
4. 「対象セル」ドロップダウン・リストから、プロファイルするセルを選択します。
5. 「項目」ドロップダウン・リストから、選択したセルのプロファイル対象の項目を選択します。
6. 選択したセルおよび項目に基づいて、Campaign がセル・プロファイルを生成します。
7. (オプション) レポートの表示を変更するには、「オプション」をクリックします。「レポート・オプション」ウィンドウが表示され、以下のオプションを選択できるようになります。
 - 階級数 — レポートに表示するビンの数を入力します。水平軸の項目値がビンに編成されます。指定する数が、異なる項目値の数より小さい場合、一部の項目が結合されて 1 個のビンになります。デフォルトは 25 です。
 - メタ・タイプ別プロファイル — メタデータ別にプロファイルする場合にクリックします。メタデータ別のプロファイルについては、『メタ・タイプ別プロファイル』を参照してください。このオプションは、デフォルトで使用可能になっています。
 - テーブルの表示 — レポートをテーブル形式で表示します。各ビンが行として表現され、各ビンのカウントが列になります。

- グラフの表示 — レポートをグラフとして表示します。これはデフォルト・オプションです。2次元レポートまたは3次元レポートの表示中にレポートを右クリックすると、さらに多くのオプションにアクセスできます。
- 2つ目のセル表示 — プロファイル可能なセルが複数ある場合は、このオプションを選択して、レポート内の2番目のセルを選択します。このオプションを選択すると、プロファイルする追加のセルを選択するためのドロップダウン・リストが表示されます。2つのセルが、グラフィック形式で横並びに表示されます。

セル・クロス集計レポート

「セル・クロス集計」レポートは、2つの項目で同時にプロファイルされているセルの詳細を表示します。このレポートでは、選択した各項目が複数のビンに分割されていて、それぞれの交差部分のボックスのサイズは、選択した属性を持つ顧客 ID の相対的な数を表しています。例えば、以下の図では、Gold.out セルの2つのレコードがプロファイルされています (つまり、資金 (Indiv._Total_Funds) が名前 (First_Name) ごとに表示されています)。別の例として、購入金額量と年齢のかけ合わせなどが考えられます。

注: セルをプロファイルするには、セルを生成するプロセスを完全に構成して、正常に実行する必要があります。

セル・クロス集計レポート



「セル・クロス集計」レポートを生成するには:

1. 既存のフローチャートを「編集」モードで開くか、新しいフローチャートを作成します。
2. 「レポート」アイコンをクリックします。「セル別詳細レポート」ウィンドウが表示され、デフォルトで「セル・リスト」レポートが表示されます。レポートでは、フローチャートの各セルが1行に1つ表示されています。

3. 「対象データ」ドロップダウン・リストから、「セル・クロス集計」を選択します。
4. 「セル」ドロップダウン・リストからセルを選択します。
5. プロファイルする項目 (変数) を、「項目 1」および「項目 2」ドロップダウン・リストから選択します。

選択内容に基づいて、Campaign がレポートを生成します。

6. (オプション) レポートの表示を変更するには、「オプション」をクリックします。「レポート・オプション」ウィンドウが表示され、以下のオプションを選択できるようになります。
 - 階級数 — 表示されるビンの数を変更します。水平軸の項目値がビンに編成されます。指定する数が、異なる項目値の数より小さい場合、一部の項目が結合されて 1 個のビンになります。デフォルトは 10 です。
 - メタ・タイプ別プロファイル — メタデータ別にプロファイルする場合にクリックします。メタデータ別のプロファイルについて詳しくは、『メタ・タイプ別プロファイル』を参照してください。このオプションは、デフォルトで使用可能になっています。
 - テーブルの表示 — レポートをテーブルとして表示する場合に選択します。
 - 2 次元グラフの表示 — レポートを 2 次元グラフとして表示する場合に選択します (デフォルト)。2 次元または 3 次元のレポートの表示中にレポートを右クリックすると、一連の表示オプションにアクセスできます。
 - 3 次元グラフの表示 — レポートを 3 次元グラフとして表示する場合に選択します。2 次元または 3 次元のレポートの表示中にレポートを右クリックすると、一連の表示オプションにアクセスできます。
 - セル 1 表示 — X 軸にセル情報を表示する方法を選択します。特定の数値項目の場合は、「項目」ドロップダウン・メニューから操作対象の項目を選択できます。
 - 項目 — («セル 1 表示」と「セル 2 表示」の両方)。プロファイルされている既存の変数に変数を追加します。この 2 番目の変数は、最初の変数を表すボックス内のボックスとして表示されます。

セル・コンテンツ・レポート

「セル・コンテンツ」レポートは、セル内のレコードの詳細を表示します。現在のオーディエンス・レベルで定義されているテーブル・ソースの値を表示できます。このレポートは、実行結果を確認するのに役立ちます。

「セル・コンテンツ」レポートを生成するには:

1. 既存のフローチャートを「編集」モードで開くか、新しいフローチャートを作成します。
2. 「レポート」アイコンをクリックします。「セル別詳細レポート」ウィンドウが表示され、デフォルトで「セル・リスト」レポートが表示されます。レポートでは、フローチャートの各セルが 1 行に 1 つ表示されています。
3. 「対象データ」ドロップダウン・リストから「セル内容」を選択します。
4. 「セル名」プルダウン・メニューからセルを選択します。

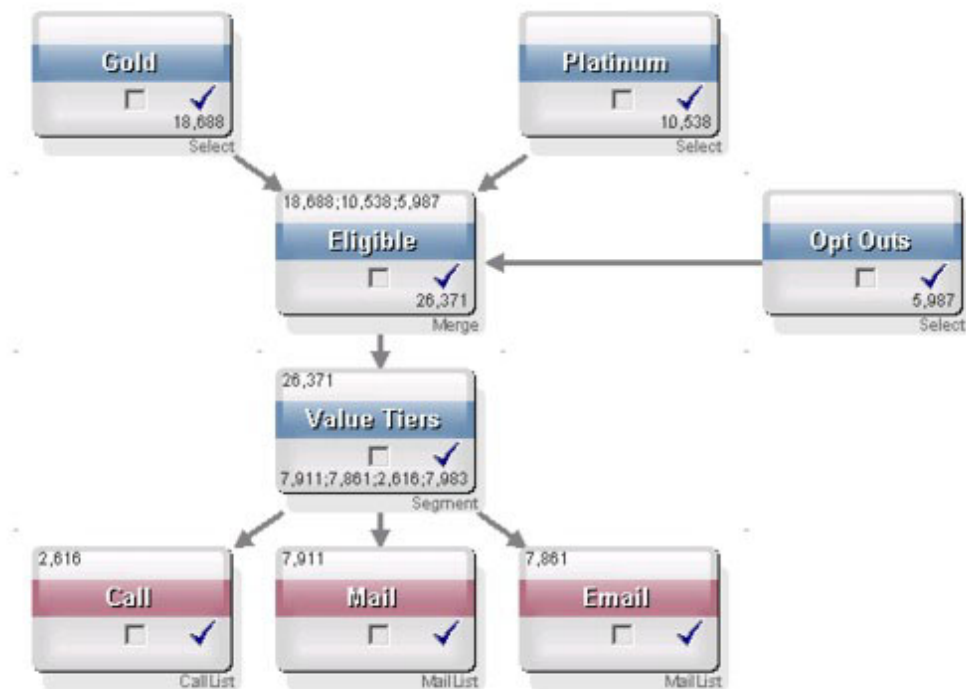
5. (オプション) レポートの表示を変更するには、「オプション」をクリックします。「レポート・オプション」ウィンドウが表示され、以下のオプションを選択できるようになります。

- 最大表示行数 — レポートが表示する最大行数を変更します。デフォルトは 100 です。
- 表示項目 — 「選択項目」領域から項目を選択して「表示項目」領域に追加することによって、レポートに表示する項目を選択します。
- 重複 ID のデータを除外 — 項目が重複するレコードをスキップする場合に選択します。このオプションは、非正規化テーブルを使用している場合に役立ちます。このオプションは、デフォルトで使用不可になっています。

「セル・ウォーターフォール」レポート

「セル・ウォーターフォール」レポートは、フローチャートのさまざまなプロセスを介してセルが入力および出力されることによる、オーディエンス・メンバーの減少を示します。このレポートは、出力ボリュームが減ったプロセスと、減少の詳細を割合と量で示します。「セル・ウォーターフォール」レポートは、連続する各基準によって生じた減少を確認することによって、ターゲット数の精度を上げる場合に使用します。

以下の例では、このレポートは、マルチチャネルのリテンション・キャンペーン・フローチャート内のゴールド・プロセスの Gold.out セルをプロファイルしています。



Gold.out セルの ID が「対象 (Eligible)」という名前のマージ・プロセスに渡されます。マージ・プロセスの出力セル (Eligible.out) が、7683 個の ID を Gold.out に追加します。次に、このセルが Planinum.out セルにマージされ、その結果 ID の数は

減少するのではなく増加しています。オプトアウト・プロセスにより、一部の ID が Gold.out と Platinum.out のマージ結果から取り出されるため、その結果の数は 2 つのセルの合計よりも少なくなります。次に、Eligible.out セルが「有効層 (Value Tiers)」という名前のセグメント・プロセスに渡され、ここで Eligible.out が複数のコンタクト・チャンネルに解析されます。

このフローチャートに基づく「セル・ウォーターフォール」レポートが、以下の図に示されています。

「セル・ウォーターフォール」レポートの「合計」行は、10,705 個の ID が Gold.out セルから削除されたことを示しています。このレポートは、残った ID の数と、元の Gold.out ID の残りのパーセンテージも示しています。

マルチチャンネルのリテンション・キャンペーン・フローチャートの「セル・ウォーターフォール」レポート

Cell Name	Size	#IDs Removed	%Remain	Seq%	#IDs (Removal Query)	Removal Query
Gold.out	18688	0	100.00			
Eligible.out	26371	Added 7683	141.11	0.00	5987	Individual.EMail.Op
Value Tiers	26371	0	141.11			
Preferred_Channel_Direct_Mail	7911			30.00		
Preferred_Channel_E-Mail	7861			29.81		
Preferred_Channel_Telemarketing	2616			9.92		
Preferred_Channel_Unknown	7983			30.27		
Total	18688	10705	42.72			

セグメント・クロス集計レポート

セグメント・クロス集計レポートには、Campaign の「分析」セクションからアクセスします。このレポートは、以下の個々のレポートで構成されています。

- ・ 『セグメント・クロス集計レポート』
- ・ 262 ページの 『セグメント・プロファイル・レポート』

セグメント・クロス集計レポート

「セグメント・クロス集計分析レポート」は、キューブ・プロセスの定義に従い、キューブの任意の 2 つのディメンションを計算して、結果を表形式で表示します。このレポートでは、セルをドリリングして、キャンペーンまたはセッション・フローチャートで使用できる選択プロセスを作成することができます。

「セグメント・クロス集計分析レポート」で分析できるのは、キューブの一部である戦略的セグメント (セル) のみです。

セグメント・プロファイル・レポート

「セグメント・プロファイル・レポート」は、戦略的セグメントのディメンション数を計算して表示します。この情報は、表形式とグラフィック形式の両方の形式で表示されます。「セグメント・プロファイル・レポート」で分析できるのは、キューブの一部である戦略的セグメントのみです。

キャンペーン・カレンダー

「キャンペーン・カレンダー」レポートでは、キャンペーンの開始日および終了日をカレンダー上で確認できます。

キャンペーンおよびオファーのリストのレポート

キャンペーンおよびオファーのリストのレポートは、IBM Unica レポートおよび Campaign レポート・パックをインストールする場合にのみ使用できます。IBM Unica レポートのインストールと構成については、インストール・ガイドと「*IBM Unica Campaign 管理者ガイド*」を参照してください。

キャンペーンおよびオファーのリストのレポートには、Campaign の「分析」セクションからアクセスします。このレポートは、以下の個々のレポートで構成されています。

- 『キャンペーン・サマリー』
- 『オファー・キャンペーンのリスト』

キャンペーン・サマリー

「キャンペーン・サマリー」レポートは、作成されたすべてのキャンペーンの概要を提供します。このレポートは、キャンペーン・コード、作成日、開始日と終了日、前回実行日、各キャンペーンのイニシアチブおよび目的をリストします。

オファー・キャンペーンのリスト

「オファー・キャンペーンのリスト」レポートは、オファー別にグループ化されたキャンペーンをリストします。このレポートは、キャンペーン・コード、イニシアチブ、開始日と終了日、および前回実行日をリストします。

パフォーマンス・レポート

パフォーマンス・レポートは、IBM Unica レポートおよび Campaign レポート・パックをインストールする場合にのみ使用できます。レポートのインストールと構成については、インストール資料と「*IBM Unica Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

パフォーマンス・レポートの出力例については、「IBM Unica Campaign Report Specifications」資料を参照してください。

パフォーマンス・レポートには、Campaign の「分析」セクションからアクセスします。このレポートは、以下のレポートで構成されています。

- 263 ページの『*仮定オファー収支サマリー (“What If” Offer Financial Summary)*』

- 264 ページの『キャンペーン詳細オファー・レスポンスの内訳 (Campaign Detailed Offer Response Breakout)』
- 264 ページの『オファー別のキャンペーン収支サマリー (実績) (Campaign Financial Summary by Offer (Actual))』
- 264 ページの『月別のキャンペーン・オファー・パフォーマンス (Campaign Offer Performance by Month)』
- 264 ページの『キャンペーン・パフォーマンス比較』
- 264 ページの『キャンペーン・パフォーマンス比較 (収益) (Campaign Performance Comparison (with Revenue))』
- 264 ページの『イニシアチブ別のキャンペーン・パフォーマンス比較 (Campaign Performance Comparison by Initiative)』
- 265 ページの『セル別のキャンペーン・パフォーマンス・サマリー (Campaign Performance Summary by Cell)』
- 265 ページの『セル別のキャンペーン・パフォーマンス・サマリー (収益) (Campaign Performance Summary by Cell (with Revenue))』
- 265 ページの『セルおよびイニシアチブ別のキャンペーン・パフォーマンス・サマリー (Campaign Performance Summary by Cell and Initiative)』
- 265 ページの『セルおよびオファー別のキャンペーン・パフォーマンス・サマリー (Campaign Performance Summary by Cell and Offer)』
- 266 ページの『セルおよびオファー別のキャンペーン・パフォーマンス・サマリー (収益) (Campaign Performance Summary by Cell and Offer (with Revenue))』
- 266 ページの『オファー別のキャンペーン・パフォーマンス・サマリー (Campaign Performance Summary by Offer)』
- 266 ページの『オファー別のキャンペーン・パフォーマンス・サマリー (収益) (Campaign Performance Summary by Offer (with Revenue))』
- 266 ページの『日別のオファー・パフォーマンス (Offer Performance by Day)』
- 266 ページの『オファー・パフォーマンス比較 (Offer Performance Comparison)』
- 267 ページの『オファー・パフォーマンス・メトリック (Offer Performance Metrics)』
- 267 ページの『キャンペーン別のオファー・パフォーマンス・サマリー (Offer Performance Summary by Campaign)』

仮定オファー収支サマリー (“What If” Offer Financial Summary)

「仮定オファー収支サマリー (“What If” Offer Financial Summary)」レポートは、オファーの仮定の収支パフォーマンスを入力内容に基づいて計算します。レスポンス率がさまざまであるシナリオを評価するためのパラメーターを指定します。このレポートは、指定したレスポンス率とレスポンス率増分に基づいて増分を行うことにより、6つのシナリオの収支パフォーマンスを計算します。例えば、2%のレスポンス率と、0.25%のレスポンス率増分を指定する場合、このレポートは、レスポンス率が2%から3.25%の範囲の6つのシナリオのパフォーマンス・データを返します。

オプションで、仮定レポートのパラメーター（「コンタクト単位のコスト」、「オファー・フルフィルメント固定コスト (offer fulfillment fixed cost)」、「レスポンス当たりの売上」など）を変更できます。

キャンペーン詳細オファー・レスポンスの内訳 (Campaign Detailed Offer Response Breakout)

「キャンペーン詳細オファー・レスポンスの内訳 (Campaign Detailed Offer Response Breakout)」レポートは、さまざまなレスポンス・タイプのキャンペーン・パフォーマンス・データを提供します。キャンペーンに関連付けられているすべてのオファーと、レスポンス・タイプごとのレスポンス数をリストします。

オファー別のキャンペーン収支サマリー (実績) (Campaign Financial Summary by Offer (Actual))

「オファー別のキャンペーン収支サマリー (実績) (Campaign Financial Summary by Offer (Actual))」レポートは、キャンペーン内のオファーの収支データを提供します。これには、コンタクト・コスト、総収益、純利益、および ROI などのデータが含まれます。

月別のキャンペーン・オファー・パフォーマンス (Campaign Offer Performance by Month)

「月別のキャンペーン・オファー・パフォーマンス (Campaign Offer Performance by Month)」レポートは、指定した月のキャンペーン・パフォーマンスと、キャンペーン内の各オファーのパフォーマンス・データを示します。これは、指定した月における、提供されたオファーの数、レスポンス・トランザクションの数、およびレスポンス率をリストします。

キャンペーン・パフォーマンス比較

「キャンペーン・パフォーマンス比較」レポートは、キャンペーンの財務実績を比較します。これには、レスポンス・トランザクションやレスポンス率、固有のレスポンドーの数やレスポンドー率などのデータが含まれます。これには、リフト・オーバー・コントロール・グループ情報も含まれます。

キャンペーン・パフォーマンス比較 (収益) (Campaign Performance Comparison (with Revenue))

「キャンペーン・パフォーマンス比較 (収益) (Campaign Performance Comparison (with Revenue))」レポートは、選択したキャンペーンの財務実績を比較します。これには、レスポンス・トランザクション、レスポンス率、固有のレスポンドーの数、レスポンドー率、および実際の収益などのデータが含まれます。これには、オプションのリフト・オーバー・コントロール・グループ情報も含まれます。

イニシアチブ別のキャンペーン・パフォーマンス比較 (Campaign Performance Comparison by Initiative)

「イニシアチブ別のキャンペーン・パフォーマンス比較 (Campaign Performance Comparison by Initiative)」レポートは、イニシアチブ別にグループ化された選択したキャンペーンの財務実績を比較します。これには、レスポンス・トランザクションやレスポンス率、固有のレスポンドーの数やレスポンドー率などのデータが含まれます。これには、オプションのリフト・オーバー・コントロール・グループ情報も含まれます。

セル別のキャンペーン・パフォーマンス・サマリー (Campaign Performance Summary by Cell)

「セル別のキャンペーン・パフォーマンス・サマリー (Campaign Performance Summary by Cell)」レポートは、対応するキャンペーン別にセルがグループ化された状態で、キャンペーンのパフォーマンス・データを提供します。これには、提供されたオファーの数、レスポンス・トランザクションの数、レスポンス率、固有のレスポンドーの数、およびレスポンドー率などのデータが含まれます。これには、リフト・オーバー・コントロール・グループ情報も含まれます。

セル別のキャンペーン・パフォーマンス・サマリー (収益) (Campaign Performance Summary by Cell (with Revenue))

「セル別のキャンペーン・パフォーマンス・サマリー (収益) (Campaign Performance Summary by Cell (with Revenue))」レポートは、対応するキャンペーン別にセルがグループ化された状態で、選択したキャンペーンのパフォーマンス・データを提供します。これには、提供されたオファーの数、レスポンス・トランザクションの数、レスポンス率、固有のレスポンドーの数、レスポンドー率、および実際の収益などのデータが含まれます。これには、オプションのリフト・オーバー・コントロール・グループ情報も含まれます。

注: このレポートでは、レスポンス履歴テーブル内に付加的にトラッキングされる項目「収益」が必要です。

セルおよびイニシアチブ別のキャンペーン・パフォーマンス・サマリー (Campaign Performance Summary by Cell and Initiative)

「セルおよびイニシアチブ別のキャンペーン・パフォーマンス・サマリー (Campaign Performance Summary by Cell and Initiative)」レポートは、選択したキャンペーンのパフォーマンス・データと、対応するキャンペーンおよびイニシアチブ別にグループ化されたセルを提供します。これには、提供されたオファーの数、レスポンス・トランザクションの数、レスポンス率、固有のレスポンドーの数、およびレスポンドー率などのデータが含まれます。これには、オプションのリフト・オーバー・コントロール・グループ情報も含まれます。

セルおよびオファー別のキャンペーン・パフォーマンス・サマリー (Campaign Performance Summary by Cell and Offer)

「セルおよびオファー別のキャンペーン・パフォーマンス・サマリー (Campaign Performance Summary by Cell and Offer)」レポートは、同じレポート内のオファーおよびセル別にキャンペーン・パフォーマンスを表示する手段を提供します。各キャンペーンが、各セルおよび関連付けられたオファー名と一緒にリストされます。このレポートは、セルとオファーの組み合わせごとに、提供されたオファーの数、レスポンス・トランザクションの数、レスポンス率、固有の受信者およびレスポンドーの数、レスポンドー率を示します。これには、リフト・オーバー・コントロール・グループ情報も含まれます。

セルおよびオファー別のキャンペーン・パフォーマンス・サマリー (収益) (Campaign Performance Summary by Cell and Offer (with Revenue))

「セルおよびオファー別のキャンペーン・パフォーマンス・サマリー (収益) (Campaign Performance Summary by Cell and Offer (with Revenue))」レポートは、収益情報と一緒に、同じレポート内のオファーおよびセル別にキャンペーン・パフォーマンスを表示する手段を提供します。各キャンペーンが、各セルおよび関連付けられたオファー名と一緒にリストされます。このレポートは、セルとオファーの組み合わせごとに、提供されたオファーの数、レスポンス・トランザクションの数、レスポンス率、固有の受信者およびレスポnderの数、レスポnder率、および収益を示します。これには、リフト・オーバー・コントロール・グループ情報も含まれます。

注: このレポートでは、レスポンス履歴テーブル内に付加的にトラッキングされる項目「収益」が必要です。

オファー別のキャンペーン・パフォーマンス・サマリー (Campaign Performance Summary by Offer)

「オファー別のキャンペーン・パフォーマンス・サマリー (Campaign Performance Summary by Offer)」レポートは、選択したオファーが対応するキャンペーン別にグループ化された状態で、キャンペーンおよびオファーのパフォーマンスのサマリーを提供します。これには、提供されたオファーの数、レスポンス・トランザクションの数、レスポンス率、固有のレスポnderの数、およびレスポnder率などのデータが含まれます。これには、リフト・オーバー・コントロール・グループ情報も含まれます。

オファー別のキャンペーン・パフォーマンス・サマリー (収益) (Campaign Performance Summary by Offer (with Revenue))

「オファー別のキャンペーン・パフォーマンス・サマリー (収益) (Campaign Performance Summary by Offer (with Revenue))」レポートは、選択したキャンペーンのオファー・パフォーマンスのサマリーを提供します。これには、提供されたオファーの数、レスポンス・トランザクションの数、レスポンス率、固有のレスポnderの数、レスポnder率、および実際の収益などのデータが含まれます。これには、オプションのリフト・オーバー・コントロール・グループ情報も含まれます。

日別のオファー・パフォーマンス (Offer Performance by Day)

「日別のオファー・パフォーマンス (Offer Performance by Day)」レポートは、指定した日付または日付範囲のオファー・パフォーマンスを示します。このレポートは、提供されたオファーの数、レスポンス・トランザクションの数、および指定した日付または日付範囲の間のレスポンス率をリストします。

オファー・パフォーマンス比較 (Offer Performance Comparison)

「オファー・パフォーマンス比較 (Offer Performance Comparison)」レポートは、選択したオファーのパフォーマンスを比較します。これには、提供されたオファーの数、レスポンス・トランザクションの数、レスポンス率、固有のレスポnderの数、およびレスポnder率などのデータが含まれます。これには、リフト・オーバー・コントロール・グループ情報も含まれます。

オファー・パフォーマンス・メトリック (Offer Performance Metrics)

「オファー・パフォーマンス・メトリック (Offer Performance Metrics)」レポートは、「最適一致 (Best Match)」、「断片一致 (Fractional Match)」、「複数一致 (Multiple Match)」などの各種レスポンス属性に基づいて、選択したオファーのパフォーマンスを比較します。これには、オプションのリフト・オーバー・コントロール・グループ情報と、各種のアトリビューション率の間におけるパーセンテージの相違も含まれます。

キャンペーン別のオファー・パフォーマンス・サマリー (Offer Performance Summary by Campaign)

「キャンペーン別のオファー・パフォーマンス・サマリー (Offer Performance Summary by Campaign)」レポートは、選択したオファーについてキャンペーンごとのパフォーマンスのサマリーを提供します。これには、提供されたオファーの数、レスポンス・トランザクションの数、レスポンス率、固有のレスポnderの数、およびレスポnder率などのデータが含まれます。これには、リフト・オーバー・コントロール・グループ情報も含まれます。

付録. IBM Unica Campaign オブジェクト名での特殊文字

Campaign のオブジェクトの名前に関して、特定の要件がある場合があります。特殊文字のいくつかは、Campaign オブジェクト名としてサポートされていません。加えて、オブジェクトの中には特定の命名上の制約があるものもあります。

注: オブジェクト名をデータベースに渡す場合 (例えば、フローチャート名を含むユーザー変数を使用する場合)、特定のデータベースでサポートされている文字だけでオブジェクト名が構成されていることを確認する必要があります。そうしないと、データベース・エラーを受け取ります。

サポートされていない特殊文字

次のオブジェクトの名前には、その下の表でリストされている文字を使用しないでください。

- キャンペーン
- フローチャート
- フォルダー
- オファー
- オファー・リスト
- セグメント
- セッション

表 20. サポートされていない特殊文字

文字	説明
%	パーセント
*	アスタリスク
?	疑問符
	パイプ (垂直バー)
:	コロン
,	コンマ
<	より小記号
>	より大記号
&	アンパーサンド
¥	円記号
/	スラッシュ
“	二重引用符

命名上の制約を持たないオブジェクト

Campaign の次のオブジェクトには、その名前に使用される文字に関する制約がありません。

- オーディエンス・レベル (オーディエンス・レベルの項目 名には命名上の制約があります)
- カスタム属性の表示 名 (カスタム属性の内部 名には命名上の制約があります)
- オファー・テンプレート

特定の命名上の制約を持つオブジェクト

Campaign の次のオブジェクトには、その名前に関する特定の制約があります。

- カスタム属性の内部 名 (カスタム属性の表示 名には命名上の制約がありません)
- オーディエンス・レベルの項目 名 (オーディエンス・レベルの名前には命名上の制約がありません)
- セル
- ユーザー定義項目
- ユーザー・テーブルおよび項目名

これらのオブジェクトについては、名前に関する次の制約があります。

- 英字、数字、下線 (_) 文字だけで構成される
- 英字で開始する

注: ユーザー定義項目名には、追加の制約があります。詳しくは、211 ページの『ユーザー定義項目の命名上の制約』を参照してください。

IBM Unica 技術サポートへの連絡

ドキュメンテーションを参照しても解決できない問題があるなら、指定されているサポート窓口を通じて IBM Unica 技術サポートに電話することができます。このセッションの情報を使用するなら、首尾よく効率的に問題を解決することができます。

サポート窓口が指定されていない場合は、IBM Unica 管理者にお問い合わせください。

収集する情報

IBM Unica 技術サポートに連絡する前に、以下の情報を収集しておいてください。

- 問題の性質の要旨。
- 問題発生時に表示されるエラー・メッセージの詳細な記録。
- 問題を再現するための詳しい手順。
- 関連するログ・ファイル、セッション・ファイル、構成ファイル、およびデータ・ファイル。
- 「システム情報」の説明に従って入手した製品およびシステム環境に関する情報。

システム情報

IBM Unica 技術サポートに電話すると、実際の環境に関する情報について尋ねられることがあります。

問題が発生してもログインは可能である場合、情報の大部分は「バージョン情報」ページで入手できます。そのページには、インストールされている IBM Unica のアプリケーションに関する情報が表示されます。

「バージョン情報」ページは、「ヘルプ」>「バージョン情報」を選択することにより表示できます。「バージョン情報」ページを表示できない場合、どの IBM Unica アプリケーションについても、そのインストール・ディレクトリの下にある `version.txt` ファイルを表示することにより、各アプリケーションのバージョン番号を入手できます。

IBM Unica 技術サポートの連絡先情報

IBM Unica 技術サポートとの連絡を取る方法については、IBM Unica 製品技術サポートの Web サイト (<http://www.unica.com/about/product-technical-support.htm>) を参照してください。

特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものです。

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒103-8510
東京都中央区日本橋箱崎町19番21号
日本アイ・ビー・エム株式会社
法務・知的財産
知的財産権ライセンス渉外

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Corporation
170 Tracer Lane
Waltham, MA 02451
U.S.A.

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができますが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性があります。その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者をお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

表示されている IBM の価格は IBM が小売り価格として提示しているもので、現行価格であり、通知なしに変更されるものです。卸価格は、異なる場合があります。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。

できます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。これらのサンプル・プログラムは特定物として現存するままの状態を提供されるものであり、いかなる保証も提供されません。IBM は、お客様の当該サンプル・プログラムの使用から生ずるいかなる損害に対しても一切の責任を負いません。

この情報をソフトコピーでご覧になっている場合は、写真やカラーの図表は表示されない場合があります。

商標

IBM、IBM ロゴ、および ibm.com は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corporation の商標です。他の製品名およびサービス名等は、それぞれ IBM または各社の商標である場合があります。現時点での IBM の商標リストについては、『www.ibm.com/legal/copytrade.shtml』をご覧ください。



Printed in Japan